

---

# 陽だまりのキミ

たまさ。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陽だまりのキミ

### 【Nコード】

N3679K

### 【作者名】

たまさ。

### 【あらすじ】

焦がれたのは、ただ欲したのは8つ年下の義母だった。想いを殺し、欲望をねじ伏せ、果てまで共に生きられれば良いと願った義息の、陰湿で粘着質でダメダメな感じの 子育て日記？ 最近ちょっぴり前向きです。ダメな感じに。

## プロローグ

物怖じしない十三の娘は、自分よりも随分と年上の男を前に微笑んだ。

「仲良くして下さいね」

その言葉を魔法の言葉だとしても信じているのか、そう言えば誰しもが友になれると思っっているのか、その顔は晴れやかだった。

仲良くするいわれなどもとより無い。

どこの阿呆だとしてこんな話に容易くうなずき、順応し暮らしている筈などない。

自分の妻に、と言われたところで「何の冗談だ」と言える。だといふのに、こともあるように、この小娘様は、父の後妻として正式に義母となるのだという。

ヴァルフアムは天を見上げ、内心で激しく罵った。

あのクソ親父！

## プロローグ（後書き）

週一更新を目標に呑気にお付き合いいただければと思います。  
プロローグ（13歳）継母と継子（16歳）となっておりますが、  
その後の本編は13歳に戻りまして物語は進みます……陽だまりの  
キミはほのぼの育児日記となっておりますが、あなたの心に何か  
浸透していけばよいなと思います。

## 継母と継子その1

手元のレース編みを見つめながら、唇は不可思議な呪文を唱える。鎖編みを三つ、長編みを一つ。鎖編みを一つ。長編みを一つ。

それはいつからはじめられたのか、すでに膝の上でふわりと伸びて、まるでヴェールのようになっていくドイリー。ドイリーと呼ぶには大きなものだ。

ベッドカバーかカーテンでも作っているのかもしれない。

じっとそれを見つめながら、ヴァルフアムはその手元と、そして赤みのある柔らかな金髪の旋毛を交互に見た。

死ぬな。

と無遠慮に思う。

もし、これが騎士団の人間であれば、これほどまで他人の気配に無頓着でいればあっさりと刺されてしまう無能さだ。

ノックはした。

二度して、返事はなく。さらに二度ノックをした。

中にいるのは判っていたのだがもしや眠っているのかと思い、扉を開いて中に入れば、一心不乱という様子で手元を見つめ、謎の呪文を小さな声で唱えている小娘　　齢十六になるヴァルフアムの義母、ファティナがいた。

置かれているダイニングセットのソファに座り、せっせとレース編みに興じている。よく見れば模様は薔薇の花と鳶、華やかなものだ。

声をかけようとも思ったが、いつ気づくだろうという好奇心からヴァルフアムは壁に背を預け、腕を組むようにしてじっと彼女の様子を眺めていた。

十三歳という年齢で嫁いできた小娘様は、三年の歳月で随分と身長を延ばし、丸かった顔もほっそりとしてしまった。

相変わらずその瞳は大きな翠玉のようで、ついでその指先はまるで魔法のようにモチーフを刻む。

「えっと、上がりが四つで、長編みのみみつ……」

呪文が変わったのは糸が端に付いたのだろう。

さらにまた続くのかと、自分の忍耐力もそろそろ限界かもしれないとうんざりしたところで、ついつつむいていた翠玉があがった。一瞬びくりとした頭が、ゆっくりと上がり、そろりそろりとその視線が自分の体を這い上がるのを感じる。

どうにも居心地が悪い。

爪先の長靴を進み、足を昇り、腹を這い、やがて唇を見て、ついで視線がかちりと合う。

途端に、ファティナは「ひっ……」と喉の奥で言葉を凍りつかせた。

「ご機嫌いかがでしょうか。義母ははうえ」

組んでいた足と、そして腕とをとく。預けていた背をとんと壁から外して、にこやかに、そうつとめてにこやかに挨拶したというのに、ファティナは大仰に叫んだかとおもうと、まるで追い詰められた子ネズミのように暴れ、寝椅子の縁にがしりと張り付いた。

「ごめんなさい！ ごめんなさい、ヴァルフラムさまっ」

「おや、何をそんなに慌てておいでなのでしょう」

猫なで声で優しく言えば、ファティナはこくりと喉を上下させ、うかがうように上目遣いで見上げてくる。

「……」

何かを考えている。

じっくり考えているようで暫くそうしていたというのに、突然ぱたぱたと居住まいをただし、にっこりと微笑んだ。

「ごめんなさい、いらしていたことに気づかなくて」

と、まるで「気づかなかったことを謝ったのよ」と言わんばかりの態度を示した。ただし、ヴァルフアムには勿論、相手があんなに取り乱して謝った理由に思い当たるフシがある。フシどころか、こうして仕事を早々に切り上げて帰宅した理由だ。

「につこりとヴァルフアムは笑みを浮かべ、一歩進む。

「バザールは楽しめましたか？」

「

「スリに合われたと聞きましたが」

「つと視線が反らされる。

「いえ、スリになどあっております」

「ほお、あわれませんでしたか」

「私は」

「スリに靴を投げつけたのですよね？」

「ひくりとファティナの口の端が引きつった。

ヴァルフアムはゆっくりと寝椅子の前に立ち、静かな怒りを内包した口調で言った。

「そこに座りなさい！」

「……座っております」

失礼。

そう、もとより座っている。だからといって揚げ足など取られては相手が逆上するものとうして思わないのか、この鳥頭は。

「コンコンと小さなノックの音が部屋の奇妙な緊張感を蹴飛ばす。

ファティナはぱつと視線をあげ、開きっぱなしの扉から入ってきた執事であるクレオールの姿に救いを求めた。

「クレオっ」

クレオールはちらりとヴァルフアムを見て、ついでファティナの手元のレース編みを眺める。彼女は未だにそれをしっかりと手にしていたし、鉤針も健在で持っている。それを危険だと感じたのである。静かにその手元の物を片付けると、クレオールはヴァルフアムに一礼した。

「続きをどうぞ」

「クレオっ」

この現状を打開してくれると思われた執事だが、どうやら今度のことに關していえばヴァルフアムと同一見解に達しているらしい。

ヴァルフアムは満足気にならずき、さて、と自分のすべきことを再会することにした。

「バザールへの許可を出した覚えもありません」

「私は貴方の義母です！ 何故息子の許可が必要なのでしょう」

それでも負けまいとして言うのであるが、この猫科の小動物はすでに耳も尾も垂れていることに気づいていないのだろうか。

身を伏せた方が喧嘩は負け。

威圧的に腕を組み、口の端をあげて笑みを向けてやる。

小娘様のその瞳にはこんもりとしたものが浮き上がってきそつだ。

「第一に、あなたのことに関しての全権は私にあります」

「……ないもの」

ぼそりと言う。

とりあえずこれは無視だ。

「第二に、あなたが動くと私が迷惑を蒙るのです」

「……それはこんかいたまたま……」

これも無視。

「第三に」

ここで大きく息をつく。厳しい口調を張り替えて、優しく、優しく

極力優しく、囁く。

「私が貴女を心配しているのです、義母うえ」

「ごめんなさい」

しゅんっ、と判りやすいくらいな垂れる。

それから救いを求めるように「私が悪かったと思っているわよ。ヴァルフアムさまにご迷惑を掛けるつもりではなかったし、バザールの雰囲気を楽しんですぐに帰宅するつもりだったの」悪気は全然な

かったのだし……

「何故スリに靴など投げつけたのです」

「私石投げは得意なのです」

本当に得意そうに言うのがまた呆れる。

石投げが得意だとどうして靴をなげるか？

「バザールで歩いていたら、突然女性の悲鳴が聞こえてまいりまして、スリだというではありませんか。これはいけないと思って、咄嗟に逃げていく男の方に向けて」

すぱーんつと、それは見事にクリーンヒットしたのだと。

すでに当初の「ごめんなさい」などすっかりと忘れて、ファティナは実に嬉しそうに言うのだ。

瞳がきらきらと輝いている。

軽い興奮を隠そうともしない。

きつと心の中は単純に「わたくしってすごい」という阿呆な思考で埋め尽くされているに違いない。

ヴァルフアムは深く息をつき、彼女の忘れ去られた「ごめんなさい」を取り戻すために、ぱんつと一度手を叩いて、皮肉をたっぷりと込めた口調でもって、

「とりあえず、足をそろえてきちんと座りましょうか、義母っえ」  
臨戦態勢を伝えた。

## 継母と継子その2

十三の年に嫁いだファティナは、元々ヴァルフアムの父であるヴァルツとは顔を合わせたことが無かった。

当然恋愛結婚というものではなく、どこの誰が見ても立派な「政略結婚」である。

それはとても事務的に勧められたし、ファティナにしてみても何かの感慨など浮かぶ余地もなかったはずだ。

ファティナとヴァルツには元々薄い、コップの中に落とした墨粒よりは多少濃いかもれないという程度の血縁関係がある。延々と説明すれば「それはもう他人だよね？」と確認される程のものだ。

ファティナは父と母とを船の事故によって亡くした。それによってファティナは莫大な財産を手に入れたのだが、その年齢により遺産は凍結されていた。

だが十六までの間に婚姻によって財産の移動を行わなければ、その大半は国に没収されるという非常に コズルイ政策を回避するが為に、暫定的にヴァルツの妻となったのだ。

ヴァルツの独断により。

そのことに対して、ファティナは「新しい家族ができる」と喜んだのだが、ヴァルツにとって三十五以上離れた妻とは当然オトナの会話が成立しない。

「あと数年たてば閨おやに招くことも考えるが、今閨に連れていったところで子守唄をせがまれるだけだ」

などと言っていたが、そのことについてはヴァルフアムも賛同せざるを得ない。

嫁いですぐに、この小娘様は枕を手にヴァルフアムの寝室を訪れて言ったのが。

「本を読んで下さいませ」  
だった。

仲良くしようと言った義母は、自分の息子を「最大の遊び相手」と定めてしまったのである。

こんこんと一刻あまりも説教されたファティナは、その間お茶もお菓子も取り上げられていた。何より驚くのは、ずっと喋り続けた息子ときたら、同じように水分を取らずに説教を続けたのだ。

それはもう何かの修行か仕事のように。

しかも、執事のクレオールがお茶のセットを手に「それくらいになさいませ」と仲裁をしなければ、おそらく更に説教は続いた。

説教を受けるほうの忍耐力も物凄いものがあるが、するほうの持続力も半端では無い。ファティナは内心で「説教魔」と息子に呆れた。

やっとありつけた紅茶を、猫舌のファティナは両手で捧げもってふーふーっと息を吹きかける。それが十六の娘のやることか、とヴアルファムは更に説教をしようかと口を開きかけたが、辞めた。そのことで更に半刻近く延々と説教をする自信があるからだ。

「ヴアルファム様は今日は御早いんですね」

ふーふーっと息をふきかけていた紅茶が適温になったのか、やっと一口飲んでファティナは微笑んだ。

「また先ほどの会話に戻りたいですか？」

「頭が悪すぎる。」

「」

「当然、我が愛すべき義母うえが騒動を起こしたと上官からのありがたい報告を受けましたので、忙しい身の上の私が早々に仕事を切り上げて帰宅したのだ、とは考えないのでしょうか？」

「はなし、もどしますか？」

「尋ねられてファティナは引きつった。」

「えっと、えっと……ああ！ 旦那さまから御手紙が届いてました」

咄嗟に話を切り返し、ぱんつと手を打ち鳴らしてクレオールを呼ぶ。心得た様子でクレオールは銀のトレーに載せた手紙を手に戻った。

私信などはたいていクレオールの手によって内容を確認められるものだが、主人からのものにクレオールは目を通そうとはしない。したがって、その手紙は未だ開封されてはいなかった。

銀のトレーと揃いの文様を刻んだペーパーナイフで蠟封を開き、中から数枚の紙を引き出す。

味も素っ気も無い紙に書かれた文字を追い求め、ヴァルフアムはぱたりとそれを閉ざした。

「どんな様子でいらっしやいます？」

あまり外部との接点をもたないファティナが好奇心を向けてくる。彼女にしてみれば自分の夫からの手紙なのだが、十三から嫁いできたものの実際に夫と顔を合わせたのは両手で釣りが出るほどだろう。

「いつも通りですね」

ヴァルフアムはそっけなく言う。それもそのはずで、手紙の内容はたいてい決まっていた。

自らの領地のこと、ヴァルフアムへの結婚の催促、そろそろ騎士団を抜けて自分の仕事の手伝いをするように　まったくもって楽しい話題が無い。

ここは王都にある私邸であるが、父は領地にある本邸に暮らしている。なぜファティナが本邸でなくここに暮らしているのかといえば「子供が駆けずり回ると仕事に支障がある」という父の意向だ。

確かに、ファティナは他人に迷惑を掛ける天才なので父のその意見にもヴァルフアムは賛同できる。

「旦那さまは、まだこちらにいらしてくださいさらないのですか？」

ふと、ファティナの声のトーンが下がる。

ヴァルフアムは片眉をあげて義母を見返した。切ないような溜息が口から漏れるものだから、何かあるのかと問えば、ファティナは紅茶の表面を見つめながら唇を開いた。

「私も十六になりましたもの。そろそろ子供がいたら楽しいと思うのです」

「……」

ヴァルフアムは固まった。

子供が子供を欲しい。それはどんなに滑稽な言葉であろう。

だが困ったことに、彼女は時折この病を持ち出すのだ。それは時にヴァルフアム自身にまで被害が及んだ。曰く「ヴァルフアム様が結婚なさって子供を作ればよいのです」どうやら孫でも良いらしい。

だから思わず、ヴァルフアムは口元に緩い笑みを浮かべた。

またか　そう思った。

「わたくし、何かおかしなことを言いました？」

むっとしたのがまるきり判る顔で睨まれる。

毛を逆なでた猫は、噛み付こうとしているようだ。

身の程知らずにも。

「いいえ、そうですね。」

義母うえの子供ですか、それは楽しみですね」

完全な含み笑いだ。

「意地悪な言い方なさらないで。」

旦那さまは一緒にいてくれないし、息子は意地悪なのですもの。新たに可愛い子供を欲するのがおかしなことかしら？」

「ええ、とても」

くくつと喉の奥が鳴る。

「義母うえの言いようでは、まるで新しい玩具をねだるようですよ。飽きたからといって捨てられてしまうのでは？」

さすがにその言葉にはカチンときたのか、ファティナは「ヴァルフアム様、嫌いです」とつんつと横をむいてしまう。そういうしぐさが未だ子供なのだ。

「クレオッ」

隣にいるというのに、強い口調でその名を呼びつける。クレオールは女主人の言葉に軽く身を屈めて言葉を受ける体勢をとった。

「何でしょうか」

「馬車の手配をしてちょうだい」

ちらりとクレオールの瞳がヴァルフアムを見る。ヴァルフアムは軽く口の端をあげ、そっと顔を振った。

「……どちらにおいでになられるおつもりでしょう」

駄目だと示しているのに、希望をもたせるような言い方をするクレオールは賢くない。

「旦那さまのところですよ。子供を授けてもらうのっ」

「まったく、ムダなことを」

「どうしてですか？ わたくしがいつまでも子供だとおっしゃるの？

わたくしはもう成人を向かえたのです。私だって……」

むっつと睨みつけてくるその様子に、ヴァルフアムは匙を投げた  
い気持ちになる。

「子供が欲しいのですか？」

「そうです」

では、とヴァルフアムは口を開いた。

「弟のエイリクでも呼び寄せたらいいでしょう。

あれはまだ九つだ。あなたと遊ぶのに丁度いい」

言葉にしたものの、そんなことが起こらないことは承知している。

何より、ファティナが完全に乗り気であったところでヴァルフアムはただの戯言として無駄な努力をしない。

弟と暮らすなどまっぴらだった。

そして、この時さらりとヴァルフアムは九つと言いつつ切ったが、実際にはすでにエイリクは11才になっていた。ヴァルフアムはエイリクの年齢をきちんと言い当てたことがない。

「……」

ファティナは眉を潜めた。

エイリクは夫の前妻であるアリエラの息子であり、ヴァルフアムとは腹違いの兄と弟に当たる。アリエラは夫についていけないと離婚をしたが、エイリクは取り上げられてしまった。そして現在、エ

イリクは乳母と共に別邸で暮らしている。

年下の弟も、その管理は基本的にヴァルフアムのもとにある。共に暮らしていないのは、ファティナを預けられ、更に幼い弟の面倒までは到底みれないと父に談判し、承諾された為だ。

ヴァルフアムは自分程子守に適さない人間はいないと信じているが、適さなくともやらされた現実はいかんともしがたい。

なにより、父は家族のことを一切省みない性格だった。

「……イリクさまは私のこと嫌いですもの」

「ほら、やっぱり」

それみたことかとヴァルフアムが笑う。

「貴女は自分に懐くペットが欲しいだけなのでしょう。自分の子供であれば懐くとも？ 言っておきますが、私は自分の母に懐いたことなどただの一度もありませんよ。ムダなことです」

辛らつな台詞に、ファティナはかしやんと音をさせてカップを置いた。

「不愉快です。失礼しますわ」

義母にしては珍しくそんな捨て台詞で部屋をあとにする。ファティナのあとをついていくように侍女へと命じて、クレオールは困ったような眼差しをヴァルフアムに向けた。

「少し、言い過ぎだと思えます」

「義母うえの頭が悪すぎる。教育係が良くないのではないか？ もっとものの分別というものを教えるものをきちんと探せ」

「勉強ならば奥様はきちんと学んでおられます」

正確に言えば、彼女にはそれくらいしかすることがないのだ。普段から自由に動けるわけではなく、社交の場に出ることもない。

「そろそろ奥様も年頃です。社交の場で他の皆様との談笑を楽しむくらいの楽しみを与えてさしあげてはいかがでしょう？」

「誰が連れて行くんだ？」

「侮蔑をこめて言う。」

「この私が、これが義母だと連れていけと？」

もちろんそれでも構わない。だが、ヴァルフアムはファティナを人目に晒すことを厭う。

誰かの目にさらすことも、誰かに触れられることも虫唾が走る程に嫌悪していた。

「……他の方にお願ひしてもよろしいでしょう」

「そこで義母つえがどつかの馬鹿に引つかかったらどうするんだ？

深読みも処世術もため鳥頭が、腹芸もできずに馬鹿な男共を入れ食いにしたらどうする？」

深いことを考えずにへらへらと笑うのだ。

頭の足りない女をペットのように愛する馬鹿など山といる。剣呑な口調で言いながら、ヴァルフアムはぎしりと奥歯をかみ締めた。

「そのようにおっしゃらないで下さい。奥様は心根のお優しい素晴らしい方です」

「ならばそう育てた私を褒める」

「……」

ふんつと鼻を鳴らす。

そう、ヴァルフアムは自分が子育てをしたと思っている。

二十一の頃に引き合わされた小娘様を、ヴァルフアムは根気良く育てたのだ。自分の勉強をしたくとも、小娘様は自分の都合でヴァルフアムを引き回した。

なんと涙ぐましい日々か。

「クレオール、私はおまえにも怒っているのだ」

新たな標的を定めたヴァルフアムは、口の渴きを癒すようにカップを傾け、かちやりとソーサーに戻す。

「何故、あの人の外出を許した」

「申し訳ありません」

「何かあつたらおまえの首程度ではすまないのだぞ」

「はい。承知しております」

杓子定規に謝るだけの執事の受け答えに、ヴァルフアムはムツと唇を引き結んだ。

「謝れと言っているのではない。何故、と問うているのだ」

「……奥様が買い物にいかれたいと以前からおっしゃっておりましてので」

「それは私も知っている。だが、それに対して危険だから駄目だと私が言っていたことをおまえは承知しているはずだ」

「今回は私がお供を致しました。当然、あの方に怪我を負わすようなまねは一切させぬ所存でありましたし、このようになったことは……残念です」

静かに頭を下げる執事の様子に、ヴァルフアムは足を組み替えしばらく思索した。

今回ヴァルフアムの耳にまで届いたのは、ファティナが自ら靴を投げてスリを捕まえた為だ。警備隊のものが親切にもわざわざヴァルフアムに報告した。これだとて報告がなければ気づくこともない。

暫く神妙にしているクレオールを見つめていたヴァルフアムだが、やがてゆっくりと口を開いた。

「今まではなかったのだから良いと思ったのだな」

「……申し訳ありません」

ちつと舌打ちが漏れた。

「役立たずが」

低く恫喝のように言う。

これまでに幾人かの人間をファティナの遊び相手兼護衛としてつけてきた。だがこれらは全て役立たずだった。

どれもこれもファティナに懐柔され、彼女の意思を止めることができないのだ。

外に行きたいとさんざ我儘を言い、止めて、止めて、宥めて、すかして、そして最終的に誰もがこっそりとファティナを連れ出した。

誰をつけようと無駄だということは、すでにヴァルフアムも学習済みだ。

相当性質タチが悪い。

何より、認めたくないが一番ファティナに甘いのは　ヴァルフ

アム自身だった。

「義母うえはどこにいる」

「あのご様子でしたら、中庭の噴水か、もしくは犬小屋の辺りにおられると」

「わかった」

席を立つと、クレオールは多少慌てた。

「もう叱って下さいませ。お叱りでも罰でも、私が変わってお受けいたしますから」

「貴様の首なぞとって何が楽しい？」

根本原因はいつだって義母うえなのだから、義母うえにご理解いただかないことにはな

低い恫喝にクレオールはただ頭を下げるしかない。

本来の義母と継子の関係であれば、義母であるファティナがこれほど息子に管理されることはないだろう。だが、彼等は年齢差がありすぎた。

八つの年の差が、そのまま発言権の差となっているし、夫である男からの扱いの違いがまた彼等の立場を作りせしめている。

片や、名ばかりの妻であり、片や跡取り息子。

どちらが強いかは誰の目にも明らかなものだ。

そして…… この義理親子の関係はどこか歪こまじに危こまじういバランスの上うへに成り立っていた。

## 課したもの

無視しよう。

ヴァルフアムが義母との対面を果たしたあと、自らに課したのはそれだった。

十三の小娘の扱いなど知らぬし、自分にはまだ年端もいかぬ弟までいる。

まあ、その弟はといえば、乳母と共に山間の別邸に暮らしているのでもうでもいいといえはもうでもいいのだが。

「弟のようによそに屋敷をあてがってくださいなは良いのに」  
と、心から思ったものだが、父はそうしなかった。

「アレにはまともにも育ててもらわねばならん」  
と父は応えたが、

「ならば父うえがきちんと監督なされば良い」  
という息子の訴えを、

「子供の扱いなど知るか」  
端的に返された。

子供の扱いなど知らぬのはヴァルフアムも同じだ。

父が妻を得るのはすでに四人目。それまでの間には母違いの妹という存在も産まれはしたものの、やはりヴァルフアムにとっては感知するものではなかった。

父と義母とが離婚した今は、その妹達との接点もない。父には息子は必要だが娘は必要が無かったようだ。ヘタをすると弟のエイリクなどは跡取りのスペア程度でしか無いかもしれない。

そういうことでヴァルフアムが自らの中に課したのはたった一つ。  
無視しよう。

同じ屋敷に住んでいようと、ただの同居人だ。

子育ては使用人に任せてしまふに限る。

早々に執事見習いでもあったクレオールと、料理番のエマに小娘の扱いを任せ、自分のなすべきことに没頭しようとしたものの……  
相手は一筋縄ではいかなかった。

犬や猫と違い、それは喋るのだ。

「ヴァルフアム様！」

「……」

「本を読んで下さいませ」

十三歳の小娘が手にしているのは別に絵本では無いが、あまったるい恋愛物語だった。

「少し私には難しい単語があるのです」

困ったように眉を潜めて言うので、仕方なくヴァルフアムは控えているクレオールを睨んだ。

「クレオール」

「ファティナ様、あちらでクレオが読んで差し上げますよ」

クレオールが優しく言えば、ファティナはちらりとヴァルフアムをうかがってシユンつとうなだれつつもクレオールについていく。

当時二十四になる男と十三の小娘様のそういった接触はその日から目につくようになった。

子供というのは単純で、遊んでくれるものがいればそれでいいのだ。

だからほっとしていた。一週間の間は。

「若様」

困ったようにクレオールが声をかけてきたのは、夕餉も済んだ頃。

自室で本を読んでいたヴァルフアムは、ちらりと壁にかけられた時計に視線をめぐらせた。

「なんだ？」

「ファティナ様のご相談があります」

その名前を聞いた途端にヴァルフアムは顔をしかめた。

「なんだ？」

「よる、あまりお休みになられていないようなのです」

「昼間はバカみたいに元気に走ってるじゃないか」

といったところでそれは予想だ。

ヴァルフアムは現在王宮の文官として仮勤めをしている。屋敷にはあまりいないのだ。

「部屋の中からすすり泣きが……」

「

クレオールは本当に困っている様子で吐息をつき、

「昨夜は私が添い寝した程です」

「は？」

「勿論、いけないことだとは理解していますが　どうもお寂しい  
ようで」

クレオールの言葉を要約すれば、ファティナは夜になると失った  
父母を思い出し眠れなくなり、一人で枕を抱きしめて寝ているのだ  
と言う。

「あんまりおかわいそうで、思い余ってしまったのですが」

それは確かに使用人としての分を越えている。越えすぎだ。完全に  
アウト。

父であれば首を切る。実質的に。

ヴァルフアムが眉間に皺を刻めば、

「ファティナ様が今宵も一緒にと」

「……」

どうにかして下さい。

切実に訴えられた。

ヴァルフアムは気乗りしない思いを抱えつつ、ファティナの部屋  
の扉をノックしようとした。

手を軽く握りこみ、彫刻の施された分厚い扉に当てようとしたと

ころではたりととまる。

何と呼べばいいのだ？

悩んだ途端に、腕はスベってドアをノックした。

「クレオ？」

途端に嬉しそうな声と共に扉が内側から開かれる。

その翡翠の瞳がヴァルフアムを認めて二度瞬いた。

「ヴァルフアム様？」

「……」

「何ですか？」

不思議そうにしている。

ヴァルフアムは眉間にくつきりと皺を寄せ、

「義母うえ」

今までの義母に対してそう呼んだように、そう口にした。

そう、たとえ八つも年下であろうと、書類上はこの小娘は母である。義理とは言え、母ということになっている。ならばそう呼ぶ他は無い。

「クレオールをお待ちなのですか？」

「はい！ クレオが昨日は童話を話して下さいました。今日もお願いしたのですけれど」

天真爛漫に言われてしまった。

まったくもって邪気もなく。

「クレオールは使用人です。寝室に入れてはいけません」

なぜ自分がこんなことを。

ヴァルフアムはとりあえず神ではなく父親を呪った。

「でも……」

「貴女は私の父の妻なのですよ？」

「でも、旦那様と一緒に寝て下さいません」

「」

それどころかこの時点で顔を合わせたのは、書類を作成したその時だけだったはずだ。

「十三といえば立派な淑女ですよ。」

「一人できちんとお休みなさい。いいですか？」

「……」

途端にへにやりとその顔が歪む。

「枕はあったかくありません。クレオはあったかかったのに」

「温石を寝台おんせきに入れるように言っておきましょう」

それで話しは終いだと、ヴァルフアムは切り上げた。

子供の脳内はどうなっているのだ。

十三ならもう少し男と共に寝台に入るといふことがどういふことだか理解していてもいいだろうに。それとも判っていて言っているのか？

思わず疑いたくなる。

ヴァルフアムはその足でファティナの寝台に温石をいれるようにと手配をすませ、自分も休むことにした。

それが運命の分かれ道だったのではないだろうか。

ヴァルフアムは後々後悔した。

その夜、なんとなく目が覚めて、なんとなくファティナの私室の前を訪れれば、そこにはクレオールが立っていた。

眉間に皺を刻み込み、扉に手を当てて。

「クレオール？」

「若様」

何をしているんだおまえは、そう告げるよりその扉の奥から小さく聞こえるすすりなきが……クレオールの行動の意味を知らしめる。なんとなく気まずい空気が二人の間にただよう。

おまえ行つて来い。

ヴァルフアムにそう言えていれば、何かが変わっていたのだろう。クレオールは主の許しに心の重荷をとくようにそうしたのである。だがヴァルフアムは深い溜息と共にその扉を自ら開いた。

子供とはなつくと際限が無いといつことを知るのに時間は必要とし  
なかつた。

## 讓歩

十三歳。

そのくらいの女性としてはファティナは幼すぎるのではないだろうか。

ヴァルフアムは女性と積極的に関わる性格ではなかったが、仕事の一環として出席を命じられた茶会の席、じっくりと十三歳でいどの娘を観察してみた。

確実に違う生き物だと知れた。

「ヴァルフアム様は騎士団に入団なさるのですか？」

「ヴァルフアム様は侯爵さまの跡取りでいらっしやるというのに騎士団に入るなんて、とても素晴らしいですね」

ただたんに隠居しない父親のおかげで騎士団に入る予定なだけだ。

内心で一々反論しながら、やはりこれは何かが違うと感じた。

ファティナの話題といえばその日花開いた花や、犬だとかヤギとかの家畜の話、雲の形が美味しそうなの、読んだ本の話。

あの思考回路はきつと十歳以下に違いない。

「おつかれ」

友人のイリスが苦笑しながらぼんぼんと肩を叩いてくる。

それに対して眉を潜めながら、

「十三歳は女だった」

とげんなりと呟いてしまう。

「そりゃあ、女の子のほうが早熟だからね。あのくらいだときつと結婚相手の選別で大忙しだろう。おまえだってその標的の一つだ」

「私の知っている十三歳はもつと幼い」

「へえ？ それはきつと呑気なご両親に育てられているのかな。跡取り娘だったらはいいうちから相手選びでたいへんだろうし、そう

でなくともよそに嫁に出さないといけないから、やっぱり女の子の  
ほうがオトナになる」

呑気な。

その言葉に想像する。

ファティナに良く似た父と母。三人そろってへらへら笑っている。  
いつそ火を掛けていいだろうか？ 心の平穩の為に。

それでも一旦浮かんだ疑問は、ファティナへと向けられた。

「ご両親はどんな方たちでした？」

夕食をすませ、居間で寛いでいる時に言葉にした。

途端に控えていた執事見習いが顔をしかめたが、ヴァルフラムは頓  
着しなかった。

「あまり……存じません」

ファティナは少しだけ困ったように小首をかしげた。

「両親は多忙であまり家にいなくて……時々帰宅しても、お忙しく  
て」

「」

ファティナの両親の持つ領地は小さなものだった。小さく、そし  
てこれといって産業が無い。その中で人々の生活を守る為に、両親  
は貿易という手法を取ったのだ。

幼い娘は一人きり屋敷に残された。

屋敷に数名の使用人はいたが、必要最低限の使用人は決してファ  
ティナの遊び相手にはならず、ファティナは決まって羊に寄りかか  
って編み物や絵本を読むことで時間を費やした。

きちんと教育を受けていないファティナは、本を読むのにも苦勞  
するのだ。

「でも」

言葉を続けようとするファティナに、クレオールは遮るように声を  
かけた。

「ファティナ様、美味しい氷菓子などいかがですか？ 甘い蜜をか

けましようか？ それとも、酸味の強いソースをかけますか？」

「え、あ……」

言葉を遮られて驚いたファティナだったが、戸惑うようにヴァルフアムを見てくる。ヴァルフアムは自分の失態に気づいていたから、そのまま話題を切り替えた。

「私には紅茶を。義母うえ、どうせなら幾つもの味を楽しめるといい クレオール」

「はい、かしこまりました」

本を読んで下さいませ。

もしかしたら、そんなことを言える相手もいなかったのだろうか。

「義母うえ」

「あ、はい。何ですか？」

「……教育係をお付けしましょう。何か学びたいことはありませんか？ 今以上に本を読みたいのであれば、綴りを教えてくれるものを行儀作法も学ぶべきでしょうね」

ぱつとファティナの顔が嬉しそうに微笑む。

幼いのは捨て置かれた為、だろうか。

それでも、素直に笑ってみせる。

ヴァルフアムは届けられた氷菓手に幸せそうに笑ってみせる義母を眺めて眉間に皺を刻み込んだ。

へんに色気たっぷりよりはマシか。

今日見た娘達はすでに媚をうつるというものを知っていた。自分達が美しいということを知っていた。

それよりはまだマシ。

ヴァルフアムは譲歩という言葉を学んだのだった。

妥協とも言つ。

## ままならぬもの

「あなたはいったい何をしているんですか!」  
ファティナが怪我をしたという知らせは、帰宅してから聞かされた。

普段であればヴァルフアムが帰宅すれば呼ばれもしないのに一階ホールまで出てくる小娘様がその日は出てこないばかりか、クレオールも顔を出さなかった。

主を迎えに出た使用人達は困惑の入り混じった様子でヴァルフアムを迎え入れ、

「クレオールはどうした?」

というヴァルフアムの問いに、中の一人がおずおずと進み出て口を開いた。

気乗りしな気に。

「奥様がお怪我をなさいまして。クレオールさんは付き添っておいでです」

「義母つえが、怪我?」

は?

「馬から落ちられたのです」

その言葉に一気に血の気が引いた。

落馬で命を落とすものは多くいる。打ち所が悪かったり、命を失わぬまでも腰をおって下半身不随などは良くある話だ。

屈強な騎士でも良くある話なのだから、小娘様などひとたまりもないように感じた。

なんといつてもファティナは子供だ。

ヴァルフアムは慌ててファティナの部屋へと駆けつけた。

「義母<sup>はは</sup>つえっ」

ノックすらもどかしく扉を開いた継子だったが、その義母はといえ

「おいしー」  
などとクレオールに林檎を食べさせてもらっていた。

「あなたはいったい何をしているんですか！」

カツとしていえば、うさぎの形に切られた林檎を啜えたまま、

「ふあるふあむはま？」

「口にもものを入れて喋るのはおよしなさい」

怒鳴りながらざろりとクレオールを睨みつける。クレオールは寝台の脇に椅子を運びそこに座っていたが、すぐに席をたち一礼すると控えた。

ファティナは眉を潜めてしゃくしゃくと林檎を咀嚼し、クレオールが汚れた左手を濡れた布巾でふいてやる。

よくみればファティナの右手は白い包帯に包まれていた。

「どうしてそのような……」

「聞いて下さい、ヴァルフアム様！」

途端に元気なファティナは口を開いた。

「今年産まれた仔馬のエイディったら、わたくしを乗せてくれないのです。やつとつかまえて乗ろうとしたら振り払われてしまいました」

「……」

「やつぱり仔馬は駄目です。今度は母親のエミリーに挑戦いたします」

きつぱりと言い切る娘を前に、ヴァルフアムは拳に力が入るのを感じた。

誰だ落馬などと大げさに言ったのは。

「怪我は、その手だけですか？」

「あとはお尻に痣ができてしまいました」

ケロリと言う。

いたたまれないのかクレオールは視線を逸らしたままだ。

「……判りました。怪我はゆっくりと治して下さい」

「ちよつとお尻と手が痛いだけですから平気ですわよ」

「どうせなら頭の一つもうつっていたいただいてもう少し中身を替えて欲しかったですね」

淡々と言えば、フェアティナの翡翠の瞳が瞬く。

「頭は打つてませんよ」

「……ええ、残念です」

切実に。

「残念ですか？」

「とにかく、もう馬に乗ろうなんて考えは捨てて下さい。エミリーに乗ろうなどと冗談では無い」

「いやです」

「駄目です」

吐き捨てるように言いながら、ヴァルフアムは踵をかえした。

まったくもって処置なし！

背後からフェアティナの「ヴァルフアム様のイジワルっ」という声が追いかけてきていたが、ヴァルフアムはさつさとその部屋の扉に手をかけ、

「クレオール、ここは侍女にでも任せてしまえ」とクレオールを呼んだ。

とりあえず、ここで叱るべきはフェアティナでは無い。

馬屋などに行かせたこの男だ。

「どうして馬屋などに」

「フェアティナ様が仔馬を見てみたいとおっしゃられましたので」

「見るのがどうして乗るのに変わる」

「ご自分のサイズと照らし合わせて、おそらく乗れるのでは無いかと結論に達したのだと思われます。先だつては犬にも乗ろうと

なさいましたので、似たようなことではないでしょうか」

子供め。

ヴァルフアムは頭痛を覚えて額のあたりに手を当ててしまった。

「常々思っていたのだが」

「はい」

「おまえは義母うえに甘すぎる」  
きつぱりと突きつけた。

「義母うえの護衛兼目付け役に誰かつけようと思う。おまえは義母うえの言葉に逆らえないからな」

「それがよろしいかと」

意外な返答が返った。

「おまえも楽しんでアレの世話をしているのかとおもったが」  
皮肉を込めていえば、クレオールは半眼を伏せた。

「自分があの方に甘いのは承知しております。甘さだけではいけないことも 若様のご決断はとてもよいものだ」と

しかし、その決断も甘かったと知るのにやはり月日はそれほど掛からなかった。

ファティナ付きにした使用人の多くが幼い小娘様の「お願い」に容易く陥落し、いつの間にかファティナは馬に乗ることも、屋敷から中央市場へと抜ける道すらも熟知するようになっていた。

さすがにそれに気づくには多少の歳月があったが。

ヴァルフアムはある段階で理解した。

子育てとはままならないものなのだということを。

## 市場にて

人間というのは意外な場所で意外な相手と顔を合わせると息が止まるらしい。

ヴァルフアムがその日道端で出会ってしまったのは、違<sup>たが</sup>うことなく、ファティナ。

十三歳の義母<sup>はは</sup>であつた。

午前中の仕事を終えて、珍しく友人のフレイが昼食は外で取ろうと街へと誘いを掛けた。

それに応じてヴァルフアムが街へとおりた時、バザールへと抜ける中央広場の噴水の前、ばつたりと……

「ヴァルフアム様！」

「……」

「奇遇でございますね」

ファティナは無邪気に元気に悪意無く、微笑んだ。

ヴァルフアムはうつかり止まってしまった心臓を押さえるように始動させ、引きつりそんな顔の筋肉をなんとか押さえ込んだ。

一瞬間さえ自分を包み込んだかのように感じたが、伏せた瞳をもう一度開いたところでそこにある阿呆面は変わらない。

失礼。阿呆は言いすぎだ。

間抜けにしておく。

「何をしておいでです」

「バザールを見てまわっております。焼き林檎がとても美味しゅうございました」

そう言う口には確かに焼き林檎のカスがある。

眩暈がした。

「ヴァル、キミの知り合いかい？  
随分と可愛らしい娘さんだね」

「フレイがくすりと笑いながら言う。

「可愛らしいと言われた小娘様は、満面の笑みを浮かべてフレイへと体をむけ、一礼した。」

「はじめまして、私ファティナと申します」  
「まて

「こんにちは、ぼくはフレイ。フレイ・ファルスだよ」

「いつもうちの」

「言うな！」

慌てて遮り、<sup>ひそひそ</sup>がしりとその両肩を掴む。

「今、いま、何を言おうとした！」

「ヴァルフアムはばくばくと動き出した心臓を<sup>なだ</sup>宥めつつ、ギツとその視線をフレイへと向けた。」

「すまない、私は早退する。上官に言っておいてくれ」

「ヴァル？ え、なに？」

「フレイが何事か言っているようだが、ヴァルフアムは無視した。ぐつとファティナの体の向きを無理矢理かえて歩き出す。

「できることであれば肩にかつきあげて移動してしまいたい衝動を抱いたが、それをすれば誘拐という身に覚えの無い罪で追われてしまいそうだった。」

「ヴァルフアムさまだったら、私きちんと挨拶できましたのに」

「どう挨拶するつもりだったのですか？」

「その場からとりあえず逃亡を図ったが、やがて疲れて足が止まる。するとファティナは不満そうに唇を尖らせた。」

「それは勿論、うちの息子がいつも御世話になっておりますって」

「……」

「ヴァルフアム様？」

小首をかしげて見上げてくるファティナを前に、ヴァルフアムは正しい呼吸方法を思い出す努力を必要とした。

翡翠の瞳に悪意や悪気は見られない。

おそらく、イヤガラセをしている意識も無いだろう。

そう、この小娘様ときたら性質タチの悪いことにいつだって本気なのだ。とりあえずこの世のありとあらゆる神を罵倒するより先に父を罵倒しておく。

「それよりお尋ねしたいことがあるのですが」

「はい、何でしょうか？」

「義母つえは、何故このような場所にいらっしゃるのでしょうか？」

「ですから先ほども申し上げました通り」

「何故、お一人で外にいらっしゃるのですか？」

ゆっくりと再度言えば、ああっと無邪気に微笑んだ。

「野菜売りの方が屋敷にいらっしゃるでしょう？ その方の荷馬車に乗せてもらったのです。馬車を引いているのがとっても可愛らしい口バで、なんだか幸せな気持ちになれますわよね、あれって」

「あなたの付き人はどうなさいました」

「かくれんぼも鬼ごっこも得意です」

首だ。

野菜売りは出入り禁止。

ふつつつと腹の中で沸騰するなにかをやり過ごす。

「ヴァルフアム様？」

そんな継子の怒りにやっと気づいたのか、ファティナは不思議そうにみあげてくる。

怒鳴ろうと開いた口を、ヴァルフアムはゆっくりと一度閉ざした。

「義母つえ」

「はい」

「私の実の母のことをご存知でしょうか？」

ゆっくりと、やさしく囁く。

「絵では見たことがございます。画廊に置かれている方ですわよね？」

「はい」

ヴァルフアムはことさらゆっくりとうなずき、

「私の母は馬車の事故によって亡くなりました」

「」

「母を亡くした時、私はとても辛く悲しい気持ちになりました」

「」

ファティナの瞳に動揺が走る。

それを見逃さず、ヴァルフアムは半眼を伏せた。

「あなたも私をおいて逝かれるおつもりですか？」

「そんな……」

「外は危険なのですよ。どうぞご自愛下さい　私を一人にするような危険なことはどうぞ謹んで下さい」

自分で言っていてうそ臭い。

それでもゆっくりと噛んで含めるように告げれば、ファティナは泣きそうな顔で慌てて口を開いた。

「ごめんなさい、ヴァルフアム様。」

あなたを悲しませるつもりは無かったのです。ただほんの好奇心で……」

「あなたが無事でよかったです」

むしろこちらの心臓が持たない。

ヴァルフアムは義母からの「ごめんなさい」を引き出し、笑みを浮かべはしたもののその腹の内でもそれだけの人間を処分すればこの憤りが静まるかを考えた。

「馬車がそんなに危険とは思いませんでした」

ファティナはふるりと身を震わせ、

「今度は馬に致します」

随分と見当違いなことを言い、ヴァルフアムしばらくファティ

ナを見つめた後、胃が痙攣するような違和感をねじ伏せて微笑んだ。

「とりあえずそこに座りましょうか？」

いっそ石畳に直に座らせたい衝動にかられた。

## 恋愛事件

どこで聞きつけたのか、ある日ファティナが言った。

「わたくしにはもう一人息子がいるのですか？」

「……」

その言葉で、自分が確かに息子と思われている事実気づいた。

何かが傷ついた。矜持とか自尊心というものだろう。これが義母だと言うことはなんとか言えるが、これの息子だと認めるのはあまりにも深い溝のようなものがある。溝というよりもむしろ落とし穴かもしれない。

ヴァルフアムは頭痛を逃すように額に手を当てながら、

「エイリクのことですか？」

と口にした。

「はい！ まだ稚い方だと聞きました」

「そうですね。まだ四つか五つですから」

弟の年齢など覚えていない。適当に言ったのだが、どうやらその時エイリクはすでに8歳になっていた。まったく感知すべくことではないが。

「どちらにおられるのでしょうか？ やはり息子なのですから、義母であるわたくしが育てるべきだと思います」

瞳をきらきらとさせながらいう小娘様。

### 十三歳。

十三歳に四つや五つの子供は育ててもらいたいと思うだろうか？ 少なくともヴァルフアムは絶対にイヤだ。この小娘様に育てられたら最後、おそらく世を儂みなくなる人生がまっている気がする。エイリクへの肉親の情などというものは持ち合わせていないが、エイリクの為にも絶対に阻止しなければならぬ。

否  これ以上屋敷に子供を増やされてはたまらない。

我が家は保育所でも託児所でもない。

「エイリクの教育に関しては父の問題です。

あなたが何を言ったところで無駄ですよ」

「……そうですか」

途端にシユンと落ち込む。

自分の夫のことを彼女がどう捉えているのかは理解しかねるが、それでも一筋縄でいくあいてではないということは承知しているようだ。

この時点で夫と顔を合わせたのは二度。

年のはじめの挨拶でファティナは緊張で顔を真っ赤にして「旦那様」と呼んでいたが、ヴァルフアムの父はそれを華麗にスルーしていた。

あのスルースキルは見習いたい。

ヴァルフアムはこの頃になるとファティナの扱いに多少慣れもできていた。

「そのうちに共に暮らすこともあるかもしれませんが。今は我慢なさい」

「はい………そうですね。わたくしにはヴァルフアム様という息子がいるのですもの」

「……」

八つ年下の義母にはおそらく悪気も悪意も無い。だからこそ性質クチが悪いのだ。

この頃からファティナはもう一人の継子に対して手紙を出したり贈り物を贈ったりとしていたが、その返事はいつこっにかえることは無かった。

「わたくし、エイリク様に嫌われているかもしれませんが」

人生が終わったかのように悲壮な声で言われたが、相手はたかが四つ五つ、もしかしたら六つかもしれないが 返事などがきくとも思われない。

たとえもし自分が十近く年上 十しか違わない義母から贈り物

攻撃を受けたのであればどうするか、それは勿論無視するだろう。だからヴァルフアムはこのことに関して何も言わなかった。所詮落ち込んだところでこの小娘様は一日それがもたない鳥頭。もし尾をひくようであれば甘い菓子でも土産に持ちこめばそれで終いだ。

その鳥頭の小娘様が三日程ふさがちになればこの屋敷は葬式もかくやという程静かになった。

侍女達は声を潜め、息を詰める。

下男達も何かを恐れるようにしていて、どうにも居心地が悪い。だがそれさえ目を瞑れば、世はコトもナシ。

実に平和だ素晴らしい。

「若様」

クレオールが帰宅したヴァルフアムに原因を明かしたのは、全てが終わった後のこと。

「教育係の一人を解雇致しました」

人事に関しては全てクレオールの領域であるから、それはいっこうに構わない。だがクレオールの表情は厳しい。

当然、教育係なるものがつけられているのはファティナしかない。い。

上着を脱ぎながらヴァルフアムは視線だけで話の続きを求めた。

「このところファティナ様のご様子の変化をお気づきでいらっしやいましたか？」

「ああ」

あれほど判りやすい動物などいまい。

元気なときはうるさく、機嫌が悪い時には噛み付き、そして気落ちしている時はまったく回りが見えずに一人で身を丸めるのだ。

だからヴァルフアムだとて勿論気づいていた。

静かだから放置していたに過ぎない。

「教育係にイジメられでもしたか？」

ふんと鼻を鳴らして言えば、クレオールは不快そうに眉宇を潜めた。  
「似たようなものでしょう」

「端的に言え」

「言い寄られていたようです」

「は？」

思わず間抜けな声が漏れた。

言い寄る。その言葉が耳に入り、また通過した気がした。

「教育係は幾つだ？」

「二十五でございました」

「それが義母うえに、言い寄った？」

十三の小娘だぞ。

「気づくのが遅れまして申し訳ありません」

鎮痛に言うものだから、思わずヴァルフアムは立っているクレオールを押しつけた。

遅れる、という言葉に体が動いた。

「義母うえっ」

案の定、身を丸めて寝台の上でひくひくと泣いているファティナの姿に、ヴァルフアムは一瞬目の前が真っ赤になった。

「何があつたのです？」

乱暴に腕を掴んで顔をこちらに向けさせる。

最悪のことが頭に過ぎった。

ファティナはヴァルツの妻ではあるが、事実上その関係は白い婚姻だ。二人の間柄に何かがあるはずもない。焦るヴァルフアムとは違い、泣いている小娘様はまったく違うことを言う。

「酷いんです！ 酷いんですよ、ヴァルフアム様っ。

わたくしは旦那様を愛しているのに、ちっとも信じてくださらないのです」

「……」

「一生懸命言っているのに。そんな愛はまやかしだなんて、ひどい

ですっ」

まやかした。

ヴァルフアムでも言うかもしれない。

「義母うえ」

「はい」

「とりあえずそこに座って下さい。」

このところ落ち込んでいた理由からお聞かせ願えますか?」

これはヴァルフアムの落ち度だ。

ファティナが静かで丁度いいなどと放置した結果がこれである。ヴァルフアムは目を真っ赤にして泣いている小娘様を見下ろし、イライラとした心をなんとか押しつぶした。

「ケイン先生が、わたくしを好きだとおっしゃって下さったのです」  
冷めた茶をこくこくと飲みながら、ゆっくりとファティナは口を開く。

「わたくしも好きですよと言ったんです」

好きといわれれば好きだとかえす、それが小娘様クオリティ。

「で?」

「そうしたら、ケイン先生はわたくしを抱きしめてキスなさいました」

ファティナは顔をしかめた。

「キスは家族以外としてはいけないってわたくしはちゃんと言ったんです」

「で?」

「そうしたら、ケイン先生がわたくしと家族になりたいって……わたくしと結婚したいとおっしゃいました」

悔しそうに言う。

「わたくしにはすでに旦那様がいると言いましたら、愛の無い結婚に意味は無いなどと失礼なことを言うのです」

おそらくその結婚に愛は無い。

ケインというその男はおるか、全ての者達の意が同一の見解を示すだろう。

ヴァルフアムは小娘様の話を耳にいれながら、なんともいえない気分を味わった。

喉の奥に魚の骨が引っかかるような奇妙な違和感。

ヴァルフアムはやがてファティナの言葉を遮った。

「お尋ねしたいのですが、義母うえ」

「なんでしよう？」

「あなたは 父を、愛しておられる？」

ファティナは翡翠の瞳を瞬き、なんとも不思議そうに継子を見つめ、

「当然ではありませんか」

と口にした。

「わたくしは旦那様の妻ですもの。今は旦那様はお忙しくてわたくしと共にいて下さらないけれど、わたくしと旦那様は神様の御前で愛を誓い合ったのです」

「はあ……」

ヴァルフアムはその後ファティナの愚痴をさんざ耳に入れ、最後に「キスされただけですか？」とそこをきっちり確認し、嘆息しながらファティナの頭を撫でた。

「明日は元気になって下さい」

ケインという教師には制裁を加えようと思っていたが 辞めた。

なんだか不憫になってしまった。

ふっと口元が笑ってしまう。

今まで見続けた父の妻達の中で、ファティナはどうやらまったく違う生き物であるらしい。

少なくとも、あの父を「愛して」いた女性など居ないだろうから。

## 返礼

十四になったのだと、はにかむように義母が言った。うかつにも人間というものは年をとるのだとその時になってやっと思い出した。

その日は休暇で、ヴァルフアムはゆつたりとした気持ちで新聞に視線を落としていた。ファティナは庭先で子犬と戯れている。料理番のエマの家で産まれたという四匹の子犬が、現在の彼女の気に入りだ。

そこにクレオールが馬車の到着を知らせたのだ。

「誰か来る予定が？」

「いえ」

クレオールは否定し、身を引くように自分の背後から訪れた男を引き合わせた。

「ご無沙汰しております。ヴァルフアム様」

「……本邸の」

父の屋敷にいる従僕の一人。名前まで一々覚えてはいないが。

「奥様に祝いの品をお届けにあがりました」

「祝い？」

「十四の生誕を迎えられましたので」

何が変わるということでもない。

十三の小娘様が、十四の小娘様になっただけ。ただそれだけのことだ。

馬車で運ばれてきた宝石や絹地は箱にして二十七を数え、ファティナは大きな翡翠の瞳をさらに大きく見開いて喜びを従僕に示し、夫へと返礼の手紙をしたためた。最近やっと読める文字になってきた

手だ。余計な世話とも思ったが、代筆を申し出たが義母はふるふるとはにかむような微笑みで首を振った。

「文字はあまりうまくありませんけれど、わたくしの心をお届けしたいのです」

それは実に嬉しそうに。

ちらりと背後に控えるクレオールをみれば、クレオールは静かに半眼を伏せていた。

従僕は早々に帰り、そして残されたファティナはその荷物が納められた空き部屋で女中たちと密やかに微笑みあっていた。

その笑みがとても儂い気がして自然と眉が寄ってしまふ。

何故だかとても苛々としたものが胸の中で広がる。

ファティナの笑顔をぶち壊してやりたくなくなるような、奇妙な感覚だ。

くるりと身を翻しその場を抜けた。

何かをしなければいけないような切迫感。何かを忘れているような……足音をさせて廊下を歩んでいれば、廊下の窓から庭にいる犬が見えた。

別に贈り物を用意しなかったことに対して罪悪感がある訳ではない。普段から何か欲しいものがあれば言うようにとつけてあるし、げんに彼女は「焼き菓子」だとか「焼き林檎」だとか欲しいものを嬉しそうに口にする。

そうだ。衣装や宝石など、喜ばない。

「エマ、いないのか？」

はじめて階下に現れた主の姿に、厨房内がざわめいた。

「若様？」

「外の子犬を一匹分けてくれ」

言えばエマは微笑んだ。

「ああ、やっとお許しになられるのですか？ お嬢様が御好きなのは真っ白いコですよ」

「許す？」

「お聞きでなかったですか？ お嬢様は子犬を欲しがっておられましたよ。ですが、若様がきつとお怒りになられるからって」

怒ったりしない。

とは言い切れなくて口を継ぐんだ。

ヤギも駄目だと言った覚えがあるし、馬は絶対に駄目だと言ったのは確かだ。駄目という言葉積み重ねて、おそらく犬も駄目だと言われると思っただろう。

なんだか不愉快な気持ちがあったが、それを無視して庭の子犬を拾い上げた。真っ白い子犬は一匹だけで、ころりとよく太っていて到底番犬や猟犬になどなりそうもない。その首に自分の首にあったりボんタイを結んで先ほどの部屋へと戻れば

ファティナが泣いていた。

女中達はいずに、部屋の中にいるのはクレオールとファティナだけ。クレオールにしがみつき、ファティナが泣き、そしてクレオールの普段は白手に包まれているはずの手が、直接ファティナの髪を撫でていた。

「我慢なさらなくとも良いですよ」

「だって！……ヴァルフラム様に心配をかけるだけだもの」

「かもしれません」

「……それに、我儘だって判っているわ」

「いいじゃありませんか。大丈夫ですよ、全部吐き出してしまったほうが楽になれる」

「っ」

ふうつとファティナの声のトーンが上がる。

「こんな贈り物要らない！」

どうして旦那様は来て下さらないのっ。いて下さるだけでいいのにっ

思いのほか大きな声を、クレオールが調整するようにファティナの顔を自分の胸に押し当てる。

「旦那さまっ」

部屋に入ることができなかった。

薄く開いた扉、こちらが見ていることをクレオールも気づいている。軽く会釈するように下げられた顔に、一つ瞼を瞬いて応えた。

あの父がわざわざ生誕の贈り物など、おそらく歴代の妻達のかなかでそんな気を利かせたのははじめてだ。

そう言えば、ファティナは喜ぶだろうか？

おそらくその品々を用意したのは父の意向であつたとしても、父が選んだものではない。父は従僕に命じたただけだ。それでも、他の妻とは明らかに違うのだと。

言えば　ファティナは喜ぶだろうか？

ギリつと奥歯が音をさせた。

自然と腕に力が入り、腕にいた子犬が苦しさにキャンと声をあげた。ハツと息を飲むのと、部屋の中の泣き声はやむのは同時。

ヴアルファムは苦い思いを飲み込み、息をつくと扉を開いた。

そ知らぬ顔で。

「義母うえ、どうかなさいましたか？」

赤くなった目頭を慌ててハンカチで拭い、咄嗟に笑みを浮かべる。

クレオールは心得た様子で一歩下がって控えた。

「あんまり嬉しくて……」

「そうですね。ではこれは要らなかつたかな」

言うまでもなく、すでに腕の中の子犬をファティナは気にしている。

「そのこ」

「あなたに」

「良いのですか!？」

ぱっとその顔に喜びが広がった。

先ほど見せた儂い笑みではなく、満面に広がる喜色に胸の中にあるものが霧散する。ぱっとこちらに駆けてきて、ヴァルフアムから子犬を受け取るときぎゅっと強く抱きしめた。

「とても嬉しいです」

「良かった」

「名前を決めて良いですか？」

「勿論、あなたのお好きに」

「ヴァルフアム様からいただいたから、ヴァルというのはどうでしょう!」

「駄目です」

ヴァルフアムはあっさりと却下した。

「今、わたくしの好きにつて」

「その名前は駄目です」

「良いではありませんか」

「絶対に駄目です」

「……」

ファティナは唇を突き出し不満そうにしたが、やがて諦めたように息をついた。

「では、パールにします。白いから」

「オスですよ」

「知ってます」

「まあそれでしたらどうぞ」

なかばうんざりとしながら了承すると、ファティナは子犬を一旦足元におろし、微笑んだ。

「ありがとうございます。ヴァルフアム様。とても嬉しいです」

「喜んでいただけでよかった」

「ヴァルフアム様」

にっこりと言い、身を屈めるようにと命じられる。

やれやれとその言葉に感じれば、ファティナはヴァルフアムの襟に手を添えて背伸びをすると迷うようにして継子の唇にそっと口唇で触れた。

「大好きです」

怒るべきだろうか。

不用意にそんなことはしてはいけないと。

不用意にそんな言葉を使っではいけないと。

一旦開いた口が、別の音を落とす。

「私もですよ」

いいじゃないか。

自分と彼女は親子なのだから。

## 水遊び

庭には小さな小川が作られている。

噴水から流れる水を利用してそのまま水路になっていて、天気の良い日はファティナは良くそこで足を水に浸したりして楽しんでいるのだが。

最近その小川を埋め立ててしまおうかという気持ちがあるのは、見ていて不愉快だからだろう。

「まったく、いつまでも子供だ」

三階の窓からファティナを見つけた。

確か今の時間は算学を習うのではなかっただろうか？

という気持ちと同時に、ファティナと犬が戯れている近くにその為の教鞭を取るものを確認できた。

新しく雇い入れた講師は、珍しい女性講師だ。

「何をしているんだ」

「下に敷いてある白石を使つての講義ですよ」

なかば独り言だったのだが、背後のクレオールが応える。

「……遊んでいるようにしか見えない」

確かに良く見れば、小川の底に敷き詰められている玉砂利を幾つか手に取り、それを相手に見せてはまた小川にほうつたりとしている。

「というか遊びがいなのなものでもない。」

「十四歳のすることか？」

足が濡れているじゃないか。簡易的で質素なドレスにわざわざ着替えているようだが、その裾も濡れている。

パールと名づけた白い犬が、主の動きに合わせてまとわりついて  
いる。

「ファティナ様は算学が苦手ですから、おそらく講師にムリを言っ

たのでしょう」

「甘い」

まったく誰も彼もあの小娘様には甘すぎる。ぶつぶつという言葉には返事が無い。

背後で控えるクレオールにも自覚があるに違いないのだ。

窓から離れて自らの執務机の上にある手紙を手にする。

父から送られてくる定期便には、最近ファティナのこととも時折混じるようになっていた。

曰く、学業を与えるように。

曰く、乗馬を習わせるように。

まったくあの父親が何を考えているのかは少しも理解できない。淑女であれば裁縫やお茶の作法を習うのは当たり前としても、学業などは実はあまり必要が無い。

女性の識字率だとこの国では低いくらいだ。

そのてんファティナは本を読みたいと熱望し、今では文字をあやつることも可能になった。

随分とへたくそな文字で、時々自分の机の上に置かれている手紙には辟易とさせられるのだが。

曰く、庭の奥でうさぎを見つけたのだの、市場の焼き林檎が食べたいのだの。

たかがそんな文字を読解するのにも苦勞する。挙句返事を書かなければならないのだから面倒くさい。

「義母うえの明日の予定は？」

「明日は」

クレオールは絶句したように言葉を止めた。なんだ、と一旦部屋の中へと戻していた視線をクレオール同様中庭へと向ければ、小川の中で座り込み笑っている小娘様がいた。

犬に飛び掛かれ、そのまま尻餅をついたのだと容易く想像がつく。

「ファティツ」

クレオールが咄嗟にそう小さく呟いた言葉と同時に、ヴァルフアムは  
大股で一步クレオールに近づき、相手の襟首を締め上げていた。

「奥様、だ」

「若……さま」

「確かにお前は名前を呼んでいたな。

これからは他の使用人同様、義母うえのことは奥様と言え」

静かに告げ、クレオールから手を離す。

まったく、使用人の躰までしななければいけないとは頭が痛いにも程  
がある。

女主人を容易く愛称で呼ぶような使用人など良くない。クビにして  
やりたいが、クレオールへの権限があるのは自分ではなく父だ。

身を翻して階下へとおおり、廊下の窓を開け放ち窓枠に手を掛けて  
中庭へとおりた。講師が慌てた様子でファティナを引き起こしてい  
るのだが、ファティナは濡れてしまえば一緒とでも思っのか、楽し  
そうに笑っている。

「義母うえ！」

声を張り上げると、講師は驚いた様子で身を引き頭を下げた。

「申し訳ありませんっ」

「あなたは彼女の講師として不向きのようにだ。明日からは来な  
くていい」

「ちよっ、ヴァルフアム様っ」

ファティナが慌てて水の中から立ち上がろうとするのだがうまくい  
かずにわたわたとしている。

そんなファティナのもとへ行き、背中と膝の下に手を入れてその  
まま引き上げる。

ファティナを濡らす水が、自らの衣類へも容易く浸透し濡らしてい  
く。

「お怪我はありませんか？」

「それより！　メアリ女史が悪いのではありません。わたくしが

ムリを言ったのです。解雇なんてなさらないで」

「そうです。あなたがムリを言ったのでしよう。

自分のムリや我儘がまわりにどれだけ弊害があるか、どうぞ少しはお考え下さい」

静かに言いながら、息をつく。

ちらりと視線を恐縮している女性講師へと向ければ、身の置き所がないという風情で小さく震えていた。

「……解雇は取り消します。

あなたは珍しい女性の講師だ。義母うえとも仲がよいようだ。ですが、今後は義母の我儘に付き合っつてこのような真似は控えて下さい。怪我でもさせていたらただでは済ましてさしあげられない」

「申し訳ありません」

萎縮している女を無視し、ヴァルフラムはそのままファティナを抱いた状態で歩き出す。

まったく、気づくのが遅い女中達がわたわたとあらわれてタオルを差し出してくる。

「もうっ、おろしてください！

私怪我などしておりませんからっ。ちゃんと歩けますっ」

「少しは反省なさい。おろしたが最後説教を恐れて逃げられてはかなわない」

「っっお説教なさるの？」

腕の中のファティナが身を硬くして翡翠の瞳でみあげてくる。

ファティナを濡らした水が自らの体をまでも濡らしていくのに、彼女の子供特有の高い体温がまるきり直に触れるように熱く届いていた。

「……その前に風呂を使って体を温めて、着替えなさい。怪我はなくとも風邪をひく」

ほんの少しだけほつと息をつき、ファティナが笑う。

それはそれは無邪気に。

「ヴァルフラム様もびしょぬれですわ」

「誰のせいですか」

「えっと……一緒に御風呂入ります？」

足と一緒に心臓が止まりそうになった。

凝視すれば、ファティナはクスクスと楽しそうに微笑む。

「冗談です」

「

にっこりと自分も笑った。

風呂に叩き落としてやろう。

やたらと凶暴な気持ちになるのは、小娘様がいつまでも子供だからに違いない。

## 恋愛と結婚

「莫迦ね、ファティ」

その声は鳥の声すら思わせる愛らしさで言った。

「恋愛というのは結婚した後にするのよ。幸いあなたの家にはすでに跡取りがいるのだもの。あなたがこの家の子供を産む必要なんてないわ。」

一度夫に抱かれてしまえば、その後は恋愛なんてし放題よ！」

小鳥のように愛らしい声でファティナにそう言うのは、リール。

リルティアというファティナの幼馴染だという少女だった。

帰宅し、居間へと入ろうとしたところでヴァルフアムは足を止めた。

実に愛らしい声が　鈍器のようにヴァルフアムの頭を殴りつけ、その足を止めさせた。

ちらりと一歩後ろにいるクレオールへと視線が走る。

もしや何かの聞き間違いかとも思ったのだが、どうやらヴァルフアムの聞いた言葉に誤りはないうつだ。

クレオールの眉間にもくつきりと皺がある。

貴族の間では当然といわれる悪しき因習。確かに、ヴァルフアムもそれを否定するつもりは無い。おそらく将来的に自分の妻となった女性もそうなることは予測しているし、それで構わないと思っっている。

妻には早々に跡継ぎを産んでもらい、あとは遠い場所で一生を終えてくれれば世はコトもなし。これ以上やっかいなものを抱える気は無い。

彼女が産み落とす二人目三人目の肌や瞳、髪の色がどんなものであろうと自分はまったく気にしない。

だが、ファティナにそうされるのは問題だ。

この屋敷は託児所ではない。

まあ、話の大前提である夫との関係などファティナには持ちようがないのだが。

思わず憤りのままに居間の扉を開きかけたが、それを止めたのはファティナの声だった。

「わたくし、ちゃんと恋愛はしておりますよ？」

衝撃である。

いつもの呑気な口調で、ファティナの声が響く。

「まあ、素敵！　どんな方っ」

もう一人の愛らしい声が言えば、ファティナはふふっという含み笑いが聞こえた。

「勿論旦那様に」

冷水ではなく生ぬるい湯をかけられた気がした。

くると身を翻す。

扉を開く気にはもう到底なれない。ここからはじまるのはファティナの　謎の妄想だ。

愛している夫の話をや々とするのだろう。

優しく、遅しく、素晴らしい男の話を。

ただし、ヴァルフアムはそんな男を父に持った覚えは無い。

あの小娘様の思考回路はいったいどうなっているのだろうか。どこかの組織が壊疽しているのではないかと本気で心配になってくる。

ならばむしろ他の男に恋心でも抱いてくれたほうが……

「駄目か」

ぼそりと呟き、ヴァルフアムは額に手を当てた。

「若様、本日届いた目録でございます」

私室の居間に落ち着いたヴァルフアムの前に幾つもの手紙と目録とがおかれる。

その中で幅を利かせているのは、どごその令嬢との　いわゆる見

合い話ばかり。

それをうんざりと見ながら、ヴァルフアムは軽く手を払った。

「燃やしてしまえ」

「しかし若様」

「さらに嫁姑戦争などされてはたまらん」

ファティナを前に自分の妻となる女はどんな顔をするであろうか。想像するとうんざりとする。

「奥様でしたらきつと仲良くなさって下さいますよ」

クレオールという言葉に口の端が引きつる。

ファティナであればおそらくヴァルフアムの妻となった女にも「仲良くして下さいね」と笑顔を浮かべることだろう。

しかし、相手の女はそれを受けてどのように振舞うであろうか。

「こちらこそ！」

と、二人でニコニコしている様子を想像したら胃がキシリと傷む気がした。

「」

むっつりと押し黙り、ファティナを冷たく見つめるほうが実にありそうだ。

その場合、自分は確実に妻よりもファティナを庇わなければならぬだろう。

ファティナが嫁をいびるのは想像できないが、嫁にいびられて寝台で泣いているのは容易く想像できる。

その時はきつとクレオールがファティナの頭を撫でている。確実だ。

「……そんなのはごめんだ」

楽しい未来を想像することはできそうになかった。

やがて私室で本を読んでいると、友人が帰宅したであろうファティナが無遠慮に来訪した。

「ヴァルフアムさま、お帰りでしたのならお声をかけてくださればよろしかったのに」

「私は一人で楽しんでおりましたからお気になさらず」

「まあ、せっかくリールが来ていたのですよ？」

リールもヴァルフアム様にお会いしたいとおっしゃってました」

できれば二度と会いたくない。

ヴァルフアムは嘆息し、こちらの許しもなく反対側の席に座る義母の姿に瞳を眇めた。

「リールはヴァルフアム様にお似合いですよ」  
にこにこという。

第一子出産後浮気確定の妻というわけだ。

別にいいが。

「義母うえ」

「なんでしよう」

小首をかしげる義母の姿に、「友達は選びましょう」と口を開きかけて辞めた。

口火を切ったが最後、自らの立ち聞きも全て暴露してしまいそうだ。それになにより、ファティナは友人の思想に染まりそうにない。

「ヴァルフアム様？」

話題を転化させようと思案したものの、適当な言葉が出てこない。

「私が」

「はい？」

「結婚することについてどう思われます？」

よりによってコレか。

口から出た話題に自分で吐き気がする。

ファティナは一瞬驚いた様子で瞳をまたいたが、すぐにぱつと嬉しそうに笑みを浮かべた。

「まあ、素敵ですわ！」

どちらの方でしょうか？ ああ、でも心配ですわ。わたくし花嫁さまと仲良くできますでしょうか？」

「……」

「嫁姑戦争は永遠の課題ですわよ」  
実に楽しそうだ。

「姑と花嫁の間には長い長い戦いの歴史があるのですって！  
著名なニーナ・ロツヒもそれはどろどろの嫁姑戦争を題材に  
した本を出していらっしやるのよ」

何の本を読んでいる。

ほんとうに楽しそうに言う義母にうんざりとしてしまう。

ヴァルフアムは義母を無視してもともと読んでいた本に視線を落と  
した。

「ヴァルフアム様？」

「まだ結婚はしませんよ。今だって私は子育てに忙しいんです。ま  
ったく冗談ではありませんね」

「……子育てって、もしかしてわたくしのことですか？」

「おや珍しく察しがよろしいですね」

「わたくしはあなたの義母ですよ！」

キッと怒り出した小娘様に溜息を吐き出し、ヴァルフアムは暗  
い感情がちらりと過ぎったことに苦笑した。

少しは動揺して欲しいなんて、莫迦らしい。

いや、どうやら多少は動揺、というか悩んだようだ。まったく望ん  
だものではないが。

「義母うえ」

「なんです！」

「親子二人ではご不満ですか？」

「……不満はありません。けれど」

けれど、と続けられそうな単語がいやでも理解できるから、ヴァル  
ファムは言葉を遮った。

「義母うえ、夕方ではありますが犬の散歩でも行きましょっか」

けれど 続く言葉など必要がない。

この愚かな小娘様は判っていないのだ。

あなたが愛していると思いついていて、あの男が実際に隣にいた時

あなたの幸せなど崩壊してしまうに違いないというのに。

無邪気に笑うその顔を思い切り歪ませて泣き顔にしてやりたくなるのは、きっと彼女があんまり愚かで腹立たしいからだ。

時々腹の底に淀むどろりとしたこの感情は、憎しみに良く似ている……

## 約束

「約束はキライです」

ふいに口にした言葉に、ファティナは眉間に皺を寄せた。

約束してください。

そう言った言葉を、小娘様は横を向いて拒絶した。

「私と一緒に構わないのでしたら」

うんざりとヴァルフアムは言った。

幾度も幾度も「出かきたい」と訴える義母に、とうとう折れた。勝手に外出などされるよりはマシだと諦めたのだ。

夕餉を済ませた後。

居間で食後のお茶を飲み、いつもと同じようにファティナはその日あったことをつらつらと語る。

ヴァルフアムはただそれに相槌を打ちながら過ごしていたのだが、そのうちにファティナは街へと行きたいのだがと口にしたのだ。

随分とおそろおそろ。息子の機嫌を損ねないかと心配気な様子で。

「よろしいのですか？」

途端にその顔に喜色が浮かぶ。

「仕方ないでしょう。あなたときたら放置しておくで勝手に一人で出かけてしまいかねない」

すでに幾度か同じことをしてかしている。

ならば、自分と一緒に出かけてもらおうほうが随分と気が楽というものだ。

こんな小さく頼りない命のものが、王都といったところで柄の悪いものたちだとしている街に繰り出して無事であることのほうが奇跡的だ。

ひょいっと攫みあげて馬車に押し込んでしまえば、それだけでフ

アティナという存在を見つけ出すことは困難になってしまっただろう。  
そんな恐ろしい思いは絶対に御免だ。

「その代わり、一人で出かけるようなまねはもうなさらないで下さい」

「はい」

「約束して下さい」

にっこりと微笑むファティナに念を押すように言えば、ふっと小娘様の瞳にかげりがうまれた。

翡翠の眼差しが、戸惑うように揺れる。

「義母うえ？」

「……約束はキライです」

「それは守れないという意味ですか？」  
生意気にも。

「父さまも母さまも、すぐに帰ると約束なさったのに帰ってきて下さらなかったもの」

小さく囁かれた言葉に、ヴァルフアムの眉間に皺がよる。

「いつもと同じようにわたくしを抱きしめて約束なさったのに」

約束、という言葉を拒絶する様子にやれやれと息をつく。

果たされなかった約束。この小娘様はそれを忘れていないのだ。

「では約束の仕方をかえましょう」

「ヴァルフアム様？」

ヴァルフアムはゆっくりとした所作で義母の前に立つと、身を屈めて軽く、ほんの少しだけ躊躇して、けれども軽くファティナの濡れた唇に触れた。

甘い味は、先ほど食べた砂糖菓子。

「約束しますよ。私はあなたを残して消えたりしない。だから、あなたも約束なさい。」

私を残して消えてしまったりしないと

すぐに身を離して言えば、ファティナは戸惑いを込めた眼差しで

見上げてくる。

「唇のキスは軽々しくしてはいけませんわ」

いつの間にそんな常識を覚えたのだろうか。

子育てというのは時々驚かされる。相手の成長が喜ばしく、また少しばかり 無駄な知識など必要が無いとも思う。

愚かな小娘様だと蔑むくせに、その愚かしさが……愛しい。

そう、おそろしいことに、愛しいのだ。

まったく厄介なイキモノだ。

ヴァルフアムはやっぱりと笑う。

「以前にもして下さいましたでしょう？」

「あれは特別……ですわ」

「これも特別ですよ。大事な約束ですから 違いますか？」

穏やかに言う継子の言葉に、ファティナはしばらく考える風ではあったがやがて納得したように微笑んだ。

「そうですね。大事な約束は特別ですものね？」

「そうですね。それに、家族の間のキスに問題などないでしょう？」

家族、という単語が彼女の弱点だ。

ファティナは嬉しそうにうなずいてみせる。

戯言だ。

こんな言葉で容易く丸め込まれる小娘様はちょっと危険なのではないかと思うのだが。

もう少しきちんと脳を使わないと、騙されてぼろぼろにされてしまう。

愚かさが愛しく、愚かさが苛立ちの原因にもなりうるのだから不思議なものだ。

自分に騙されている分には良いのだが、他人に騙されることを危惧している。

そんな自分が結局愚かだということをヴァルフアムは気づいていた

が、その全てを棚に放りなげるのも得意だった。とにかく、ファティナというイキモノは油断がならない。

一人で野放しなど到底できようはずがないのだ。

「大事な約束の儀式って、なんか素敵ですね！」  
子供の児戯。

小娘様は真実子供だからこういつた行為を純粹に好む傾向にあった。

父と母とを事故で失ったこの小娘様が、家族というものを大事にしていることも知っている。

ファティナは瞳を瞬き、微笑んだ。

「約束して下さいませぬ？」

その言葉に、身を屈めるようにと手で示される。

そつと自分の唇にファティナが唇で触れて、ヴァルフアムは半眼を伏せて口元に笑みを刻んだ。

「約束しますわ。わたくしはあなたを残して消えてしまったりしません」

「ではもう一つ」

先ほどの、一人で出かけたりしないという約束をきちんと交わす。ファティナがくすぐったそうに笑った。

「何か？」

「このような親密な約束は、仲の良い親子って感じがしてよろしいですわよね」

実に嬉しそうにファティナが言うから、ヴァルフアムも口元に笑みを刻み込んだ。

親子、という言葉に嫌悪を抱かなくなったのはいつごろからだろうか。

ヴァルフアムはちらりと考えたが、笑みの中に落としこんだ。

自分にも昔、実の母親というものがいた。今も画廊に絵の飾られたその女性はとても美しい女。

だがその腕が自分を抱きしめて息子を愛した記憶など無い。自分も

また、母を愛しいなど思ったことなど無い。

母の死は、母の不在は幼い子供に何ももたらしたりはしなかった。

真実あれが親子であるなら、これはいったい何だろうか？

親子という言葉に安心しきって楽しみに笑う義母との関係は、確かに義母と継子であり、ヴァルフアムはそれでいいと感じている。

親子であるならば、彼女はかわらずそこにいるのだから。

思わず冷笑が口元に落ちて、不思議そうにファティナが首をかしげた。

「どうかなさいました？」

「いいえ。次の休みが楽しみですね」

「はい！ とつておきの店を案内いたしますわ。美味しいパイのお店を知ってますのよ」

嬉しそうに瞳をきらきらさせていう義母に、ヴァルフアムはにっこりと微笑みかけた。

「いつそんな場所を覚えたのでしょうかね？」

「……」

「詳しく聞かせてもらいましょう」

泣きそうな顔で上目使いに見上げてくる義母を見ると何故か溜飲が下がる気がするが、それはまたまったく別の話だ。そんなことでほだされたりはしない。

本当に、小娘様は油断できないから困る。

## 約束（後書き）

陽だまりのキミは香気な育児日記です。

嘘

「わたくしはもう子供ではありません！」

小娘様の宣言に失笑が漏れる。

もう間もなく十五になるうという小娘様だが、ヴァルフアムに言わせれば小娘様はいつまでたっても小娘様だった。

「ヴァルフアム様はわたくしを小さな子供だとも思っていないらしいやいますか？」

「小さいとは思ってませんが、子供だとは思ってます」

あっさりと白状すればファティナは唇を尖らせた。

淑女はそんな顔をしない。

「わたくしは義母なのですよ」

「ええ、判ってますよ」

「もう添い寝など要りません」

きっぱりと宣言する。

「ほんの少し前まで一人で寝れないと騒いでいた人の台詞とは到底思えません」

「……それは、子供だったのです」

今と何が違う。

ファティナは眉根をひそめ、上目遣いに睨みつけてくる。

「では本の朗読も必要ありませんね？」

「……はい」

それには多少未練があるようだが、ファティナはどうやら今回は強い意思を持つての宣言らしい。

「ではよろしいですよ。私も別に狭い寝台であなたの寝相の悪さに耐えながら寝るのが趣味という訳ではありませんし」

言われた内容に不満はあるものの、ヴァルフアムのあっさりとした返答にファティナはぱっと笑みを浮かべた。

「ところで」

「はい？」

「今回はまた急な話ですね？　どういった心境の変化でいらっしやいますか」

組んでいた足を組み替えて小首をかしげて問えば、ファティナは微笑んだ。

「……淑女は旦那様いがいの方と添い寝してはいけないのでしょうか？」

多少戸惑いながら言う言葉は、明らかに誰かからの入れ知恵だ。そもそも今まで何の疑問も持っていなかったのだらう。彼女は継子をあたたかな枕程度にしか思っていない。

「どなたから教えていただいたのです？」

「メアリ女史が」

「女史は勘違いなさってますよ。私と貴女は親子ですからね。家族は同じ寝台で寝てもおかしくない」

にっこりと言えばファティナは戸惑うように瞳を揺らした。

「ですわよね？」

「家族ですからね」

「家族ですものね？」

愚かだ。

この小娘様は家族という単語に弱い。

元々から家族という愛情に恵まれなかったのだ。そして彼女は強くそれを欲している。本来の家族の姿を知らないのだから示されるものを鵜呑みにしてしまうのだ。

ああ、本当に愚かしい。

だがそれがファティナだった。

愚かでか弱くて、無邪気で　こんな容易く丸め込まれる。そして憎らしい。

「ですが、今夜からは別で休みましょう」

ヴァルフアムは言いながら席を立つと、ファティナの前で身を屈め

て彼女の瞼と頬とに唇を落とす。

「おやすみなさい、義母っえ。」

どうぞ良い夢を

」

私室でグラスを傾け、本に視線を落とす。

静かな時間はもう随分と前に手放したものだ。

クレオールも誰もいない。ただ一人だけの自分の部屋。壁にたつ時計の針の音が時々気になる程度。

さて、どうするか。

夜も深くなり、移動を考えたところで控えめに扉がノックされ、苦笑する。

ゆっくりと椅子から立ち上がり扉を開ければ、寝巻きにガウンをかけただけの小娘様が眉根をしっかりと寄せて唇を尖らせて見上げていた。

そろそろ行くかと思っていてヴァルフアムは苦笑するしかない。

どうやらヴァルフアムが訪れる前に我慢ができなくなったらしい。

「どうなさいました？」

「……寝れません」

「お一人で寝るのですよね？」

「……」

泣きそうな顔をする。

「義母っえ？」

「ヴァルフアム様、意地悪です」

「意地悪などしていませんよ？ 私は義母っえを尊重しているだけです」

そっとその頬に手を当てる。

体は温かいというのに、一人の寝台は彼女にとって心地よいものはなかったのだろう。

「淑女は夫意外と床をともしないのでしょうか？」

益々泣きそうな顔をする。

歪んだ顔に愉悦がもれるのは 随分と趣味が悪いのだろう。自分は。

「ヴァルフアム様は家族だから……息子だから、良いのです」

「そうですね」

はい、よくできました。

クスリと笑みを落としてヴァルフアムはファティナの眦にうつすらと浮かぶ涙の雫を舐め取った。

「私の寝室で構いませんか？」

「はい」

ぱつとファティナが微笑む。

愛しくて憎らしくて、どうしようもない小娘様。

「お話がございます」

強張った顔の勤勉なる女性は、ヴァルフアムの前で背筋をピンと伸ばし強い意思のある眼差しを向けてくる。

「なんでしよう」

ヴァルフアムが書庫にいるところを見計らうように訪れた彼女は

名は何だったか、ファティナ付きの女性講師。腹のあたりで指を組んでゆっくりと覚悟を決めるかのように息を吸い込んだ。

「奥様のことでございます」

「そうですね。あなたと私が他に何の話しをするのか想像もつきません」

擲諭するように言えば、ぴくりと眉間のあたりが動く。

「あの方に嘘を教えるのはお辞め下さい」

「嘘？」

「あの方はあなたを信じていらっしゃる」

ほんの少しだけ彼女の声は震えていた。

おそらくそれは自分の進退すら危ういものだと感じている。この

場でヴァルフアムが解雇を言い渡すであろうことを覚悟している。

それでも言わずにはいられない内容　という訳だ。

「あなたがあの方に接するものが……普通の親子の関係と異なるものであることを、ご理解しておりますね」

「さあ？」

「ヴァルフアム様！」

ヴァルフアムは肩をすくめ、近くの机に軽く腰を預けた。

「普通の親子がどういったものか、生憎私は存じ上げませんから。

私はただ、義母うえと愉しく生活しているだけです。問題でしたでしょうか？」

「あの方はあなたの父君の奥方ですよ」

「そうですね。私はきちんと義母うえとお呼びしている。

何が問題であるのか理解できませんね？」

ヴァルフアムはわざとらしく小首をかしげた。

「……少なくとも、一緒に寝台に寝るような行為はもうお辞め下さい」

「ああ、義母うえからも言われました。私も了承致しましたよ」

その言葉に女史はほっと息をついた。

その安堵の表情がおかしく思え、ヴァルフアムは言葉を続けた。

「ですが結局義母うえは夜中に眠れないと私の寝室に参りましたが」

「」

「親子で共に寝ているだけです。女が欲しければ娼館でも行きますから安心なさい」

さらりと言われた言葉に相手の顔が強張る。

その反応がことさらおかしくて、ヴァルフアムはわざと胸の内を吐露していく。

「性処理ならいくらでもいる。触れるだけの口付けが問題ですか？

抱きしめる親子がない？　あなたはいったい何に対して問題だ

と言っているのか、まったく私には理解できかねますね」

「あなたは……」

ヴァルフアムは笑みを湛え、口調を変えた。

「あの人は私の義母だ。たかが講師如きが余計な口を利くな。あなたはただあの人の暇潰しの相手でしかない。私があなたの首を切らないのはあなたが女であるという理由だけだ。今の仕事を失わぬよう、分を超えない程度に励むんだな」

普通の親子の関係と異なる？

そんなのは元からだ。

八つも年下の小娘。そのどこが普通だというのだろう。

莫迦らしい。

女史が口を開こうとしたところで、ノックの音が二人の緊張を割った。

「どうぞ」

と躊躇無くヴァルフアムが応える。

ひよこりと顔を出したファティナが瞳を瞬いた。

「あら……えつと、あの、御邪魔してしまっただかしら？」

どう見ても二人が会話を交わしていたことは明らかだ。

ヴァルフアムは苦笑し「どうなさいました」と尋ねたが、ファティナの瞳は興味深々だ。

「もしかして御二人は恋人同士？ まあ、素敵ですわっ」  
恋愛物語にもありましたわ！

女性家庭教師と貴族の若君の恋っ。と嬉しそうに語るファティナの言葉にメアリは狼狽したが、ヴァルフアムは冷たく言った。

「そんなことあるわけがない。あなたの勉強について話していたのですよ 義母うえ」

「……きちんと学んでおりますよ」

怯えるように言うファティナに近づき、ヴァルフアムは極普通の所作でファティナの頬に触れ、額に口付けを落とし、眦にも触れる。「ではご褒美にあなたの誕生日には景色の良い山荘にでも行きましょうか。数日私も休みをとってのんびりと。いつの間にか上達したという馬の扱いを見せて下さい」

「本当ですか？」

「私は嘘は言いませんよ　ねえ、女史？」

すっと視線を向けられ、メアリは自分の喉に唾液がたまるのを感じた。

「女史？」

冷たく向けられる眼差しを避けるように瞳を伏せて、ゆっくりとうなずく。

「はい……」

鉛が喉を通るような重苦しさに、メアリは唇を噛んだ。

## 子供

ああ、そういえばいたな。

久しぶりに見たその女が、自分にとって腹違いの妹であることを思  
い出すのに時間が必要だった。

「兄さまっ」

ぱっと駆けて来るのはデリラだったか、マリルだったか。

そう考え、自分が妹の名前を覚えていたことは新鮮な驚きだった。

ヴァルフアムの父であるヴァルツはすでに四回の婚姻をしている。  
そのうちの二番目の義母が産み落としたのは二人とも女兒であり、  
離婚の折りに絶縁している。

父にとって娘は必要ではなかったようだ。

最低な男だが、ヴァルフアムにとってそれは今更だ。

自宅の門前にいる腹違いの妹の姿に、ヴァルフアムは一瞬眉間に皺  
を刻んだ。

「どうかしたか」

自然と言葉も乱暴になる。

「ああ、兄さまっ、お会いしたかった」

実に嬉しそうに言われるが、ヴァルフアムは会いたいと思ったこと  
もないし妹はおるか弟にでさえ肉親としての情などというものを持  
ち合わせていない。

父親を最低な男だとは思うが、おそらく自分にはその血が色濃く流  
れていることをヴァルフアムは否定するつもりはない。

門前で問答でもしていたのだろう、門番に立つ男が困った様子で  
一度頭をさげた。

門番に馬の手綱を預けて嘆息する。

「どうしてここに？」

「聞いて下さいます、母さまがっ」

切々と自分の悲哀を訴えようとする相手につんざりとした。

絶縁の意味を知っているか、と突きつけたい。

これの母には父が多大な金を渡している筈だ。決して当家とはもう関わらないという名目で。それはつまり、彼女と自分は兄でもなければ妹でも無い。

「私は疲れている。話しがあるなら後日手紙をよこしてくれればいい」

「兄さま？ あの……」

戸惑うようにその眼差しが揺れる。

まるきり、兄の言葉が判らないというように。そうしてからふるりと一度首を振り、

「兄さまもお父様に強く命じられていらっしやるのね……」

悲しそうに言うが、おそらくまったく、全然違う。

怒鳴ればこの女は帰るだろうか、と思ったところで 呑気な声が耳に入り込んでしまった。

「ヴァルフアムさまっ、お帰りなさいませっ」

足元に白い犬をまわりつかせ、帽子のツバを押さえてぱたぱたと駆けて来る義母の姿に、ヴァルフアムは天を仰いだ。

「あら、お客様でいらっしやいますか？」

継子の前にサマードレスの少女を見かけ、ファティナは驚いた様子で言ったが、彼女の背後にいたクレオールが「ファティナさま」とやんわりと声をかけた。

名前を気安く呼ぶ執事 そう、この男はすでに執事見習いではなく執事である に眉間の皺が深くなるが、おそらくこの場の状況を考へてのとなのだらうと流す。

「戻りましょう」

「あら、でも……」

「兄さまの 奥様？」

不快そうにデリラだかマリルだかが言う言葉に、場の空気を読むと  
いうことがまったくできないファティナは元気に言った。

「あら、わたくしはヴァルフアム様の義母ですわ」

につこりと微笑むファティナは実に愛らしいと思うが、時々絞め殺  
したくなるのはいったい何故なのだろうか。

デリラだかマリル つまり、腹違いのこの妹は息を飲み込み、フ  
アティナを食い入るように見つめて言った。

「最低だわ！」

何に對しての言葉だか知らないが、同意してやってもいい。

ヴァルフアム自身そのような感想をいろいろな事柄に対して思うこ  
とがある。

だがそれをファティナに叩きつけるのは間違いだ。

「私よりも子供じゃないの！ 何を考えているの、父さまはっ」

「え、あの……」

ファティナの顔から無邪気な笑みが消えた。

相手の言っている意味をゆっくりと咀嚼するように考え、救いを求  
めるようにヴァルフアムへと視線を向けてくる。

翡翠の眼差しが途方にくれていた。

「クレオール！」

怒鳴ればクレオールは一礼し、ファティナに「失礼いたします」と  
その腕を引いた。

体制を崩すファティナを、クレオールがその腕に抱き上げた。

その小娘様を手早く移動させる為にヴァルフアム自身がよく使う手  
法だが、それを他人がするさまをみるのははじめてのことだった。

ぎしりと自分の中で何かがきしむ。  
無理矢理連れていかれる主を心配し犬が吼える。  
妹の視線からそれを逸らすように間に入り、ヴァルフアムは笑みを刻んだ。  
苛立ちが体内を巡る。

何故この女は訪れたのか。

何故ファティナは散歩などしているのか。

何故　自分はここに立っているのか。

「もう帰りなさい」

「どうなっているの？　父さまはまた再婚なさったというの？　それである小娘？」

小娘という言葉に口元が歪む。

その通り、小娘だ。

だが、それを他人の口が言うのがこれほど不快だとは思わなかった。

「その口を閉ざすといい」

「兄さま……」

「先ほども言ったな、用があるのであれば手紙を先に出して相手の応えを待つものだ。突然屋敷を訪れるのが淑女のすることか？」

「妹が兄の家を訪れるのに儀礼が必要ですか？」

「必要だ」

きつぱりといえ、戸惑いに瞳を揺らしながら一礼する。

「ごめんなさい……でも」

「失礼する」

「兄さま。私困っているのです」

「その相談は私にはなく、自分の母親にするべきだ」  
軽く手を払って身を翻す。

「母さまが結婚しろというのです。相手は随分と年上の男なのです。こんな結婚イヤです」

悲鳴のように叫ぶ言葉に、ヴァルフアムは足を止めて冷やかに言った。

「あの人は三十六も年上の男に嫁いだぞ」

「つつ」

「せいぜい夫婦仲良く愉しく暮らせばいい」

「兄さまっ」

門番を睨みつけてあとは無視した。

軍靴を鳴らして居間へと入れば、ファティナの戸惑いを宥めるようにクレオールがひざます跪き語りかけている様が視界に入り込む。

「義母うえ」

「……ヴァルフアム様」

少しだけ潤む瞳が見上げてくる。どこかほっとしたように。だがその瞳からは戸惑うような怯えのようなものが拭えていない。心の動揺がすぐに顔にでるのはファティナの美点の一つだろう。嘘など絶対につけない。だというのに隠し事をしてすぐにばれるのだ。

「……旦那様の、娘、なのですね？」

「二番目の妻の子です。お気にかけることはない」

「でも、そうしたら……あの方もわたくしの娘なのですね」

クレオールが下がれば、同じ場所にヴァルフアムが跪く。

一人掛けの椅子に座るファティナの膝に手を掛けて、できるだけ笑みを浮かべて見せた。

「もうとうに別れていますし、義母うえの心を煩わせることは何もありません」

「でも」

「義母うえ」

「私よりも年上でいらっしやいますね？」

少しだけ疲れたようにファティナが儂く微笑む。

それはむしろ当然なのだが、心のどこかが落ち着かなくなるのだから。

「いつか、わたくしも旦那様からお子を授けてもらえるかしら」  
ぼつりと言う言葉に、ヴァルフアムは胸の内にとろりと淀むものを感じた。

腹違いの妹に対していままで何かを感じたことは無い。いるというだけだ。だが、このときはじめて殺意を覚えた。

「大丈夫ですよ」  
うつむいてファティナの膝に自分の額を当てた。

「そんなことで心を痛めないで下さい」

ファティナの指先がヴァルフアムの頭に触れ、そつと撫でる。

自分ばかり動揺して、気づけば自分の膝に義息がなついている。まるで彼こそが傷ついたかのように。

それを戸惑い見下ろし、ファティナはちらりとクレオールへと救いを求めて視線を向けたが、クレオールは緩く首を振る。

「お疲れなのですか、ヴァルフアム様？」

「ごめんなさい、わたくしが心配をおかけしたのね？ 平気ですわよ。ちよつと吃驚しただけなのです」

柔らかな色素の薄い金髪を撫で、ファティナは自分の不甲斐なさに吐息を落とす。

理解しているはずだ。

夫と 自分との年齢差。

夫の幾人もの子供。

「ヴァルフアム様はいがいに妹弟が多いのですね。それでは今は一人で寂しいですわね？」

ファティナは優しく言う。

「きつとわたくしが弟か妹を創つてさしあげますね？ ヴァルフアム様はどちらがよろしいですか？」

ファティナの膝に額を当てていたヴァルフアムだったが、やがて肩

を震わせて顔をあげた。

「要りませんよ。今は義母うえの子育てで一杯一杯なんですから」  
慰めているつもりだったファティナだが、継子の言葉に途端に唇を尖らせた。

「またそのような憎まれ口をおっしゃるっ」

そんなファティナを見上げて笑いながら、ヴァルファムは口角を引き結んだ。

「そうですね……あなたの産む子であれば、どちらでもいい」

弟でも妹でも、自分はきつと愛せる。

アイセルだろう。

だがそのアイはきつとニクシミに等しい。

彼女に感じるそれとおなじように。

義母が無邪気に笑みを浮かべる程、自分は淀んでいくような気がするのだ。

暗く、深く、闇が広がる。

義母の手が髪に触れる。

そこから闇がゆるりと辿り、彼女が侵食されてしまえば良いとすら思いつのに……彼女は変わらず陽だまりにいるように暖かく穏やかにそこにある。

愚かしい……

ファティナは十五を迎えていて、その時にも父は昨年同様膨大な量の贈り物を贈りつけて彼女を泣かせた。

自分にはできないことを父は容易く行う。

手紙の返事一つもよこさぬくせに。

この一年一度も顔さえ出さぬくせに。

「ヴァルファム様？」

膝頭に額を押し当てて息をつく息子の様子に義母が小首をかしげる。

「疲れました……」

「でしたら自室で休まれたほうがよろしいですわよ？ 床に座って  
いてはいけません」

「動きたくありません。しばらく こうしていいですか？」  
うつむいたまま言う言葉に、ファティナはくすくすと喉の奥を鳴ら  
した。

「時々ヴァルファム様は小さな子供のようです」

「子供ですよ。だから少しだけこうしていさせて下さい」

姫君は健やかにしているか。

数日前に届いた父の定期便。その文面一つで暖炉に入れて燃やし尽  
くした。

最後まで読むこともできずに。

……何が書かれていたのか、今ではその内容を読み落としたことが  
心の片隅でじくじくとうずいた。

## おとうと

義母が落ち込んでいる。

それはそれは判りやすい程。

はじめのうちこそ微苦笑で眺めていたものだが、その落ち込みが三日を過ぎるとどういうわけか腹立たしさを覚えてくるから不思議だ。「もういい加減にしなさい」

大きな白い犬を抱きしめてその体毛に埋もれている義母を庭先で見つけ、ヴァルフアムは眉間に皺を刻んだ。

「いつまで考えても仕方がない」

「……でも」

「でもも何もありません。もともとから嫌われていたのは知っていますように」

きっぱりと言い切ると、ファティナは顔を歪めた。

ことのおこりは数日の休暇がとれたヴァルフアムが、避暑をかねてファティナを別宅に連れていったのが原因であった。

何も考えずに父の持つ幾つかの別宅の一つを訪れた。

そこに先客がいるとは思っていなかったのだ。

父の別宅、別荘で誰かに遭遇する 確率がないわけではなかった。

忘れがちだが、自分にはもう一人家族がいたのだ。

エイリク、また随分と年の離れた腹違いの弟。

年齢を認識したのは実ははじめてだったのだが、いつの間にか大きくなっていったのか八つになっていた。

そしてその顔つきときたらヴァルフアムに良く似ていた。

ヴァルフアムが父親に似ているといわれるのだから、つまりこの顔も父に似ているのだろう。

そんな相手を見てファティナがどうするか？

抱きついたのである。

「まあ、お可愛らしいっ  
ぎゅむりと。」

そして激しく抵抗され、また拒絶された。

そうして作成されたのが現在のファティナという 実に阿呆らし  
いことだ。

「あんなに可愛らしいのに」  
ほっつと溜息を吐き出すファティナを眺め、ヴァルフアムは腕を組  
んだ。

八つの子供はきつと子ども扱いもイヤだったことだろう。子供の癖  
に。ファティナにもそういう傾向がある。

愚かな子供だというのに、そのように扱われると途端にへそを曲  
げるのだ。

ならば生意気ざかりの八つの子は、同じように反発するのは定石  
それ以上に憎しみすら持つような冷たい眼差しでファティナを  
睨んでいた。

それはそれは実に面白いほど。  
「嫌われていたのは承知していただいでしょう？ そんなことで一々落  
ち込まないで下さい」

「……いいですわよね、ヴァルフアム様は」

ぎゅつと犬の首を抱いたままの小娘様は唇を尖らせてヴァルフアム  
を見上げた。

「エイリク様にとっても好かれておいででしたもの」

そう、何故かあの弟ときたらヴァルフアムにはまとわりついてきた。  
尾の生えた犬のように。

ぶんぶんと尾をふり、瞳をきらきらとさせて。

「兄さま！」

と……

ああいうのを見るとむしろ気持ちが悪い。

妹達にもいえることであつたが、何故彼等は無条件で兄というイキモノをあれだけ慕えるのか判らない。

少なくとも、ヴァルフアムにとって妹や弟に対して碎くような心は無い。

嘆息を落とし、肩をすくめた。

「そんなにエイリクに好かれますか？」

「あたりまえです。だってあんなに可愛いのに！」

可愛かつただろうか？

ヴァルフアムは眉間に皺を寄せて考えてみた。

エイリクの造作は自分と似ている。おそらく、自分も八つ程度であればあんな感じだつただろう。色素の薄い金髪。意思の強い眼差し。憎しみを憎しみのままに叩きつける傲慢さ。

好きか嫌いしか持たず、中間も知らぬ計略というものを持たぬ愚かさ。

捻り潰してやりたくなるかわいげのなさだ。

「可愛かつたですか？」

思わず尋ねてしまった。

「可愛いじゃありませんか！ 旦那様にそっくりで」

「……あなたの感覚を信用してはいけないということをお忘れていました」

「なんですか、それ！」

ファティナが声をあげて怒り出したが、ヴァルフアムはふと違うことに気づいた。

「私は？」

「はい？」

「あなたにとってこの継子はかわいい存在なのですかね？」

ファティナは益々眉間に皺を深め、

「ヴァルフラム様は素敵だと思います」

と嬉しいことを言ってくれたが、

「でも、口は悪いですし時々とっても意地悪だし、ちっとも可愛くはありません」

言い切った。

「あ、でも……旦那様に似ているところは高ポイントですが、しかも絶対にいやなことを言う。」

あの父親に自分が似ている？

「旦那様とヴァルフラム様とエイリク様を並べたらきつとすばらしいですわ」

うっとりというファティナはまったく理解できない物体だった。

父と自分と弟を並べる？

なんとというおぞましい光景だろう。吐き気すらしそうだ。

心底気持ちが悪い。

「エイリク様も一緒に暮らせたらきつと愉しいでしょうに」

「……ですからあなたは相当嫌われていますよ」

うっとりという義母に溜息交じりに言えば、途端に口を尖らせた。

「仲良くする自信があります！ 仲良くする機会がないだけです」

「まあ、楽観主義なあなたらしい解答ですね。何度も言いますけれど、エイリクのことに関しては父の考えです。私にも、そしてあなたにもどうにかなるものではありませんよ」

どうにかなるとしても絶対にどうにかする気は無いが。

ファティナはぱふりと犬の頭に自分の顔をうずめて、

「子供が欲しいですわー」

と呑気に言う。

そのへんで拾ってきそうでいやな言い方だ。

と、ぱつと義母は顔をあげた。満面の笑みで。

「ヴァルフアム様！」

「……なんでしょう」

聞きたくない。

絶対にろくでもないことを考えている顔をしている。

「ヴァルフアム様は23歳におなりですわね」

「そうですね」

「結婚なさったらいかがでしょう」

ほら、この義母ときたら突然こんな突飛なことを言い出す。

「私が、ですか？」

「はい！ 男性としては少し早いかもしれませんが。若い父親が珍しいわけではありませんでしょう？ 結婚して下さい」

結婚して下さい。

激しくむかつく。

自分に結婚をすすめるこの義母の理由は実に単純だ。子供が欲しい。ただそれだけ。

継子の顔が引きつっているだろうに、犬に張り付いたままのこの小娘様は自分の考えがさも良いことのように思うのか、物凄く愉しそ  
うに続ける。

「お相手の方はどなたかいらつしゃいます？」

ああ、わたくしときたら迂闊でした。ヴァルフアム様、どなたか想  
う方はいらつしゃらないのですか？」

「思い出して欲しいのですがね」

ヴァルフアムは口元に緩く笑みを浮かべ、義母をねめつけた。

「私の休暇日は決まってどこかの誰かさんがやれどこそこに連れて  
いけだのと騒ぐ為にすべからく潰されておりまして、女性と遊んで  
いる暇などないのですが」

「まあ！ ヴァルフアム様ってばふがいのない」

ふがいのない？

「女性との出会いは自ら時間を作り出すものです」

川にでも落としていいのか、この小娘様は。

ちらりと視線が庭の片隅にある小川に向けられる。だがあれはただの水路であって深さが無い。落としたら最後濡れるだけではすまないで辞めておく。

「きつとわたくしが素敵な花嫁さまを見つけてさしあげますわ」

「……もう好きにして下さい」

結婚することに意義は無い。

自分は家の跡取りとしてそれに見合った相手と姻戚を結び子を作る。子供さえできてしまえば、妻は本邸にでも別宅にでも好きなところで暮らせばいい。結婚したところでこの生活は何も変わらない。

義母は間抜けにそこにおいて、自分はその傍らで職務をこなすのだろう。

何があるうと変わらない。

自分と彼女の関係が義母であり、継子である限り。

この当時はそう思っていた。

父が何を考えているのか、ヴァルフアムは少しも考えてなどいなかったのだ。

## 音楽会1

義母の考えは時々複雑すぎて理解ができない。

「ヴァル？」

グラスを片手に首をかしげる友人に、ハッとヴァルフアムは酸素をとりいれるという行動を思い出した。

頭が真っ白になっていた。ゆっくりと頭の中で数字を数え、それで足りなくて地名をなぞる。七つ程度考えたところで、ゆるりと思考回路が正常値を取り戻した。

「いや、なんでもない」

わけではないが。

「可愛いご婦人でも見つけた？ 君はその年齢で珍しく婚約者がいないからな。選び放題だ」

ククッと喉の奥で笑われたが、そんなことを構っている暇は無い。

音楽会の主催はどこぞの侯爵家。

上官に無理やり命じられての出席で、面倒なことこの上ないとは思ったが夜会や舞踏会などよりは随分とましだと思っただけのものだ。

その侯爵家の子息が披露する拙つたない楽曲も、余興だと思えば聞き流せる。

それに、その後は楽器を奏でるのが趣味の人間が交互に演奏を変わっていく。やがてはプロの楽団に変化していくだろう。

だからそれはいい。

だが、二階席。オペラグラスで会場内を観察しまくっている小娘様の姿は、腹立たしい程に目立つ。

まったく何をしているんだ！

隠れているつもりなのか？

何故こつちを時折じっと見ている？

観察か？ いやいや、そんなことより、誰があの人のお外出の許可を出したというのだ。

幸い、というべきかそれともどういうべきなのか、何故かヴァルファムの義母の隣にはもう一人女性がいた。

リルティア　いつだったかファティナに浮気を奨励した小娘。まったく友人は選べ。

苛立ちが募っているというのに、そんなヴァルファムの元に女性が二人声を掛けてくる。

ここは音楽会の会場で男を捜す場所ではない。そう内心で思った途端にすたとんと理解した。

つまり　嫁を探しているのだ、あの小娘様は。

複雑な思考回路ではなく、やはり単純に。

\*\*\*

「あちらの方は？」

「確か男爵家の娘よ。ヴァルファム様にはちょっと不釣り合いよ」  
リルティアの言葉にファティナは困ったように微笑んだ。

「やっぱり家格というものは気になるものかしら？」

「当たり前でしょう？　うちの婚約者だってつり合いを考えて選出されたのよ？　あああ、十五歳も年上なんて絶望よ」

ファティナは友人の言葉に唇を尖らせる。

「失礼ですわよ、リール。わたくしの旦那様はもつと年上ですけれどとっても素晴らしい方ですわ。きつとリールの……」

「はいはい、ファティの旦那様自慢は今日は要りません！　あなたの義息さまのお相手を探すのでしょうか？」

「ああ、そうでした！  
あちらの方、随分と派手な御衣装ですわね？　ああいった方がお好みなのかしら」

音楽隊が奏でる曲を聴く為に据えられた椅子とはべつに、ダンスを踊るためのスペース、歓談のスペース、軽食をとるスペースが取られている。

軽食のスペースで食事と飲み物を楽しみ、男二人で会話をしていたヴァルフアムのもとに、女性がちかづき愉しそうに会話をしている。オペラグラスでそれを眺めて、ファティナは眉を潜めた。

「時々睨まれている気がします……」

「やめてよね？　ばれたら怖いじゃないの」

「とつても怖いですよ。ヴァルフアム様って説教魔ですもの。ずうつと御説教なさるのよ。わたくしのほうが母親だというのに」

「……まあ、いろいろと気持ちは判るけれど」

とくに義息の。とはさすがにリールもいえなかつた。だが、ファティナは相手の言葉の意味を完全に取り違えたようで、嬉しそうに言葉が続けた。

「判っていただけで嬉しいですよ！

クレオだつてわたくしが叱られている時は当然のような顔をしたりするのであるもの。ひどいと思いませんか？」

おそろくきつと怒られて当然の行動をしているのだろう。

\*\*\*

二階席、通路に並べられた長椅子で歓談する二人の娘の場に、栗色の髪の青年が笑みを浮かべて近づいた。少しばかり癖のある髪に人懐こい笑み。

「ファティ、何を怒っているの？」

「セラ兄さま」

ファティナはリルティアの兄の姿に微笑み、リルティアは唇を尖ら

せた。

「兄さま、先ほどの演奏でリードミスをなさいましたわね。情けない」

管楽器のリードが確かに音を外した。それをきつちりと指摘され、セラフィレスは苦笑した。

「手厳しいな、リールは」

「でも、それ以外はとっても素敵な演奏でしたわよ。セラ兄さま」

「ありがとうファティ。で、どうしたの？　こんな場所で小さくなつて」

「見事に鉢合わせしたのよ。ファティのトコのヴァルファム様と」  
リルティアの言葉に、セラフィレスは肩をすくめてファティナを見下ろし、その頬をむにりとつまんだ。

「ファティ、今日は君の義息君はお仕事の関係で遅くなるんじゃないか？　つたつて？」

「……と聞いてましたのよ？　だからクレオールを説得して参りましたのに」

「ああ、つまり君の義息さんの本命がいるのかな？　義母にナイシヨで逢瀬、とか？」

つまみあげていた頬を一度引つ張ってから放し、そのまま腕を組んで自らの顎先をつまみ上げたセラフィレスは、ニツと口元をゆがめた。

「まあヴァルファム様に本命の女性！

どの方でしょうっ」

途端にファティナはセラフィレスから視線を逸らし、階下のホールへと視線を戻した。

「今一緒にいる人かな？　あれ、そうでもないのかな」

三人で下を覗き込む様子はもう滑稽でしかない。

物見遊山の有様だが、当人達はおそらく気づいてもない。

「あー、花嫁さまっ。素晴らしいヒビキですわよねえ」

「……響きだけならね」

セラフィレスは苦笑をこぼし、ファティナの頭をぽんぽんと二度叩いた。

昔からこの頭はふればカラコロと音がするのではないかと思うのだが、今のところそんな音を聞いたことは無い。

子供の頃、リルティアの兄だと名乗った途端に「わたくしもお兄様欲しいです!」とリルティアに迫り、今も彼女はセラフィレスを兄と呼ぶ。家族の縁が極端に薄いファティナらしいともいえるのだが。

「あら、兄さま。ファティは人妻よ? 気安くそんなことをするのは駄目よ」

リルティアはおかしそうに笑うが、セラフィレスは肩をすくめるしかない。

「人妻……ね?」

「しかも子持ち」

その言葉はリルティアにとって面白いのだろう。彼女は扇の陰でぷつと吹き出した。

「確かにそうですね、セラ兄さまは特別ですわ  
だって兄さまですもの。」

無邪気に微笑むファティナに、セラフィレスは肩をすくめるしかない。

「さて二人の妹姫達は何か食べるかい? 下の階にはおつかないの  
がいるみたいだからね、軽食を選んできてあげようか」

「デザートにして下さいませ」

ファティナの言葉に、リルティアが追従する。

「そうね。果物とかでもいいけど」

「あれ、もう何か食べたのかい?」

「兄さまの演奏中に。いっぱい」

「美味しく頂きましたわよ。ね、リール?」

にっこりと意地悪に言われ、セラフィレスは脱力した。

確かにリードミスという致命的な失敗はあったが、せっかく妹達が聴いてくれているのだから結構真面目にがんばっていたというのに、当人達ときたら食事を楽しんでいたようだ。

「まったく可愛い妹達だね」

肩をすくめて身を翻し、軽く手を振る。

階段をおりてすぐのところにいる給仕に二階の令嬢二人のもとに飲み物を三つ運ぶように頼み、その足を軽食の置かれている場へと向け、ファティナの義理の息子。ヴァルフアムとしっかり視線がち合ってしまった。

すでにヴァルフアムの元には女性の姿もない。

ただ友人らしき男と会話をしていたようだが、軽く手をあげてその言葉を遮るとヴァルフアムは長靴ちゅうかの音をさせてこちらへと歩を進めた。

完全に威嚇されている。

セラフィレスは内心で吐息を落とし、相手が口を開くより先に口を開いた。

にっこりと微笑んで。

「やあ、こんばんは」

「  
」  
ヴァルフアムは出鼻をくじかれた様子で眉間に皺を刻んだ。

眼光が鋭い　これで本当に文官か？

セラフィレスは内心で苦笑したが、おくびにも出さずに続けた。

「いつもうちの妹達が御世話になっているようで」

「……妹？」

「あれ、その話しがしたくてぼくのどこに来たのかと思ったんだけどな。」

リルティア、リールの兄のセラフィレスと申します。家名まで名乗ったほうがいいのかな？　別にかまわないよね」

「妹、たち？」



せてあげたら？」

「不要だ」

そのまま階段へと向かう相手を見送り、ちらりとセラフィレスは二階で談笑している妹達へと視線を向けた。

ああ、全然気づいてない。

もともと二人は仲が良いのだが、会う時間もなかなかとれない様子で今日などはずっと二人で話しをしている。セラフィレスが同行したのはただの虫除けだが、

「すごい虫除け　ってか、アレが虫なんじゃないかな」

セラフィレスは呟いたが、とりあえず自分の食事と実の妹の為にデザートを物色することにした。

## 音楽会 2

腸が煮えくり返る。  
はらわた

という言葉の意味をヴァルフアムはかみ締めていた。

自然と靴音も高くなるし、速度も上がる。ゆったりとした音楽が流れるなかで、おまえはどここの戦場に行くのかという勢いのヴァルフアムは、二階で愉しそくに笑いあっている義母の姿に、更に腹がたつた。

「義母うえ」

ひくく威嚇するように出た言葉に、ファティナは短い悲鳴をあげて見事にびくんつと軽く跳ねた。

壊れた玩具のように。

「あら、ヴァルフアム様」

ファティナやヴァルフアムが口を開く前にリルティアは穏やかな口調でそう呼んだ。

「ごきげんよう。官服の礼服でいらっしゃいますか？ 良く御似合いですね」

「……リルティア嬢も本日の装いはよく似合っておいんですね。ですが申し訳ない 今は義母うえに話がある。いや、話はあとでいい。義母うえ」

ヴァルフアムはにっこりと笑みを浮かべてみせた。

引きつる筋肉を精一杯笑みへとかえる。そういった感じの微笑みだった。

「帰りましょうか？」

「……あの、ヴァルフアムさま」

ファティナは義息の怒りが目に見えるのか、怯えた様子で引きつっていた。

「なんですか？」

「か……かえる、のですか？」

「当然ですよね」

「あのですね。今日は……あの、ヴァルフラム様にナイショでヴァルフラム様の花嫁さまを探す為に、ですね……」

自分の我儘でここにいるのではなくて、義息の為なのだとして一生懸命主張しているのだが、相手は相変わらずの笑みを湛えたままだ。

目が笑っていない。

瞳孔が開いているように見える。

激しく怖い。

「それはたいへん嬉しく思いますが、まずは帰りましょーうね？」

「……はい」

ファティナは手元でもてあそんでいた扇をぱたりと閉ざし、ちらりとリルティアへと視線を向けたがリルティアも苦笑するしかない。

「ファティ、今度はわたしの家に遊びに来てちょうだい」

「え、あ……」

「義母うえ。早くなさい」

返事をする前にぴしゃりと言われ、ファティナは吐息を落としてリルティアに向き直った。

「セラ兄さまにもよろしくお伝えくださいな」

「それはもちろん」

気をつけてね？

軽くウインクされたが、もうなんだかイロイロと気をつけようがない事態だった。

\*\*\*

ほんのちよつとの出来心だったのだが……

「悪いことつてできませんわ」

半ば乱暴に馬車に押し込まれ、二頭建ての小型の馬車で身を縮めてファティナはぼやいた。

それにそもそも悪いことという意識は無い。

ヴァルフアムの為に花嫁を探そうと思ったのだ。

たまたま、セラフィレスが音楽会に出るというから、そのような会であれば居る令嬢はさぞ素晴らしい娘さん達に違いないと思って同行を許してもらったのだ。

「あのつ、ヴァルフッフ」

冷やかな空気を全身に纏い、怒りをためている相手に堪えられなくなり、ファティナは思い切って声をあげたのだが、間が悪かった。馬車の車輪が石を跳ね上げたか、それとも乗ったのか　　がくんと車体が大きく動いた。とたんにファティナは力いっぱい舌先を噛んでいた。

「んっっ」

痛い。

尋常でなくいたい。咄嗟に噛んでしまった口元に手を当てる。おそるおそる中指で舌先に触れたファティナは、更に痛むような気さえした。

赤い血液が白いレースの手袋を染め上げていた。

「何をしているんですかっ」

ヴァルフアムが乱暴に声をあげてファティナの手首をつかむ。

「ふあるふあむはま……」

「舌を噛んだのですか？」

こくこくとうなずくと、義息は腹の中身をすべて押し出すようにため息を吐き出し、ファティナの頤おとがに手を掛けた。

「口、あけなさい」

じんじん痛む。

それでも言われたとおりにそつと口をあけると、ヴァルフアムが眉間の皺を更にきつくして「舌、出して」と命じる。

おそるおそる舌先を出すと、ヴァルフアムは頤に掛けていないほうの手の白手を自分の歯で噛むようにして抜き取ると直手でもってフ

アティナの舌先に触れた。

「少し切っただけですな」

ほっと息をつく。

ひよこりと出した舌先を指先でなぞられて、ファティナは涙目になっ  
てしまった。

あまりにも情けない。

ふと、ヴァルフアムの視線がファティナを捕らえた。

「消毒すれば平気ですよ」

舌先の消毒？

それはさぞ苦いものに違いない。

もっと嫌な気持ちになった途端、ヴァルフアムの舌がファティナの  
舌先を舐めた。

慌てて舌を口の中に戻し、ファティナは瞳を瞬いた。

「ヴァル」

「消毒にならないでしょう？ 舌、出さない」

「……でも、あのっ」

「舐めればなおりますよ」

きっぱりといわれ、ファティナは蒼白になった。

確かに、子供の頃の些細な怪我を「舐めれば治る」などとリルティ  
アなどは言っていた。

「う、嘘れす」

舌のわずかな痛みで奇妙な音になる。

「私は嘘などついたことはありませんよ」

さくりと返された。

もうそこからして嘘なのだが、ファティナは気づいていない。

それでも相手の行動に違和感を覚えるのか無駄な抵抗で唇を閉ざし  
ているファティナに、ヴァルフアムは微笑んだ。

「頑固ですね」

言葉と同時に顎のあたりを掴まれる。ぎゅっと　ヴァルフアムと  
してはそれほど力をいれたつもりはないが、たやすくファティナの  
口は開いた。

もつと硬いものを食べないと顎によくありませんよ。などと溜息を  
吐き出し、ヴァルフアムはファティナの口を斜めに塞ぎ　口腔内  
にたやすく自らの舌を差し入れた。

動力は怒りだった。

自らの知らない場で夜会まがいの場に出向いたファティナへと。  
自らの花嫁を見つける為に労力を惜しまない様を。

知らぬ誰かが親しげに……

「ファティ……」

押さえつけて唾液も、酸素も、思考能力さえ全て奪い去り、くつた  
りと胸に抱かれたファティナに、ヴァルフアムは小さく囁いた。

そう、呼んだのははじめてだった。

呼んではいけない。

呼ぶ必要はない。

「ファティナ　」

口唇から低くもれる囁きに、腕の中の義母は小さく身じろいだ。  
伏せていた瞼が開き、びくりと身を硬くする。

「ヴァル……ファム様？」

「はい」

自然とヴァルフアムは口元に笑みを浮かべた。  
罵ればいい。

何をするのだと怒鳴ればいい。

ヴァルフアムはむしろそう望んだ。

自分と彼女との間に徹底的な溝を作り出し、その溝を更に修復不可能なほどに全てを破壊尽くしてしまいたい衝動。それは暗い喜びにも似てヴァルフアムは愉悅に微笑んだ。

ファティナは眉間に皺を刻み、唇を尖らせ、

「わたくし思うのですけどね！」

体勢を整えながら不満そうに言った。

「さっきのは乱暴です！　すごい苦しかったですよっ  
「……」

「それに！　舌は舐めなくてもいいんじゃないのかしら？　だって、舐めてるようなものだと思うんですよ！　唾液がクスリになるのかしら？　だったらやっぱりさっきみたいなのはおかしいんじゃないかしら！　だって舌って口の中にあるんですもの！　どう思います？」

縊<sup>くび</sup>り殺してしまいたい。

切実に。

凜猛な怒りが腹を満たしていく。

無かったことにされるよりも質<sup>たち</sup>が悪い。

ぎしりと奥歯が音をさせ、ヴァルフアムは必死に自分をおし留めた。

口腔に溜まった唾液をゆっくりと嚥下する。

苦くもないはずだというのに、それは随分と呑みづらく時間が必要だった。

義母へと向けるこの感情は決して愛情ではない。

そう、そんなものではない。

そんなものは生ぬるい。

かみ締めた口腔に血の味を感じた。

義母の血を。

「ヴァルフアムさま？」

怪訝に自分を見ている義母に、ヴァルフアムはゆっくりと微笑んだ。

「帰ったら説教です。覚悟なさい」

泣いても縋っても、朝まで無断外出を責め続けられる自信がある。

泣かず。

それが自分にできる唯一の特権であるのならば。

## 距離

一通の手紙が届いた。

それは父親からの定期便。銀色のペーパーナイフを差し入れて、ヴァルフアムはそれを斜めに読み流した。

私の姫君は息災にしているか。

ぴたりとその言葉に目が留まる。

姫君という言葉の前に、私の、と入れられている事実には心臓がきしんだ。

いつからだ？

いつから、父は姫君という言葉の前にそのような単語を入れていた？ 思い返してみても判らない。ファティナの話題に触れた途端、ヴァルフアムは苛立ちを覚えてそれを抹消してきたのだ。

今この時も咄嗟に火にくべてしまいそうな気持ちになったが、どくどくと血脈を辿るような気持ちでその先の文字を拾い上げた。

そしてやっと安堵の息をつく。

それ以上ファティナの話題には触れられていない。これといって父はファティナに関心など払ってはいない。

そう息をつき、そんな風に安堵する自分にヴァルフアムは自嘲的に笑った。

あの日、ヴァルフアムは自分の中のそれをいやという程理解した。いつか自らが義母との関係を破綻させるのではないかという闇を。そんなものは必要ではない。本来もつべきものは穏やかなるものである筈だ。

求めるべくものが泣き顔ではなく微笑みであるはずならば、立ち止まり一歩退き、名を呼ばぬ強い意思を。

ファティナと、次に音に出した時……それを思えば身がすくむ。その身を苛み、その心を殺し 果てにあるものなど欲しくは無い。

彼女と自分は義母けいぼであり継子けいこであるべきだ。

そうでなければ、共に永劫居られなどしない。

オンナとはやがて離れるものであることをヴァルフアムはいやでも知っている。

何より、彼女が愛していると思っ込込しているのは 父だ。

\*\*\*

「今日はお戻りにならないのですか？」

朝食の席でファティナが興味津々という様子で尋ねてくる。

「何の話ですか？」

「だって、最近ヴァルフアム様は時々帰っていらっしやらないではありませんか。週末でもあることですし、今日も帰っていらっしやらないのかと思って」

「帰れない時だって仕事です。何をそんなに楽しそうになさっているんですか？」

「さらりとヴァルフアムは返し、お茶をことさらゆっくりと喉の奥へと流し込んだ。」

「まあ、そうなのですか？ わたくしはてつきり想い人ができたのかと思っ込込していましたのに」

「生憎とそんな相手はいません」

「がっかりですわ」

心から落胆したように言う義母をさめた眼差しで睨み、ヴァルフアムは唇を舐めた。

「あのですね、ヴァルフアム様」

「なんでしょう」

「……正直に言って頂きたいのですけれど」

ふいに、思案するようにしていた義母が姿勢を正してヴァルフアムの瞳を射抜いた。

ふだんほやほやとした彼女にしては珍しく真剣に、そして 強い意思を閃かせて。

ヴァルフアムはずくりと身にうづくものを感じながらファティナの視線を受け止めた。

「わたくしの杞憂であれば良いと思っっているのです」

「」

「ですが、もしかしてと思うとわたくし……ここは正直にヴァルフアム様のお心を聞かせて頂きたいと思ひまして」

ヴァルフアムは自分の口腔に唾液が溜まるのを感じた。

手のひらに体温があがり、我知らず血脈の音すら耳もとで響く。

ファティナがいつになく真剣で、そして とても言いづらそうにしている様子にヴァルフアムは極度に緊張するのを感じた。

彼女が何を告げようとしているのか、とても……

「ヴァルフアム様は、もしかして」

「もしかして？」

口ごもった言葉の先をゆっくりとうながせば、ファティナは躊躇うようにして視線を逸らし、だがついで勇気を奮い起こすように言った。

「男の方がお好みなのですか？」

「」

カシャンと茶器が音をさせた。

音をさせたのは新しく茶をいれていた侍女だ。

この場の空気は絶対零度まで引き下げられ、ぴしりとどこかに亀裂

が入った。だというのに、ファティナだけは相変わらず場の空気を読まずに勢いをつけて言葉を紡いでいた。

「最近読んだ本にそのような話しがあったのです！もしやと思いましたけれど、ヴァルフアム様はちつとも花嫁さまを探そうとなさいませんし、女性の方とお付き合ひされている様子もありませんし……あの、もし御悩みであるのであれば、わたくしにきちんと聞かせて下さいませ。一人で思い悩んでいらっしやるようでしたら」

「黙りなさい」

ヴァルフアムは怒鳴らなかった。

ただ淡々とした口調で、黙りなさいと告げていた。

怒りは沸点を通り越し、腹は冷えた。

頭も冴えている。

「どんな本を読んでいるのです、くだらない。なぜよりもよつてそのような結論がでるのかこの義息にはまったく理解しがたい。

あなたときたら頭が腐っているではありませんか？」

「まあ！ わたくし本気で心配しておりますのに」

「そのような心配などしないで下さい」

しかも本気で。

本気で？ 本気でそんなことを悩んだというのか。いっぺん死んでこい。

腹の奥がふつつ煮える。

これと関わりと碌なことがない。

ヴァルフアムは義母と距離をとるようにしていた。あの日、音楽会のあつた折より。

以来共に眠ることもしなくなった。人が恋しいのであれば家庭教師に頼めと言いつき、彼女自身も承諾した。

日が過ぎればそれすらなくなり、ファティナは一人で眠ることも

できるようになった。

それが正しいのだと自らに突きつけ、義母のことを頭から弾くために容易い女に手を伸ばす。一人で眠ることを苦痛に思うのは、誰ならぬ自分だと気づけば天を仰ぐしかない。

義母と義息の関係は多少ぎこちなくとも、ほんの些細な過ちで失うことなどないように。

自らの気持ちを宥めながら、ヴァルフアムは義母と義息の距離を保とうと努力するしかないのだった。

\*\*\*

「クレオ、もしかしてわたくしヴァルフアム様に嫌われてしまったのかしら？」

熱心にレース編みをしていたファティナだが、休憩を勧めると淡く微笑んでやがてそんなことを言い出した。

「杞憂でございましょう」

やんわりとクレオールは言う。

「でも、最近は良く外泊なさいますし……休日もふらりといなくなつてしまつたり」

「どこの若君もそんなものですよ。いつまでも母君にべつたりではいられない」

「反抗期というものかしら？」

「かもしれないね」

どうもファティナの思考回路はどこが大衆じみたものもあれば、外れたものもある。苦笑したいのを堪えてクレオールは柔らかかに微笑んだ。

「とても寂しく感じるのは……いけないのでしょうか？」

「いけないということはありませんよ。奥様と若様はたいへん仲の良い親子でいらっしやいますからそのように感じるのも仕方ありません」

せん。

ですが、いつまでも義息に義母が構うのも確かに世間的にみてもよろしくありません。このさいですから、奥様も若様と少し距離をおとりになるのも良いのではありませんか」

困ったようにファティナは笑う。

両手で捧げ持ったカップからはまだ湯気がたちのぼっていた。

「こつこのつを親離れというのかしら。寂しいものですね」

それこそべつたりと仲が良かった自覚があるだけに、ファティナは寂しさを覚えて仕方ない。それがゆっくりと距離をとるようなものであればそれほど感じなかったかもしれない。

だが、それは明らかにあの日　音楽会の後にはべつたりとヴァルフアムはかわってしまったものだから、ファティナは自分が悪いという気がしてならないのだ。

自らの心のうちを吐露しても、クレオールはそれで良いのだと笑って返す。杞憂だといわれてはそれ以上に言うことは憚られた。

クレオールはそれでも浮かない表情をみせているファティナに微笑み、膝について女主の顔を下から覗き込んだ。

「そのような顔をなさいますな。世の中とはそついうものなのですから」

「……息子というのは離れるものなのですね」

ファティナは深く息をつき、膨れることなど考えられない自分の腹部を撫でた。

「お腹を痛めた子ではないヴァルフアム様でさえこんなに寂しいのですから、きつと本当に自分で産んだ息子が自らはなれるというのはとても辛いことなのでしょうね」

「そうかもしれませんね」

クレオールはそつのない調子で微笑を返した。

「……旦那様にお会いしたいわ」

「お忙しいのですよ」

「いつもそればかり」

クレオールは恨みがましく唇を尖らせる女主に苦笑し、ゆっくりと噛んで含めるように告げた。

「旦那様は奥様を愛しておいでですよ」

「クレオはいつもそればかりね」

「愛していらいっしやるからこそ、今はお会いできないのです。ご理解なさって下さい」

「……愛しているからこそ、共にいて欲しいこともあるのよ」

切なそうに溜息をつくファティナは  いつの間にか女性の顔立ちをしていた。

\*\*\*

「ソルド」

短く告げられた名に、カディル・ソルドは丁寧に頭を垂れて控えた。定期的に運ぶ報告書を、わざわざカディルが自ら持ち込むのはそれなりに理由がある。手紙などで主が動かぬことを知っているからだ。幾度願い出たところで主は簡単に無視してくれない。ならば一度でも多く顔を合わせて自らの意思を伝えなければいけない。

「姫君はもう間もなく十六になるようだ  おまえがその顔を見せたのはそれが理由か？」

別段これという感慨などみせることもなく、ただ事実を事実として告げられる言葉に、ソルドは微笑を浮かべてうなずいた。

「素晴らしい女性におなりのことでしょう」

「言われずとも判っている。それだけの教育を受けさせているからな」

手元の書類を処理しながら、壮年の男は顎でしゃくるように置かれている書類を示した。

「今年が目録だ  手配しておいてくれ」

「ヴァルツ様」

「なんだ」

「今年こそは、私が姫君への使者として発つことをお許し願いたいのですが」

「不要だ」

「意地の悪いことを仰らないで下さい。どのような姫君になられたのか、私がきちんと報告いたしますよ」

本当はお会いしたいと思いますが。

意地の悪い笑みを向けられ、男は　ヴァルツは瞳を眇めて相手を見返し、ふいに口元に笑みを湛えた。

色素の薄い金髪に鷹を思わせる鋭い眼差し。ヴァルツの覇気は少しも衰えることなど知らぬ。

「確かにそろそろ頃合だろう。」

時がたちすぎても良くない　どこかの阿呆がうるさくてかなわぬしな

揶揄するような言葉を向けられ、カディル・ソルドは眼鏡の奥の瞳を細めた。

「私はただ一日も早く跡継ぎを設けたほうが宜しいかと思うだけです」

「ふん。そうそうおまえの望みどおりにしてやるものか」

吐き捨てられた言葉を受けて、けれどカディルは自信に満ちた微笑で応えた。

「勘違いなさらないで下さい、ヴァルツ様。」

私はいつだって姫君の　ファティナ様の為に生きているのです」  
さらりと吐き出された言葉に、ヴァルツはすつと瞳を細めてその牙え冴えとした笑みを浮かべた。

「ぬけぬけと言う。貴様の舌は二枚はおろか三枚はあるのではないか？　勘違いしているのは誰だ、ソルド？　貴様には決定権など無いということをお忘れな」

ゆるりとそれでも確実に、時は流れていた。

## 焦燥

意図的にファティナとの距離を保つ

一步退き、義息としての自身を保つ。そう努めている義息の努力など、おそらく彼の義母は欠片程も考慮していなかった。

「そうですかー、いやいや、こちらとしても申し訳ない」

自身の勤める勤務場所である一室　上官の呼び出しはいつものことであるが、扉に手を掛けた状態でヴァルフアムは眉間に皺を刻んだ。

「彼は真面目に勤務してくれるのはいいんですがね、いささか真面目がすぎる。うん、いえいえ褒めているんですよ。ええ、私などでは、彼がいないと自分の仕事もままならない」

「でも、あんまり忙しすぎてヴァルフアム様が倒れてしまいます」  
高い声音にそのまま身が沈みそうになった。

夢にまで現れる相手。これこそ夢ではと眩暈がした。  
もちろん悪夢だ。

「しかしそんなに帰宅できない程の仕事を彼がしていたとは、それはこちらの落ち度ですね。本当に申し訳ない」

「あら、ゼルトさまが悪いわけでは」

「どうぞデインンとお呼び下さい。かわいらしい奥方さま」

「あの、デインン様……あの、近いです」

怯えを含む少女の声に、ヴァルフアムは乱暴に扉を開いた。

応接用のソファに向かい合い、ファティナの手を握って間に挟まれたテーブルを無視してファティナに近づこうとしている上官の姿にヴァルフアムは笑みを浮かべた。

「何をしているんですか」

「よお、ヴァル。おまえ遅い　いや、早い。もうちょっと気を利

かせる」

ニヤリと口角をあげて笑う上官に、ファティナが瞳をぱちぱちと瞬く。その間もファティナの手を両手で挟みこんでいる男に、ヴァルフアムはつかつかと近づいて力いっぱいその足を長靴ちようかで踏んだ。くぐもつたうめき声を黙殺する。

「義母うえ、何をしておいでです」

「ヴァルフアム様がお着替えを求めていらしたでしょう？ お届けに参りました。それと、エマのパイを」

自由になった手で、同じくソファに置かれているバスケットを示してファティナは微笑んだ。

もう一月近く正面から見ていない微笑。

ぎしりと胸がきしむ。

「いやあ、それにしてもおまえこんな可愛いお義母さんなんて羨ましい。一度も話題に出さなかったじゃないか、オレだったら自慢しだくりだぞ」

踏みつけたままの足に更に力を加えた。

「義母うえ、勝手に屋敷を出るなどどういっつ見です」

「ですから、出て宜しいですか？ と尋ねに参りましたの。だってヴァルフアム様ときたらこのところちつともお帰りではないのですもの。それに、お願いが一つありまして、そのためには是非お顔を拝見しなくてはと思つて参りましたのよ」

おそらく幾度も考えて捻つた受け答えなのだろう。

よどみなく言い切るファティナを見下ろしながら、ヴァルフアムは上官の足をさらにぐりぐりと踏みつけた。

「……ヴァル、痛い。めっちゃイタイ。え、オレそんなに悪いことシマシタカ？ 全体重掛けてませんか？」

「ああ、いたんですか　とつとと出て行ってきてくれて構いませんよ。

あなたが回してきた書類の三分の一はまだ残ってますからお好きに  
なさい」

冷淡に言う部下に、ディーンは顔をしかめて両手でもって自分の  
足を相手の足の下から引き抜いた。

引き抜いても足の甲がずくずく痛む。

情けも容赦もない。

「可愛い奥さん。この鬼っ子の義母うえさま。あなたの義息はいつ  
もか弱い私をいたぶるんですよ。ひどいと思いませんか？」

「あら、ヴァルファム様は怒りんぼうですからしかたないのです。  
でもわたくしちゃんと知ってますのよ？」

とっておきの秘密を語るように、ちらりとファティナはヴァルフ  
アムを盗み見て微笑んだ。悪戯を企む子供のように。

「ヴァルファム様が怒るのは、相手の方を想つてのことなのです。

ヴァルファム様はとても愛情深くて優しくて心配性な方なのですよ」

かあつと体温があがった。

むしように気恥ずかしくなり、この場から逃げ出してしまいたい衝  
動にかられる。

ディーンは呆気に取られたようにファティナを見て、それからヴァ  
ルフアムへと視線を合わせた。

「……」

「……」

数秒視線を絡めて、ディーンはぱんつと勢いをつけて自分の膝を打  
った。

物凄くわざとらしく。

「ヴァル、おまえ、仕事が原因で寝込んだりしないように三日程休  
暇をやる。この可愛い義母うえと自宅に帰れ」

「それはっ」

自宅に戻らなかつた理由は仕事ではない。それを承知でディーンはにやりと笑い、席を立つと胸元に手を当てて優雅に一礼した。

「いやいや、最近はヴァルに怒られ通してしたが、よもやその原因が彼の愛情ゆえとは少しも理解していなかった。なんとも私も未熟なことだ。そんな私ですから、彼の疲れにも気づけなかつたようだ。どうぞご自宅でゆつくりと静養させてあげて下さい」

「ディーン様はお優しいですね」

「いえいえそんなことはありませんよ。ところで可愛い奥方さま、どうぞ今度私めの自宅にいらして下さい。自慢の茶葉を振舞わせていただきたい」

「ヴァルフアム様がお許し下さいましたらお伺いさせていただきます」

「おやおや、口やかましい義息殿のようですね。ですがそれもまた愛情ゆえということですか」

くくつと喉を鳴らして笑う上官に 殺意が沸いた。

「ええ、ヴァルフアム様はとてもお優しいのです」

おそらく本気で言っているであろう義母を睨みつけ、ヴァルフアムは彼女の横におかれていたバスケットを引つつかんだ。

「中佐」

低く呼ぶ。

「んん？」

にまにまと視線を向けるディーンへとヴァルフアムの碧玉の瞳が向けられる。

「七日程休暇を頂きます。なに、その間は有能なあなたのことだからきつと私がいなくとも仕事をこなして下さいますことでしょう。

ええ、きつと」

きつく睨み、ファティナの腕を引いた。

細くて華奢な手首。

軽い体重　　くそっ！

離れている間に他の女を抱きもした。  
仕事にも没頭したし、極力考えないようにしていた　その全てを  
この女は無駄にする！

乱暴に腕を引いて歩く。

ちょうか  
長靴の音が廊下に響く。

他の部下やらがぎよっとしたように避けていくのも無視して建物を  
出て車寄せに出れば、馬車と共にクレオールが一礼してそこにいた。  
まるで全てを見透かすように！

「何故おまえがここにいる」

「奥様の付き添いとして参りました」

「おまえは屋敷の管理が仕事だろう」

苛立ちのままに怒鳴れば、ファティナが声をあげた。

「無理を言ったのはわたくしです。クレオを叱らないで」

「……」

ヴァルフアムは一瞬天を仰ぎ見た。

二十歳をとうに超えたというのに、空の蒼さに涙がでそうだった。

こんなに厄介なイキモノはこの世に二人といたのだろうか。ぎりつと  
唇を噛み、深い呼吸を繰り返してゆっくりとファティナへと向き直  
る。

幾度見返してもそこにいる小娘様は変わらない。

天使のような悪魔。

「馬車にどうぞ、義母つえ」

「一緒に帰るのですよね？」

おそろおそろというように尋ねられ、ヴァルフアムはゆっくりと、

そうするのも苦しいのだというようにひどくゆっくりと息を吐き出した。

「はい」

ファティナに手をかして馬車へと導いてやる。

置かれているステップに足を掛けてファティナは微笑んだ。

「良かった」

ふわりと砂糖が溶けるかのような晴れやかな言葉と微笑は、あまくて身を腐らせる毒のようだ。

「何が良いのです」

「だって、ヴァルフラム様に嫌われてしまったのかと心配したので。ずっと……お会いできなくて、まるで避けられているのはいかって不安でしたの」

避けていましたよ。

だが嫌ってなどいない。

腹立たしいことに、嫌ってなどいない。

憤りを覚えたり憎しみすら覚えるというのに、嫌うことができない。

「御仕事だから仕方ないとは思っておりましたけれど、とても……とても寂しかったです」

儂い微笑みを浮かべるファティナの姿に、ヴァルフラムは口の中で呪いの言葉を呟いた。

死んでしまえ。

相手は誰でない自分だ。

この一月の苦しみをたかが一言で霧散させる。  
抱きしめて閉じ込めて誰の目にも触れさせずに……

「ヴァルフラム様？」

馬車の座席についたファティナは、自分と相對する席に腰を落ち着かせた息子を見てギョツとした。

「どうなさいました？」

「」

「どこか痛みますの？ あのつ、ヴァルフアム様？」

その頬につつと流れ落ちた涙に、ファティナは動揺しておろおろと腰を浮かした。

伸ばされた手を引き寄せ、胸にかきいだく。

驚く義母に囁いた。

「お会いしたかったですよ」

ずっと、ずっと……共にいて下さい。

きつくきつくきつく、抱きしめて搾り出す言葉に数々の想いを込めた。

けれど彼女はふつと微笑み、優しく言うのだ。

「わたくしはどこにも行ったりしませんわよ？ ふふ、ヴァルフアム様はときどき本当に小さな子供のようですね」

ヴァルフアムは苦しさにあえいだ。

肉欲ならば女を抱けば済む。

だが自分が義母に求めるそれは 何をすれば満たされるのかもとう判らない。ファティナを腕の中に抱きながら、乾いた笑いが浮かんでいた。

微笑んでいて欲しい。

泣いて欲しい。

苦しんで欲しい。

……これは病に違いない。

距離をおけばどうにかなるなどとあまい妄想だ。

彼女が生きている限り……自分はもう完治しない。

誰か彼女を殺してくれ。

いや……だめだ。駄目だ。

誰もそんなことをしてはならない。

自分がいい。

## ヴェール

義母の瞳が期待に輝いていた。

お願いがあるのです。

確かに、そんな話をされた覚えがあった。うつかりと聞き流していたが、彼女はそのことをちらとも話題にしなかったが忘れてはいなかったようだ。

休暇の三日目。

ファティナが起毛の絨毯の上、クッションに座りレース編みをしているのを時折眺めながら、平穏な気持ちでチェスの布石を一人で楽しんでいたヴァルフアムだったが、ふいにファティナは手をとめて小さく「あっ」とつぶやいて言った。

どこかわざとらしく。

「忘れておりました。ヴァルフアムさま」

「なんですか？」

盤面へと視線を戻し、女王を犠牲にすればあと十回程度で相手の王を下すことができるが、果たしてそれは騎士としてまっとうな考えとはいえないだろうと苦笑する。

女王を守りつつ王を下すにはあと いや、だがやはり女王を放棄してしまっただけが話しははるかに早い。

まあ、所詮自分は騎士団に在籍はしているが内勤の文官 所属が騎士団というだけであってここはやはり頭を使って

「お茶会に行きたいのです。よろしいですわよね？」

明るい言葉に僧兵ポーンが弾かれて転んだ。

「また突然……何事です？」

「リールからご招待いただきましたの。ヴァルフアム様がいらっしやらない間のことでしたから、わたくしとっても困ってしまいました」

「……」

ファティナはにっこりと微笑んだ。

「出席しますとご返事してしまいました」

「確信犯か!？」

鳥頭の癖にいつの間になんな悪知恵を働かすようになった。

ヴァルフアムは引きつるのをこらえ、じっとファティナを見つめた。

「何故、私の返事を待たずにそんな真似をなさったのですか」

「だってヴァルフアム様はお忙しいようでしたし、わたくしは女主人おんなあるじとして自らの決断を問われたのです」

何故か胸を張って言うファティナだったが、じっと見つめ続けると居心地が悪いのか眉をじりじりと寄せて小首をかしげた。

「だめでしたか?」

「……」

「でも、でも、もう……」

「いつです?」

嘆息気味に言えば、ファティナはぱつと顔をほころばせた。

「本日の午後ですわ」

「やっぱり確信犯じゃないか。」

こんなにぎりぎりになるまで言わずにいるとは。当日に断ることなど到底できない。それをしっかりと熟知しているのだ。だということに、しれっと「忘れておりました」などと白々しい。

義母の鳥頭がそんな思考を持つ日がこようとは。

ヴァルフアムはその冷たい碧玉の視線をちらりと部屋の片隅で控えている男へと向けた。

「つまり、衣装の準備もすんでいる訳だな?」

きつい口調で問いかけるのだが、クレオールではなくファティナが陽気に応えた。

「淡い緑のサマードレスですよ。お茶会にはきつとぴったりだつてメアリ女史もほめてくださいました」

冷たい視線をさらに冷たくしてクレオールを睨んでいたのだが、ふいにファティナの瞳が下方から覗き込み、その手がヴァルフアムの手を包むように触れた。

「ヴァルフアム様も一緒に行きましょう？」

そのように言われて断れる人間などいない　ヴァルフアムは脱力したように吐息を落とし、掴まれた手の上にさらに自分の手を重ね合わせ、とんとんと優しくたたいた。

「私もご一緒でよろしいのでしたら。否やありません」

これも戦術の一つじゃないだろうか。ちらりとヴァルフアムは思ったが、うれしそうな義母の様子に白旗をあげた。

あと数手で王を取れた筈だというのに、犠牲にしようと思っていた女王がくると振り返って遁走するような錯覚を覚えた。それともこの女王は敵側の女王で誘惑されたのか？

ぐしゃりと盤面の駒を散らした。くだらん。

すくいあげた手のひらにそっと口付けを落とし、ついでファティナの瞳を覗き込む。

混じりけのないきれいな翡翠。

その瞳に、自分はいったいどのように見えているのだろうか。

「ですが義母うえ、私にとってはあまり知らぬ相手の茶席。どうぞこの義息を一人になどして心細い思いをさせて下さいませんように」

「まあ、ヴァルフアム様でも心細いなどありますの？」

「ありますよ」

さらりと言ってファティナの脛に口付けを落とす。

「私はとても小心者なのです」

触れたいという思いと同時に触れるなという命令が下る。どちらも自らの心だというのに、体は脆弱に行動する。

小心者だと吐露する義息の言葉に、ファティナの瞳が瞬いた。

彼女は瞼の口付けを、頬の口付けを　唇に触れることすら許す。  
どこまで許されるのかその際を、深淵を……見極めたい誘惑。

「ヴァルフアム様のような方が？　とても信じられません」

「あなたには私がどう見えているのでしょうか？」

苦笑と共に問えば、ファティナは多少の思案もなく即答した。

「いばりんぼうのおこりんぼうです　小心者だなんてとんでもない」

「……」

「でもちゃんと優しさもあるのは知ってますわよ？　それで時々とつてもかわいらしいの」

くすくすとからかうように微笑を落とされ、ヴァルフアムは眉間に皺を刻んだ。

「わたくしの自慢の息子です」

その瞳が悪戯でもしでかすように輝いている。それを見つめ、ヴァルフアムはこくりと喉を鳴らした。

ゆっくりと心の中で数字を数える。

喉の奥にたまる唾液を、気づかれないようにゆっくりと嚥下する。  
気づかれたところで何がどうなる訳ではないと承知しているが、それでも……自らの気配を殺すように。

「今日のお茶会はリールの婚約のお披露目なのです。結婚式は相手の方の御領地ということですから到底わたしくしが出席するのは難しいと思いますの。ですから今日だけは行きたいと思っておりますのよ」

ファティナは自分のひざの上で揺れるレース編みをきゅっと抱きしめた。ほんの少し恥ずかし気に。

「ヴェール、今日中にできればよかったですけれど、ちょっと無理でした。手直しもしたいですし、またこれは改めてリールに御贈りいたしますわ」

このところ彼女が熱心に使っていたのは、友人の結婚式の為のヴ

エールだったのだ。  
それをどこか空虚に聞きながら、ヴァルフアムは薄い笑みを浮かべた。

義母の手から作りかけのヴェールを抜き取り、ふわりと頭にかけてやる。

それを瞳を細めて眺めて、ヴァルフアムは囁いた。

「義母うえの花嫁姿はさぞかわいらしかったでしょうね」  
なにせ当時は十三歳だ。

そしてヴァルフアムの前に引き合わされた時、すべてはすでに終わっていた。

ヴェールに縁取られた面おもてに苦笑を浮かべ、ファティナはゆっくりと顔を振った。

「花嫁衣裳は着ておりません」

「……司祭の前で婚姻の儀を執り行ったのでしょう？」

「司祭様はいらっしゃいましたけれど。わたくしと旦那様が行ったのは書類のサインだけです」

幾つかの書類にサインをして終えたその儀式を思い浮かべたのか、ファティナは微苦笑を浮かべて小首をかしげた。

「ヴァルフアム様の婚姻にはわたくしがヴェールを作ってさしあげますね？」

腹の底の血の気が引いて、ついで呻くように言葉がもれそうになるのをヴァルフアムは必死で押しとどめた。

たとえそれが政略結婚、馬鹿げた年齢差のある婚姻だったとしても、あまりにもファティナを蔑ろにしている。幼い小娘の心をどこまで踏みじれば気が済むのか。

誰より結婚に夢をもつこの小娘様を。

死んでしまえ。

もう幾度も唱えた呪詛が腹をめぐる。

自らでも義母でもなく、それは父へと向けられた。

そう、あんな男など死んでしまえばいい。

「……あなたはっ」

「はい？」

あなたはそれでもあの男を愛しているなどというのか！

その言葉を必死で押し殺した。

腹立たしいことに知っている。義母は たとえそれがまやかしいえども父を愛している。一途に愛していると思いついでいる。彼女に父の悪態を向ければ、それは諸刃の剣となって自らにかえるのだ。

強く噛んだ奥歯がぎしりときしみ、握りこんだ手がその強さにわずかに震えた。

ファティナは自らの頭に掛けられたヴェールをそつと引き抜こうと手を掛けた。それをとつさに阻むように抱き込んで、その耳元に囁いていた。

「病める時も、健やかなる時も共にいて下さいますか？」

頭がくらくらする程の暴挙だ。

自分はおそらく壊れている。

「ヴァルフアムさま？」

そんな壊れた男の腕の中で、くすりとファティナが笑う。

「結婚式の真似事ですか？」

「いけませんか？」

「いけません。誓いは神聖ですもの たとえヴァルフアム様とい

えど、遊びでそんなことをしてはいけません」

「いいじゃありませんか」

憤りでめまいがする。

言葉が震えないのが不思議だった。

ファティナはなおも首を振り、ゆっくりとヴァルフアムの胸に手を当てて体を引き離れた。

ゆっくりとゆっくりと引き離された身体。

自分を見上げてくる義母の表情はやけに穏やかで、そして 儂い  
微笑みを浮かべていた。

まるで大人のような。

まるで慈愛深き母のような。

「それに、約束しましたでしょう？」

わたくしはヴァルファム様と一緒におりますわ。そんな戯事は必要  
ありません」

そうでしょうか？

幼子をなだめるように言い、ファティナはヴァルファムの頬をその  
手でそっと撫でた。

ふわりととろけるような微笑は 胸を締め付ける。

「神聖なる誓いの儀式はご自身の花嫁さまの為だけにとっておかな  
くては」

時折

時折、この目の前のずいぶんと年下の小娘は、すべてを理解してい  
るのではないかと脳裏をかすめる。

自分の境遇を 夫に捨ておかれた哀れな境遇を。

義息が抱くほの暗い淀みよとを。

そのすべてを知りながら、そしらぬ顔をして笑うのではないかと。

誰よりも 計算高き罪深い女なのではないかと。

そうであれば良いのに。

そうであれば、いっそ壊してしまえるのに。

苦しさに息を忘れそうになったヴァルファムを正気づかせたのは、  
クレオールの来客を告げる声だった。

「奥様」

低く静かな声が言う。

「旦那様から贈り物が届きました」

無機質な言葉に、ファティナはドレスの裾をふわりと揺らして立ち上がった。

「今年は少し早いんですね」

物柔らかな声音が響くなか、白いレースのヴェールがとさりと床に落ちた。

結婚の戯事などもう彼女の心には無い。誰の目にもそれは明らかだった。彼女の心は一瞬にして喜びとせつなさに溢れ、義息との戯言など失われ　占めるのはたった一人の夫のみ。

彼女は夫を愛していると思いついでいる。

そう【思い込んでいる】と【思い込みたい】のはヴァルフアム自身だ。

## ねがい（前書き）

\*時系列が多少ごちゃごちゃしていても読みづらいかもしれません…

ねがい

クレオールの前で、彼女はその封を施した。

慣れぬ所作で蜜蝋を溶かし、封筒にそつと落とし込む。女主おんなあるじの様子が火傷などしないものかと思を詰める従僕に構わず、ファティナは銀の皿の上に置かれている印章を溶けた蝋に押し付けて封印を施した。

小さな野鳥と白百合とをあしらったその印章は、十六の生誕の祝いの品の中のひとつ。

かたりと銀の皿に戻し、ファティナは幸せそうに微笑んで 照れるようにそつとその封筒に唇で触れた。

「御返事、いただけると良いのですけれど」

生誕の祝いのお礼と、そしてこの手紙の中にはもつと親密な願いが秘められていることをクレオールは知っていた。

彼の女主おんなあるじが内緒話をするようにこっそりとそつと教えてくれた。実に幸せそうに。誰にも内緒。秘密の願い。

「お預かりいたします」

トレイを示すと、ファティナはねだるようにクレオールを見上げた。

「クレオ」

「いけません」

「まだ何も言っておりません」

「おっしゃられずとも判ります。ご自身で郵便屋に行きたいなどとお考えなのでしょうか？」

「それも勿論ですけれど、リールの婚姻の時のヴェールのレース系が足りないのです。買いに行きたいの」

彼女は親友への贈り物を現在作り直している。

一度自分の身に乘せられ、あまつさえ床に落としてしまったことを危惧したのだ。

「また若様に御叱りを受けますよ」

クレオールは淡々と言うのだが、ファティナは悪戯をたくらむ瞳で見上げてくる。

「ヴァルフラム様は騎士団に所属なさっておいでだけれど、内勤なものですもの。外で会うなんてありませんでしょ？ ほんの少し、半刻ばかりで良いのです。この手紙だけは……わたくしの手で郵便屋さんにおあずけしたいの」

クレオールはしばらく女主の顔を見つめていたが、やがて大きく息をついた。

ファティナの願いはほんの些細なものだ。街へとおりてほんの少しの買い物。そして、愛する夫へと向ける手紙の投函……悲しくなる程にささやかな願い。

「私がお同行いたします。ですが奥様　くれぐれも私から離れたりなさらないで下さい」

例え何か問題があつたとしても、自らが罰を受ければ良い。

そう、たとえクレオールであろうとも、この女主がスリを相手に靴を投げつけるなどとは思ってもいかなかったのだ。

\*\*\*

ゲラゲラと笑いながら顔を出したのは上官だった。

何が楽しいのか紙を丸めてぱしぱしと手に当てながら、資料室で目当ての資料を探しているヴァルフラムを見つけるとバカ丸出しの大声で言った。

「いやあ、本当に面白いよな！」

「　　主語が抜けた言葉で理解しろというのは到底無理ですね」  
　　うんざりとしながらやつと見つけた資料を引き抜く。

誰の仕事をしていると思う。おまえが押し付けた仕事だと言ってやりたい気持ちになる。

「おまえの可愛い義母上殿！」

警備隊のやつらに大人気っ」

「……は？」

すでにヴァルフアムの義母が年若い小娘であることは騎士団の中でも知られている。だが、さすがに警備隊にまで話が渡るのはいささか理解できない。どこの誰が吹聴して歩いているというのか。

むつとしながら面前の上官をにらみつけると、くつくつと笑いを堪えながら言った。

「バザールでスリを捕まえたらしい」

ああ、安心しろー？ 怪我とかしてないらしいからな。と言葉は続いてしたが、ヴァルフアムはもうそれどこではない。

目の前が真っ暗になった。

ふっと照明が落ちたような違和感。ぐらりと体がかしぐ気がしてがしりと書棚に手をかける。

ついで訪れた獰猛な怒りに、口元に笑みが浮かんだ。

笑い続ける上官と共にヴァルフアムの口からも笑いがこぼれたが、あまりの不穩さに笑っていたティーン・ゼルトはひくりと口の端を引きつらせた。

「えっと……ヴァル？」

「言われていた資料です。私の机にある書類とつき合わせてお使いください」

「ヴァ、ル？」

「帰ります」

「あんまり虐めるなよ？ 嫌われるぞー？ おーい？ 給料差つ引くぞー？」

怪我は無いという言葉だけでは何の信用にもならない。その姿を見ないと安堵できようはずもない。何故、外に出るのだろう。堅固な檻と鎖とでつながないとあの人には理解できないのだろうか。

世の中は危険が満ちていて、いつなんどきあのような脆弱な義母を死神の手に委ねることになるか知れぬ。

だのに義母ときたら、ヴァルフアムの心など欠片程にも危惧してくれないのだ。

最近の義母ときたら口答えも増えた。生意気にも言い返す　ヴァルフアムは眉間にくつきりと皺を刻み込んだ。

これはいわゆる反抗期というものだろうか。

小娘のくせに生意気な。

\*\*\*

\*\*\*

スリに靴を投げたことをさんざ説教し、やっと心を落ち着けたかと思えば思い出したように「子供が欲しい」などという病を再発させる。

喧嘩の果てに自分から逃げ出した義母の姿を求めたヴァルフアムは、クレオールの言葉のとおり庭の噴水付近で犬と共にいる彼女を見つけることができた。

白くて大きなもつさりとした犬は、ヴァルフアムを見ると低く身を伏せるようにして喉の奥で威嚇する。

それを一瞥し、ヴァルフアムは噴水の縁に座ってつんと横を向くファティナを見た。

わたくしは怒っているのです。

そう必死に示しているのだ。

「子供が欲しい」という彼女に対し、「玩具をねだるようだ」と告げたヴァルフアム。その言葉は小娘様のへそを完全に曲げたようだった。

ヴァルフアムは苦笑し、足元にいる犬を蹴飛ばしてやろうかと思いましたがそれは辞めた。

この義母は、ヴァルフアムの心根など理解しようともしない。

一步距離をとり、正しく義母と継子としての距離を保とうと努力しているというのに、突然こんな風に義息の心臓をぎしりと攫む。距離などつつている間にこの義母に何事があれば、おそらく後悔してもしきれない。

仕事場で知らされた義母の冒険譚は、ヴァルフアムを地獄に叩き込むには十分な破壊力があつた。

義母ほどか弱く容易たやすい人間などおそらくこの世には存在しない。眠つたが最後起きないのではないかという思いに不安を覚えたのは一度や二度ではない。

その憤りを収めたと思えば、子供が欲しいなどと言い、あまつさえ実力行使に出ようと父の元へまで行こうとする。

まったくもって彼女は不可解な生き物だ。

か弱く脆弱せいかじやく もういつそ死んでしまえばいいと幾度も願ひもした。

だがそれは他人の手で行われるものであつてはいけない。ファティナはやがて訪れる老衰か、もしくは……自らの手で逝くのが許さない。

一定の距離を保ち、平穩無事にこのまま二人ですごし果ては老衰馬鹿げた夢だが、ヴァルフアムは本気でそう願っている。

だが、距離をとつたところで、死んでしまえばまったく無意味だというのに。

彼の義母はすぐに義息との約束を破り、彼の作る檻を抜け出す。脆弱な小鳥は檻の中で愛らしく鳴いていれば良いというのに。

幾度も幾度も約束を破り「ごめんなさい」という言葉のみで許してきた。

そろそろ罰のひとつでも与えたほうが良いのかもしれない。

彼女が愛らしい声で泣いてすがって侘びをいれるような罰を。胸のうちに浮かぶ暗い喜びの想いにふっと笑みが浮かんだ。

「義母っえ」

つんつと横を向いたままヴァルフアムを無視しようとする義母に話しかける。

ファティナはそっぽを向いたまま、だがせいらいのこらえ性のなさの為か、しばらく見つめているとつつけんどんに口を開いた。

「話すことはありません」

屋敷を勝手に抜け出し、拳句またしても子供が欲しいのだと戯言を言う義母。

外出して騒ぎを起こしたことを、子供が欲しいと我儘を言うことを、きつちりと叱り飛ばさそうと思っていたというのにヴァルフアムは義母の横顔を見つめながら降参した。

「……心無い言い様であったことは認めます。どうぞお怒りを解いて下さい」

「」

「義母っえ」

ファティナの伏せられた<sup>まなじり</sup>眦が待ちあがり、潤む翡翠が見上げてくる。軽く睨むその所作を前に、ヴァルフアムはその場で膝を折った。地面に膝をついてファティナの膝の上に置かれた手を両手で浚い、額に当てる。

そこから流れるものが、胸を締め付ける。

いくら離れたいと意図しても、彼女はそれを許さない。

ヴァルフアムだとて理解している。彼女の心の中の一番は父で自らには無い。そして、永遠に彼女と共にあるうとするならば義母と継

子という立場が最大の恩恵であるということ。

その心を真綿にくるんで守り続ける想いと同時に、破壊しつくしてしまいたい欲望。危うい均衡は、いつどちらに振り切れてもおかしくない程だというのに、彼女はあくまでも陽だまりで生きている。

ヴァルフアムは自らの振る舞いに笑うしかない。

彼女が陽だまりにしようとすれば、まるで自分は日陰か　それとも地底か。まったく別の場所にいる醜い獣けだものなのではないかとすら錯覚する。

幾度も幾度も自分を戒めて自重を促したところで、ファティナの前に義息は敗北するしかない。

怒る顔も泣く顔も笑う顔も全て　腕の中に閉じ込めてしまいたい渴望。

神とはいったい何をもってこのような恐ろしい生き物を作り上げたのだろう。

彼女はヴァルフアムの心を打ち砕き、また喜びをも与える。

「どうすれば許して下さいますか？　何か美味しいデザートでも取り寄せましょうか？　買物にだって付き合います。どこか行きたい場所があるのであれば、お連れしましょう」

私にできることであれば、何なりとおっしゃってください。

びくんとファティナの指が反応する。

下から覗き込めば、ファティナは口元が笑ってしまうのを必死に堪える顔をしてヴァルフアムを見ていた。

「本当に？」

「私があなたに嘘を言うとても？」

「では、わたくしお願いが」

ぱつと綻ぶ表情にもう怒りはない。鳥頭は怒りを継続するのも難しいのだ。愚かかわいらしい義母。それを見つめ、ヴァルフアムはほっと息をついたが、

「ソルドさんと仲良くして下さい」

「それは無理です」

義母の言葉に考えるまでもなく即答していた。

\*\*\*

先日、ファティナの16の生誕の祝いにと父からの贈り物を運んできたのは、普段来る従僕とは違う男だった。人間が変わることは良くあることで、これといって何の興味もない。

その男がファティナの元にひざまずき、その手を押し頂き口付けを落とすこともこれとっておかしなことでもない。

女主にそれ相応の敬意を払うのはむしろ当然のこと。

だがその男は、眼鏡の奥の鋭い眼差しを細め口元にゆるく笑みを刻みつけ「我が姫君」と囁いた。

「姫、私のことを覚えておいででしょうか？ このカディル・ソルドを」

穏やかに甘く囁かれる言葉に、意外なことにファティナは瞳を瞬いてしばらく思案はしたものの、やがて柔らかに微笑んで応えた。

「覚えておりますわ　わたくしの婚姻のりに立会いなさいました方、でしたもの」

「はい。立ち合わせて頂きました。

姫君はとても立派でございました。さすが私の姫様だと今も私の心にその時のことは思い起こすことができます」

「姫だなどと、わたくしは人妻です」

「いいえ、私にとっては貴女様はいつまでも私の姫でございませう  
ば」

その時の気持ちは筆舌に尽くしがたい。

ヴァルファムは自分の狭量加減を自覚しない訳にはいかなかった。

自らの知らない義母を知るものがある。そしてまた、その記憶は義母の内にもあるのだ。義母の手を取ったまま男は熱っぽくファティナを見つめる。

セラフィレスの時には抱いたが、このときの嫌悪感いやさはそれを容易たやすく凌駕りょうがした。

ファティナの手を掴んだままの男のその瞳は、小ざかしい狐が弱いネズミやうさぎをどう料理しようかと値踏みするそれに似ていた。

そんな視線でファティナを見るなど汚らわしい。

ヴァルフアムは腹に鉛でも落とされたような鈍い重さを感じた。

「月に数度、姫様に勉強をお教えるようにと旦那様から言付かってまいりました」

まあっ、とファティナが嬉しそうに声をあげるのをさえぎるように、ヴァルフアムは相手の手を跳ね上げ、ファティナの肩を押すようにして向きを変えた。

「義母うえ、出かける準備があるのですからいつまでも時間を無駄になさらないで下さい」

「え、あつ？」

「ご友人のお茶会に出席なさるのでしよう」

もとより歓迎などしていなかったが、今はこの予定があることが幸いだった。

「ヴァルフアム様、ソルドさんに失礼ですわよ」

まだ会話を交わしていたのを邪魔する義息を叱責するように言うが、ヴァルフアムはファティナの肩を押さえ込み、自分だけ相手へと視線を向けた。

「父の使いといえども先触れもなく現れた方が非礼なのですよ。それに、勉強？ 母には専属の家庭教師がつけてある。悪いがあなたは不要だ。用はすんだ。父の元に帰るのだな」

きっぱりと突きつけ、話は終わりだとファティナを押すようにして部屋を出ようとした背に、カディルは小さくすりという笑みを

こぼし、言葉を続けた。

「私にしかお教えできないことがあるのですよ。生憎とあなたの命令には従わない。」

我が姫よ。近々またお尋ねいたします。そのおりにはお姫がお好きだった焼き菓子をお持ちいたしましょう。」

ヴァルフアムのことを完全に無視した男は、狡猾な笑みでファテイナを見つめていた。

その相手と仲良く？

共にいる間どれだけ殴り飛ばしてやろうかと思っていた相手だというのに。

「それは無理です」

考えるべくもなく、答えは決まっている。

ねがい（後書き）

ごちゃごちゃしてすみません。

【継母と継子1】午前中・ファティナ  
【継母と継子1】昼・ヴァ  
ルファム

【継母と継子2】その後  
【ヴェール】その後……になっています。

## 変化

「あの男と仲良く？ 狡猾な蛇や狐のような男と仲良くするくらいであれば、私はあなたに結婚を申し込んでもいい」

「……意味が判らない例えですけど、なんとなくすごいイヤだといふのは判りました」

パールはオスですのに。とファティナ自身も理解不能なことを言う。オスだろうとメスであろうと犬である事実には変わりはない。

ファティナは困ったように小首を傾けた。

「でも、ソルドさんは旦那様のお使いですよ」

「義母うえのお願いでもこればかりは利けません」

「良い方ですよ？ 先日もわたくしが子供の頃に好きだったパイを持ってきてくださいましたし」

「食べ物などで懐柔されるなど、まったくあなたときたらいつまでも子供だ。ああいう人間を信用すると痛い目を見ますよ。そもそもあなたは騙されやすいのですからもっと他人に対して注意なさるべきです」

ヴァルフアムの言葉に、ファティナは眉をひそめて深く溜息を落としました。

「騙されやすいなどと、わたくしがいつ誰に騙されたといふのでし  
よう？」

わたしに。

さすがにヴァルフアムは苦笑を浮かべるだけに留めた。

そう、もっぱら彼女を騙しているのは他ならぬヴァルフアム自身だ。「ほかの願いなら利きましょう。私はどうしてもあの男と仲良くないどなれない 使用人と仲良くする必要もない。こればかりは義母うえといえど私の心は揺るぎませんよ」

ファティナは判りやすく深い溜息で落胆を示すと「判りました」と困ったように微笑みを浮かべた。

「そのかわり、あの方がお見えになっても意地悪をなさらないで下さいね」

「私がそのように子供のようなことを？」

ふんつと鼻を鳴らせば、ファティナは瞳を瞬きやがて破顔した。

「ヴァルフアム様はご自身をご存知ではありませんわね」

「義母うえ？」

言われたくは無い相手というものがある。

まったく同じ台詞をファティナに返してやりたい。

「ヴァルフアム様は時々本当に子供のような真似をなさいますのよ？ 幼いお子が母親を取られまいとするように。先日だって、随分とセラ兄様と揉めていらしたわ」

まあ、最終的には仲良くなさっていたようでしたけれど、という言葉は無視する。

「……あの男が不躰に義母うえに触れたり頬に口付けたりするからです。汚らわしい」

そう、あの日は午前中にカディル・ソルド 午後にはセラフィレスという不愉快な男と対峙する羽目になった史上最悪な日だった。忌々しいことにセラフィレスは確実に面白がってファティナにちよっかいを出し、ヴァルフアムの様子を伺ってはほくそ笑んでいた。拳句、やけに馴れ馴れしく背中を叩いたりして最終的には「今度一緒に飲もうよ」などといわれた。

ヴァルフアムにはまったく理解できない人種だ。

「ほら、幼い子供のようではありませんか」

「……」

くすくすと笑う義母を見下ろし、ヴァルフアムは憮然としていたがやがて息をついて義母の頬に触れ、反対側の頬に自らの頬を摺り寄せた。

「いいですよ。認めましょう。私は子供です。義母ははを愛する幼い子供です。あなたが誰かに奪われるのではと日々恐れている哀れでちっぽけな子供です。私から義母あなたを奪うものがあるならば」

一旦言葉を切り、

「殺してやる」

優しく、愛しさを込めてその耳元に囁く。

ファティナがびくりと身を震わせるのを肌で感じながら、ヴァルフアムは触れ合わせた頬を離し、小首をかしげて間近にある翡翠の瞳を覗き込んだ。

「愛してますよ、義母うえ」

戸惑いにファティナの翡翠の眼差しがゆれ、救いを求めるように他を見ようとす。

それすら許さず、ヴァルフアムは微笑を称えたまま瞳を細めてファティナの脛に口付けを落とし、鼻の脇に、唇の端に口付けを落とすていく。

身じろぎしながらファティナはおそろおそろ口を開いた。

「殺すなどと、冗談でも恐ろしいことを言っではいけません」

「本心でもですか？」

「なおさら、そんなことを言っではいけませんし、してはいけません」

「ではさせないで下さい。義母うえ。ずっと私の義母あなたでいてください」

ファティナの瞳には不安がゆれていた。

その不安がじわじわとヴァルフアムの内で喜びへと変わる。

面前にいる者がどんな男であるのか、義母は知るべきだ。知られたくないという思いと同時に、ヴァルフアムはどこまでも強く自分が

暗く淀んだ存在であることをファティナに示してやりたくなる。

おびえてにげられたいなどは思わない。

だがそうされるのもまた自分の内に喜びとして広がる矛盾。

狐狩りの狐を追うように、ファティナが怯えて逃げるのであれば長銃マスケットを向けその肩口をぶち抜いてしまいたい。

「義母うえ、義母うえは私を愛しておられますか？」

親指の腹でそつとその唇の端に触れる。

淡い色の口紅を塗られたぷくりと愛らしい唇。白手にその色がうつり、汚れる。

それすら自らのうちに奇妙なざわめきを与えた。どこまでも真っ白いこの小娘様を自分の毒で汚してしまいたい。その渴望に身が震える。

ファティナの瞳が潤むのは恐れているからだ。

彼女は自らの義息を恐れている。義息としてではなく、一人の男として恐れればいい。

「愛……しておりますわ」

「父よりも？」

「」

細い喉がこくりと上下に動く。

ヴァルフアムはやがてくすくすと笑みを落とした。

「冗談ですよ。義母うえ？」

どうかしましたか？ まるで猟犬に睨まれた狐、いや、野兎のようですよ

肩を揺らして笑い出すヴァルフアムに、ファティナはほっと息をつき、ついで不機嫌そうに唇を尖らせた。

「意地悪をなさいましたね？」

「あなたがあんまりこの義息むかしを困らせるからですよ。私ももう二十

四だというのに、子供だ子供だと意地悪をおっしやるし。ほんの少し報復されても仕方ないと思いませんか？」

「そういうところが子供なのです！」

「ああ、そうかもしれませぬね」

くつくつと笑い、ヴァルフアムは宿めるなだようにファティナの頬を撫でた。

びくんと、ファティナのからだが小さく震えた。

それはおそらく無意識に。

今まで無遠慮に幾度も触れてきた頬。

ヴァルフアムは唇をゆがめて笑みをつくり、身を寄せてその頬に口付けを落とした。

ファティナの体がほんの少しだけ固まるのが判る。

それは今までには無い反応だ。

腕の中に抱きしめたところで彼女はゆったりと何の不安も抱かずにその身を預けてきた。

だが、今の彼女は自分の反応に戸惑い、困ったように自分を見上げてくる。

ヴァルフアムは腹の底から笑い出してしまいたい衝動を堪えた。

「義母うえ、どうか？」

「いえ……あの」

「そんなに怖がらせてしまいましたか？ 申し訳ありません とうすればこの義息を許してくださいます？」

「怖がつてなどおりませぬ……」

ファティナはぎこちなく微笑む。

ヴァルフアムは優しく微笑をこぼし、囁いた。

「非礼の侘びに口付けを許してくださいますか？」

「口付け、ですか？」

「約束とは違いますが、特別な儀式に変わりは無いでしょうか？ 私

があなたに意地悪をしてしまったお詫びに、キスをしたいのですが許してはいただけませんか？」

柔らかに穏やかに謝意を込めたいのだと言われ、ファティナはヴァルフアムの碧玉の瞳を見つめて小さくうなずいた。

どこか不安を覚えながら、それでも義息を信じて。

ヴァルフアムは義母の唇をついばむように二度口付け、三度目その唇の膨らみを舌先で舐めた。

ファティナが翡翠の瞳を瞬いて見上げてくる。

それをとろけるような笑みで見下ろし、ヴァルフアムはファティナの心に宿ったものに体の奥深い場所が熱を持つのを感じていた。

矛盾だらけのこの心を開いて見せてやりたい。

穏やかに親子として生きて死ぬ。

そう望みながら、親子の垣根を脱ぎ払い憎まれてでも奪いつくしてその脳髓にヴァルフアム以外のことなど考えられぬように染め上げてしまいたい。

そうしてはいけない理由。

理由はただひとつだけ。

泣き顔より彼女の笑顔が大事だ。

泣かせたいという欲求よりも微笑みを与えられたいという望み。その為ならば死ぬまで義息（いおち）を演じられる。

まったく、くだらない。

## 手紙

ヴァルフアムが重い腰をあげたのは25になろうかという頃のことだった。

彼には彼の責任がある。父親も思い出すようにその話題を出していたが、今までのらりくらりと無視していた。そのうちに父が勝手に相手を見つけて勝手に結婚するのだろうと思っていたものだが、どうやら父はヴァルフアムの婚姻についてもさして興味がないようだ。

そう、結婚。

ヴァルフアムは侯爵家の跡取りとしてふさわしい相手を見つけ、そして次代を残すという役目がある。

休暇のおりに自宅のソファに腰をおろしてクレオールに用意させた冊子を一一つ、事務的に眺める。

「何をなさってらっしゃるの？」

そんな時に限って、庭で犬と戯れていた小娘様はいつの間にか立ち戻って興味津々の眼差しを向けてくる。

ヴァルフアムはそれをさも煙たそうにしながら「女性の目録です」と淡々と応えた。

「女性の目録？」

眉を潜ませつつテーブルの上の一冊に手を伸ばすファティナ。

「お見合いの資料ですよ」と、不親切な義息の言葉にクレオールが言葉を足した。

「相手の方の絵姿と趣味などが記載されています」

「まあ、おもしろいものがありますのね」

ファティナは瞳をきらきらさせて中身を確かめ、さらに嬉しそうに声をあげる。

「綺麗な方！ ヴァルフアム様、この方になさいませ」

実に短絡的だ。

ヴァルフアムはうんざりとしながら口を開いた。

「どの女性も三割り増しは綺麗に描かれていますよ。ヘタをすれば五割り増し。どちらにしろそんなものを信じる人間は阿呆ですね」

あんに義母が阿呆だと言ったのだが、ファティナは眉を潜めて「では何を基準に相手の方をお探しなのですか？」と尋ねてくる。

義息の嫌味も通じない。

「もちろん、家格です。当家が侯爵家なのですから、つりあいの取れた相手を求めるのは当然です」

「……つまりませんわ」

ファティナはあからさまに落胆してみせた。

とさりと許しも得ずに反対側のソファに腰をおろすと、クレオールにお茶まで頼んでいる。このままこの場に居座る気だということに気づき、ヴァルフアムは一瞬だけ眉を潜めた。

何も人が作業している場でくつろごうとしなくても良いではないかと思うのだが、それがファティナだった。

「ああ、でも結婚はいいですわよね」

絵姿を検分しつつ、ファティナが夢見るように言う。

「良い方を見つけて一日でも早く孫を抱かせてくださいませね」

ああ、わたくしもおばあちゃまですわ。不思議な感じですよわねえ。とどこかうつとりという。

「まだ子供を諦めてないのですか」

今回の病は存外長い。

ヴァルフアムの口調は自然と冷たくなった。激しく苛立つのは面前の義母があまりにもヴァルフアムの感情を頓着しない為だろう。

理解しているが理解したくない。

「何故諦めたと思うのです？」

逆にきょんととして首をかしげてくる。

「わたくしはちっとも……」

「ですがどうやら孫でも良いとおちついた様でよかったです。孫でよければ来年、再来年にはさしあげられますよ」

うんざりと言う。

それで彼女の病が沈静化されるのであればヴァルフアムとしては歓迎する。

ファティナは嬉しそうに微笑み、さらに熱を込めて目録に視線を落した。

「そういえば、お尋ねしたことはありませんでしたけれど」

「何です？」

「ヴァルフアム様のお好きな女性のタイプはどのような方でいらっしやいますの？ こうしてみても色々な方がいらっしやって、迷ってしまいますわよ」

義母の呑気な言葉を耳に入れ、それまで穏やかに聞いていられたヴァルフアムもほんの少しばかり かちんと来た。

手にしていた目録を閉ざし、足を組みかえる。

反対側のソファに座るファティナは、ヴァルフアムの冷たい眼差しなど気づかぬふうでぱらぱらと目録を繰っている。

ファティナの頭のとっぺんから、輪郭をたどり首筋、肩を見つめ、その指先にまで視線を落とす。そのまま視線は肩へと戻り、薄い胸元、細い腰、そしてそろえられた足をたどり柔らかな室内靴の先端まで。

「髪は蜂蜜色 瞳は翡翠」

まるでゆっくりと、柔らかな声音でヴァルフアムは言葉を続けた。

「薄い唇。細い肩、胸は手の中に納まる程 腰は軽く手が回るほど。幼い語り口。あげく随分と年下」

冊子に落ちていたファティナの瞳が戸惑うように持ち上がりヴァ

ルファムを見上げてくる。それを受けてにつこりと微笑み、

「そついうのは却下で」

ヴァルファムはざっくりと切り捨てた。

「もう子育てはうんざりですから」

「今は明らかにわたくしのことですわよね？」

「おや、そつ聞こえましたか？ 気のせいですよ」

「つつつ」

「今の特徴をまるきり正反対にした女性がいいですね。肉感的で抱き心地のよさそうな一つ二つ年上の女性なんか好みです」

くつくつと肩を揺らす義息に、義母は唇を震わせて顔を背けた。

「ヴァルファム様、いやらしいっ」

「成人男性ですから」

「ヴァルファム様より年上の女性なんて、わたくしはイヤですわ。

わたくし、お嫁様とは仲良くしたいのです。ですのにあんまり年齢が離れてしまうと、きつと嫁姑戦争がはじまってしまいますわよ。

嫁と姑の間にはものすごい溝があるのです。たいへんですのよ」

どうやらまたおかしな本の影響を受けているようだ。

苦笑しながらファティナを眺めていると、ふいに席をはずしていたクレオールが銀の盆を手に部屋へと戻った。

「若様」

クレオールが一礼して銀の盆を示す。

中には幾つかの手紙がそろえて置かれているが、そのうちの一通をクレオールは抜き取り、ファティナへと示した。

「こちらの手紙は奥様宛てとなっております」

普段であればファティナ宛ての手紙など無い。ファティナ自身も怪訝に首をかしげ、おそろおそろというようにその手紙に手を伸ば

した。

「まあ、どなたからかしら？ リール？」

友人からの手紙かと言う彼女に、執事は感情ののらぬ淡々とした言葉で応えた。

「いいえ、旦那様からです」

その言葉に、ファティナも、そしてヴァルフアムも固まった。

それは実にはじめての、夫からの手紙。

いったい何事かと自然と背筋を伸ばしたヴァルフアムと違い、ファティナは受け取った手紙をそつと大事そうに胸に押し当てた。

「きつとこの間のお返事ね」

「父に……手紙を出したのですか？」

ヴァルフアムは口腔に唾液が溜まるのを感じ、息苦しさにゆつくりと飲み込んだ。心臓が鼓動を早めて、指先が冷たい気すらしてくる。だが、そんなヴァルフアムとは違い、義母ときたら実に幸せそうに両手で手紙を包み、ふわりと微笑む。

「ええ！ 旦那様にお手紙をさしあげたのは幾度かありましたれど……お返事をいただけたのははじめてですわっ」

興奮に頬が上気して、彼女は とても、幸せそうに微笑した。

手の中の手紙をゆつくりと目で確認し、蠟封の淵を指先でなぞる。

その視線がクレオールへといくと、クレオールは心得た様子で銀色のペーパーナイフを女主へと手渡そうとしたが、ファティナは一旦伸ばしかけた手を引き戻した。

「部屋で読んでまいりますね」

「ここで いえ、どうぞ……」

ヴァルフアムは喉の渴きを覚え、あえぐように言った。

ファティナが身を翻して出て行くのを奇妙な生き物を見るように見返し、クレオールは控えている侍女についていくようにと示す。

湧き上がる感情を抑える為にヴァルフアムは胸を上下させて酸素を取り入れ、ゆっくりと吐き出した。

「義母うえが……義母うえが、父に手紙を書いたなどと知らなかったぞ」

やっと搾り出した言葉は、低く冷淡なものになった。

「一月程前のことになりました」

外出をとがめられた日だということを、クレオールは口にしながら、

余計な怒りを再発されてはたまらない。

「内容は」

「存じ上げません」

「役立たずめ」

吐き捨てられた言葉に一度頭を下げる。

ヴァルフアムはぎしりと奥歯の音をさせ、みずからも父からの手紙にナイフを入れた。

父からの手紙は予定調和だ　毎月毎月、一定のことばかりを記載する手紙。だが今回は何かが違うのではないかとヴァルフアムは身構えた。

世界が崩壊しそうなほどの恐怖がじりじりと足元から這い登る。

そう、ヴァルフアムの幸せは……気まぐれなこの男の指先一つでいつでも崩壊する危険性があるのだ。

ぐしゃりと手の中で手紙が音をさせる。

放り出した手紙に眉を潜めるクレオールを感知せず、ヴァルフアムは奇立ちを更にぶつけるようにテーブルの上の女性の目録を片手で

なぎ払った。

父の手紙は変わらない。  
相変わらずの予定調和。  
しかしそれをうち崩す最後の一文は、ヴァルファムの心をかき乱すのに十分なものだった。

近いうちに王都へと赴く。

義母はきつと喜ぶだろう。  
愛する夫に会えるのだ。

彼女の幸せが自分の幸せだなどと  
嘘でも言えそうにない。

## 苦痛

居間へとたちもどつた義母の手には手紙はなかった。

随分と機嫌が良い様子でソファへと戻り、テーブルの上に自らの茶がなくなっていることに眉を潜めた。

「片付けてしまったの？ わたくし冷めているほうが嬉しいのだけ  
れど」

そのカップは先程割れてしまった。

テーブルの上にあるいくつもの書類、冊子、手紙と共にヴァルフ  
アムに払われ、幾つかの破片へと成り果てた。

琥珀色の液体が全ての書類を汚した。

未だ読まれない手紙も、目録も全て処分を命じた。今頃は積み重な  
りまったたく意味もない塊に成り果てていることだろう。

起毛の絨毯は今ももう染みすら見られない。だが、触ればぬ  
れていることに気づくことができるだろう。

気づいて欲しい、気づかないでほしい。

それは 心に似ている。

一瞬湧き上がる激情にわれを忘れた意味を、彼女は……気づくこと  
などないのだろう。

絨毯がぬれていることに気づかないように。

「冷たいお飲み物をご用意いたしましょう」

クレオールが懇懇に言うと、ファティナは嬉しそうに微笑んだ。

「アップルとシナモンのお茶にしてみらえる？」

「かしこまりました」

クレオールは心得た様子で軽くうなずき、そして侍女へと命じる。

それを見ながらヴァルフアムはファティナの顔を見つめた。

ほんの少し、目元が赤い。

義母は泣いたのだらう。たった一人で、おそらく、父からの手紙に感極まって。

小娘様はよく涙を流す。策略も取引も何もなく、ただ感情の赴くままに涙を流す。嬉しい時に、そして悲しい時に。怒ったときに。

ヴァルフアムに見せてくれる涙は決まっている。

悲しい時　ヴァルフアムに怒られている時に。

決して嬉しさに涙をみせてくれたりはしないのだ。肘掛けにおいた肘から伸びた手を組み合わせ、親指をこめかみにあてて軽くうつむき深く息をつく。

ゆっくりとおとされた呼気に、あらゆるものを詰め込んで。

やがて顔をあげれば、ファティナが不思議そうに義息を見つめていた。

二つの翡翠で。

「父は、何と？」

ヴァルフアムは絞り出た言葉に軽く首を振った。

思うほど優しさがのせられなかった。せめて冷たく感じなければいいのだが。

「健やかにしているかと。それと……」

ふっと、ファティナは瞳を伏せた。

「会いたいと　会いに来て下さると」

「他には？」

とくとくと心臓が逸る。ファティナはついつと視線を伏せた。幾分考えるように間をおいて、やがて「秘密です」と消え入るようになさやいて、笑ってみせた。

とても、朗らかに。

その笑顔が何かをぐしゃりと叩き潰すなど、彼女は少しも思いはしないだろう。

「よかったですね」

「ヴァルフアム様も旦那様にお会いになるのは久方ぶりです。いや、いますでしょうか？ うれしいですか？」

ファティナは新たに届けられたグラスを受け取り、ふふつと微笑んだ。

「嬉しいですよ」

途中で馬車が脱輪して溝に落ちてしまえとか、橋から落ちるとか、ふつふつと浮かんでくるのはおそろく気のせいだ。

何よりヴァルフアムは良くわかつている。

あの父ときたら悪運だけは強いのだ。どんな逆境からでも悪魔のように立ち直り嫣然と胸をそり返して立ち向かう。

たとえもし希望通りの悪夢があつたとしても、それを全て跳ね除けて更に自分の糧として立ち上がる。

それがヴァルツという男だった。

ああいう男は殺しても死なない。毒を飲めば皿まで飲み干して更に薬瓶すら要求する。

嬉しそうな義母をみながらヴァルフアムは暗澹たる気持ちになった。

乾いた微笑が唇からこぼれた。

末期だ。

冷静さを失いすぎている。父が来るからどうだというのだろうか。自分の目の前に義母がいる。それはすなわち、大前提で父という存在がいるのだ。父が彼女を娶ったために自分は義母を得た。

「父に礼を言わなければ」

「どうかなさいますか？」

「私に義母あなたを与えてくれたのは、あの人ですからね　私はその点に關してはあの男に感謝してしかるべきだ」

ふふふつと乾いた笑みが唇から零れ落ちる。

二三日、目障りな男がうるついたところかどうかということはない。

もとよりこの目の前の小娘様は父の妻だ。だがそれ以上にヴァルフアムの義母だ。たかが一日二日、父に義母を貸す程度なということはない。

自分は赤ん坊か。

「ヴァルフアム様？」

「……今、ものすごく人生を投げたくなりました」

冷静になれと思っているというのに、どうやら根本の部分で冷静になれないようだ。

額に手を当ててしまった義息の様子に、ファティナは持っていたグラスをテーブルにおいて席を立つと、ヴァルフアムの足元に膝をついてその手をそつとヴァルフアムの額に触れさせた。

「どうなさったの？　具合でも悪いのではありませんか？」

冷たいグラスを持つていた手が、刺すような鋭さすら感じさせて額に触れている。ヴァルフアムは痛みを堪えるようにきつく眉根をひそめてファティナに告げた。

「少し気分が悪い」

「まあ、では横になったほうがよろしいわね」

すつと離れていこうとする義母の手をすばやく留めて、ヴァルフアムは苦しさにあえぐように言葉をのせた。

「義母うえの手はとても気持ちいいですね」

「しばらくこうしていきましょうか？」

心配気な言葉が心地よい。

ヴァルフアムは吐息のように囁いた。

「少し、横になります。義母うえに眠りにつくまで付き添いをお願いしたら断られてしまつかないかな」

共に眠られなくなってもう幾月がめぐったことだろうか。

自ら添い寝はしないと宣言したのだ。彼女との距離を保とうと必死に 触れ合う体温が、吐息が、決して自分のものではないと知っているから。

ファティナは翡翠の瞳を瞬き、

「断ったりいたしませんわよ？」

と応え、拳句の果てに言った。

「わたくしの可愛い義息さまは子守唄と物語はどちらがお好きかしら」

確実にからかう口調でくすくすと笑った。

具合が悪い義息が心細さに子供にかえってしまったのだと感じているようだ。

彼女は時折そうやって年上の義息を子供扱いして笑う。

生意気にも彼女は八つも年上の男を育てている気になっているのだろう。

愛しい、そして憎らしい小娘様。

もし、その身をその義息が喰らい尽くしたら、いったいどんな顔をするのだろうか。彼女は、そして……父は？

ヴァルフアムは口の端を引くようにして笑った。

「子守唄を聴かせて下さい」

つらくて眠れない。

だから、眠りに落ちるまでそばにいて。

天と地が落ちて神が滅びて悪が笑うならば欲望のままに全てを曝け出して奪いつくすこともできよう。

だがそうはならない。

自分はきつと壊れている。

自分はきつと病んでいる。

それをもたらししたのはこの蜂蜜色の髪と翡翠の瞳をもつ愛らしい小娘だが、精一杯の理性を、常識を、ぎりぎりつなぎとめるのもまた彼女だった。

彼女が陽だまりにいる為に自らが日陰にいるのなら、苦痛すら喜びにかえてみせよう。

## 微熱

気だるさは気分の問題かと思えば 風邪を引いた。

「ちゃんと寝ていないと駄目ですよ」

寝台の横で嬉しそうにしている義母の姿に、ヴァルフアムはうんざりとしていた。

なぜ、何故にこの小娘様はヴァルフアムが寝込むと嬉しそうにしているのだ。自分の健康を見せ付けるかのようにやけにいつもよりも機敏に動こうとする。

動こうとするだけで色々と無理があるようだが。

枕辺で林檎と悪戦苦闘しているのを、その背後からクレオールが多少青ざめるようにしてみている気がする。

「実よりも皮のほうが美味しそうだな林檎というのも珍しい……」

ぼそりとヴァルフアムはつばやき、とりあえず義母の手からナイフを取り上げた。

「危ないですよっ」

「あなたが一番危ない。風邪がうつりますから、どうか自分の部屋に戻っていらっしやい」

ヴァルフアムはナイフをクレオールへと手渡し、ファティナの手で芸術的な形を見せている林檎を引き取り、食べた。

元は丸かった筈だというのに、今は洋ナシのように不恰好な形をしている。作り方を誤った瓢箪と言ってもいい。

そもそもりんごの皮をむこうという発想はどこからくるのか。皮もきちんと食べるのが正しいだろうに。

「病気は気持ちが悪くなりますわよ。わたくしが今夜は看病いたします」  
何故そんなに張り切っているのだ。

濡れタオルで手をぬぐい、嘆息する。ちらりとクレオールを見れば、クレオールは軽く身を伏せるようにして背後からファティナに囁いた。

「奥様、若様はゆっくりとした休息が必要でございます」

クレオールの言葉であればききいれるとでも言うのか、ファティナは吐息を落して寝台の脇に用意されていた椅子から立ちあがり、その冷たい手でもってそつとヴァルフアムの額に触れ、ついで何を思うのかヴァルフアムのこめかみの辺りに口付けた。

「早くよくなつてくださいますね。おやすみなさい」

「おやすみなさい。義母うえ」

ふっと、ヴァルフアムの唇から風邪に浮かされた吐息が漏れた。

確実に、子供の扱いだ。彼女は今幼い子供が病気になったように示している。しかもこの現状を少し楽しんでいるのではないだろうか。

腹立たしい。

侍女もクレオールも下がらせ、たった一人きりで寝台に沈む。

冷たかった濡れ布巾も、今ではぬるく重く額に乗るだけだ。うつろに目覚めそれに気づいてもういつそどかそつと手を伸ばしたヴァルフアムだが、その手が布巾に触れるより先に布巾はするりと抜かれ、ついで枕辺でぴしゃりと水音がはねた。

「……義母うえ？」

ふと目を開ければ、薄ぼんやりとした明かり　燭台の炎が揺れる脇にファティナの姿が浮かび、淡く微笑んだ。

自ら持ち込んだのか、桶の中で手ぬぐいを湿らせて冷たくなったそれでヴァルフアムの額と首筋とをぬぐう。

何故だか酷く狼狽してヴァルフアムは身じろぎした。

冷たい手が頬に触れ、首筋に触れる。

「熱は少し下がりましたわね」

「……いつからいました？」

「屋敷中が寝静まってるから　クレオールに怒られてしまっただろう？　だからこっさり」

くすりと笑うのは、おそらく悪戯が成功したような気持ちなのだろう。

「ヴァルフアム様も怒りますか？」

「……いえ」

部屋に戻りなさい、という言葉は飲み込んだ。

喉が少し痛む。熱でくらくらする。

こんな現状で怒るなんてしたくない　ただそれだけだ。額に戻された手巾の冷たさに瞳を伏せる。ファティナの手が、労わるように手にふれ、握りこんでくれる。

「うなされておいででしたよ。何か怖い夢でも見ましたの？」

夢、夢など見ただろうか。

臉を伏せたままファティナの手の冷たさだけを感じて、思考をめぐらせる。夢を見た覚えはない。気づいたら額の手ぬぐいの重さを感じて目覚めただけだ。

だがファティナの心配気な口調に、ヴァルフアムは口を開いた。

「あなたがいない夢です」

ああ、自分は熱に浮かされている。

風邪だから、心がいつもよりずっと弱くて、そして

「気づくと、あなたがいなくて……私は一人になっている」

「わたくしはここにおりますよ」

「そうですね」

「それに、お嫁様だっていらしてくださいさることでしょう。ヴァルフ

アム様が一人になるなんてことはありませんわよ」

ファティナの華奢な手がすつと開いてヴァルフアムの手を離れようとす。それに身じろぎすれば、安心させるようにとんとんと二度その手が手の平を叩き、

「喉は渴きませんか？ 冷たい果実水も用意してありますのよ。氷が入っていますから、美味しくいただけますわ」

ファティナの気配が少しだけ遠のく。

だがすぐに戻り、かたりと枕辺の小さなテーブルにグラスを置くと寝ているヴァルフアムの肩に手を掛けて隅に追いやられたクッションをせつせと背中につめるようにして起こしてくれる。

そこまでしてくれなくともすでに体は動く。

熱は微熱に成り果てて、今はただだけだるいだけだ。

だがファティナのするにまかせてヴァルフアムは重病人の気持ちで彼女にうながされるままに口元に当てられたグラスから冷たい液体を飲んだ。

「まだ顔が少し赤いですわね。もうお休みなさったほうがよろしいわ」

「はい」

身を起こすことで外れた額の布巾をもう一度水でぬらし、ファティナはヴァルフアムの体を寝台に戻すと額にかかる髪を優しくすきあげた。

「早くよくなつてくださいませね」

触れていた指先が頬を掠めるようになぞるたび、ヴァルフアムは泣きたいような気持ちで胸がざわついた。

すつと指先が自ら離れる。

その痛みに、咄嗟にその手首を掴みあげていた。

「ヴァル……」

「いかないで下さい」

声は、臆病にも小声になった。

いけないで、いけないで欲しい。

そこにいて欲しい。切迫する気持ちだが、食いしぼるような音となつて唇の隙間から落ちた。

びくりとファティナが一度身を震わせた。

拒絶されると感じれば、ヴァルフアムは自らの行動に奥歯を鳴らした。

だが、ファティナはふつと腕の力を抜いてもう片方の手を伸ばしてファティナの手首を掴むヴァルフアムの指に触れた。

「ともにいますから」

「……」

柔らかな声音を信じないようにファティナの手首を掴んだままの義息の様子に、ファティナはあきれるように囁いた。

「ガウンがぬげませんから手を離してくださいませ」

とんとんともう一度ヴァルフアムの手を叩き、おずおずとその手が外れるとファティナは身に付けていたガウンを脱ぎ、椅子の背に掛けると燭台の蝋燭を吹き消して　ヴァルフアムの寝台の中に身を滑らせた。

「病気の時は心がとつても寂しくなりますものね。わたくしもそうです　さあ、もう休まなくてはね」

ファティナは寝台にうつぶせになるような格好でヴァルフアムを覗き込み、微笑んだ。

「おやすみなさいませ」

汗の香りと、ファティナの甘い香りに気が遠くなりそうになつた。

ほんの少し前まで、添い寝していたのだから動揺するなど阿呆らし

い。そう思うのに、風邪で発汗した自らの香りが羞恥を呼ぶのか、それとも熱に浮かされているだけなのか、ヴァルフアムは酷く自分が狼狽していることに気づいた。

やがてファティナはヴァルフアムの手に自らの指を絡めて、猫が寝心地の良い場所を求めてもそもそと動くように身をひねり体制を整えると、こてりと寝入ってしまった。

何故、寝れるのだろうか、この人は。  
この現状で、何故？

軽く腹がたってくる。

自分が動揺しているだけに、相手が信頼して身を寄せてくることに自らを被保護者として見ていることに苛立ちがつのる。

ファティナはくーくーと奇妙な音をさせて安らかに寝ていて、自分は熱で体が痛むほどだ。

安らかな眠りなど到底期待できないような現状だというのに。

一人になる恐怖を吐露したのは自分だが、それは確実に失敗だった。心優しい彼女は、まったくもって純粹に病気で心の弱くなった息子を労わるつもりでここで寝ているのだ。

ヴァルフアムは苦い気持ちで身を起こそうとした。  
だがファティナの手が自らの手を戒めるように絡みつく。  
水に濡れていた手は今も冷たい。

ヴァルフアムの体温が高くてそう感じるだけかもしれないが、上半身を起こした現状で隣で眠るファティナを見下ろし　ヴァルフアムは瞳を細めた。

彼女の首筋が無防備に誘いを掛ける。

自由な手がファティナの首筋に落ちる蜂蜜色の　今は暗闇でそうは見えないが、絹のような柔らかな髪をそつと肩に流していた。

あらわになつた首筋をつつと指の腹でなぞればファティナの身がほんの少しだけ身じろぎした。だがそれだけで、彼女の眠りは深いのかそのままくーっとまた夢の果てへと沈んでいく。ヴァルフアムは微笑し、もう少し強くその皮膚を押し心地よい弾力がかえるのを楽しんだ。

そこに赤い跡を残してやりたい。

渴望に身を伏せようとしたが、首筋はあまりにも目立つと喉の奥で笑いがこぼれた。

犬が主にそうするように、ファティナの首筋に鼻をこすりつけるようにしてなで上げ、そつと二度唇でふれ、ほんの少し舌先で撫でる。

ファティナの甘酸っぱいような香りと、そしてほんの少しの汗の味。

心がそれだけで留めよというのに、体の熱が更に求める。

風邪をひいてる 病気なのだから、仕方ない。

笑いたいような気分で、片手でそつとファティナのネグリジェの胸元の細いリボンを引いた。

はらりと胸元がくつろぐ、指先で薄布を軽く弾けば、胸の膨らみがまるで果実のようにほのくらしい間にしらじらと浮かんだ。

このまま押さえ込んでその全てをむさぼりつくすことは可能であろうと思うのだが、ヴァルフアムは自らの愚かしさを胸に身を伏せ、胸と胸の間に口付けた。

ついでに唇を触れさせ、強く吸い上げる。

白い肌に、赤い跡が残るように強く。

ファティナが身じろぎして脛を振るわせる。その翡翠がこぼれる頃には顔をあげ、なだめるようにとんとんと彼女の二の腕を叩いた。

ぼんやりとした瞳がヴァルフアムを見上げる。

ヴァルフアムはなんでもないとゆうように優しく囁いた。

「なんでもありませんよ、おやすみなさい」

二度震えた瞼が落ちる。

すーっと深く沈む吐息を耳にしながら、ヴァルフアムは口の端をゆがめた。

白い、白い肌に小さく残された赤い印。

ぽつんと一つ、それは穢<sup>けが</sup>れだ。

綺麗な義母にたった一つだけの穢れを残したことに愉悦が広がる。

軽い満足感にファティナを抱き込むようにして目を閉ざした。

悪夢など見ない。

今宵はただ安らかな眠りが訪れるだろう。

## 訪れる者

「……悪い虫が世の中にはいるので、気をつけてください」

泣きそうな顔でメアリ女史が言った。

朝、ヴァルフラムの寝室で目覚めたファティナはクレオールによつて彼女の自室へと追いたてられた。

その後侍女に手伝ってもらいつつ着替えを済ませたのだが、顔色が悪くした侍女により連れて来られたのはメアリ女史で、そして彼女は小刻みに肩を震わせながらそんなことを言うのだ。

「そうなのです。昨夜虫に刺されてしまったようです」

着替えの最中に鏡を見て気づいた。

胸元にぽつりと赤い跡が一つ。痛みやかゆみはないものの、まったくどうしてそんなところに虫に刺されたのだらうと思うと気恥ずかしい気持ちでファティナは憤慨した。

「ヴァルフラム様の寝台、虫がいるのかしら？ 今日ちょっと日に当たってさしあげると先程頼んだのです」

女主人としての采配を振るつたつもりなのか、彼女は得意げだがメアリは複雑だった。

「ええ、本当に日に当たって抹殺できるならそれに越したことはありませんが。とにかく、以前にも言いましたよね？ 男の方の寝台に入つてはいけません」

ファティナが虫の話から何故そこにいきつくのか眉宇をひそめたものの、メアリの言葉に嘆息して「判っております」と苦笑した。

メアリはしばらく迷った風ではあったが、やがて諦めた様子で持参した本を示した。

「恋愛物語です。ファティナ様はこういった本はお好みではありませんが……ときにはこのような本を読むのも悪くありません」

ファティナは少しだけ吐息を落して本を受け取った。どちらかといえば本は好きだが、童話のようなものかもしくは歴史書、嫁姑を

扱ったものが好きだった。

【ニーナ・ロツヒ】著作の【嫁と姑の確執】、【家族の戦争】は実に楽しく勉強になると思っているくらいだ。

読んでいるとわくわくどきどきする。自分にもいつか降りかかるかもしれないと思えば力が入るといふものだ。もちろん、お嫁様とは仲良くしたい。仲良くするつもりだ。だが、ちょっと嫁姑戦争は楽しそうかもしれないも思っている。

甘いばかりの恋愛小説は実はあまり好きではない。

しかしメアリ女史が読んだほうがいいというのであればそうなのだろう。だから仕方なく受け取り、空き時間にも目を通そうと思っていた。

\*\*\*

ばさりと冊子を机の上に放り出す。

風邪が完治して数日が経過していた。

嫁候補として数名絞込み、さらに誰と決めるのも面倒であるとは父にでも決めてもらおうと放置した。これらの女性の資料は相手方から送られてきたものだから、断られることはないだろう。

誰であろうと構わない。ただし、翡翠の瞳と蜂蜜色の髪の色は含まれていない。それだけは許容できなかった。

ファティナは一人しかない。

いないのだ。

苦い笑みが口の端に浮かび、自嘲するように前髪をかきあげた。

王都に訪れると予告した父だが、半月を過ぎた今も来る気配はない。来ると宣言したからには来るのだろうが、相変わらず傍若無人だ。他人のことは考えられても自らの家族のことを少しも頓着しない。いや、家族と思っているのかどうかすら疑わしい。

来るならさっさとくればいい。

むしろこうして延ばされるのが腹立たしい。

「失礼いたします」

軽いノックの音と共に入室したクレオールが一礼し、ついでカデイル・ソルドの帰宅を告げた。

幾度かすでに訪問をしている【自称家庭教師】に関していえば、ヴァルフアムは一瞥いらい顔を合わせようという気はない。

必ず侍女を部屋につけさせるようにと命じている為に心配はしていないが、苛立ちは募った。

「今日は？」

「奥様のご生家の話と、近隣の様子などを話していたそうです」  
家庭教師といいながら、その実まっとうな勉強をしている様子はない。決まって世間話のようなことをして帰るのだという。

本来であれば父の差し向けたものとしてそれ相応に扱い、場合によつては夕餉を供することも考えねばならないのかもしれないが、ヴァルフアムはそのことを完全に無視した。

「義母うえは？」

「少しお疲れのご様子で、自室で休んでおられます」

「疲れるようならソルドなど早々に帰してしまえばいい」

冷たく言い切り、ヴァルフアムは机に手を掛けてその勢いそのまま立ち上がった。

義母の部屋を訪れようと思ったのには理由がある。

あの日、父からの手紙を受け取ったファティナはその内容を語ってはくれなかった。

ヴァルフアムが心を落ち着けて何気ない風を装って尋ねれば、ファティナはほんの少し赤い目をして……おそらく一人で泣いたのである。顔を笑顔を浮かべて、

「秘密です」

などと生意気なことを言っていた。

拳句「夫婦の秘密は義息といえどもナイショなのです」などと言  
うのだ。

おそらくへんなところで頑固な小娘さまは、幾度尋ねたところで  
その糞忌々しい「秘密」とやらを語ってはくれないだろう。

せめて、ソレをどこに置いたのかだけでも探り出してやる。

ヴァルフアムは冷ややかな気持ちだった。

もちろん、何から何まで彼女のことを知りたいなどと思っている訳  
ではない。知ったところで腹がたつことのほうが多いのがファティ  
ナだ。だが、こればかりはどうにも落ち着かない。

まるで喉の奥に何かが引っかかっているような。

幾度も幾度も嘔吐を繰り返し、胃液の逆流によって喉仏さえも異物  
に感じる不快感に似たソレ。

父はファティナに愛を囁くのだろうか？

それは滑稽で阿呆らしい想像だ。

それは確実に……嘘でしかない。

十六になった妻を前に、父は愛を囁きその腕に抱こうとするのだろ  
うか。それを想像した時、ヴァルフアムは自分が意外な反応をした  
ことに驚いた。

そうすればよい。

そう、思ったのだ。

ファティナは父の妻だ。

だからそうすればいい。

あの小娘様を泣かし、傷つけ、愛という嘘くさい幻想など木っ端微  
塵に破壊してしまえばいい。

あの女好きの下衆が。

ファティナの部屋へと足を向けたところで、突然あわただしく侍女がやってきて一礼してクレオールに耳打ちした。

「なんだ？」

「正門前の通りを馬車が来るようです。紋章は当家のものだ」と

端的な執事の言葉に、ぐっとヴァルフアムは喉の奥を鳴らした。

たった今考えていたことに軽く動揺する。動揺する自分を笑えるようになれば、全てを振り払うかのように口の端をゆがめた。

「離れの用意はすんでいるな」

「はい」

「ではおまえは車寄せに向かえ。私は……義母うえに報告して連れて行く」

かつんと強く長靴ちよつかを打ち鳴らした。

冷静になれ。

自分に命じる。

そう、冷静になれ　こんなことはなんとということはない。父親が息子のもとへ、そして妻のもとへと訪れる。

何の問題もない。極一般的なことにほかならない。

こんな下らないことで動揺するなどありえない。

ファティナの部屋の前で、それでも自然と深く息を吸い込む自分にヴァルフアムはくすりと笑った。

「義母うえ、よろしいですか？」

コンッと軽くノックをして扉に手を掛ければ、中からキャットという小さな悲鳴とばさばさという音がした。

眉を潜めてヴァルフアムが扉を開けると、ファティナは彼女の私室である居間の床に子供のようにすわり、わたわたと本を抱きしめていた。

「義母うえ？」

「応えを待たずに扉を開くのは礼儀違反マナーいはんですわよ、ヴァルフラム様  
っ」

心底慌てている様子のファティナは、何故か顔を赤らめている。

ヴァルフラムは眉を潜めて「熱でもあるのですか？ 顔が赤い」と相手の言葉を無視していえば、ファティナは怒ったように顔を背けた。

「知りません！」

「義母うえ？」

「それより どうかなさいますか？ ヴァルフラム様がわたくしの部屋を訪れるなんてとても珍しいことですわよ」

どこかごまかすように言う義母に眉宇をひそめたものの、ヴァルフラムは一度短く息を吸い込んで口を開いた。

「正門を馬車が通過しました。当家の紋章を抱いた馬車いだだそうです」その意味することに気づいたファティナは持っていた本を取り落とし、二度喉を上下させた。

「迎えにありますか？」

ヴァルフラムはそう囁いた自分がやけに冷静さを取り戻していることに気づいた。

そう、自分は大丈夫だ。

「……はい。参ります」

ファティナは腰が砕けたように動けず、それに対して笑って手を伸ばした。

「緊張していますか？」

「はい……あの、わたくし、おかしなことはございませんか？」

不安そうに見上げてくる義母の額に口付けた。

義母の体が小さく身じろぎし、軽く身を引こうとする。不可解な反応だが、ヴァルフラムは微笑した。

「あなたはおかしなところが一杯ありますが、それでもいつだって私の自慢の義母です」

「……褒めるときは普通に褒めてくださいませ」

むっとして上目遣いに睨みつけてくる義母が、とても、愛しい。

ゆっくりと体勢をたてなおし、ぱたぱたとドレスの裾をはたいた義母は自分の頬をぱしぱしと叩いた。

「行きます」

ヴァルフアムはその気負いに笑ってみせた。

「戦地にいくかのように勇ましいですね」

戦地に行くように勇ましい義母であったが、正面玄関のホールにおりたつた時に小さく喉の奥で奇妙な音をさせ気が抜けたようにふらりと後方に退きそれを慌てて支えながら、ヴァルフアムも眉を潜めた。

鷹と盾をあしらった紋章の馬車からおりたつたのは、ヴァルフアムと同じ碧玉の瞳。色素の薄い金髪を持つ相手ではあるが、そのサイズは随分と小さかった。

若干九つ　もしかしたら十か。

その年齢をはつきりとは認識もしていない、ヴァルフアムの弟、エイリクだった。

エイリクの小生意気そうな眼差しがヴァルフアムを認めて一瞬嬉しそうにしたが、すぐにその隣ににいるファティナを見つけて眉間に力を込めた。

「何故、その女がいるのですか」

挨拶もろくにできない子供は忌々しいという感情を隠すこともせず吐き捨てた。

## 欺瞞

色素の薄い金髪に意思の強い碧玉　つやのある藍色の上下に緩く結んだアスコットタイという様相。

剣呑さを含ませた眼差しをぎしりと向けられたファティナが、身じろいで動揺する。

突然訪問した馬車の主が自らの夫だと思っていた小娘は、その相手が夫ではなくもう一人の義理の息子だと知り、気が抜けた様子でふらりと後退しヴァルフアムはその肩を支えて瞳を眇めた。

「何故、その女がここにいますか」

辛らつな口調だった。

子供らしいきつい言い方を鼻で笑い、ヴァルフアムは口を開いた。

「それはこちらの台詞だ。エイリク　あまりにも突然の来訪だな」

エイリクはきつい兄の物言いにはっとした様子をみせ、ついでうるたえるように視線をさまよわせた。

「兄様、あの……先日こちらに手紙をお送りしたのですが」

「手紙？」

眉を潜めて、それから思い出す。

あの日、父からの手紙が義母に届いたおりに　憤りのあまりカッブを払いのけ、その中身をかぶった幾つかの手紙の中にエイリクのものがあった気がする。どうでも良いとそのまま処分させたはずだ。「いえ、返事も待たずに来たばかりが悪いのです。申し訳ありません」エイリクは恐縮するように言い、

「寄宿学校の入学に伴いまして、下見などの為に数日の滞在をお願いしたいのですが」

その言葉に、ファティナが短く息を吸い込んだ。

「まあっ、エイリク様もこちらにお暮らしになりますの？」

とつぴな声にエイリクが途端にいやそうな顔をする。そしてヴァルフアムは苦笑し、義母の肩を軽く叩いた。

「義母うえ、エイリクはしばらく滞在するだけです。寄宿舎は全寮制ですから、それより、確かお疲れで部屋におられたのですよね。戻りましょう」

「え、あの……でも」

「あとはクレオールに任せればいい。クレオール」

「はい、かしこまりました」

クレオールはヴァルフアムの言葉に軽く一礼し、エイリクにも同じように頭を下げた。

「この屋敷の雑事をまかされておりますクレオールと申します。お部屋にご案内いたします。荷物は当家のものが運びますので、どうぞこちらへ」

後ろ髪を引かれるようにファティナがちらちらとエイリクを盗み見て歩く。

「残念でしたね」

父ではなくて。

そつとヴァルフアムが言えば、ファティナは自分の胸元に手を当てて微笑を浮かべた。

「驚きましたけれど、久しぶりにエイリク様にお会いできて嬉しいですわ」

「嬉しい、ですか？」

以前エイリクと顔を合わせたおりには彼女は数日の間落ち込んでいたというのに。

今日だとして、糞生意気な子供はハリネズミのように刺々しくファティナに対していたというのに？

動揺が多少落ち着けた様子のファティナは、唇を軽く尖らせた。

「あら、わたくし以前にいましたでしょう？ 仲良くする自信はあるのです。今までなかったのは時間ですもの」

「あまり無茶をしないで下さい。多少の怪我ならともかく……心に傷を負われでもしたら」

多少であれば子供のすることと放置してもいいが、子供とは時折容赦なく相手を傷つけるものだ。

たかが一日、二日程度落ち込む程度であれば抱きしめて慰めてやればよいだろうが、それ以上の心の傷などつけられてはたまらない。

「わたくし、がんばりますわ！」

「ほどほどに」

できればあんなものを構ってなど欲しくないが、無理に止めたところでファティナはとまらない。

ヴァルフアムは皮肉気に笑い、内心でつぶやいた。

一発泣かされて来い。

ヴァルフアムにはよくわかつている。

ヴァルフアムと同じ色彩を持つあの子供は、ヴァルフアムと同じように 性格が悪いに違いない。

\*\*\*

父であれば良かった。

ヴァルフアムはファティナを部屋へと送り、自らも自室に戻り一旦冷水を浴び頭の熱を冷まして着替えを済ませると棚に飾られた酒瓶に手を伸ばしていた。

父であればよかったのだ。

覚悟が 砕ける。

先程までの自分であれば、心を無視して父を見れたはずだ。父と、そしてファティナを。

だが、忌々しいことに訪れたのは小生意気な糞餓鬼一人 腹の底にいやなものが溜まり、それを吐き出すように薄く開いた唇の隙間からゆっくりと息を吐き出した。

何故、あいつなのか。

何故 このタイミングで。

ヴァルフアムは乱暴にグラスにブランデーを落とし、それをぐいと喉の奥へと流し込んだ。

今であれば。いや、先程までの自分であれば、あの男がファティナに触れることを許しただろう。冷ややかに笑い、腹をよどませ、けれどそれすら必要悪のように感受してやっつたるうに！

義母と義息の距離として。

「くそっ！」

忌々しいと隠さぬ低い声が唇から漏れた。

時間がたてば立つほど腹がたつ。

一度抱いた覚悟を、もう一度抱ける度量が自分にあるだろうか。いつだかにメアリ女史に告げた言葉がよみがえる。

女が欲しいなら娼館にでも行く。

そうじゃない。欲しいのは女ではなく ファティナなのだ。

女が欲しい訳ではないといいながら、ファティナに触れたいと望む。共にいて欲しいといいながら、いっそ殺してしまいたいという衝動

が生まれる。共に永劫生きられるのであれば親子のまま構わない  
といいながら　ファティナの心を望む。

正解などありはしない。  
あるとすればそれは今。共にいる今だけが正解なのだ。

二杯目の酒を喉の奥へと流し込む。

自嘲的な笑みがこぼれおちた。

自分は早い段階で結婚するべきだろう　少しは枷になるやもし  
れず、ヴァルフラムの子を愛しむファティナを見ればまた何かが変  
わるかもしれない。

たとえそれが欺瞞きまんだとしても。

「若様っ！」

切迫した声が突然部屋の扉を開いた。ノックも何もなく、突然開  
かれた扉。

乱暴な気配に吞まれていたヴァルフラムは冷たい眼差しをぎしりと  
向けた。

「何だ」

「奥様がっ」

侍女の声が全てを告げるよりも先、ヴァルフラムは手の中にあっ  
たグラスを放り出して扉へと向けて足を動かしていた。

また何かをやらかしたのだ　あの小娘様は。

\*\*\*

一旦自室へと戻ったファティナだが、その後の行動はすばやかっ  
た。

部屋付きの侍女へ「休みますから」と下がらせ、こっそりと部屋を

抜け出したのだ。

ヴァルフアムがいる二階の部屋は慎重に移動し、一階に下りると大きく息をつく。それまでにぎやかであった玄関ホールも車寄せもすでに静けさを取り戻していた。

小首をかしげてしまう。

エイリクの為に用意された部屋はどこであろうか？　ぐるりと階段やホールを一旦見回し、そしてその静けさから母屋ではないのだろうとあたりをつけた。

「お客様用かしら？」

ならばそれ用に離れが存在している。だが、本来そこは来客用であつて家族につかうものではないだろう。

眉根をひそめるファティナは、彼女の義息がエイリクのことを家族とみなしていないことなど知る由しもない。ヴァルフアムにとつて家族といえばファティナだけ　父であるうとエイリクであろうとその範疇として考えておらぬし、また義理の妹達にしてみたところでいまやまったくの他人だ。

客間を用意してやるだけありがたく思え　所詮その程度なのだが、ファティナには理解しがたいことであるらしい。

ファティナはどこか納得できないという様子で、それでもあまり縁のない離れへと足を向けた。

屋敷の正面から右手奥に作られた三階建ての建物がそれだ。

レンガで作られた建物は母屋とは違いレンガの壁を持ち、かわいらしい造りをしている。母屋が白亜であるのに対し、赤レンガの造型はおそらく来客の気持ちも明るくなるうというものだが、生憎と今まで使われているのを見たことは無い。

「……ヴァルフアム様ってお友達少ないのかしら」  
とても心配だ。

ファティナは余計な心配をしながら、その離れの裏手入り口付近に先程エイリクが乗ってきた馬車が止められていることに気づいた。下男が荷物を運んでいるのが見える。

「エイリク様はどちら？」

声を掛けると、下男がぎよつとした様子で目をむいた。

「奥様？」

「ご苦労様ですわ。エイリク様は上の階にいらっしゃいますの？」

「いや、ええ……あの、ぼっちゃんは一階においでですが、あのっ……言いながらも戸惑いを隠さない下男だったが、すぐに自分の失態を知った。

ファティナが機嫌よく微笑んでさっさと離れの建物へと入っていった。しまったのだ。

「奥様っ」

咄嗟に声をあげたとしても後の祭り、ファティナの蜂蜜色の髪は扉の奥へと消えてしまった。

下男二人は顔を見合わせ、やがて息をついた。

「中にはクレオールさんがいるから大丈夫だろ」

「……だな」

彼等はこの屋敷の女主人おんなあまが落ち込んだ数々の理由を熟知している。彼女が落ち込むとこの屋敷はまるきり光をうしなつたように暗く陰気になるのだ。

エイリクという馴染みの無い主筋しすじの少年は、以前ファティナを三日の間落ち込ませた。

彼は年の近すぎる義母を 誰もが判るほどに毛嫌いしていたのだ。それは憎しみと違っていいほどに。

だが、誰も想像すらしなかった。

そのエイリクが義理とはいえ正式なる母へと、紅茶をカップごと叩きつける程嫌っているなどは。

## 番外・メアリ女史の憂鬱

白亜の屋敷が職場であり、また現在の自宅だった。

主筋は二人　そして、自分が仕えているのはファティナ。この屋敷の女主人おんなあかじにして年若き奥方。

翡翠の柔らかな瞳と、蜂蜜色の豊かな猫毛の姫君。

心優しく、ほんの少し悪戯好きで、そして突飛なところのある主に問題は無い。

主には……

メアリは定時に目を覚まし、手早く着替えを済ませると昨夜のうちに用意しておいた水入れの水を手桶に落しいれて身支度を整えた。

本日は天気が良いから、庭先で勉強をするときつと奥様は喜ぶに違いない。ただ、あまり暑くなるようならば用心しないといけない。彼女はすぐに水辺に近づきたがるから。

朝食の為に食堂へとおりて馴染みの使用人達と食事をすませる。ときおり女主が共に食事をしようと言ってくれ、ことはとてもありがたいが、そうすると時間によっては苦手な相手も一緒であったりもするので、気をつけなさいといけない。

朝食をすませ、勉強の資料を探りに行こうと図書室へと足を向けた。

この屋敷の蔵書は素晴らしい。今まで本といえば貸本屋ばかりを利用していたメアリは、この職場がまさに天国のように思えてしかたがなかった。

主は優しく、食事は美味しく、用意されている部屋は使用人の部屋とは少しだけランクの高いものだ。本来使用人は半地下の二人部屋を使うことになるが、メアリが使っているのは一階部分にある一

般室だ。来客用とはまた違うが、それでも一人部屋だし、広さも自分分がそれまで暮らしていた下宿など比べ物にならない程に広い。ただ、隣の部屋には異性である執事のクレオールがいるので、なんとなく緊張しないこともない。

寝言とか鼾とか聴こえやしないかと不安に思っただが、相手の物音も聞こえてこないのだから気にする必要はないかもしれない。

資料用の本をばらばらとめくっていると、ふいにこの屋敷の使用人の一人である女性が戸惑うように顔を出し、頭を下げた。

確か女主の為のルーム・メイドだ。

「メアリさん。どうしたらよいか判らないのですが」  
突然の言葉に首をかしげた。

何故、屋敷の侍女が困りごとを自分に持ってくるのか理解しかねた。

何か困ったことがあればそれは全てクレオールが解決すべき事案だ。だというのにメアリに言うのであれば、屋敷内のことではなく個人的な事案だろうか。

小首をかしげながら、それでもメアリは「どうかした？」と優しく話しかけた。相手は動揺しているようだ。

メアリはこの屋敷の人間が大好きだった。  
一人を除いて。

侍女は眉根をひそめ、どう告げたら良いかと思案する様子を見せた。

腹部の辺りで重ねあわされた手がもじもじと動き、そして意を決するようにならずかに下がっていた顔をぐつと上げた。

「奥様の胸の間にキスマークがあるのです」

意味を掴みかねた。

何を言われたのか判らず、その意味を理解した時にはくらりと貧血で倒れるような気がした。

侍女は慌てて言葉を続ける。

「奥様はお気づきで無い様子でしたので……あの、虫に刺されたようだと苦笑しておられましたけれどっ、あのっ」

「気づいて、らっしやらない？」

メアリがようやく口を開くと、侍女はほっと息をついて力強くうなずいた。

「昨夜、若様が具合を悪くなさっていたのを気に掛けられておいで、どうやら一緒にお休みになったようなんです　あのっ、どうしましょっ」

あんの、害虫！

メアリはふつつつと怒りが湧き上がるのを感じた。

この屋敷で唯一メアリが苦手としているこの屋敷の馬鹿息子  
嘔吐きで陰険で陰湿なヴァルフラム様っ。

女が欲しければ、しょ……娼館にでも行くと言っていたくせにっ。  
あの腐れ外道っ。

「まさかそれ以上の手出しはっ」  
ハツと口走ってしまったが、侍女が慌てて首を振った。

「それはありませんっ。奥様は少しも気づいていらっしやいませんでしたし、あの、他におかしな点は……」

自分で言いながら彼女はかあつと頬を染めた。

「奥様は寝台に虫がいたのではないかと、若様を心配されて寝台の虫干しを命じておられましたし」

メアリのかわいらしい女中は、どこか浮世離れしている。

こんな場であんな男に困い込まれて育ったのだから致し方ないのかもしれないが、あんまりにも無防備が過ぎる。

メアリは苛々を抱え込みながら、図書館の本を見回し、そこには恋愛物語などが皆無であることに気づいて一旦自室から一冊の本を手に女主の部屋へと向かった。

男と女のことを学ぶ機会がなかったことも大きな原因だし、それを導いてやれる母親がいなかったのも要因だ。ファティナはどうにもほえほえとしすぎていて男女間のことにうとすぎる。あれで人妻なのだからまったく問題だ。まったくの子供の頃にまさに名ばかりの人妻になってしまったのだから致し方ないのかもしれないが。

迷った拳句、初級編として騎士と乙女の恋愛ものにした。描写は稚拙だがそれでも恋愛について少しは学べるだろう。少なくとも男女が同じ寝台を共にすることの意味くらいはもつときちんと理解して欲しい。

たとえそれが息子といえど、アレは義理も大義理、まったくの他人のようなものだから本気で避けて通るくらいが丁度いいというのに、ファティナときたら口先で騙されまくっている。騙している当人は騙す気満々で、あげく少しも悪びれていないのが腹立たしい。

いくらメアリが「ヴァルフラム様の言うことばかりが正しいのではありませんよ」とか、「男性であると理解して下さい」と言っても、彼女は相変わらずほえほえと「まあ、判つてますわよ」と微笑むのだ。

「あら、おはようございます。女史」

突然現れたメアリに、ファティナは微笑んだ。

目覚めの紅茶を飲んでいるところだった彼女はメアリにも紅茶をすすめたが、それをさえぎるようにして口を開こうとしたのだが

いったい何をどう言えばいいのか浮かばなかった。  
キスマークがどうとって彼女を動揺させたくは無い。ファティナは人妻であり、夫である方を心から愛しておられる。

そして義理の息子のことも同じように疑うことも無く愛しているのだ。

……その息子がこんな卑怯な暴挙に出たことをどう告げたらいいのか。

あなたの義息は卑劣で卑怯で壊れてます。

あなたに手を出すおそれがあるのでたいへん注意が必要です。  
半径一メートルに入るな危険。妊娠のおそれがあります。  
などと言えるわけがない。

「……悪い虫が世の中にはいるので気をつけて下さい」

出たのはまるきり間抜けな台詞となっていました。

我ながら酷すぎる。

それにどちらかといえば、悪い虫、ではなくて、世の中には、が先頭にくるべき言葉だろう。

自分の動揺が伺える。

しかもその言葉を受けて、彼女は胸元に手を当てて憤慨したように言った。

「そうなのです。昨夜虫に刺されてしまったようです」

唇を軽く尖らせて言ったあとに、すぐに言葉を続けた。

「ヴァルフラム様の寝台、虫がいるのかしら？ 今日はこちらと日に当ててさしあげると先程頼んだのです」

どうだ、偉いでしょう。

というように得意げに言う主の姿に、

泣きたい気持ちになった。

「ええ、本当に日に当てる抹殺できるならそれに越したことはありませんが。とにかく、以前にも言いましたよね？ 男の方の寝台に入ってはけません」

ああ、本当に！

その程度で抹殺できるのであればどんなにいいか。

だがしかし、この害虫は日に当てるようだと平然としているだろうし、煙でいぶされたところで憤慨して睨みつけてくることだろう。

メアリはあまりにもほえほえとしているファティナに、持参した恋愛物語を読むようにとすすめた。

ほんの初級編だが、純粹箱入りほえほえ娘には刺激となるだろう。少しは異性というものと意識して義息と接してもらわねば、使用人達の身が持たない。

毎日のようにあの腐れ息子が義母にべたべたしている様を見せられるのは本当に……胃が痛い。

当人は使用人など人だとも思っていないのか、まったく全然ちつとも気にかけないのだ。

ほぼその全てを見なければいけない執事など、まさに使用人の鑑かがみ。メアリが時折ヴアルファムに対しての愚痴をこぼすと、クレオールは静かに「主への罵詈ほじを聞く耳はありません」とメア리를嗜める。

だが、メアリがこの屋敷にとどまっているのは、なにも高賃金高待遇によるものだけではない。あのかわいらしい女主を精一杯お守りする為だ。

あの害虫　もしくは害獣から。

直接メアリに何かができるとは思っていない。だが、それとなく邪

魔はできる筈だ。

メアリは次にヴァルフアムと対面することがあれば、その時にもう一度対決しようと思いに決めたのだが、ヴァルフアムはやはり平然としていた。

「虫に刺されたのでしょうか」

悪事が知られているというのに、まったく意に介さずにさらりと言うので、メアリは思わず手元を戦慄かせた。

「相当タチの悪い害虫ですね！」

憤りを込めて言ったが、ヴァルフアムは口元に緩い笑みを浮かべて腕を組んだ。

「安心するといい。あなたが刺されるようなことは無い」

「当然ですっ。私は奥様を心配しているのですっ」

「余計な世話だ。義母の心配などしなくていい。あの人のことを心配するのは私の仕事だ」

まったく話にならなかった。

ファティナは狼の顎門あぎてに寄りかかるか弱い羊。

そこが一番危険だと気づかずに、むしろそこが一番安心だなどと思違いをして安堵して眠る愚かな羊。

メアリはあとはもう祈るしかない。

狼の牙が、その甘い肉を食はまぬように。

主に問題は……やっぱりあるかもしれない。

## 子犬

「なぜ、あなたが来るのです」  
冷たいエイリクの言葉に、しかしファティナは笑いを堪えるかのような顔をしてしまった。

客室の二階部分がエイリクへとあてがわれた場所であった。  
一番良い三階の部屋はヴァルツがいつ来ても良いようにとあけられている。その為にエイリクの部屋は二階室となったのだ。

はじめて離れへと足を踏み入れたファティナだったが、案内はすぐに見つけることができた。一階のホールでクレオールが荷物の采配をしていた為だ。ただし、クレオールはファティナを見た瞬間、まるで幽霊にでも遭遇したかのような奇妙な顔をした。

ほんの一瞬のことではあったが。

「奥様……何をしておいでいらっしやるのでしょうか」

「エイリク様にきちんと挨拶しようと思っただけ」

ファティナは何の悩みもなさそうな笑顔を浮かべてみせた。実際に悩みなど無いのかもしれないし、エイリクに対して思うこともないのかもしれない。だが、この屋敷の人間であれば誰一人として笑って彼女とエイリクとを並べて眺めたいなど思わない。

エイリクが彼女を嫌悪していることは、ヴァルフアムがファティナに対してどう思っているのかという程に周知の事実だ。誰も口にしないだけで。

そして、クレオールは現状を誰よりも把握していた。

「ファティナ様、エイリク様は長旅からついたばかりですのでゆっくりと休ませてさしあげたほうが宜しいと思います」

「せっかくだからいらしてくださいましたもの。お茶を飲みながらゆっくりとお話すればきっと仲良くなれると思うのです」

主は聞いてくれなかった。

ファティナという女性は、時折酷く頑固にもなるのだ。

「クレオ、ほんの少しで構わないのです。わたくし、エイリク様とも仲良くしたいの」

真摯に見つめられたクレオールは瞠目した。

「お茶を飲む間だけでございますね？」

「ええ！ わたくしが淹れてさしあげて良いかしら？ 最近少しは上手になったのよ」

とたんにファティナの翡翠の瞳がきらきらと輝いて見上げてくる。確かに最近の彼女の淹れた茶はおいしいこともあるが、時折酷く不味いこともある。練習用にと淹れてもらうこともあるクレオールはやんわりと微笑し「私をご用意致しますから、どうぞ奥様はエイリク様とご歓談をお楽しみください」とその提案は退けた。

それだけでなくエイリクへと意識が奪われてしまっているような現状では、おそらく彼女は蒸らし時間などで失敗をしてしまう。

もともと険悪だと判りきっているのだから、それならばせめて美味しいお茶でもってあいての心をほぐせればよい。

クレオールの考えは 実際にはあまり役には立たなかった。その茶を飲むものはいなかったからだ。

\*\*\*

「なぜ、あなたが来るのです」

冷たいエイリクの言葉に、しかしファティナは笑いを堪えるかのような顔をしてしまった。

クレオールが茶の乗る銀色のトレーを手に、ファティナに従うように現れたのを見てエイリクは表情を強張らせた。

部屋の様相は個人用の居間となっていた。

ファティナが普段使っている部屋よりはずいぶん狭いが、趣味の良い調度品が並び客間として不自由の無いように作られている。左手奥に続く扉には寝室が作られ、手前には使用人の為の小部屋が用意されているのだろう。

居間には応接用のソファがセットされ、エイリクはくつろぐようにそこで座り何かのケースを確認しているようだった。その背後には片付けをしている様子の女性が一人。それが彼の乳母であるジゼリ。事実上のエイリクの育ての親ともいえる女性だ。

エイリクが顔をこわばらせるように、ジゼリも目に見えて顔をしかめる。だがファティナはそんなことに頓着しなかった。

にっこりと微笑み、

「お疲れでございましょう？ お茶に致しましょう」

と堂々と宣言し、自分はさっさとエイリクと相對する場に「失礼致しますね」と座ってしまった。

「出て行け」

エイリクは低く言ったが、未だ子供らしい甲高い声が珍しいかのようにならないうにファティナは微笑んだ。

「いったい貴女は何を考えているんですか」

乱暴な物言いと精一杯の嫌悪を示す眼光。

しかし、それを向けられているファティナはどうしても笑いたい気持ちになり、それを精一杯堪えていた。

ファティナが笑いを堪えているとが感じられるのか、更にエイリクの眼差しがきつさを増していく。

エイリクとヴァルフアムの持つ色彩は元々そっくりであるとファティナは知っていた。だがこうしてみれば、エイリクの眼差しのほうが色素が若干薄いのだと気づくことができた。

それははじめての発見だ。ほんの数度しか顔を合わせていないの

だから致し方ないといえど、そういった些細なことさえ自分は知らないのだと思えばファティナは義母としての自分の情けなさを感じてしまう。

だが、それとは別にファティナが笑いを堪えてしまうのは、面前のエイリクがあまりにもヴァルフアムに酷似している為だ。怒っている時の彼に　そしてまたそれが小さいものだからとても面白く感じてしまう。

整った顔立ちも良く似てはいるが、面前にいる相手の面は少し幼く丸い。

眼光をきつくしても子犬が威嚇しているように微笑ましい。もちろん、ヴァルフアムが睨み付けてくる時などは、犬というよりも狼が睨むかのようにファティナにそんなふうには微笑ましいなどと思う余裕などないのだが。

「なぜ笑うのですか」

「だって、ヴァルフアム様とエイリク様があんまりそっくりでいらつしゃるものですから」

堪えていたのだが、ファティナは耐えられなくなって笑い出してしまった。

「ヴァルフアム様もとっても怒りんぼうでいらつしゃって、すぐにわたくしに向かって【そこに座りなさい】なんておっしゃるの。そうしてずうつとお説教なさるのです。今のエイリク様の表情、とても似ていらつしゃいます。でも」

口元に手を当てて、ファティナはもう耐えることなど完全に放棄して肩を揺らした。

「エイリク様はとってもお可愛らしいっ」

ちょうどその時に、ことりと置かれた紅茶のカップを　エイリク

は咄嗟に掴んで面前のファティナへと叩きつけていた。

それは一瞬の出来事で、ファティナには何があったのか判らない程だった。ただ突然ぐいっと肩をつかまれ、視界が暗転した。

明るい光を失い、ついで右手に痛みが走る。それは熱であったかも  
しれないが、感じたのは痛みだった。ジンジンと痛むが、まったく  
意味が判らない。

誰かが悲鳴をあげ、耳元にかかる吐息が安堵に大きく息をついてフ  
ァティナに囁いた。

「奥様、お怪我は？」

「クレ……オ？」

クレオールに抱きこまれている。そう咄嗟に理解し、ついで何故抱  
き込まれたのかを思索し、右手の痛みに気づく。

ジンジンと、まるで脈打つかのように痛む……

侍女がばたばたと駆け回る音、そして、

「クレオ、クレオ？ 怪我は？」

何かを投げつけられた。そしてそれを受けたのはクレオールの背だ。  
そのことに思い至ったファティナは翡翠の瞳を大きく見開き、慌て  
てクレオールの上着を掴んでいた。

カップを投げつけられた。

淹れ立ての紅茶の入ったカップを。

「クレオっ、火傷してはいませんか!？」

「大丈夫ですよ、地の厚い生地ですから ですがすみません、失  
礼させていただきます」

クレオールは安堵させるように言いながらファティナを腕から開放  
し、着ていた執事のお仕着せの上着を脱いだ。

ぐつしよりとその背がぬれているが、上着を脱いだ下のシャツはさほどの被害はないようでファティナは安堵の息をつき、ついで自分の手の痛みに気づいた。

「奥様、こちらに」

侍女が氷の入った桶を持参しファティナの右手を手早く浸す。その顔は蒼白で、ずいぶんと心配させたのだと思えば胸が痛む。

そしてその視線が

蒼い顔をしたエイリクが突っ立ってこちらを見ているのを見て取ると、ファティナは困ったように微笑もうとした。

「エイ……」

「出て行って下さい」

強張った口調でふいつと顔をそむける少年の様子に、ファティナは言葉を飲み込んだ。何を言うべきか判らずに、ただ戸惑いのままに、

「ごめんなさい……」

自然と謝罪の言葉が漏れた。

だがそれすらエイリクの気に障るのかカツとしたようにその顔をファティナへと向け、さらに怒鳴ろうと口を開きかけたのだが、忌々しいというように顔を背けそのまま奥の部屋へと向けて歩を進めていた。その背へと向けて「エイリク様。どのような理由があったとしても相手に紅茶を投げつける行為が正しいなどということはありません」淡々と言ったのはクレオールであったが、エイリクは苛立ちをこめたまなざしを一度向けるだけで奥の扉へと消えた。

「母屋に戻りましょう 誰か、医者の手配を」

「お医者様は要りません。それより……クレオは大丈夫なの？」

「私は平気です」

ファティナの言葉に逡巡はしたが、確かにさほどの怪我とも思えずにクレオールはうなずき、ファティナの片手を支えるようにして促した。

女主人の手は僅かに震えていた。

時間がたつにつれ、怖くなつたに違いない。

そう思えばクレオールは痛ましい気持ちを募らせた。

それ程の被害が無かったから良かったようなものの、もしこの主の顔にでも紅茶がかかっていればそれは笑って済ませられる問題ではない。

「あの、ヴァルフアム様には黙っていて……欲しいのだけれど」

ファティナが居間へと戻る間に、こっそりと内緒話でもするよう  
にクレオールへというのだが、クレオールはゆっくりと首を振った。

「すでに侍女が報告に行っております」

「……」

とたんに泣きそうな顔をする女主に、クレオールは同情を禁じえな  
かった。

## 傲慢

大きく息を吸い込んだ。

どうせ義母が何かしでかしたのだというのは理解している。もともとエイリクというイレギュラー要素を前に、あの小娘様がじっとしているなど不可能に近いことだったのだ。

理解しがたいことだというのに、それがまたよく理解できた。まったく言葉遊びのように面倒くさい。

彼女の奇行を止める為には一人になどしなければ良かったのだし、しつかりと手綱を握っているべきだった。

「何があつた？」  
乱暴に足を動かすヴァルフラムの後ろ、息を切らして歩む侍女に問えば、苦しそうにしながらも精一杯というように彼女は口を開いた。

「エイリク様が奥様に紅茶を……カップごと、お投げになつたのです」

だんつと足がいったん止まり、その背に侍女が危うくぶつかりそうになつた。

「怪我は？」

「咄嗟にクレオールさんがおかばいになられましたから、奥様の怪我は……右手に少々カップが当たりましたようですが」

すぐに冷やしました！

おびえるように叫ぶ言葉に、ぎしりと奥歯をかみ締めた。

「酷いのか？」

「いいえ！　ほんの少ししかかった程度でございますし。即刻氷で

冷やしましたので、水ぶくれなどにもなっておりません！ 軟膏を塗れば明日にでも痛みはひくものと存じ上げます」

まるで強く言わなければ自らが怒られるとでもいうようにおびえて言う娘を一瞥し、ふっと息を吐き出した。

「義母うえっ」

いつもの居間の二枚扉を乱暴に押し広げれば、寝椅子に座るファティナと、そしてその斜めに跪いて女主の手を氷水で冷やしているクレオールの姿を目に入れることとなった。

その周りを侍女達が心配そうに見守っているが、ヴァルフアムの姿にざっとよけていく。

「医師はどうした」

ヴァルフアムは冷ややかな眼差しをクレオールへと向けたのだが、応えたのはファティナだった。

「それ程酷い怪我ではありませんわ。シアースせんせい医師をわざわざ呼ぶようなことはありません。シアース医師もお年ですもの」

分別臭い台詞を吐く義母へと、ヴァルフアムは皮肉に口元を歪めてみせた。

「何故、怪我をするようなことになったのかお聞かせ頂いてかまいませんか？ 我が親愛なる義母うえ」

やけに丁寧な口調にファティナはちらりと悪戯を叱られる子供のように義息を見上げ、

「ほんの些細な……意見の相違、のような気がします」  
「ほう？」

「えっと、あの……本当は、良く判らないのです。でも、きつとわたくしが怒らせてしまったからで、エイリク様は悪くありませんわ」

歯切れの悪いファティナの言葉に、ヴァルフアムはクレオールが持つ濡れタオルを抜き取り、執事がいた場に自らが跪くとファティナの冷たくなつた手を掴んだ。

氷で冷やされた手は赤くなり、ぴくりと動くのはわずかにでも痛みがあるのだろう。

痛ましい気持ちに吐息が落ちる。

「エイリクはどうしている」

「客室のほうにおられると思いますが」

「あれは義母うえに謝罪したのか？」

その言葉には返答がなかった。

「謝罪がないのであれば会う必要もない。今夜の正餐も共に取ることはない。謝罪もなく客室に居座らせるつもりもない。一日だけ猶予を与え、退去させる」

ヴァルフアムは冷淡にそう命じた。

ファティナが慌てたように身を整える。

「そんなことおっしゃらないで」

「どんな理由があれば紅茶をカップごと投げつけてよい理由になるのか教えて頂けますでしょうか？ それができないのであれば、どうぞ口出しなさいませんように」

「ですから、あれはわたくしが悪いのです」

「どう悪いのです」

冷たい手の甲が赤い。用意されている軟膏をもつ片方の指先にとり、丁寧とその赤くなつた手の甲へと塗りこめていけばファティナが居心地悪そうに身じろぎする。

なんとなくヴァルフアム自身微妙な気持ちになりそうで、こっそり苦笑した。

「……エイリク様を叱つたりなさらないで」

「叱りませんよ」

ヴァルフアムはあっさりと言った。

「あれに割く時間など私にはありませんから」

「……」

「叱る程の価値など無い。あなたに怪我を負わせたことは腹立たしい限りですが、もうご理解いただけましたでしょうか？ 自らを嫌っている相手になどかかずらうものだからこのような目にあうのですよ。あれのことは忘れなさい」

何より、ああいう手合いには叱るよりも叱られないことのほうが身にしみるものだ、それにほかにも色々やりようはある。所詮浅慮な糞餓鬼などに向ける気などありはしない。

タダで済ませる気は毛頭ないが、それをファティナに言うこともない。

自らの手で暴力に訴える気はない、そんな価値など認めてやる気などない。だが馬車に細工して崖から落としてやりたいくらいの気持ちはある。どちらが良いかは判らないが。

ヴァルフアムは淡々といいながら手当てを施すと、ついで軟膏の塗られた手に柔らかく薄いガーゼを当て、包帯を巻き始めた。

「でも、ヴァルフアム様……」

「でも、何です？」

「あの方もわたくしの義息なのです。仲良くしたいと願うことは当然のことではありませんか」

「そうしてあなたは私を悲しませるおつもりなのですな？」

ぎゅっと強く包帯を巻かれ、ファティナが痛み顔をしめる。

ヴァルフアムは微笑をたたえ、跪いたその姿勢、丁度視線を合わせて問いかけた。

「この怪我ひとつとっても、あなたの義息が悲しんでいないと思いののですか？ でしたら貴女は考えを改めるべきだ。私はとても悲しんでいるし、怒っております。義母うえ」

「……ごめん、なさい」

真摯な眼差しにファティナは耐え切れないうつろい様子で視線をそらしたが、ヴァルフアムはその頬に手を当てて固定した。

「エイリクを叱ってほしいですか？」

「それはだめです。悪いのは……わたくしなのですから」

「そうでしょうね。おそらく無駄にあれを刺激して怒らせたのは貴女でしょう。ですが、あなたに怪我を負わせた事実が消え去りはない。それに対してあれが自発的にあなたに謝罪しない限り私はあれと対するつもりはない」

だから叱ることもないでしょう、安心してください。

不安そうに見つめてくる義母の瞳の下に口付けた。

ほんの少しの塩気は、涙の味だろうか。口元に更に笑みが浮かんだ。

肉体的にはなく精神的な衝撃とやらについての幾つかの報復行為が脳裏をよぎる。下らぬ子供の喧嘩に大人がでるようなものだが、大人を怒らせればどのようなことになるのか理解させるのもまた大人の役目だろう。

「あまり私を心配させないで下さい。あなたの痛みをこの身に受けられたらばどんなに良いか」

「おおげさだわ、ヴァルフアム様」

ファティナはエイリクを叱らないという言葉の意味を履き違えてもしたのだろう、安堵したのかやっとふわりと微笑んだ。

それを見つめ、ヴァルフアムは半眼を伏せて白い包帯に包まれた手を見つめた。

あなたは気安くアレを義息むすこなどと言う。

自分が安楽に過ごすその言葉の上に、あんなものを同列に並べようとす。

あなたはそんなにもこの義息を傷つけないのか。

「なあに？ 何か面白いことでもありましたか？」

顔を伏せて小さくクッと喉の奥を鳴らした義息の雰囲気は柔らかさを取り戻したことに安堵したファティナが問いかけると、ヴァルフアムはゆっくりと首を振った。

あなたほど傲慢な女など、きつといないに違いない。

「この手では食事もままなりませんね。なに、安心なさい。私がきちんと介助して差し上げますから」

「……結構ですわよ」

「遠慮は要りません。せんだつては私が病気のおりに義母うえが献身的に看護なさってくださいましたからね。当然あなたの義息としましては、その時の多大な恩義に対して返礼する用意があります」

にっこりと実に楽しそうに言う義息の言葉に、ファティナは困惑するように眉をひそめた。

「うちには幸い他にも一杯人がおります。何もヴァルフアム様が必要はありません」

「その言葉はそのまま義母うえにお返し致しますよう。あなたは私が病に臥しましたらきつと優しくまた看病なさってくださいましょう？ 当然その好意に対して同じものを それ以上ものをお返し致しますよ」

ヴァルフアムはむしろ上機嫌でファティナの耳の後ろをなでた。

「髪も洗ってさしあげましょう」

ファティナは頬に赤みがさすのを感じながら視線をそらし、唇を尖らせた。

「意地悪をなさっておいでですね！」

それは義母の勘違いだ。

意地悪などではない。

本気だ。

## 家族愛

右手に白く巻かれた包帯が痛々しさを誘うが　その実その怪我がまったくたいしたものであるということを知りながらヴァルフアム自身承知していた。

痛みはあるだろう。おそらく明日、明後日になればその白い手には痣がはつきりと目立つこととなることも予想がつく。それでも骨に異常がある訳では無いこともその手に握りこんで確認をした。

だが万一を考えて医者呼び寄せ、ファティナの治療を命じている間にヴァルフアムは自分の執務用にと使っている書齋でペンを走らせていた。

「エイリク様が面会を求められておりますが二度目だった。」

淡々とした調子でクレオールが言うのだが、勿論ヴァルフアムは会う必要を感じてなどいない。だからそれについて返答はしなかった。クレオールは心得た様子で軽く視線を伏せ、ついで控えている侍女に合図だけを送る。

「義母うえは？」

「現在シアース医師が到着しておりますので、治療中でございます。誰をつけている？」

手元のペンは走らせたまま問えば、現在小娘様は彼女の家庭教師であるメアリ女史と共にいるという。

「家庭教師だろうに」

「職務と違うことは存じ上げておりますが、女史は時間が許すときは奥様の付き添いをなさっておりますから」

付き添いという単語に、ヴァルフアムは皮肉に口元に笑みを貼り付けた。まがりなりにも人妻でありながら付添い人がついているなど、

まったく規格外だ。

むしろ逆であつてもおかしくはない。メアリ自身が未婚女性なのだから。

「信用のしすぎではないのか」

「そのようにお感じになりますか？」

珍しく逆に問い返され、ヴァルフアムは眉を顰め、しばらくペンを止めて「問題はない」と短く応えた。

かの女史が自らの主へと向けるものを忠誠と分類してもおかしいものではないだろう。なんといっても、彼女は時折自らの女主人<sup>おんなあかじ</sup>の為にヴァルフアムにさえ進言しようとする。

まったく意味はないが。

書面のほうに意識を戻し、署名をして吸い取り紙で一度しっかりとインクを吸い取る。

「僭越ではございますが」

と、前置きしてクレオールは言った。

「どちらにお届けすれば宜しいでしょうか」

「お前が知る必要は無いが、どうせあて先を見れば判る。届けておけ」

簡潔に言い切る主にクレオールは口を噤んだ。

クレイティル聖教会。

恭しく書かれた文字が禍々しいと感じるのは間違いだらう。

\*\*\*

呼び出された初老の医師ははじめのうちこそ慌てた様子を見せたが、ファティナの怪我に「舐めとればなおるさ」と豪快に笑っていた。

冗談でもそんなことを言わないで下さい。

やけに真剣な顔でメアリ女史は医師に言っていた。医師の冗談にまで怒りを向けるほど女史を心配させたと思えばファティナも反省せざるを得なかった。

悪いのは自分だ。

叱られることも罰があるとしても甘受しよう。

だからこれは……その、つまり、罰なのだろうか。

上着を脱いだヴァルフアムが白いシャツの袖を片手で器用に折り込んでいく。それを見ながらファティナは眉根を顰めた。

「あの、ですね」

「何です？」

「やっぱり髪の毛を洗っていただくのはちょっと遠慮させて頂きたいのですけれど」

「その手ではろくに洗えないでしょう？」

義息はやたらと機嫌が良い様子で当然のように言うのだが、ファティナは完全に動揺してしまい気づいていなかった。

そもそも、彼女が自分の髪を自分で洗うなどということは無い。

普段から侍女がやってくれることなのだから、右手が使えるように使えまいと、まったく関係が無いのだということを生憎と進言してくれるものも無かった。

ヴァルフアムはファティナの私室を訪れたおりにいたメアリ女史へと早々に仕事の終了を告げていた。作り物めいた笑みさえ浮かべ「ご苦労」などと労いの言葉まで掛けて。

「さすがに着替えを見るまではしません。早く着替えていらっしやい」

浴室の中にある衝立を示す義息は両腕の袖口を二の腕の辺りまで折り曲げ、「全裸になれと言っている訳ではないでしょうか？化粧着で入浴なさればいい。髪を洗い終えたら出て行きますから。それとも、体も洗って差し上げましょうか？」などと完全にからかつて楽しんでる様子のヴァルフラムの言葉に、ファティナはむっとした様子で唇を尖らせた。

「結構です！」

ぷいっと怒って衝立の向こうに消えてしまった義母をくつくつと笑いながら見送り、ヴァルフラムは湯を張ったバスタブに腰を預けるようにして座った。

ファティナが嫌がっている様子がとても心地よい。憤りながらも彼女は結局は義息の言葉に従うのだ。

なんと愚かで愛らしい生き物であろうか。

侍女が洗い流し用の湯桶を幾つも用意していく。それを見るともしれずに眺め、十分な湯が届いたと思えば軽く手を払った。

「下がっていい」

「ですが」

戸惑いにあふれた侍女が顔を見合わせる。

「体を洗う段になれば呼ぶ。髪を洗うことにおまえ達の手を借りることもない」

端的に言われ、それでも侍女の一人が思い切るように衝立の向こうにいると思われる女主へと声を掛けていた。

「奥様つ、宜しいでしょうか」

この時の侍女の言葉は多少足りなかった。

退出して宜しいでしょうか。そう告げていれば、違う返答が戻ったかもしれないが、多少腹をたてながら侍女の一人に手伝われて着替えを済ませていたファティナは、着替えが済んだかどうかを問われたのだと思い、容易く応えていた「はい」と。

バスタブには首を預ける窪みが作られ、そこに首を預けて頭を出し、仰向けに細長い湯船につかるようにして髪を洗えるようになって  
いる。

ファティナはこの真新しい【罰】に憤慨しながら、それでもヴァ  
ルフアムの手につかれて湯船に身を預けた。

寝巻きとして使う薄い化粧着が湯に触れて沈んでゆく。ところど  
ころに空気の泡がぷかりと布地を押し上げ、やがて抵抗をうしなっ  
て湯に溶け込むように沈んでいく。何故か普段よりも多く湯船に落  
とされた幾つものユリの花の花弁が体から離れては近づくのを感じ  
ながら、どうしてもファティナは落ち着かない気持ちで眉根を寄せ  
てしまった。

「窪みに首を預けて」

「まだ、怒っていらっしやるの？」

諦めたのか、ファティナは瞳を伏せて言われたように窪みに首の  
後ろを預けて自然と自分の胸元に左手を乗せた。

ヴァルフアムはファティナの頭の横　バスタブの縁に腰を預ける  
ようにしながら微笑を落としました。

「怒っているとお思いですか？」

「これは……罰なのでしょう？」

居心地が悪いし、どう考えても普通のこととは思わずにファテ  
イナは言うのだが、言われた義息は喉の奥を鳴らして機嫌良く「返  
礼だと申し上げていますでしょうに」といいながら指先をゆっくり  
とファティナの髪に絡めた。

頭皮を指の腹でなぞるように丁寧に、軽く力をこめて触れていく。  
サボンを湯に浸して水分を十分しみ込ませ、ファティナの髪をゆっ  
くりと湿らせる。ふわふわと揺れる髪が、いまや水気を吸ってその  
色の濃さまで変えていく。

そのやり方はいつも侍女がしてくれるそれとは違っていた。彼女  
達は乱暴でこそないが、髪を湿らせる為にそのようなまどろっこし

いいことはしない。髪の下のほうから決して顔に湯がかかったりしないようにと注意しながら、湯を直接掛けていくのだ。

だが彼女の義息はゆっくりと髪に湯を湿らせ、その都度もう片方の指で濡れた髪を解くようにすきあげていく。

はじめのうちこそ緊張が羞恥だかに支配されて強張っていた体が、やがてその強張りも解けてほどファティナはいつしか小さな吐息を漏らしていた。

「痛くはありませんか？」

「……とても」

うっかりすると欠伸が漏れてしまいそうで、ファティナは苦笑するかのように柔らかな言葉を続けた。

「とても、気持ちいい……です」

ぴくりと義息の手が止まり、その不自然さにファティナは伏せていた瞼を震わせて瞳を開いた。

「ヴァルフアム様？」

「気持ちいいですか？」

「ええ、とても」

「もつと気持ちよくして差し上げますよ」

ヴァルフアムは不自然に力が入りそうな指を押さえ込むように逆に力を加え、苦笑を落として囁いた。

純粹に完全に楽しんでいた行為が、ファティナの不用意な言葉でまったく違う緊張を孕んだなどということが無防備に湯船に浸る小娘様は欠片も気づいていないのだろうか。

獣油ではなく植物油で作られた香り豊かな石鹸を丁寧に泡立てて、髪を洗ってやりながら、ヴァルフアムは自らの内に宿るものとせめぎ会う羽目に陥っていた。

ほんのささやかな楽しみみの筈であったというのに。

ファティナの髪に触れ、本来することのないことをただ楽しむ為

であったというのに。一度意識してしまえば何もかもがまったく違う感覚を呼び起こしてしまう。

たとえば、首筋に、耳元に　泡のついた手のままでなで上げて、そしてまた逆に手を滑らせればどこまで触れることができるだろうか。

首筋をたどり、鎖骨をなであげ華奢な肩に触れて　髪を洗うのと変わらぬそぶり、そのまま化粧着の下に触れて……何がいけない。

義母は嫌悪などしていない。

気持ちよいのだと吐息を落としているほどなのだから。その感覚を更に深く快樂へとかえてしまえば彼女は

ヴァルフアムはゆっくりと喘ぐように喉を上下させ、置かれた湯桶を掴むと一息にファティナの髪についた泡汚れを流した。

「終わりです」

「……最後はちょっと乱暴です！」

顔に掛かったではありませんかっ。

ふるふると顔を振る義母の言葉に、更にヴァルフアムは身のうちのどこかが　逆に冷えた。

「時々あなたを見ているとムシヨウに腹がたつのは何故なのでしょうね」

「ほらっ、やっぱり怒っているではありませんかっ」

「怒っていませんよ。でも髪洗は終了です　侍女を呼びますから、あなたは湯船に沈んでいらっしやい」

体を起こそうとしたファティナを乱暴に押し留め、ヴァルフアムはおかれているタオルを引っつかむようにしてくるりと身を翻した。

体を起こすな！　化粧着が張り付くじゃないかっ。

華奢な体に化粧着がはりついて、それでも膨らんだ胸が判る。どくどくと脈打つ己を叱責し、ヴァルフアムは隣室に控えている侍女にファティナを任せてその部屋を出た。途端に、ぶつかりそうな勢いで目の前に女がいた。

「何をなさっているのですか」

冷やかなメアリは慌ててやってきた様子でヴァルフアムを睨みつけた。

「また文句を言いに来たのか？」

ヴァルフアムは苛立ちのままに冷やかな眼差しを向けていた。

「文句かどうかはわかりません。貴方様が奥様に何もしていらっやらないのであれば文句ではありません」

だがその瞳は完全に信用していないようだった。

さあ、白状しろという眼差しに、ヴァルフアムは憎しみすら抱いた。

何もしていない。

何も！

容易く手を出して失うことなどできないのだ。

信頼も愛情も、その優しい声音も、泣き声も囁きも！ その全てを、今ある全てを失っても欲しい。だがその欲望に従い、完全にその全てを失い、彼女の憎しみだけを向けられた後の世界などに等しい。地獄

死んでしまえ！

寧猛な怒りが腹を満たし、ヴァルフアムはやがてゆっくりと微笑んだ。

「下衆の勘ぐりだな」

かつとメアリの頬が怒りに染まる。

「望む答えを与えてやるう　私が彼女に向けるものは家族愛ではない」

地を這うような低い声でヴァルフアムは告げた。

「理解したか」

言葉というよりも音のようなそれを吐き捨てて去るヴァルフアムの背を呆然と見送り、メアリはぎゅっと自分の二の腕を握り締めた。激しく走る震えを必死に押さえ込むように。

ヴァルフアムはその時にメアリの身を震わせた感情を知れば激怒しただろう。

その時、彼女ははじめてその感情をヴァルフアムへと抱いていた。

身を引き絞る程に切ない、哀れみを。

## 給仕

母が自分を捨てたのは、5歳の頃のことだった。

父と母とが別れた原因は判らない。もともと父親とは滅多に会うこともなく母も奔放な女性で、自分を育ててくれた乳母のジゼリが言うには「お忘れなさいませ。あの方は多大な金でもって貴方を売り渡すような人でなしなのですから」と冷たいものだった。

母は人でなしであったので、子を育てる気などさらさらになかった。そう思えば感慨も浮かばない。

母は必要ではない。

ジゼリがいる。そして自分には兄がいる。年の離れた兄への思慕は募るが煩わせない為にも自分達は別々で暮らすのだ。ジゼリは時折りその兄のことを冷たく言うこともあったが、それは彼女なりの慰めでもあった。多少表現がおかしなこともあったが、ジゼリはいつだって養い子の為に生きていたのだ。

母は必要ではないが、父は再婚を果たした。自分が八つの頃のこと、再婚したのだという言葉しか知らなかった。

「新しい母君になられたというのに、なぜエイリク様の元に来てくだらないのか。情の無い」

ジゼリが憤慨するように言い、その後いつものように抱きしめてくれた。

「エイリク様にはジゼリがおります」

もうどうでも良かった。

自分と五つしか変わらない娘が母などと滑稽過ぎる。父のすることに文句は無いが、あまりにも分別の無いということくらいは理解していた。

初めて義母に会った時。その時、胸に湧き上がった感情はおそろくまったく初めて感じた種類のものだった。怒り、憎しみ、憤り。

まったく気にも掛けていなかったというのに、激しい嵐のように胸の内でそれらは吹き上がった。

彼女は、まるきり悪意も何もなく嬉しそうに微笑んだのだ。その時に理解した。

この女は自らの義息を無視し続けていたというのにそれを罪とも思わずにいる　人でなしなのだ。

人でなしだからこそそんな笑顔を向けられる。自らの罪など欠片も気付かずに。

まるで自分を生み落としたあの女と、この女は変わらない人でなしなのだ。

「エイリク様は悪くありません。あの方が無神経なのですよ」ジゼリは憤慨した様子で言葉を募らせた。

彼女の口は素直に言葉をつむぐ。それは時折心地よくもあるが、また時折酷く苛立ちをも与える。

エイリクは落ち着かない気持ちにさらに追い討ちをかけられたかのような気持ちに舌打ちをもらした。

「ジゼリ、もういい。部屋に下がれ」

「判りました。その前に何かお飲み物でも用意いたしましょうか」

ジゼリは主の機嫌のよしあしをすぐに捉えることのできる女だった。だが、飲み物という言葉にエイリクは不機嫌を増し、睨むようにして相手を追い立てていた。

紅茶をあの女に投げつけたのは、確かに短慮が過ぎた。

あの執事がかばったことに関しては正直にほっとしていた程だが、その後は更に苛立ちを覚えた。

「クレオっ、クレオっ」

あの女は狼狽して必死に執事の顔を覗き込み、相手の上着に手を掛けてその無事を確かめていた。

それはまったく理解しがたい光景だ。何故、執事の身を案じるのだ。あの女は義理の息子を案じることなどでできずとも、たかが使用人ならばその身を思うとでもいうのか？

人でなしの分際で。

何よりもエイリクを落ち着かない気持ちにさせるのは、兄がこの屋敷の主である兄が何も言っただけで来ないことだった。

あの女は、兄に何を告げているのだろうか。

あることないことを兄の耳に吹聴し、自らの都合の良いように操作しているのではないかと思えばいてもたっても居られない。面会を申し込んだが受け入れてももらえず、正餐は客室でとるように執事によって告げられた。

悔しく、そして苛立つ。

あの女が何を兄に告げたのか！

どうせ自分の都合の良いようにしか言っていないに違いない。兄は心優しい兄は、あの女の言葉をどう受け取っているのだろうか。時が過ぎる程に苛立ちはずばかりだった。

\*\*\*

幾度かエイリクが面会を求めていたが、ヴァルフアムはそれに対して会う必要など当然覚えたりはしなかった。

そわそわと落ち着かないのはファティナもだったが、エイリク自身落ち着かないものがあるのだろう。だが、ヴァルフアムは忙しかった。

そう、とても忙しい。

「もう自分でできます」

「駄目です」

ファティナが嫌がることをするというのは実に楽しい。ヴァルフアムはやりわりとした態度でファティナに接していたが、ファティナは困惑を隠さずに不満そうに見上げてくる。

翡翠の眼差し。眉間に皺を寄せて唇を尖らせ。

「わたくしは子供ではありませんし……不都合があれば、ほかの方にお願ひいたしますから」

差し出された匙　そう、右手を怪我したファティナの為に、彼女の食事の介助を申し出ているのだが、小娘様ときたら居心地が悪いというように顔をしかめてしまう。普段であればほえほえと笑っている顔が困惑と窮屈さにかめられるのを見るのは、存外悪いものでは無かった。

おそらく、良い趣味だとはいえないだろうが。

「義母うえ、早く食べていただかないと私も疲れます」

「ですから、スープならば左手でも食べられますし」

「頑固ですね」

嘆息してとりあえず現在匙の上にある琥珀色をしたコンソメスープは自分の口の中に入れた。

冷えすぎてしまった。

いっそのまま口移しで無理やり飲ませてしまおうかとよぎる。

軽く自己嫌悪に陥った。

まったく何を考えているのか。愚か者。

「それに、怪我はもう平気です。大げさに包帯など巻く必要など

」

そんな義息の心情など知らぬ気に、ファティナは不満を隠さずに唇を尖らせた。

右手の白い包帯へと視線を向けて、吐息を落とす。わずかに引き攣れるような気がするが、ただそれだけだ。この包帯さえとってしまえば、おそらく自分で食事だって可能だろうとさえ思っている。

「駄目ですよ。あと数日は右手を使うのは禁止です」

ファティナは淡々と言われる言葉にますます不満そうに顔をしかめた。まるで重病人のような扱いだが当然そんなことは無いし、何よりファティナに不満を抱かせるのは、

「ヴァルフラム様」

「なんででしょう」

「……ずいぶんと楽しそうですね？」

そう、怪我をしてからというものの何故か彼女の義息は実に楽しそうにしているのだ。

微笑をたたえて嬉々としてファティナの面倒をみようとする。

髪まで洗われてしまう始末だ。

ヴァルフラムはその後しばらく仕事だといって自室に引きこもってしまったが、夕餉の頃合には当然のように　このありさまだった。

怒るように姿を消してしまった義息に、また機嫌をそこねたかと不安にさえ思っていたというのに彼女の義息はむしろ機嫌が良い程だ。

「あなたは先日私の病気のおりに似たような反応をしていたと思いますが」

「まあ！　わたくしは心配して看病しておりましたのよ！」

「ええ。私も純粹に心配して看病しています。同じですよ。さあ、我儘はもうお止めなさい。口を開いて。きちんと食事を済ませなければデザートは食べさせてあげませんよ」

純粹といいながらそれは激しく濁りを感じさせるが、それに気付かないファティナはデザートへの誘惑に眉根をひそめた。

絶対に楽しんでいる。

ファティナは恨めしそうに最後の抵抗としてヴァルフアムを上目遣いに睨んだが、本日のデザートはファティナの大好きなチョコレートと生クリームのかけられた酸味の強い果物だ。自分の中でほんの少しだけ葛藤し、仕方なく口を開いた。

新しく匙にすくいあげられたスープを、ヴァルフアムが息を吹きかけて軽くさまし、あまつさえそれを自分の唇に押し当てて温度を試して差し向けてくる。

ファティナは泣きたくなった。

洗髪の件といい、この食事といい居心地が悪すぎる。救いを求めてクレオールへと視線を転じれば、クレオールはずっと視線を逸らしてしまった。

見てませんから大丈夫ですよ。

まるで無言の慰めが聞こえてくるようだ。

と、決して友好的ではないにしろ食事を再開したところで廊下側が騒がしくなり、ヴァルフアムとファティナの視線が自然と食堂と廊下とをつなげている二枚扉へと向けられ、いち早く動いたのは控えていたクレオールだった。

クレオールは早足で扉の方へと動いたのだが、それよりも早く扉は開かれた。

「失礼します！」

甲高い子供の声に、けれどヴァルフアムは頓着しなかった。

すぐに視線をファティナへと戻し「食事中に注意を怠るとこぼしてしまいますよ」と諫めるように言う。

反対に突然入室した弟といえば、食堂で 決して狭くない食堂で、わざわざ女主の横に椅子を置いて食事の介助をしているという一見まっとうそうでありながら結構奇妙なその光景に瞳を見開いた。

その視界の中に屋敷の家人であるクレオールが割って入り、一礼する。

「エイリク様、主は現在食事中でございます。何か御用がおありでいらつしやいますなら事前に打診をなさいますしてから面会をお求め下さい」

「面会を求めても断られるのは判ってる。邪魔だ、どけ」

「エイリク様」

「兄さま、どうかぼくの話も聞いて下さい！」

その怒鳴り声に、ファティナはなんともいえない表情を浮かべた。

「聞いて下さい、兄さま！ その女があることないこと吹聴しているのは判ってるんだ。確かにカップを投げつけたことはやりすぎたと思いますが、だからといってその女の言葉ばかりを信じてぼくの話聞いて下さらないのは酷すぎる。こちらにも言い分が」

「食事中に乱入して不快なことをわめき散らすのがおまえの流儀か  
エイリク」

かたりと匙をテーブルに置き、ヴァルフアムは冷ややかな眼差しを弟へと向けた。立ち上がるうとするヴァルフアムへと咄嗟にファティナが手を伸ばす。

伸ばしたのは右手 包帯の巻かれたその手に、エイリクはざつと視線を走らせて一瞬息を呑みこんだが、すぐに勢いをつけるように言った。

「大げさに包帯など巻いて。そうやって酷いことをされたと訴える

のがその女狐の手管ですか」

メギツネ……

ファティナは瞳を瞬きつつ、その言葉の意味を自分の中の辞書を引き出して探ってみたが、あいにくと引つかかるものはなかった。

メ・ギツネ、メギ・ツネ、メギツ・ネ？

あまり良い言葉ではないだろうと理解できるのだが。

「おまえは随分と粗野な言葉を知っているな。呆れる」  
「……」

かあつと少年の頬が赤く染まるが、それを振り切るようにして下がりかけた視線を上げた。

「クレオール、たたき出せ」

「兄さま！ 話を聞いて下さい」

「食事中だ。また改める」

「ではいつでしたら時間を割いて頂けますかっ」

少年の言葉に、ファティナはおずおずと二人の仲裁をしようとす  
るのだが、ヴァルフアムは冷ややかに言い切った。

「自らしでかした失態の非礼もわびぬ、作法も知らぬ礼儀知らずに  
割く時間などありはしない。今この瞬間に屋敷を出て行けとは言わ  
ない。だが、明日には出て行くのだな」

「兄さま……」

ぐつとエイリクは拳を握りこんだ。

何かを堪え、それから決意するように。

悔しそうに身を翻し、そして引き絞るように言った。

「カップを投げつけたのは……やりすぎました」

「誰に対して言っている」

冷ややかに言われ、エイリクは唇を噛んでもむろにつかつかと  
ファティナの前に立つと尊大に言った。

「すみませんでした！」

それは決して謝っている様子では無かったのだが、ファティナはぱつと笑顔を浮かべた。

「よろしいですよ。わたくしが悪かったのです。だから、ヴァルフラム様　明日帰れだなんて冷たいことをおっしゃらないで下さいませ」

エイリク様が謝罪なされれば宜しいとおっしゃっておいででしたね？

そう続けられ、ヴァルフラムは忌々しいとばかりに口元を引き結んだ。

「今の謝罪を受け入れると？」

「あら、受け入れるのはわたくしでございます。エイリク様はわたくしに謝罪なさってくださいました。ですので、わたくしはそれを受け入れますわ」

普段はほえほえとしているくせに、こんな時ばかりは無駄に思考を巡らせる。

確かに、ファティナに謝ればと言ったが　自分の求めたそれとはだいぶ違う。ヴァルフラムは苦い思いで眉間に皺を刻んだ。

認めないと言ったところで、まるで鬼の首をとったかのようにファティナは「ヴァルフラム様の嘘つき」とはじめるに違いない。言った言わないの水掛け論ですらない。

ただの子供の意地の張り合いだ。

そして子供は決して自分から折れるということをしない。

ファティナは話は終わったとでもいっように微笑を浮かべた。

「ところでエイリク様」

「……」

「メギツネって何ですか？」

エイリクは絶対零度の眼差しで「この馬鹿」とファティナに叩き

つけていた。

## 恋愛物語

離れに邪魔な荷物があるが、二日もたてばこれといって生活は安定したように見えた。

ただ、ファティナの様子が少しばかり気がかりでもあった。

怪我の間は決して目を離すなど命じたとおり、義母にはクレオールかもしれないが、ほんの少しづつファティナの笑顔にかげりを感じていた矢先、彼女はヴァルフアムに告げた。

苦しそうに、切なそうに。

「お話が、ございます」

きゅっとドレスのプリーツをつまみ、きゅっと眉根を寄せて思い悩む様子で言う義母に、ヴァルフアムはまたエイリクと何かあったのかとも思ったがエイリクは昨日今日と寄宿舎の見学とやらで忙しくしている。ファティナさえ近づかなければ問題などない筈だ。

ヴァルフアムはいつも通りに上着をクレオールへとあずけ、首を緩くしめているクラバットをさらに緩めながら穏やかに問いかけた。

「何か欲しいものでも？ それとも」

「まじめな話なのです」

きっぱりといわれ、ヴァルフアムは首をかしげたがファティナの腕を引いて一人がけのソファに座らせると、自らはその顔を覗き込むようにして問いかけた。

「どうぞ」

彼女はとていいにくそうにもぞもぞと身を動かし、ますます顔をしかめて泣きそうな顔をしている。手元はせわしなく自分の指を

つまんだりひつぱったりするものだから、ヴァルフアムは落ち着かせる意味でその手をやんわりと包み込み、穏やかな調子でその顔を覗き込んだ。

「義母っえ？」

「わたくし……子供ができたかもしれません」

かぼそい声で囁かれた言葉に、ヴァルフアムは聞き間違えかとは？と間抜けな音を出し、ついで「パールが妊娠でもしましたか？」と彼女の愛犬の名を持ち出してみた。あの犬はオスだったかメスだったか忘れたが。ぼろぼろと増えてもおかしくはない。

「違います、わたくしです」

しかし、ファティナはそう言い切り、ついでヴァルフアムは声を荒げた。

「相手は誰ですっ。いつの間につ？ 隠し立てすると為になりませんよ！」

一気にぶわりと腹を満たしたのは怒りと殺意だった。血液が沸騰したようにあわ立つ。

義母が妊娠？ ファティナが、つまり、誰か別の男と？

クレオールか？ それともカディル・ソルド？ まさか下男やくそっ、どこの誰がっ。

激しくきしむような気持ちのヴァルフアムに追い討ちをかけるように、ファティナは顔をあげて言った。

「ヴァルフアム様ですっ」

「殺すっ」

事務官と言えど、銃の腕も剣の腕も自信がある。正々堂々などとは言わない。後ろからでも物陰からでも構わない、その相手は絶対

に

「誰、ですって?」

地底から這い登るような言葉が漏れた。

「ヴァルフアム様ですっ」

「……」

しんと室内に静寂があり、はっと気付くとその場にいた侍女とクレオール視線がやけに冷ややかに自分を見ていた。

ヴァルフアムはごくりと喉の奥をならし、一旦きつく使用人達を睨みつけるとゆっくりと自分の呼吸を整え、引きつる顔面筋と戦う羽目に陥ったのだった。

「申し訳ありませんが、まったく意味が判りません」

身に覚えもない。

まったく全然絶対に潔白だ。

少なくとも妊娠するようなことを彼女にした覚えはない。

現実には 妄想で妊娠できるものならばしてみせろ。

「でも……仲の良い男女が寝台で休むと子供ができてしまうのです。なんとということでしょう。わたくしちつとも知りませんでした!」

「生憎と私も知りません!」

体力というものが目に見えるものだとすれば、今の自分は激しくそれを削られたに違いない。

ヴァルフアムはいやな汗をかいてしまった額をぬぐい、引きつった笑みを浮かべて義母をねめつけた。

「まあ、ヴァルフアム様もご存知ではありませんでしたの?」

「子供の作り方なら知ってますが。少なくとも男女が寝台に入った程度で妊娠するならば、あなたはもう随分と子沢山であったことでしょうね?」

「あら……そうですわね?」

やっとそのことに気付いた様子ティアナは、その翡翠の瞳を

幾度か瞬いた。  
ぎしぎしと胃が痛む。

ヴァルフアムは脱力に凶暴な気を覚えながら微笑んだ。

「その知識はどこからきたのでしょうか？」

「【白き騎士の剣】です。とつても素敵な恋愛物語でした」  
ぽつと頬を赤らめる義母に、激しく怒りが募った。

つまり、その本の内容は単純にして明快。

愛を囁きあう男女が同衾し、何という描写もなくその数カ月後には娘の腹は妊娠するという寸法だ。

乙女小説としてはありきたりの話なのだが、あまりにもあんまりな内容だ。

たかがこんな本の為に使用人に冷たい視線を向けられ、最低の烙印を押されかけたかと思えば腹立たしい。事実であればいくらでも甘受してやるが、事実無根で向けられると思えば腹立たしさもひとしおだ。

しかし今はすでにその誤解も解け、ファティナは罪もない義息を冤罪で苦しめたという罰の為にしゅんつと膝の上に両手を乗せている。

読む本くらい選べ！

まったくこの小娘様は。

忌々しいとばかりに言葉を募らせていたが、ファティナの反省を見てとるとヴァルフアムはやがて大きく息をついてファティナの硬くなった手を握りこんだ。

「とにかく、あなたは妊娠などしておりませんから安心なさい」

それで話は終いだとぼんつと叩くと、あからさまにファティナは

大きく息をつき、ふと自分の腹部を撫でた。

「赤ちゃん、いませんのね」

「……私の子などできたら困るのはあなたでしょうに」

冷たく言えば、ファティナは切なそうに微笑んだ。

「困りますけれど、でも いないと思うとなんだか寂しいですわ」

他意はない。

他意などないのだ。

この小娘は、ただ子供というものを欲しているだけだ。

だが癡猛なものがせりあがるのを、どうして止めることができるだろうか。

ぐつと強くその手を掴み、ヴァルフアムは微笑んだ。

私の子供でよければ、産んでみますか？

そう言葉にしようとしたのを、ファティナは微笑でさえぎった。

「でも、今度旦那様が子供のことで来て下さるのですもの。寂しいのはほんの少しだけですわ」

「……子供、ですか？」

声が、震えた。

「ええ！ 子供が欲しいのだとお手紙をさしあげましたの。この間のお返事では、子供のことで来て下さるって きつとわたくしに子供を授けてくださるのですわ」

言ってしまったから、ぱつとその頬を染める。

「いやだわ、秘密にしましたのに」

息子は、こういう時に一般的な息子は、どのような顔をすれば良いのだろうか。

私は、うまく笑えているのだろうか。

生憎と自信はない。

## 秘め事

犬がいる。

尻に大きな尾をつけてぶんぶん振り回している犬が。

ヴァルフアムは執務用の机に座り、肘掛けに肘を預けて胸の前で指を組み合わせ、穏やかな調子で言った。

「知っている通り、私はこの家の跡取りだ。だからこそ道を定められ、望むものにはなれなかった。

だからといっておまえにそれを押し付けるのは間違いであるとは理解している。だが、一度考えてみないか？」

磨き上げられた机の上には銀のトレイ。

そしてその上には一通の封書がおかれている。もうすでに蠟封がはずされたそれは、ある教会筋の人間から届いた返信だった。

「聖、騎士ですか」

エイリクは嬉しさと戸惑いの滲む言葉でつぶやいた。

「ですが、ぼくは……」

じっとその封書の紋章をたどるように見つめながら、それでもエイリクの言葉は探るようにつづられる。

「将来は兄さまの補佐をする心積もりで」

「その気持ちはありがたい。だが、聖騎士は名誉ある職種だし

何といっても私も子供の頃にはあこがれたものだ。おまえもきっとそうだろう」

嘘だが。

ヴァルフアムは穏やかに言いながら、完全に嫌がらせを楽しんでいた。

聖騎士はその名の通りの神職だ。神に誓願し、その身を捧げる。当然一生を清いまま、端的に言えば童貞で過ごすことが定められ、見

習いの間は司祭等同様にトンスラ 頭髪の上をそり落とす  
こととなる。

完全無欠の嫌がらせだった。

どこの誰がそんな職種にあこがれようか。いや、いるのだろう。世の中にはそういった信仰心の厚い輩やかいが。だが生憎とヴァルファムはそれに該当はしない。

「私には進めぬ道だ。おまえが進んでくれれば嬉しく思う」  
「考えてみます」

「それと、おまえが義母うえを嫌っていることは承知している。ならばこそ、これ以上あの人に関わるな」

まるでついでのように、けれどしつかりと釘を刺した。  
何より大事なことを。

受け取った封筒を両手で持ち、エイリクはもつと話をしたい様子ではあったが下がるようにと命じるとそれまでぶんぶんからばたと振り具合をかえた尾を、最期には巻くようにして退出した。

「なんだ？」

何か言いたげにじっと見ていたクレオールに視線を向けると、執事は淡々と言った。

「若様が聖騎士にあこがれていらっしやっただとは初耳でございます」  
暗にとがめていることは容易く知れた。

「知らなかったとは意外だな」

自分でも知らなかったが。

ささやかな報復でほんの少しばかり溜飲が下がった。

おそらくエイリクはもう少し押せば聖騎士の道を歩むことだろう。  
生涯を神に捧げて一生キヨラカに過ごせ。

馬鹿め。

時折邪よこしまな心を持つ者もいるというから男に襲めわれぬようにせいぜい気をつける。

ヴァルフアムはその手紙と同時に届いた父からの手紙にとんとと指先を乗せた。

「義母つえは悲しまれるだろう」

「……」

「だが仕方あるまい。怪我ではな」

自然と口元が緩むのを引き締めて、悲しむようなそぶりでもう一度囁ささやいた。

「馬車の主軸が折れるとは、運の無いことだ」

つぶやきながら、まったく別のことを考えていた。

なんて悪運の持ち主であろうか。

馬車の主軸が折れるような事故などそうそうありはしない。そしてその事故のせいで従者が一人命を落としているというのに、この男ときたら足の骨を折る程度の軽症ですんだのだという。

日々の祈りが通じたのかもしれないが、ツメが甘い。

やはり神に祈るのではなくこの際悪魔にでも祈るべきかもしれない。

手紙の内容はその間の仕事の指示、そしてしばらくは領地の本邸にいる旨　そして、ファティナへは、本邸を訪れるようにという文面。

ヴァルフアムは冷ややかにその文字を見つめていたが、おもむろに暖炉に放り込んだ。

「義母つえは？」

ただの時間稼ぎだと笑いたくば笑えばいい　自らの愚かさなど、自らが一番理解している。

\*\*\*

「旦那様のどういったところが好きなのですか？」

メアリ女史の言葉に、ファティナは一度瞬きをし、そして穏やかな笑みを浮かべてみせた。

「全てです」

「すべて？」

メアリの言葉は多少硬かった。

彼女の女主はレース編の手を止めて、少しばかり考えるかのように小首を傾げる。最近の彼女は随分と大人びた表情を浮かべるようになり、言葉さえ口にしなれば思慮深い女主とさえ思える。

ただし、言葉を操ると途端にほえほえとした内面がにじみ出てしまう為に決して世の中に放逐はできそうにない。

「こんなわたくしと結婚してくださいましたし」

それはただの政略結婚だ。

財産の為の婚姻。詳しいことを知らないメアリであろうとも、そのような噂話であれば耳の中に入り込む。ただし、この手の噂話が行われるのは決まって階下でのことで、この使用人達は階上にあがれば決してそのような無駄な口は開こうとしない。その為にファティナの耳には入らないのだろう。

何故ならばこの主が簡単に使用人を切り捨てる為だ。

使用人のことなどちっとも認識していないかのように振舞うヴァルフラムだが、その実しつかりと自分にとって使い勝手の良い人間かそうでないかの識別はしている。

「どのようなところが好きなのですか？」

切り込むように言えば、ファティナはまるで判で押したかのようによどみなく応えた。

曰く、高潔で、精練で、思慮深く、素晴らしい夫。

メアリは吐息を落とした。

顔すら会わせない相手を、よくぞそこまで良く言えるものだ。

これではまるきり絵の中の恋人。

物語の中の主役に恋するかのようだ。

「女史？」

「……旦那様のことを、良くご存知ですね？」

溜息交じりになってしまった言葉に眉が潜まる。これでは馬鹿にしているようだと言ったが、ファティナは気付くことは無かった。

「勿論、存じ上げておりますわ」

彼女は微笑した。

「夫だから、ですか？」

メアリはどこか哀れむかのように女主を見つめた。

自分の夫であるからという理由だけで、何故こんなにも恋焦がれることができるのだろう。自分が結婚していない為に判らないのだろうか？ 自分ももし結婚すれば、彼女のように一心に相手に想いを募らせることができるのだろうか。

もしかしたら、それはそれで幸せなことなのかもしれないが。

ファティナはくすくすと笑った。

「だってヴァルフラム様のお父様でいらっしやいますもの」

彼女の言葉に、メアリの心は急速に冷えた。

「ヴァルフラム様はとても素晴らしい方でいらっしやいますでしょう？ お仕事もまじめですし、時々ちよつと意地悪でいらっしやいますけれど、でも優しくて遅しくて、お美しく、素晴らしい方だと思います。そのヴァルフラム様のお父様なのですもの。旦那様が素晴らしいのは当然です」

メアリは言葉を搜した。  
喉の奥が乾くような気持ちで、無意識にぎゅっと自分の手を握り締めてしまった。

彼女の女中は いったい誰に恋をしているのだろう。

心臓がぎゅゅと掴まれたように苦しい。

酸素を求めてそつとあえいだ。

彼女の女中は恋を語る。

義理の息子を見ながら、夫を語る。

その想いは…… いったい、

酸欠で倒れそうなメア리를正気づかせたのは、扉を叩くノックの音だった。

「どうぞ」

ファティナが気安く応えれば、扉を開けて現れたのは彼女の義息

仕事を終えた義息はちらりとメア리를一瞥したが、すぐに彼の

義母の元へと歩み寄り、慣れた所作でそのこめかみに口付けた。

「勉強は終わったようですね。よろしければ正餐まで軽く遠乗りに  
でませんか？」

「まあっ、宜しいのですか？」

「その代わり、私の前に座っていただきますが。それでよければ」

「勿論かまいません」

嬉しそうに微笑する女主と、そしてヴァルフラムを見ることので  
きずにメアリは喉を上下させて瞳を伏せた。

好奇心猫をも殺す。

知らなければ良かった。知る必要などなかった。

メアリは伏せた眼差しで自分の組まれた指先を見つめ、それからつ  
つと視線をあげた。

「それでは私は下がらせていただきます」

私は何も知らない　　真実など彼女ですら気付いていないのだから。  
ら。

これは秘め事。

私は決して静けさの泉に石を投じたりなどしない。

## 試練

高価な白き封書に、聖教会を示す紋章の蝋封

敬愛する兄から渡された一通の封書を前に、エイリクは眉間に皺を寄せてただじつと考えていた。

兄が望んでくれたことならばどんなことでも諾とうなずき、兄に褒めてもらいたい。だが、これはまさに自分の一生を左右する問題だった。

聖騎士　神に身を捧げ、騎士の中でも高位に位置され尊敬、敬われる存在だ。高潔な兄が子供の頃にあこがれたというのもうなずける。

ただし、エイリクはそこにあまり魅力は感じていなかった。

だが兄が薦めてくれたものだし、わざわざ教会の人間にまで打診し推薦状をとりつけてくれたと思えば魂が震える程に嬉しい。

確かに高潔な兄こそ聖騎士という職柄はふさわしい気がするが、果たして自分はどうか。

「聖騎士！　まあ、なんてことでしょう」

乳母はこの世の終わりのように声を荒げた。

「止めて下さいまし、エイリク様。私はあなた様の可愛らしい赤様をこの腕にお抱きするのが夢なのです。聖騎士になんてしてしまえば、赤様など望めないではありませんか！」

金切り声で言うジゼリを無視し、更に眉間に皺を寄せる。

妻帯することができないということは何の問題ではない。女などどうでもいい　母も、そして義母もオンナだ。あんなもの関わらずに生きていけるのであれば、喜ばしい程だ。

そう思えば、ぐんと聖騎士という道も身近に感じる。

断る理由はないように感じられた。兄の信頼も望みも嬉しい。残念なことがあるとすれば、兄の補佐につこうと思っていた夢が廃れてしまうことだった。

「いや、聖騎士といったところでやがてはその身を退くことになる。そうすればいくらでも兄の為に尽力を尽くすことができる。聖騎士という崇高なる職種なればこそ、兄の為になるうというものだ。」

「そう、何も悩むことは無い。」

「私の可愛いエイリク様がトンスラだなんて！」

聖騎士の道は申し分ない……だが、もう少し悩んでも兄は怒らないだろう。

\*\*\*

エイリクは信じられない思いに首を振った。

母屋の一室、日当たりの良いテラスへと通じるその部屋に籐籠で作られた椅子があり、それにはふんだんにクッションがすえられている。

クッションに埋もれるようにして寝ているのは、蜂蜜色の髪を結い上げもしていないファティナだった。

部屋には誰もいなかった。

普段であれば誰かが必ず付き従っているというのに、今日この時の彼女は無防備にくーくーと寝息をたてて眠っているのだ。

「いや完全に誰もいない訳ではない。侍女が一人。」

エイリクが居間へと立ちいると、顔色を変えて「エイリク様……」と声をかけてきたものの、エイリクが冷たく睨みつけると更に顔色を悪くして「奥様はお休み中でございます、退出を願います」と必

死の様相で言うのだがこれは無視した。

侍女はエイリクが女主に害を生さないにと心底気が動転しているようだが、一人しかいない為に人を呼ぶこともできずにただ白くなっている。

こんなものはいなくても同じだ。

エイリクはもとより侍女など気にしなかった。

そんなことよりも、こんな場で居眠りなどしているこの愚かな女だ。

馬鹿だ。

こんな風にこんな場で眠るなど本来あってはならない。

それを冷淡な眼差しで見下ろし、エイリクはふつつつと湧き上がる苛立ちと戦った。

蹴り飛ばしてやりたい。だがそんなことをすれば兄は怒るだろう。兄は騎士道精神のある素晴らしい人間で、こんな小娘を義母と認めて敬っている。

なんて素晴らしい崇高な精神の持ち主であろう。

だが、生憎とエイリクにはそんなことはできかねた。できかねたが、聖騎士を目指すのであれば何事も寛大な気持ちでもって接するべきなのだろう。

そう、聖騎士とは何事にも動じることもなく平等に接するものこそが相應しい。

ふつと、ファティナの睫が小さくふるえ、その翡翠の眼差しがゆっくりと開いた。

びくりと警戒するようにエイリクは自分の胸元に手を当て、一步退きそうになった。

「旦那さま……?」

ぼんやりとした小娘は馬鹿なことを口走り、それから面前にるのがエイリクだと気付くと幾度も瞬きを繰り返し、小首をかしげた。

「エイリク様?」

「」

「何をしているのでしょうか?」

それはむしろこちらの台詞であったから、エイリクは冷たい眼差しで「貴女こそ」と言葉を返した。そう、これはある種の試練だ。これに打ち勝てねば聖騎士など到底なれよう筈が無い。

「わたくしは……」

ファティナは辺りをきよろきよろと見回し、

「レース編みをしておりました」

と、おかれた丸テーブルにあるソレにはじめて気付いたように笑ってみせたが、エイリクの表情は更に冷たさをはらんでしまった。

「居眠りですよね」

「……そうとも言つかもしれません」

「だらしの無い」

そんなことではいけないと思うのだが、どうしても口からこぼれる言葉が冷たくなる。

これは試練なのだ。大嫌いなこの女を相手に平常心を保つ。それができずしてどうして聖騎士になどなれようか。

兄の期待に応えられる男になりたい。

残念なことにエイリクは本気だった。

「エイリク様はお昼寝なさいませんか? 日当たりの良いところでうとうとするととても気持ちが良いのよ?」

むっとしているのか、唇を尖らせて言う。

エイリクは冷やややかさを増した。

「自室でなさればいい。居間などでそんなことをする淑女がいますか」

「ここはとつても気持ちが良いのです」

「そういう問題ではないでしょうに」

本当に馬鹿だろう。

エイリクが平常心など到底もてないと思ったところで、ふいにファティナはくすくすと笑い出した。

またその笑い方が癩に障る。

ムツとしたエイリクに、ファティナは言った。

「エイリク様は本当にヴァルフラム様にそっくりでいらっしやいますわね」

「……」

その言葉は、ほんの少しだけ嬉しかった。

敬愛する兄に似ているというのは褒め言葉だ。姿形は確かに似ていると自身でも思っている。だが、エイリクはその中身までも兄のようになれば良いのと願っていた。

心から。

「そんなに似ていますか？」

心臓がとくとくと期待に脈打つ。

頬が熱を帯びて、嬉しさに口元が緩みそうになるのを必死に押さえ込んだ。

ファティナはふわりと微笑んだ。

「はい、とつても似ていらっしやいます」

「どこがでしょうか」

期待を滲ませて尋ねると、ファティナは微笑を湛えて言った。

「おこりんぼうなところが」

急速に何かがしぼんだ。

口元が緩みそうになっていたものが、あっという間に別の緊張で引きつる。

この女はいったい何を言い出すのか。

「怒り方もそっくりです」

「……」

「兄弟って宜しいですわね！」

元氣いっぱい調子で言われたが、何が宜しいのか理解できなかった。

ふっと、鼻から息がもれた。

ふ、ふ、ふつと三度程同じリズムで息をつき、ぎっと面前のオンナを睨みつけていた。

「失礼致しますっ」

試練だ。

これは試練に違いない。

聖騎士を目指すには、まずあの女の前で平常心を保てるようにならねばならないだろう。

もとより高潔な兄が目指したその道を、容易く進める訳など無かったのだ。

あの女を前にして怒りに流されない自分になる。

見ていてください、兄様！

ぼくはきつと立派な男になってみせます。

どんな時にも平常心を保ち、誰よりも立派な聖騎士へとなってみ

せませす。

兄様が目指すことすら許されなかった道を、きつとこの僕が歩んでみせませす。

ぐつと拳を握りこみ、エイリクは部屋を出かけてもう一度足を止め、不思議そうに眉間に皺を寄せているファティナへと挑発するように言った。

「また明日お会いして宜しいですか」  
「勿論ですわ」

ファティナがにこにこ応えるのがまたしても胸をかきむしりたいような苛立ちを与える。

この女を乗り越えてこそ、自分はきつと立派な聖騎士となることができるに違いない。

兄様もこの試練に打ち勝ち、あのような素晴らしい騎士道精神を鍛えたに違いない。

この女こそが試練なのだ！

## ナイシヨ話

クレオールは困惑の溜息を吐き出した。

「ヴァルフラム様に叱られてしまいますよ」

彼の女主の無鉄砲や突飛な行いは屋敷の住人達にとっても楽しい余興の一つだ。だが、それが余興であればまだしも、ある一定のラインを超えた場合は脅威になりえることも良く理解している。

すくなくとも、この屋敷の執事であるクレオールは。

「ヴァルフラム様は過保護でいらつしやるのよ。まるでわたくしが小さな子供のように見えているのかしら」

ファティナは眉間に皺を刻みつけて嘆息し、けれどその考えを弾き飛ばすかのように微笑んだ。

「でも、自信はあるのです。わたくし、きっとエイリク様と仲良くなってみせます。

はれて仲良くなれたら、きっとヴァルフラム様も喜んでくださると思うのです。だから、ほんの少しの間だけで宜しいの」

お願い、クレオ。

両手を合わせて翡翠の瞳で見上げられ、クレオールはがっくりと肩を落とした。

外見上は普段どおりに。

「私は知らぬ存ぜぬで通せばよろしいのですね」

無茶であることは判っていたが、クレオールはそういうしか無かった。

屋敷内の全てを網羅している自分が、知らないと主に告げるのほとても恥ずべき行為だ。だが、ファティナはそれをしると言う。

命じたのではない、あくまでもお願いしているのだった。

どちらでも一緒だ。

クレオールはこの女主の願いを完全に突っぱねられた試しが無い。男主から見れば立派に役立たずな執事だ。

「ありがとう、クレオ！ このことはちゃんとわたくしの口から言うから。その時がきたらヴァルフアム様にきちんとお伝えしますから。それまではナイシヨにしているね？」

嬉しそうにいう女主を前に、クレオールは自分の胃の辺りをそっと撫でた。

彼の女主は不思議なもので、胃痛の原因でありながら胃痛を取るための癒しにも成り得る。まったく稀有な存在であった。

\*\*\*

呆れる。

ヴァルフアムは面前の義母の様子に呆然とし、ついで吐息を落とし、口元を緩ませた。

ファティナの手にはすでに包帯はない。もともとそう酷い怪我でもなく、彼女は三日もせずにはさつさとその包帯を取ってしまった。

食事も何もかもを自らの手で行えるのだと証明し、今も自らの手で食事をしていたのだ。

母屋の食堂にはヴァルフアム、ファティナ、そしてエイリクが席を埋めている。エイリクなど離れて食事をすればよいのだが、ファティナが「家族ですのに！」とうるさい為にヴァルフアムもエイリクの同席は認めていた。

その代わり、はじめに忠告はしてあったが。

食事時に無礼な振る舞いはしまいな？

何かあればたたき出すという圧力を、子供はきちんと感じ取れただろうか。

「義母うえ」

「……」

びくんとファティナの体が震える。突然呼ばれたことで一瞬だけ浮上したのであるが、どうやら彼女の背に張り付いた睡魔は強力なようで、ずっとその意識を飲み込んでしまった。

食事中に寝るのは赤ん坊だけかと思った。

叱るべきかとも思ったが、あまりにも阿呆らしくてヴァルフアムは嘆息一つで膝の上のナプキンで口元をぬぐい、席を立つとそのままファティナの横へと回り込んだ。

同席しているエイリクが顔をしかめているのが判る。

「何故そのように無節操に寝れるのか理解できませんっ」  
子供らしい不平を口にするのを無視する。

無節操に寝るのがファティナだ。

「寝室にお連れ致しましょうか？」

クレオールが声を掛けてくるが、ヴァルフアムはそれを手で払うようにしてからファティナの膝裏に手を差し入れ、肩を支えて抱き上げた。

エイリクがあきれ果てた冷たい眼差しを向けてくる。

「自分の面倒も自分で見られない人間がいるとは」

「見慣れぬものがうるついているのだ。義母うえも気が張ってお疲れなのだろう。おまえが疲れさせているのではあるまいな？」

「そんなっ……」

エイリクは傷ついたように顔をあげ、それからふいっと顔をそむけた。

ヴァルフアムはそれを冷たく一瞥し、さっさと食堂を出た。

食事もありすすんではいなかった。そう遅くない時刻に目を覚ますだろーし、空腹も覚えるだろー。そう判断して寝室ではなく普段から使っている居間へと足を向け、彼女が気に入っている籐の椅子にそのままおろした。

クッションが柔らかくその体を受け止め、身が沈む。

幾度もここで昼寝をしているのを目撃している。どうやら彼女はここを気にいりの昼寝場になっているようだから、寝心地は悪くないだろー。

ヴァルフアムは苦笑をこぼし、ついて来ていた侍女にひざ掛けを持ってくるようにと命じた。

唇にパンの欠片。

「まったくあなたときたら」

小さくつぶやいて親指の腹でそれをぬぐえば、ぼんやりとファティナの臉が震えた。

「旦那様？」

小さく振るえる臉は随分と重いのだろー、ファティナは必死にそれをもちあげようとするが、すぐに下がってしまう。

けれど手が伸びて、ヴァルフアムの手をぎゅっと握り締めた。

「旦那様……お会いしたかった」

ふわりと口元が笑みを刻む。

夢を見ているのだ。

悪意無い夢を。夫の夢を 愛する夫の夢を。

ヴァルフアムは肺一杯に息を吸い込んだ。わずかに身が震えるのを必死に押さえ込み、戦慄くような奇妙な音が口から漏れた。

天井を見上げて瞳を伏せる。

ついで、ヴァルフアムは決意したように身を伏せ、籐椅子の左右の

肘掛け部分を掴むようにしてファティナの唇を奪った。

軽く一度触れて、もう一度ついでに。

軽く。ほんの軽く。

そうして囁いた。

深呼吸の合間にした、ある決断のもとに。

「義母うえ」

目覚めるまで優しく。幾度も。

浅い眠りと深い眠りに翻弄されるようにファティナは瞼をおしあげ、そうしてやっと面前にいるのが義息だと気付くと微笑みをたたえてみせた。

「ヴァルフアム様？」

「父に会いたいですか？」

ゆっくりとした言葉は、硬く、そしてわずかだが揺れていた。

ファティナは何を言われたのか理解するように二度瞬き、ついで小首をかしげた。

「もちろんですわ」

「父から手紙が届いております。怪我をしたということでごこちらに来ることはできなくなつたと」

途端にファティナの瞳に悲しみが広がった。

翡翠の瞳がいつきにかける様を直視すれば、ヴァルフアムはどこかが痛むような気がした。

「お怪我を？　どんな具合なのでしょう、あのっ、旦那様はっ」

「心配ですか？」

「当たり前ではありませんかっ」

怒るようにいわれ、ヴァルフアムは暗い笑みを浮かべた。

「では、見舞いに行きますか？」  
冷やかな音になったが、ヴァルフアムはそのまま言葉を落とし込んだ。

「よろしいのですか？」

途端にファティナの言葉に喜色が混じる。

彼女は心から嬉しいのだろう。愛する夫に会いにいけることが心から。それを冷めた心と眼差しで見つめながら、ヴァルフアムは微笑した。

「急なことで休暇をとるのに数日かかることでしょうか、お連れしましょう」

「本当に？」

「ええ、約束しますよ」

いいながら、ファティナの顎下に人差し指と中指とを沿えて顔を上げさせた。

眠気など吹き飛んだように幸せそうな表情を浮かべるファティナに、冷笑を湛えたまま口付けた。

約束の証として。

腹の底を満たすのは憎しみだろう。

そんなにあの男が好きかとその両肩を掴んでかくかくと揺らしてやりたくなる。そんな感情はただのまやかしで、実際にあの男を面前にしてしまえば木っ端微塵に打ち砕かれるものだ。

あの性根の腐った下衆野郎が小娘を愛し敬い、優しさをむけるとても勘違いしているのか？

ならばそんな幻想など硝子のように打ち砕いてやる。

泣けばいい。悲しめばいい。自らの思い込みを、自らの愚かな幻想を粉々に打ち砕かれてしまえばいい。

ボロボロに傷つけられてしまえばいい。

もう二度とあの男を愛しているなどと言わぬほどに。

「ヴァルフアム様っ、わたくしは優しい義息をもって本当に幸せです」

嬉しくて仕方がないのだろう、ファティナはその両手を伸ばしてヴァルフアムの肩に手をかけ、自らも義息の頬にちゅっと音をさせて口付けた。

「喜んでいただけとても嬉しいです。ところで食事が途中でしたが、いかがなさいますか？ 食堂に行つて食事を再開なさいますか？」

「あら……そういえば」

冷静さを取り戻した様子のファティナは頬を染めて自分の腹部を撫でた。

「わたくしついたら食事中にうとうととしてしまいましたの？」

「ええ赤ん坊のように」

「ちよつと疲れていましたのね」

ファティナは恥じ入るように口元を押さえ、けれどすぐに瞳をきらりと輝かせて、とっておきの秘密を打ち明けるように囁いた。

「今日はとても素晴らしいことがあったのですよ？」

「何でしょう？」

問いを返せばファティナは途端に自分の言葉に驚愕するように瞳を瞬き、ついで慌てた様子で自分の口元に指を当てた。

「やっぱりナイシヨです」

「またナイシヨですか？」

ふと暗い影がさした。

彼女のナイシヨは今までもあまり良い思い出が無い。

「あとでちゃんと教えてさしあげますけれど、今はちよつとだけナイシヨですわ。でもきつとヴァルフアム様も喜ぶようなとっておき

のナイシヨですよ？ 楽しみにしててくださいませね？」

私が喜ぶようなとおきのナイシヨ。

果たしてそれが信用できるものか否かといわれれば完全に信用が  
できない部類のものだろう。

何故なら、ファティナときたら「夫に子供を授けてもらう」「ことも  
ヴァルフアムにとって喜ばしいことだと信じている愚か者だ。

ヴァルフアムは右手を差し伸べてファティナを促しながら口元を  
引きつらせた。

「意地悪をおっしゃらないで教えて下さい」

「駄目ですわ。でも本当に素晴らしいことですよ？」

ファティナの笑顔がまぶしい程、ヴァルフアムは苛立ちを募らせ  
た。

絶対に確実にすばらしいことなどでは無いだろう。

ヴァルフアムは断言できる。

きっとヴァルフアムにとっては許容できないような度し難い問題が  
あるに違いない。

締め上げてやりたいが、まずはクレオールからだ。

## ティー・タイム

「こらこらこらっ、大事な資料になにしてやがるっ」  
ぐしゃりと思わず丸めてしまった羊皮紙に、ヴァルフアムはふつと正気を取り戻して眉間に皺を刻んだ。

丸めたところで羊皮紙はびろんとまた元に戻る。

それをひったくるようにして持っていった上官であるディーン・ゼルトはあからさまに溜息を吐き出しながら、内容を確認した。  
そこだけを見ればまるでまっとうな上官のように見えなくも無い。

膨大な数の書類を保管してある資料室だった。重大な資料が多いこの部屋は、羊皮紙が多く室内の空気もどこか獣臭い。幾つもの棚が組み立てられ、羊皮紙は丸めてリボンによって止められ、更に箱に入れられている。植物性の樹皮などで作られた紙資料と違って、数多ある羊皮紙の資料はかさばるし発見もしづらいが、それだけに安全性もあると思われる。目的のもの一つ発見するのにたいそう苦労するというおまけつきだ。

安全性保持の為に細分化などされていないのだ。ヴァルフアムに言わせればただの怠慢だが。

「何がそんなに気に食わないんだか」

「失礼しました」

慇懃に詫びをいれて相手の手から書類を引こうとしたが、それよりも先にディーンはヴァルフアムが書類を丸めた理由に気付いてしまった。

「おっ、このヴァルツってのはおまえの親父だろ？」

「……」

署名を見ただけで抹殺したくなっただとはさすがにいけない。

職業上の資料でもある。しかも、羊皮紙に書かれているものはかなり重要なものとなる。

ヴァルフアムはそ知らぬ顔で「偶然ですよ。ただちょっと他のことを考えていただけです」と無表情で相手の手から書類をもう一度引き戻そうとしたが、デインはにやにやとしながら内容を確かめた。

そもそもそれが理由の一旦ではあるが、理由の全てではなかった。昨夜、執事のクレオールに対し「義母のナイシヨ話」についての心当たりについて詰問したのだが、クレオールは慇懃に「存じ上げません」と頭を下げた。数度同じ質問を繰り返した後に、やっとクレオールが口を開いたことといえば、

「本日奥様が喜んでおられたことでしたら、お茶の時刻に出されたアップルパイがすばらしかったということと、庭の散策中にうさぎを見つけたことがありますか」

と言葉を付け足した。

アップルパイはともかく、うさぎは「ヴァルフアムが喜ぶナイシヨ話」かもしれない。多少胡散臭いが。

クレオールは実は結構信用ができないのではないかと最近思っているくらいだ。

そのことを考えている時に、父親の名のある書類を目にした途端ヴァルフアムは無意識にぐしゃりとやってしまったのだ。そう、反射的に。

「へえ、議員会のメンバーなのか。なになに、この時は……決闘、私闘の廃止法案について、か」

「可決はされませんでした。まだぐだぐだと言っているようですね」

冴え冴えと言いながら締め、他の資料に手を伸ばした。

「ま、近いうちに可決されるんじゃないかねえの？ 無意味だし」  
もともとそんなものには用はなかった。ヴァルフアムが探していたのは騎士団の関係資料だ。ただ偶然引き出したものに父の名を見つけ、思わず燃やしたい衝動にかられただけだ。

生憎と資料室には暖炉がない為ぐしゃりとつぶしてみたが、羊皮紙に損害は欠片もない。

デーンは何が面白いのか、同じように議会に提出された書類に幾つも見線を落とし、

「おまえの親父結構色々な法律の立案だしてるじゃないか」と口笛を吹いた。

「ろくなものはありませんが」

「そうかー？ 外洋における他国との保安条例だとか、女性襲撃だとか、水路政策における治水条例だとか結構まっとうなものも提出しているじゃないか」

「暇なんですよ」

相手にする気もおきない。

やらなくてもいいことにまで手を出してわざわざ仕事を増やすのだから、暇なのだろう。動いていないと死ぬ生き物かもしれない。

過労で死ぬ。

自分の領地の管理だけまっとうにやっておけばよいものを、何が議会だ。

ヴァルフアムはとりあえず父親がやることに対しては何でも気に入らないかのように冷たい眼差しをデーンに向けた。

「ああ、そうだ。オレはおまえとおちゃらけ話をしにきた訳じゃないんだわ」

「……」

それ以外でこの男が自分の前にいたためしが無いと言ってやりたかったが、ヴァルフアムは耐えた。

こんなの上官だ。あくまでも。

腐って腐敗臭が垂れ流しであるうとも上官だ。

「長期休暇の申請出したる？」

「出しましたね」

「とりあえず不可」

「は？」

「一月近くおまえに休まれたらオレが仕事にならん。だから不可。ふーか」

何故かやたらとキリつと真顔で言う上司に、ヴァルフアムは冷やかな視線をひたりと向けた。

「私は別に職を辞しても一向に構わないのですが？」

「……せめて、せめて二週間にして、お願い」

「二十日」

「二十日！ 二十日！ オレに死ねって？ 過労死したらどうしてくれるっ」

「死になさい」

ヴァルフアムは言い切り、ディーンはまるで子供のようにその場にしゃがみこんで頭を抱えた。

「くそっ、おまえのかーちゃんべそっ」

「死になさい。即刻」

「嘘。嘘ですっ。ファティちゃんは可愛い。あの子がでべそな訳がない」

ヴァルフアムはしゃがみこんでいる上官の襟首を掴み上げて無理やり立たせると、低い声で警告した。

「私の義母の話をそれ以上するようでしたら、今この場であなたを殴り倒して辞表のかわりに致しますがどうしますか？」

それでなくともファティと他人に言われることほど腹立たしいことは無いと気付いてしまった。

殴ることは無理でも、ぐいぐいと首を締め上げ、がくがくと相手の上半身を揺さぶりながらヴァルフアムは悪辣と言われる微笑を湛えた。

「……いやだなあ、まあ、ヴァルつてばそんなに真剣に怒らないでよう」

「怒っていませんよ。ええ。欠片も。」

二十日も休みを頂くのですから、怒るなどどうしてできませんようか。冷やかな笑みを浮かべる部下の前に、ディーンは降参するよう両手を広げて掲げた。

「一日も早く帰って来てね」

「ええ、私も極力早く戻ります」

むしろ父とファティナを対面させたのちは、そのまま帰宅してもいいくらいだ。

そうすればどちらの約束も違えることにはならない。だが、今回は目的がある。

その目的を思えば、ヴァルフアムは口の中に苦いものが広がるような気がした。

\*\*\*

「まずい」

口の中に苦い味が一気に広がった。

思わず言葉が口について出てしまった程だ。

「あら、美味しくありません？」

ファティナは驚いた様子で、自分の手でいれたばかりの紅茶にふーと息を吹きかけた。

どうやら「まずい」味を確認したい様子だが、この女ときたら猫舌なのか子供のように紅茶を冷ますのに必死になっている。

イラっとくる。

いや、この程度で苛立ちを覚えてはいけない。冷静だ。冷静になれエイリク。

聖騎士を目指し、兄により近づく為ならばこの程度で苛立ちを覚えたり腹立たしさに怒鳴り声をあげるなどもってのほかだ。

「少々蒸らし時間が多かったかもしれませんが。私が淹れなおし致しますしょう」

控えていた執事が穏やかに言えば、ファティナは嘆息して応じた。

「そうですわね。せっかくのお茶の時間ですもの。美味しいお茶を召し上がったほうがよろしいわ」

クレオ、お願いね。

ファティナは寂しそうな笑みを浮かべ、執事へと声を掛けた。

何故この女は使用人に対して「お願い」などというのだろうか。使用人に対して「お願い」などというのは間違っている。彼等は働くことで対価を得ているのだし、命じられることが使命なのだ。

「構わない。このまま頂きます」

エイリクはむっとしたような顔のまま軽く手を払い執事が紅茶のポットに手を伸ばしそうとするのを止めた。

「でも、エイ……」

「ぼくがいいと言っているのだからいいんです」

エイリクはきつぱりと言い切ると、まずいと先ほど言い切った茶を喉へと流し込んだ。

まずい。

渋みばかりが出ている。

へらへら笑いながら茶をいれているからこつこついうことになるのだ。  
度し難い程に愚かな女だ。

本当にまずい。

そう確認するようにお茶を飲んでみると、ファティナが心底嬉しそうに微笑み、エイリクの為に今度は洋ナシのタルトを切り分けにかかった。その切り分ける様子がなんともぎこちなく、ファティナの背後の執事がわずかに口元を引きつらせているのはその安全を気に掛けているのだろう。

今にもうつかりとその切れなさそうなナイフで手を切り付けそう  
だ。

「このタルトは料理番のエマの得意なものなのですよ」

最終的に背後からやんわりと執事が手を伸ばしナイフを引き取りタルトを切り分けに掛かった。

「私が致しますから、奥様は座っていらして下さい」

馬鹿女の手からナイフが取り去られると、エイリクは我知らず小さくほっと息をつき、途端に顔をしかめた。

やっと冷めた茶を舐めるように飲んで、ファティナはその苦さに  
気まずそうに顔をしかめ、ついで困ったように茶の中に薔薇の形の  
砂糖を足した。

馬鹿だな。

ぬるくなった茶の中で砂糖が溶け残るぞ。

……激しくイラつとくる。

なんでそんな風に笑うんだよ。

おまえはほくのことなんて放置していた癖に。まるでそんな事実な  
ど無いかのように笑う様が、苛立ちを沸き立たせる。

冷静にならなければいけないというのに、この女と共にいるとやけに腹の中がざわつく。

執事が穏やかな笑みを湛えて主の言葉を見無視して新しいお茶をいれる為に動き出す。

それに対してはつが悪そうな、けれど楽しそうな様子で話しかける彼女を見ていると、とても落ち着かない気持ちになる。

くそつ。

苛立ちのあまり何故か執事を睨みつけ、エイリクは小さく舌打ちをしていた。

**執事日記・その1（前書き）**

Web拍手で掲載済みのものです。最後におまけを一つ。

## 執事日記・その1

〇月X日

旦那様が四度目の再婚を果たされた。

その年齢差36才。

究極の幼な妻は御年13才。若様よりも八つも年下の姫君は、多少、いや、かなり精神年齢も幼いかわいらしい姫君だった。

結婚したといったところで、夫である旦那様は遠く離れた御領地において新しい妻は王都にあるヴァルフアム様の屋敷に暮らすこととなった。子供の面倒など見切れないという旦那様の言葉は納得ができるが、果たしてこの気難しい若君と一緒に暮らして彼女にとって良いものかどうか、一抹の不安を覚える。

〇月X日

昼間のうちは元気にしておられる姫君は、本を読んでやると途端に私になついた。

まるで子猫や子犬がなつくように大きな翡翠の眼差しでうれしそうに「クレオ」とついてくる。癒し系の小動物のようだ。

それに反してヴァルフアム様といえば、完全に姫君を無視することにしたのか視線すら合わせようとしない。

それでも彼女は果敢にも幾度かアタックをしかけている。

「ヴァルフアム様は義息ですもの。義母として仲良くしたいのです」

どこか頓珍漢な姫君　ファティナ様の様子はある意味ほほえましいが、果たしてヴァルフアム様にたちうちできるものかと不安を覚えずにはいられない。

〇月X日

深夜の見回りの折りに、ファティナ様が眠れずに泣いていることに気づいた。

だが、さすがに使用人という立場で寝室をおとなうことはためらわれる。少しの間様子を見ようと思うが、声を殺すようにして時々ひくひくとしゃくりあげて泣く様子が扉越しにも判る為、なんとも息苦しさを覚えずにはいられない。

ヴァルファム様は相変わらずファティナ様を無視しておられる。

少し大人気ないのではないだろうか。

ファティナ様はお小さいのだから、もう少し寛大な心でもって接してもらいたい。

〇月X日

この数日耐えていたが、もう耐えられなくなった。

ファティナ様の寝室の扉を叩き、中の様子を確かめると身を丸くして泣いておられた。

思い余ってそんなファティナ様に温かなミルクを用意し、本を読んできかせれば、そのまま手をつないだまま眠る羽目にまで陥った。

すっかり抱き枕よろしく張り付いて眠られてしまったが、どう考えてもこれはよろしくない。

ファティナ様は事実がどうであれ旦那様の妻である。激しく心が葛藤を繰り広げたが、ファティナ様は「また明日も一緒に寝てね」と上機嫌で私の名を呼んでくれる。

実に愛らしいが、だからといってはいとはいえない。今夜どうすべきだろうか。

〇月X日

悩んだ拳句、ヴァルフアム様に相談をした。

まったくあてにはできなかつたが、それでも主に言わずにはいられまい。まったく期待できなかつたが、本当にどうしようもなかつた結果としてファティナ様は今夜も寝台でひっそりと泣いているようだった。

私の中でもすごい葛藤が繰り広げられた。

扉に手を掛け、中に入り込んで昨夜と同じように優しい眠りを与えてやりたいと願ったが、役立たず　期待できない、いや、訂正　とにかくヴァルフアム様も多少は気にかけていたようで、ファティナ様の私室の前で遭遇した。

その後、ヴァルフアム様は多少の人間らしさを奮起したのかファティナ様の寝室に入られた。

義理といえど息子は息子、使用人が寝かしつけるよりもマシだろう。

私は安堵していた。

〇月X日

ヴァルフアム様はデリカシーというものが欠如している。

お茶の時間にファティナ様に無遠慮にご両親のことを尋ねられた。ファティナ様がこの年で婚姻という道をたどることになったのは、彼女のご両親が亡くなられたことに起因するのであるから、そんなことを尋ねてはいけないということ、十歳児でも判るだろう。だがヴァルフアム様にはそれが理解できないらしい。

ヴァルフアム様はきつと情緒とか他人を思いやる気持ちというものをどこかに忘れてきてしまったのか、それとも捨ててしまったに違いない。ファティナ様の優しさをほんの少しでも見習われたら良いのにと心を痛める。

最近ではファティナ様もヴァルフアム様が噛み付いてはこないという事に気づいたようで、何かあれば「ヴァルフアム様」と鶏の雛のようについてまわるようになった。だが相手は心に欠陥をもっているかのようなヴァルフアム様なので、時々ものすごく「この愚かな糞餓鬼」というような視線を向けられている。ファティナ様がおかしいそうではない。

〇月X日

ヴァルフアム様がいららとしていて。どうやら原因はファティナ様が夜になると決まって本を読んでほしいとねだることにある。そうして寝室で本を読んだあげく、手をつないで眠ってしまうのだ。ヴァルフアム様はずいぶん和我慢してそれに付き合っていたら、やるようで、少しは人としての優しさや機微というものを身に付けたのかもしれない。

思い返せばヴァルフアム様は動物をいとおしむ心も欠如しておいでだった。幼い頃にはジャマだという理由で羊を蹴飛ばしていたこともある。

今やっと情操教育というものを行っているのかもしれない。

ヴァルフアム様の情操教育はいいが、ファティナ様の性格形成に異常をきたしたりしないかが気にかかる。

もし、あの優しいファティナ様がヴァルフアム様のような性格破

綻 ではなく、ちょっと心に問題のある人間になってしまったりしたらどうしようかと私などはどうしても危惧してしまう。

〇月X日

失敗をした。

ファティナ様に怪我を負わせてしまった。これは確かに私の失態だ。馬が子馬を産み落とし、しばらくたっていたので「見てみますか？」と尋ねてみた。もともと彼女は子馬に興味津々で気に掛けていた為、ひどく喜んだ。そんな様子を見るととてもほほえましい。どんな願いでもかなえてさしあげたくなる。

だが、ほんの少し目を離したスキに、ファティナ様は馬に乗ろうとなさり、ずり落ちて怪我をした。

捻挫といえどもたいへんなことだ。私はファティナ様を医者に見せ、その怪我がひどいものではないという言葉にやっと安堵したが、とても恐ろしい気持ちがあった。

従僕として決して簡単に考えてよいことではない。誠心誠意謝る私に、ファティナ様は優しく微笑まれて「クレオは悪くありません」と何度も言ってくれださった。

だが、そのあと帰宅したヴァルフラム様は酷かった。

ファティナ様が怪我をされたというのに「頭をぶつけていればよかった」などとおっしゃっていた。あの方こそ頭を打ってその性根をかえてしまえばいいだろう。まったく嘆かわしい。ファティナ様を少しは見習って欲しいものだ。

帰宅後慌ててファティナ様の寝室においでになったときは、青ざめた顔をして心底心配しているふうであったというのに……

その後ヴァルフラム様はファティナ様に人を付けると決めた。

その決断は少し寂しいものだったが、自分がファティナ様に甘いことはすでに承知していたために素直に飲み込んだ。

〇月X日

ヴァルフアム様が激怒されている。

ファティナ様が屋敷をこっそりと抜け出していたところに出くわしてしまったのだ。しかしヴァルフアム様が見つけてくれて本当に良かった。

今日は屋敷中が大騒ぎだった。ファティナ様につけていた付添い人は、どうやら簡単にファティナ様にまかれてしまったようだ。

あんなにのんびりとして見えるファティナ様だが、その実結構動きも早く、野生児なところも見せる。

実は木の上で午睡にふけているのを発見した時などは、私の心臓が止まるかと思った。慌てて梯子を掛けてファティナ様におりるようと説得すると、ファティナ様はけろりと「わたくし木登りは結構得意なのです」などにとっこりとおっしゃった。

ヴァルフアム様に知れたらまたお説教されてしまうだろうと思いついて、それは内緒にしておいたほうがいいと進言しておいた。

最近のヴァルフアム様は何かというとファティナ様を叱り飛ばしている。

人間が狭いのではないだろうか。もう少しおおらかな気持ちでファティナ様に接してさしあげて欲しい。

なんといってもファティナ様は未だ稚い方なのだ。

脱走の件に関していえば、確かにもっとしかって欲しいが、今日は私の肝も冷えた。

〇月X日

ファティナ様の元気が無い。普段から明るく朗らかな方であるだけに、元気がないと途端にまわりにも影響が出始める。

侍女達も気に掛けているようだし、もちろん私も気にかかる。困ったように戸惑うようにしている様子を見ると、「どうかしたのですか？」と幾度も尋ねてみるのだが、ファティナ様は「なんでもありませんわ」とそんな時だけ無理に笑みを浮かべて見せる。

ヴァルフアム様がねちねちと虐めているのではないだろうか。心配だが、見ている限りそのような様子は無い。

〇月X日

ファティナ様の様子が沈んでいるというのに、ヴァルフアム様はむしろ機嫌が良い。ファティナ様が静かであることを心地よいことだと感じているようだ。まったく救いがたい神経の持ち主だ。

何故優しさというものが無いのだろうか。それとなく「ファティナ様と何かありましたか？」と尋ねてみたが、「近づいても来ないまったく気楽でいい」などと言っている。明日はファティナ様にもう少し強く尋ねてみることにする。

早く元気になっていただかないことには、とうとう庭師までファティナ様の様子を伺って仕事にならない。

そういう私も仕事に支障をきたしてしまいそうで危うい　　気をつけなければならぬ。

〇月X日

何故もう少し早く私も気づいて差し上げられなかったのか、悔やんでも悔やみきれない。勉強の時間の終了とお茶の時間とを知らせる為にファティナ様の勉強室へと訪れれば、忌々しいことにあの講師がファティナ様に口付けをしているのを目撃してしまった。

持っていた銀盆を叩きつけてやったが、もつと酷い目にあわせてやればよかった。とっさに解雇を言い渡し追い出してしまったのは早計であった。

ファティナ様はショックを隠しきれない様子で、私も近づけてはくれなかった。一人部屋にこもってしまったファティナ様の心痛を思うと自分が役立たずであると心底から悔やまれてならない。

ヴァルフラム様が帰宅し、今回の一件について報告すればヴァルフラム様はすばやくファティナ様の寝室に向かわれた。

まさかファティナ様に対して説教をするのではと気が気ではなかったが、どうやらファティナ様を慰めることに成功したようだ。

たまにはきちんと役に立つのかもしれない。

\*\*\*      \*\*\*      \*\*\*

「やあ！ 奇遇だねっ」

セラフィレスは実に親しげに片手をあげ、さも当然という様子でヴァルフラムが座っていたテーブルの隣の椅子を引いた。

「こんな場所で顔を合わせるとなんか運命を感じるよね」

「」

テーブルの上におかれている煮込み料理も、麦酒も一気に味気のないものに変化した。ヴァルフラムは苦いものでも？むように牛夕

ンのシチューを噛み、大きく息をついた。まあもともとそれほど旨いものでもない。

「あなたこそ、こんな場所にどんな用事で？」

皮肉に言っただけで、セラフィレスは嬉しそうに言った。

「性処理」

「……」

「歓楽街のど真ん中で他の何があるってどういうの？ それともマズ

イ食事を目当てに？ いやあ、品行方正な甥っ子殿とこんなところで

会えるなんて嬉しいよ。あ、いい子知ってるよ？ 紹介しようか

？ あ、でもそれだと甥っ子とオジサンから兄弟になっちゃおうか！」

黙れ、このエセ紳士。

心はおろか体の平穩もなかなか手に入れられない。

## 戸惑い

寝台の横にあるボードの上に、その本は置かれている。

他にも幾つか大事なものはあったが、とりあえず今回はこの本だけを持参した。黒い装丁に金色の飾り文字でタイトルが入れられた学術書だ。

本は大変に貴重なもので、その装丁は装丁師が一冊づつ丁寧に施してくれるものだ。活版印刷の普及で手に入りやすいといったらところで、容易く購入できるものではない。

エイリクが暮らすヒースなどその最たるもので、本の入手は非常に困難だ。

それでも 兄は季節の折々に、誕生日に、何かの祝いにとこまめに贈り物を届けてくれた。当初など人形などが目立ったものだが、最近では学術書や新しい黒板、手紙の為の便箋と年齢にあわせたものを送ってくれる。

誰にも見向きされない弟を兄は忘れてはいなかった。

手紙の一つもつけてくれれば良いのにと拗ねたこともあるが、その気持ちだけでも嬉しかった。

家族の優しさを分けてくれたのは、兄だけだったのだから。

\*\*\*

「奥様つ、お止め下さいっ」

珍しくクレオールの大声が響いた。

昼食が終わり、クレオールはファティナのことを家庭教師であるメアリに任せて屋敷内の掃除の状況などを点検していた。その矢先、足を向けた階下の厨房の入り口で一塊になっている使用人達の群れ

に「何をしているんだ」と叱責しようとしたのだが、半分だけ厨房に体を入れていたメアリがぎくりとした様子で顔を向け「奥様っ、クレオールさんですよっ」と、まるで悪戯の見張りまがいなことを言う。

クレオールは厨房内にファティナがいるという事実には血の気を引かせ、慌てて厨房の入り口に手を掛けて中を見た。

さして広くも無い厨房のテーブルの前、彼の女主はオフ・ホワイトの粉にまみれてけほけほと横を向いて咳をした。

その前では料理番のエマが腰に手を当てて、

「咳なんかしたら粉がまた撒き散らされちゃいますよ」などと楽しそうに言っている。

楽しそうに言っている場合ではないだろう。

「奥様、何をしていますのですか」

「あら、クレオ 丁度良かった。あのね、バターをホイップするのです。ホイップって判りますか？ わたくしやってみただけけれど、とても硬くて。お願いして構わないかしら？」

白くなった手でボールを示された。

クレオールは何をしているのか尋ねたのであって、クレオールが何をするのかを尋ねた覚えはないのだが。

軽く息をついてもう一度同じ問いを口にした。

「なにをなさっているのよ？ 今日の日ザートですか？」

「焼き菓子を作っているのよ？ 今日の日ザートです。クレオも楽しんでみてください」

「……それは奥様のなさることではありません」

「母親は息子に焼き菓子を焼くものです！」

やけにきつぱりと言い切るファティナの様子に、思わずクレオールは薄暗い天井を見上げてしまった。

ああ、隅のほうにクモがいる。

クモは益虫だから殺してはいけませんが、巣を作られる前になんとか

しなければ……  
現実を逃避している場合ではない。

「わたくしのお母様もわたくしの小さな頃にはお菓子を作ってたよさったのよ？」

けれどきつとファティナ様のお母様はファティナ様のように粉まみれになったりしなかったでしょうね　　という言葉をクレオールは飲み込んだ。

幾つかの案が脳裏をめぐる。この場を収めるのにいったいどういう言葉が相応しいのか。

クレオールは困ったような柔らかな笑みを浮かべ、ついで厳しい眼差しで使用人達に命じた。

「生地ができあがった後に入れるように沐浴の準備を　　エマ、材料は全て測って用意してさしあげてくれ。それと、私にエプロンを」

結論。

早めに終わらせる。

おそらくこの焼き菓子をヴァルフラム様は召し上がるだろう。きつとファティナ様は誇らしげに自分が作ったのだと報告もする筈だ。

菓子を作ることに對してヴァルフラム様は軽く苦言を呈し、それでもお喜びになられるに違いない。自分の為にならなくてももらったものだと勘違いしている間は。

「クレオ？」

クレオールの引きつった口元に、ファティナは小首をかしげて名を呼んだ。

「エイリク様に作ってさしあげたいのですよね？」

「ええつ。あ、勿論クレオの分も」

気を使って頂いて申し訳ないが、その気はまったく別のところに使ってもらいたかった。

「ヴァルフラム様もお喜びになられますよ」

「だといいいですけど」

ふと、フアティナは言葉をとめ、頬を染めた。

「美味しくできたら……今度旦那様に作って差し上げたら喜んでいただけますかしら」

無理ですね。

旦那様は甘い菓子を好まない。かろうじて果物を召し上がるくらいだ。

クレオールは一旦停止してしまった思考をたたき起こし、微笑を湛えた。

「バターをホイップですね」

ちらりとメアリへと視線が向いた。自分以外にこの女主を止めることができるのであれば彼女くらいだと信じて女主を任せている。だがその効力はあまり強いものではないようだ。

しかし最終的にクレオールだとて女主をとめられないのだから、結局は誰をつけても同じなのかもしれない。

今のところ転職は考えていない。  
とりあえず二度くらいしか。

せつせと生地を作り上げ、最終的に姿を現したのはカップケーキだった。生クリームを添えてお茶の時間に出すのだと意気込んだフアティナを浴室へとおいたて、クレオールはオーブンをエマへと任せ、大きく息をつく。

どうして女主はああ破壊的に不器用なのだろうか。

いや、レース編みはとでも得意だ。ただし刺繍は花をモチーフにしているのか奇怪なイキモノをモチーフにしているのか判別するのが難しい。

そして料理もまた、彼女にとって難解であると証明された。

クレオールはその疲れに思わず首筋に指を入れて襟首を軽く緩めてしまった。

そのタイミングを見計らった訳でもないだろうに、ばたばたと侍

女の一人がやってきて執事の姿を認めると安堵の息をつく。

「クレオールさん、お客様がおいでのようです」

「来客の予定は無いが」

ベストのポケットから鎖につないだ懐中時計を引き出してその銀板を覗くと、菓子作りに半刻　手際よくすんだと口元が緩んだ。

「馬車の様子からソルドさんだと思われませう」

「……あの人は事前に連絡するということを知らないのでしょうかね」

多少げんなりとしつつ、クレオールは一度緩めてしまった襟首を手早くなおした。

来客を迎えるのは執事の仕事だ

\*\*\*

お茶の頃合ということでエイリクは勉強を切り上げ客室のある離れを出て、母屋である屋敷へと向かう為に着に袖を通した。

「エイリク様、そろそろお屋敷に戻りましょう」と乳母のジゼリが最近熱心に言っているが、未だ進路は決まっていな。聖騎士を指す為にはあの腹立たしい壁を越えなければ自らが許せそうにない。まずはアレだ。あの馬鹿女を乗り越えてからのこと。

ジゼリの口やかましさはいつものことであると放置し、エイリクは中庭を抜けて歩んだ。

左手にある厩舎に箱馬車が止められている。来客のものかとちらりと考えたが、あまりそれに関心などは寄せなかった。

母屋の屋敷へは正面を回るのが面倒で一階のテラスから入り込んだ。そこで拭き掃除をしている侍女が慌てて頭を下げるのを無視する。

普段からお茶の場所は決まっていな。天気も風の頃合もよい時には中庭にテーブルを並べたりもするようだが、通ってきたかぎ

り今日は中庭ではない。だから当然二階のプライベート・エリアにあるファティナが普段からいる居間だろうと中<sup>あた</sup>りをつけたのだが、エイリクの予想は見事に的中し、そこに彼等はいた。

パシリという乾いた音。

見知らぬ男が身を屈め、この屋敷の女主の耳元に唇を寄せていた。その光景に息を飲み込み、自然と瞳孔が萎縮する。

耳に口付けでもするのかと思ったが、それは何かを囁きかけるだけだった。

息さえ飲み込んだその時、執事であるクレオールが足を踏み出すより先に、彼女は咄嗟に男の頬を平手で叩いたのだ。

そして自分の行動におののくように瞳を見開き、やがてひどくゆっくり振り上げた。

「わ、たくし……」  
おびえてかすれた声。

眼鏡の男は口元に笑みを浮かべ、そしてクレオールが咄嗟に女主の宙に浮いたままの腕をとろうとしたのだが、彼女は身を翻して駆け出していた。

開いた扉にエイリクがいるのを、一瞬翡翠の瞳が捉えた。

だがそれだけだった。ファティナは唇をつらさにゆがめ、その翡翠の瞳に涙を溜めてエイリクの横をするりと風と共に駆け抜けたのだ。

「ソルドさんっ」

執事が珍しく声を荒げている。

それをぼんやりと耳にいれ、エイリクは咄嗟に身を翻していた。舌打ちと悪態が口から漏れる。聖騎士など到底なれそうにもないくらの罵詈雑言をはきながら、階段の踊り場でようやくファティナの腕を

捕まえることができた時、小さな吐息が口から漏れた。

けれど相手の力も強くて、危うくぐんっと引かれそうになる。

男と女と言ったところで、相手は十六。自分は十一になったばかりで、身長だとして認めたくはないがあまり変わらない。わずかにフアティナのほうが高いくらいだ。

「とまれよっ」

そのまま更に行こうとするからエイリクは怒鳴りつけた。

とまれ、このっ、馬鹿女！

さすがにそう言うことができずに、咄嗟にどう呼べば良いかわからずにエイリクは搾り出すように言った。

「義母さまっ」

他に、言いようが無いじゃないか。

自分に対する言い訳は、次の瞬間吹き飛んだ。

フアティナがぎゅっとエイリクを抱きしめ、肩口に顔をうずめて身を震わせたのだ。

声を殺すようにフアティナは泣いた。

熱い吐息と、涙とが伝わってくることに狼狽しながら、エイリクはわずかに背の高い相手をどうなだめたら良いのか判らずに、おずおずとぎこちなくその背をなでていた。

つらいとき、悲しいときに誰かにそうしてもらいたいと望んでいたことを。母親に抱かれてそうされたいと願っていたことを。

「……………義母さまっ？」

もう一度途方にくれてそう囁こうとした言葉が、力強い言葉にかき消された。

「奥様っ」

階段を三段飛ばしという勢いでかけあがり、執事はその場においてくとエイリクの腕の中にいるファティナを容易く引き剥がし、抱き上げたのだ。

「ありがとうございます。お茶の用意が下にできておりますからどうぞご利用下さい」

慇懃、いやむしる慇懃無礼な調子で言いながら執事はファティナの泣き顔を隠すように自分の胸に押し当てる。まるで害あるものから守るように。

その行動に激しい苛立ちと怒りが胸の奥にずんつと石のように落ちた。

自分が彼女に害があるとでも？

咄嗟に浮かんだ言葉はやがて闇に沈んだ。

腹の中を奇妙な感情がめぐる。

優しく何かを囁きながら階段を上っていくその背を睨みつけ、ぐつと拳を握り締めた。

熱すら感じた首筋が、今はひんやりと冷たい。濡れて風に触れて、吐息は奪われた。

そんな女、嫌いだ。

大嫌いだ。大嫌いなんだ！

ちくしょうつ。

## うつつき

空気の違い、というものは肌で感じるものだ。

仕事から戻り、サーコートコートの留め金に手をかけながらヴァルフアムは控えている執事呼んだ。

「何かあつたか？」

「昼にソルドさんが参りましたが、それだけです」

クレオールが半眼を伏せて言う。ソルドの名に、ヴァルフアムは息をついた。

あの男だけはまったく理解できない。ファティナの家庭教師といいながらそれらしいことをしている様子は無い。むしろ貴族の女性にはつきもの話し相手や付添い人のように彼女の前で他愛も無い言葉ことばを落として帰っていただけだという。

父の思惑がまったく判らない。

それとも、思惑などないのか　いいや。あの男が何も考えずに人をよこすなどそれこそ考えつかないことだ。

妻の様子を知る為に？

あの男がそんな無駄なことに人員をさくなどそれも理解しがたい。

「今日はどんなことを？」

「ヴァルツ様のお怪我の内容と、もしよければファティナ様を御領地へとお連れしましょうかと進言されておいででした」

実際はそれだけでは無かったが、クレオールにもそれ以上のことは理解できていなかった。彼の女主おんなあまじは決して口にしまいと決めれば時折とても頑固にそれを貫きとおす。

必死に宥めてその涙を止めてはみたものの、彼女を動揺させ、ほんの一瞬といえども激昂させた事柄については口を閉ざしてしまっ

拳句、ファティナは落ち着きを取り戻すや相手の頬を叩いた自身を恥じ、次に顔を合わせた時には謝らなければと戸惑いのままに口にした程だ。

立派になられたと褒めるには多少心にわだかまりが残る。

「あの男が義母うえを？」

憤慨するようにヴァルフラムが眉間に皺を刻みつければ「奥様は丁寧に断っておいででしたが」と付け加えておく。

ナイシヨにして下さいませ。

泣きはらした赤い目で、ファティナはクレオールを見つめた。

「何を言われたのか教えて下されば」

良くないと理解していても、そう交換条件を突き付けました。だが、ファティナはふるりと首を振り、困ったように眉をひそめた。

「咄嗟のことでしたから……きつとわたくしの勘違いなのです。男の方って、時折ひどい冗談をおっしゃることがあるのでしよう？

それを真に受けて叩いてしまったのです。悪いのは……わたくしです」

それがたとえ冗談であったとしても、あのソルドの表情をみれば確信犯だと知れる。

冗談だか何だか知らないが、あの男はファティナが激昂することも念頭においていた筈なのだ。

せめて内容を教えてさえくれればとクレオールは願ったがファティナは幾度も首を振り、やがて小さく呟いた。

「言葉にしたら……真実になってしまいそうなのですもの」

彼女はそれを恐れるようにぎゅっと自分の体を抱きしめた。

クレオールは自分の無力さを思い知り、もう二度と女主の近くにある男を無防備に近づけさせはしないと誓った。

「義母うえは？」

「ほんの少し熱がありました、今は寝室でお休みになっておいでです」

現在は家庭教師であるメアリが付き従っている。

せめて彼女に真実を語ってくれていれば良いと願いつつ、そうされるのはとても寂しいことであるとクレオールは感じていた。

ヴァルフアムの足が自然とファティナの寝室へと向かう。それを止める術もなく、クレオールはただ付き従った。

\*\*\*

「正餐の頃合には顔を合わせなさるじゃありませんか」

メアリは溜息交じりに言葉にしながら女主の後について歩く。頃合はまだ夕刻　頭が痛いと言横になっていた女主だが、転寝から起き上がると今度は「離れに行かなくては」と慌てて動き出したのだ。

「それでは遅すぎますわ」

「そろそろヴァルフアム様もお帰りになられますよ」

「ですから、それでは遅いのです」

ファティナは多少焦りを覚えていた。

自分がしでかした失態　来客を叩いてしまうなどという暴挙もさることながら、エイリクにすがって泣いてしまったことを、一刻も早くエイリクに詫び、そして何より口止めをしなければいけない。

クレオールはヴァルフアムに秘密にしてくれるだろう。だが、エイリクはそうではない。

まったく恥ずかしく愚かしい。

もしエイリクの口からヴァルフアムにそのことが告げられてしまえば「朝まで説教」かもしれない。

淑女らしからぬと延々と叱られてしまう。

何より、クレオールが心配したようにヴァルフアムにまで「何を言われたのか」と問い詰められたくは無かった。悪いのはきつと……ほんの戯言を真に受けた自分なのだ。

そう思いつつ、ファティナは自分の胸をぐずぐずと刺す思いにくりと喉を鳴らした。

ほんの他愛も無い会話だった筈だ。

旦那様にお会いしたいと。旦那様に会いに行くのだと。

子を授けて頂くのだと。

いつもと何ら変わらぬ会話だったはずだ。だが、ふいにカディル・ソルドは可笑しそうに喉の奥を鳴らし、眼鏡の縁を軽く中指で押し上げてファティナの耳元で囁いたのだ。

「あなたが産み落とす子の父親は私です」

耳に言葉が落とし込まれた直後は、おそらく理解などできなかった。だが、それは本能のように次の瞬間には血の気をひかせ、そして咄嗟に手を振り上げていたのだ。

人を叩いたのははじめてのことで、思いのほか自分の手がじんじんと痛み、ついで、自分のしてしまったことに驚愕した。

ファティナは動揺のままに言葉を飲み込み、そしてその場を逃げることにできなかつた。

心臓が激しく鼓動する。

子供が欲しかった。それは夫婦の証であるから　　子供は愛の証であるから。幸せの証明であるのだから。

だが欲しいのは夫の子供だ。

何より、夫婦でなければ子供はできないのではないの？

不安に　押しつぶされてしまいそうだった。声を大にして叫んでしまったかった。

だが時がたてば、それはきつと彼の冗談なのだろうと心を静めた。ファティナの夫はヴァルツで、ファティナの産み落とす子の父親はヴァルツ以外にありえないのだから。

そのことを考えると身が震えた。

震えて、叫んでしまいそう　けれどそんな他愛の無い戯言など忘れてしまえばいい。忘れてしまえばいい。

全ては無かったこととならなければいけない。

ファティナはふるりと小さく身を震わせた。

「義母うえ」

ばったりと廊下でヴァルフアムと顔を合わせてしまったファティナは、あやうく気を失いそうな程動揺した。

今まで考えていたこともさることながら、エイリクへの口止めという激しく後ろめたいことを考えていた為に、

「きやあああつ」

咄嗟に悲鳴をあげていた。

\*\*\*

頭痛がするという義母を見舞うために義母の部屋へと向かおうとして義息は、寝込んでいる筈の義母が廊下を歩んでいることにも驚いたが、何よりも義息の姿を捉えた途端に大音量の悲鳴をあげたことに面食らい、ついで激しい怒りに囚われた。

「義母っえっ」

あやうく身を翻して逃げようとしたところをがしりと捕まえた。動揺するメアリやクレオールのことなど構わずに、ヴァルフアムはじたばたと暴れている義母を押さえ込み、冷ややかに言った。

「何か企みましたね？」

頭痛など嘘で、寝込んだふりで何かしでかそうとしたに違いない。咄嗟にそう判断したヴァルフアムは、低い声で言葉をあやつりながら往生際悪くじたばたしている義母の体をひよいつと担ぎ上げた。

「な、何も企んでなどおりませんっ」

「いいえ、絶対に怪しい」

「怪しくありませんっ」

「では何故私の顔を見て悲鳴をあげたのですか？」

まるで米俵のように担がれ、ファティナは涙目でクレオールに救いを求めた。ずんずんと居間のほうへと運ばれて行きそうになる。このままでは逃げることもできずに全てを白状するまで説教がなされるかもしれぬと思ったところで、クレオールが言葉を挟んだ。

「奥様、もう無理です」

その言葉にすつとファティナの血の気が失せていく。

じわりと眦にあついものが湧き上がるのを覚え、ファティナは絶望に頭が真っ白になりそうになった。

「ヴァルフアム様、奥様はヴァルフアム様を驚かせて差し上げたかっただけなのです。そうお怒りになられないで下さい」

歩んでいたヴァルフアムの足が止まり、訝しげに眉を寄せた。

「確かに十分驚いた」

顔を合わせた途端に悲鳴をあげられたのだから。

不愉快な気分でクレオールを睨みつけると、クレオールは淡く口元に笑みを刻んだ。

「そうではありません　奥様はヴァルフラム様に贈り物をなさろうとしたのです。その準備の為に厨房に行かれるところで顔を合わせなさったものですから、きっと驚いて悲鳴をあげてしまったのです」

「厨房？」

「本日奥様はヴァルフラム様の為に焼き菓子をお作りになられました。こうして白状してしまったのですから、もうサプライズにもなりません」

こっそりとお届けする予定だったのでよね、奥様？

やんわりと続けられる言葉に、ファティナはこくこくとうなずいた。

「ごめんなさい。驚かそうと思って……わたくしが驚いてしまいました」

ファティナの心臓がばくばくと音をさせていた。

嘘がばれやしないものかと身までも細かく震えていたが、ふいに担ぎ上げられていた身体がぐんつと戻されて床におろされた。

体制を整えられ、ついで今度はヴァルフラムがまじまじとファティナを見つめてくる。後ろめたさから視線を逸らしそうになりながら、ファティナは精一杯微笑んでみせようとした。

「私の為に？」

「はい……」

「怪我などなさいませんでしたか？」

「お菓子作りで怪我はしませんわよ？」

「　あなたならどんなことでも怪我をしますよ。ああ、でも……ありがとうございます。義母うえ。そして無体な真似をしてしまいましたね。この義息を許していただけますか？」

穏やかに言いながら嬉しそうに見下ろし、頬と頬を重ね合わせる  
義息の様子に、ファティナは泣きたくなるような罪悪感を必死に隠  
しながら「もちろんです」と囁いた。

ごめんなさい。

幾度も幾度も胸のうちに繰り返される言葉は、ヴァルフアムには届  
かなかった。

ごめんなさい。

あなたはわたくしを許さなくていい。

本当は気が弱くて嘘つきで立派な母親になりきれない愚かなわたく  
しを……許さないで。

## 動揺

そつとこちらを伺う様子は、腹立たしいことに言葉を使わなくとも相手の真意を伝えていた。

翡翠の瞳が不安に揺れて、時折ちらちらとこちらを伺う。

昼間の出来事でエイリクが何を考えているのか。そして、それを口にしてしまうのではないかという恐れ。

エイリクはうんざりとしながら、食事の途中にも関わらずナプキンで口元をぬぐって席を立った。

「失礼します」

途中で退席するのは礼儀に反することだろう。だが、この場に留まり食事をする気にはもう到底なれない。

「あの、エイリク様デザートは？」

ファティナがおろおろと声をかけてくるが、それを拒絶して退出しようとして足が扉に向かう。

「エイリク」

失礼にたいしての咎めかと思いつつ、兄の言葉にエイリクの足が止まる。

「進学についての考えはまとまったか？」

「もう少し、考えさせて下さい」

自然と視線が落ちた。

兄の期待に応えたいが、果たして自分にはその資格があるのかどうか。この数日の心の乱れを思えばエイリクは早急に答えを弾き出すことができずにいた。

苛立ちのままにその足を食堂室からさほど離れてもいない居間へと向けた。昼間、あの女が来客をひっぱたいた場だ。

部屋の中はほのかに暖かく保たれ、今は人もない。

それでも幾つもの明かりがともされているが必要最低限に留められている為に部屋の端々は薄暗い。

昼間。茶などどうでもいいが、来客に詫びなければと思いなおし居間へと立ち戻ったのだが、客は早々に退出していた。侍女に問えば困惑顔で「怒っている様子はありませんでしたが……エイリク様、奥様はどのような？」心配そうに問い返され、エイリクはそれを睨みつけて黙らせた。

「主人の行動を容易く口にするな」

何故、泣いたのだろう。何故叩いたのだろう。

どちらが非礼を？

苛立ちのままに窓辺から外を見れば、中庭が良く見えた。月明かりに芝生が反射し、ほんのりとした明るさが満ちている庭だ。エイリクの暮らすヒースには中庭に迷路が作られているが、ここにはそんなものは無い。それだけの敷地が無いのだ。ここは王都　広大な土地を持つヒースとは違う狭い箱庭。

中庭の左手にの三階、やがて明かりの灯されたのは兄の私室だ。カーテンが引かれている訳ではない為に兄が動いているのが見える。執事と何やら話しているのを捉えながら、何故か複雑な心境になった。

聖騎士となって兄の期待に応えたい。果たしてそれが自分にできるのだろうか。

「まだ離れに行くおつもりですか？」

どれくらいぼんやりと兄の部屋を見ていたのか、ふいに人の話し声が耳に届いた。

開け放たれた居間の二枚扉から廊下の声が入り込む。

「せっかくエイリク様に焼き菓子を作りましたのに……昼間のお茶

も召し上がらなかつたようですもの」

「奥様、トレーは私が持ちますから。離れにたどり着く前にこぼしてしまいますよ?」

呆れたような声は、それでも楽しげだった。

声の女は確かにメアリだとエイリクはちらりと考えた。ファティナについている付添い人は、使用人としては馴れ馴れしい程にあの女と会話を交わしている。

「エイリク様に……」

ふつと、ファティナは言葉をとぎらせ、そして室内にいるエイリクの存在に幾度も瞼をふるわせた。

開かれた扉を隔て、廊下と室内で。

「まあ、こちらにいらっしやいましたのね?」

「いけませんか?」

きつい口調で応えたが、ファティナは淡い笑みを浮かべて室内に入ると、自ら部屋の明かりを増やそうと蠟燭へと手を伸ばし、銀のトレーを持って持っていたメアリが慌ててトレーをテーブルにおいて彼女の手からその仕事を取り上げた。

仕事を取り上げられたファティナはぐるりと身を翻し、エイリクにソファを示した。

「お茶に致しましょう?」

「……そんなことを言いたいんじゃないだろ」

ぶつきらぼうに言えば、ファティナは多少強張るような表情を浮かべ、すぐに姿勢を正した。

「昼間はごめんなさい。おかしなところを見せてしまいました」

「紳士を叩くなど、常識外れもはなはだしい」

「そうですね　ええ、そのとおりだと思います」

顔色が白くなり、瞼が伏せた。

自分の手を組み合わせ、もぞもぞと動かしながら、そして思い切っ

た様子で一旦さがりかけた顔をひたりとエイリクへと向けた。

ありつたけの勇気を振り絞るように。

「ヴァルフラム様にはナイシヨにしていただけませんか？」

「自らの失態を兄に知られるのはお嫌みたいですね」

「イヤです」

嫌味つたらしく陰湿な口調で言っただけなのに、ファティナは意外なほどさりりとそれを認めた。

「心配をさせてしまうのは、イヤです」

判ってる。

彼女が叩いたのは何か、あの男がそれだけの非礼を働いたからだ。こんなほやほやとしたバカが自ら好んで暴力的にでるとは思わない。

ちつと舌打ちをし、エイリクは苦い思いで視線をそらした。

「言いません」

自分だって兄に無闇に心痛を与えるのはイヤだ。

エイリクはぶつきらぼうな調子で応え、そしてふつと視線をあげるとファティナは満面の笑みを浮かべて自分を見ていた。

「ありがとうございます！」

そして、それはおこった。

ファティナは容易くエイリクの前に近づくと、心持ち身を低くしてほんの優しく、音すらないキスを、した。

「約束です」

ふつと柔らかく触れた唇の感触に全身が硬直し、まるでオイルのさしていない蝶番ちょうばんがいのような不自然な強張りが体を支配する。

両目を見開いて面前の女を見ても、この女ときたら自分が今やっ

たことに対して何とも思っていないのか、晴れやかな微笑を湛えていた。

「お茶に致しましょう?」

「なっつっ」

はじき出された言葉は、ただの音となった。

ずざりと身を引き、無様にも口が戦慄いて次の音を必死に探す。

今、今……

「何をするんですか?」

「何か?」

きよとんつとしたファティナと、その背後で顔色を悪くして顔をそらしているメアリ。

「どうしてキスなんて?」

「まあ、エイリク様はご存知ないのですね」

ファティナはふふつと微笑んだ。

「約束の印です。きちんと約束を守る証に家族はキスするのです。キスして交わした約束は絶対に守らないといけないのですよ? できないとおしおきされてしまいます」

精一杯こわいことがあるような表情と声音でおしおきという単語を口にして、けれど彼女は楽しそうにくるりとテーブルへと向かった。

「今日のデザートはわたくしが昼間のうちに作ったのです。生クリームと木苺も添えて召し上がりましょう?」

約束の証に家族はキスをかわす?

一般的な家庭というものを知らないエイリクだとしてそれくらいは知っている。

そんな阿呆なことをしでかす甘ったるい家族などあるか、バカ！

## 眠れず

誰もいない静寂の中、何かに触れていないと背中から嫌なものが這い登るような感覚に、自分の体を抱きしめた。

耳の奥にどろりとこびりついたたった一言が自分の中に浸透し、悪いことがおこる不安で手足の先まで冷たく自らの一部ですらないような恐怖。

こわくて、こわくて。

けれど、救ってくれる筈の人は、いない。

\*\*\*

強い酒の筈なのに、まるで水を飲むように味気なく何も蓄積されない。二杯をあおるように、三杯目は無意識。四杯目は、ただ睨んでいた。

ヴァルフアムは自室でブランデーを飲みながら、客間から持ってこさせた葉巻を手中で弄んだ。

来客用のもので、ヴァルフアムは好んでそれを使うことは無い。煙草を旨い不味いと考えたことはなく、煙草はただ煙草だった。

だが腹にある感情を殺す為に必要であれば、煙草であろうと他の何かであろうと歓迎しても良い。

葉巻の先端をナイフで切り取ると、ふいに扉のノックの音に視線をあげた。

「何だ」

クレオールが顔を出したのかと剣呑な口調で問えば、しかし扉をおずおずと開いたのは小娘様だった。

ヴァルフアムは手の中の葉巻を握りこんだ。程よい硬さで巻かれたそれはほんの少し形を歪ませる。口の中に、未だ吸ってもいない苦い味が広がるような気がした。

「何です？」

ヴァルフアムは出迎えなかった。

応接用の椅子に座ったまま眉宇をひそめて不安そうにしているファティナを見る。よく見るまでもなく、彼女はすでに就寝の寝巻きにローブというまったく出歩くに不都合ばかりな格好だった。

義息の部屋を訪れるのにも不都合極まりない。

「あの、お邪魔……しました？」

「あなたが邪魔であることはありません。飲みますか？」

煙草をケースへと戻し、ついで軽くグラスを掲げて見せるとファティナは戸惑うように瞳を揺らしたが、ほんの少しの好奇心か、やがてこくりとうなずいて見せた。

「美味しいのですか？」

「あなたにとつて美味しいかどうかはわかりませんが、私は嫌いではありません」

ファティナはぱたりと扉を閉ざしてヴァルフアムに近づくと、テーブルを挟んだ反対側の椅子に軽く腰をかけ、ヴァルフアムが新たにグラスに注いだ琥珀色の液体をしげしげと眺めた。

その様子は小動物が得体の知れないものに対して警戒し、鼻を引くつかせているのによく似ている。そつと口をつけようとすることに、ヴァルフアムは半眼を伏せるようにして冷ややかに言った。

「おそろおそろ舐めるように飲むのではなく、一息に喉の奥に流してしまいなさい。舌先で苦味を捉えるのではなく、喉の奥で感じるものです」

その言葉に、ちらりと翡翠がヴァルフアムを捕らえ、ついで思い切るように息を吸い込み、ファティナはそのグラスに唇をつけた。

唇がグラスに触れた途端、くいつと一気に流し込む。

グラスの三分の二程も流し込み、だがそれは一気に彼女の喉を焼け

つくしたに違いない。途端に激しくむせ返り、苦しげに胸元をぎゅつと押さえ込んで激しくむせこむ。

それを見ても、ヴァルフアムの溜飲は下がらなかった。

席を立ち、テーブルを超えて胸元にあるハンカチでファティナの口元をぬぐえば、恨みがましい眼差しが睨みつけてくる。

「美味しくありませんっ」

「飲むと言ったのは貴女だ」

「意地悪なさいましたでしょう？」

涙目のままのファティナを冷淡に見つめ、ヴァルフアムは口元に笑みを浮かべた。

「ええ。意地悪をしました。そうなることは判っていた」

素直に認めれば、ファティナは眉をひそめ唇を尖らせる。

うんざりとした。

腹の中にあるものを吐き出せる程子供ではない。そしてまた、いつまでも相手の心内をほうつて置けるほど大人でもない。

「何かありましたか？」

「……眠れなくて」

「お酒は眠るのに役立ちますよ。それとも、アヘンチンキでも飲みますか？ 少しばかり思考を損なうが、すぐに眠れる」

また、意地悪を言っている自覚があった。

だがそれが何ほどであろうか。彼女はもつと底意地が悪い この次に出る言葉は判っていた。

「一緒に寝てよろしいですか？」

怒らせた瞳が、今度は不安そうに揺れて自分の指を無意味に撫で回す。

耳が赤いのは、添い寝を必要とする年齢はすでに過ぎているのだと自分で理解していながらそれでも求める自分に対しての羞恥か、そ

れとも酒によるものなのか。

義息を男と意識して？

あいにくとヴァルフアムもそこまで楽観的ではない。

ファティナの思考回路は問題外だが。

ヴァルフアムはあからさまに溜息を吐き出して見せた。

「怖い夢でも？」

「……はい」

「一人では眠れそうにないのですか？」

「はい」

更に深く息をつき、ヴァルフアムはファティナの残した酒を一息にあおった。

「私の寝台には悪い虫がいるかもしれませんか？」

「大丈夫ですわよ。きちんと虫干ししてますもの」

虫干しで抹殺されたと思っっているらしい。

皮肉に口元をゆがめてみれば、すでに眠れないと言っていた筈のファティナは小さな欠伸を一つ。何より、瞼が重いのか視線が下がっていた。

強い酒の影響だろう。

このままファティナ自身の寝台に戻ったところで彼女は安らかな眠りを受けることとなるだろうが、ヴァルフアムはファティナの赤くなった耳たぶを見つめながら囁いた。

「先に寝台にいらっしやい。灯りを落としてから行きますから」

その言葉に添い寝を許され、ファティナは小さくこくりとうなずいた。

誰がヴァルフアムを責められる。

自分の妻を息子にまかせきりにした男にその権利があるとでも？  
体の深い場所であつねるのはどす黒い感情と欲望。ひねりあげて痛み  
とともに全て飲み込んで、無視するには大きいなにか。

悪いのは、愚かな貴女だ。

暖炉の炎に灰をかぶせ、室内にある幾つもの灯りを全て消し去る。  
寝室に行けば、すでにファティナは寝台の中で身をまるめていたが、  
予想に反してその瞳は開いていて不安に揺れていた。

眠れないというのは本当らしい。

吐息を一つ落としてヴァルフアムが反対側から寝台に入れば、ファ  
ティナが身を寄せてくる。そうしてやっと小さく息をつくつと、ファ  
ティナは小さな声で囁いた。

「ヴァルフアム様」

誰もいないのに、その言葉は細心の注意を払うようにひそめられた。  
まるで、誰かに聞かれるのを拒むように。悪いことを招かぬように。

「妻は、夫の子しか産めませんわよね？」

この小娘様は私を殺す気か？

一瞬酸素の取り入れ方を忘れたヴァルフアムは、まじまじと自ら  
の隣で半眼を閉ざしてとろとろと眠りの淵に落ちようとしている義  
母を見た。

「何の話です」

言葉が緊張に硬化するようだった。

「早く、旦那様とお会いしたい……ヴァルフアム様、旦那様は  
私に旦那様の子を授けてくださるのですよね？」

言葉にしながら、ファティナはますます身を縮めるようにしてヴ  
アルファムの体温を求めて安堵の吐息を落とす。

とろりと睡魔に身をあずけながら、消え入る言葉をゆつりと落と

し込む。

「旦那様、ずっと、ずっと……一緒に」

音にならずに言葉は大気に溶けた。

睡魔と酒気にゆだねられた眠り姫は、とても幸せそうに。

「っ」

体の力が抜け切り、夢の世界に落ちた義母の姿を、ヴァルフアムは憎しみすら込めて睨んだ。

「あなたはまだそんなことをっ」

低く唸るような音が口から落ち、現と夢との狭間をさまようようなファティナが驚くように一瞬瞳を開き、やがてゆるゆるとまた沈もうとする。

それがどうしても許せず、無防備に身を摺り寄せて更に深い眠りを求めようとする小娘を前にヴァルフアムは激しい感情の発露を求めた。

どうしたら、この怒りが、憎しみが、憤りが　その全てが晴れるのかわからない。

あなたの子などどうでもいい。その体を激しく揺さぶり、そう怒鳴ってやりたい。

あなたの夫など死ねばいい。

私だけを何故見ない。

義息でも構わない。父を愛しているというならそれも認めてやるう。

共に生きて共に死ねと、ただそれだけのことを、あなたは何故許してくれないのか。

乾いた笑いと共にうめくような声が漏れた。

「エイリクと　どんな約束をしたのです？」

ぼんやりとしたファティナが身じろぎし、その言葉の意味をゆっくり

りと逡巡するようにヴァルフアムを見上げてくる。

思考があやふやなのかもしれないが、ばつが悪いということは理解しているのだろう。

ファティナは困ったように眉を潜め、そつと自分を見下ろしている。義息の頬に手を伸ばした。

「ご存知です、の？」

「私の部屋から二階の居間は良く見える」

見たくも無いのに、見てしまった。

ファティナが自ら身を寄せて、自分以外の誰かに口付けする様など。その時の感情は自分でもどう表現してよいのか判らない。咄嗟に窓ガラスを叩き割りそうになったのを留めたのはクレオールで、舌打ちと共に顔を背けた。

「怪我をなさいます。お気を沈め下さい。あれは 貴方様が奥様にお教えなさったことです」

言われずともその口付けの意味を理解していた。

そう、それを教えたのはヴァルフアム自身。自分との間だけのものだ。と釘を刺し忘れたのも自分。

それすら、必要な無かったのだ。今までは。

### 約束。

それは、彼女にとってそれ以上でも以下でもないのだと。

だがそれはヴァルフアムにとってどれだけの意味があることなのか、この小娘様は少しも理解していない。

「エイリクとどんな約束をなさいました？」

先ほどよりは思考能力が戻ったであろう義母に、つとめて静かに問いかける。

その声音が冷たかろうと温かろうと、ヴァルフアムは一向に気に掛けてはいなかった。もう、気にかけることを放棄していたのだ。

「……ナイシヨです」

ファティナは眠気に抗うのがきついのだろう、重い瞼を幾度か瞬き、そつとヴァルフアムを宥めるように頬を撫でる。

「もうあなたのナイショはうんざりだ」

頬に触れる手首を掴み、ヴァルフアムはその中指の第二間接を噛んだ。

ファティナが一瞬その小さな痛みで瞳を開いて身をすくませる。

「私は言いましたよね？ あの子供に近づくなと」

低く冷淡に聞こえるように言えば、ファティナは意識をすっかりと取り戻した様子で自らの手を引き戻そうと力を加えた。

「お、お説教ですの？」

脅えの混じる瞳を覗き込み、ヴァルフアムは口角を引き上げて微笑んだ。

「いいえ、理解の悪い愛しい義母うえ。

約束を違えれば、おしおきがまっついていると　そろそろご理解いただいたほうが良いようですね」

掴まれた手首を必死で振りほどこうとするファティナは、すでに眠気など吹き飛んでいた。

## せつなさ

月明かりが入り込む。

今日は満月では無かったが、それでも青白く浮かぶ月は中庭を白々と照らしている。

クレオールはふと右手下階にある居間に人の気配を感じ内心でやれやれと苦笑した。

またエイリク様を追い回しておられる。

だが気持ちは十分に理解できた。話さなければならぬことがあるのだらう。それはクレオール自身理解できる範疇だ。ヴァルフアムが離れている今が一番タイミング的に悪くは無い。

ただし、ヴァルフアムに知れば不機嫌になられるだらうが。

すつと視線を屋内へと戻し、ヴァルフアムの為に飲み物を用意しようとしたところでクレオールは固まった。

「  
」

自分の失態を呪った。

外に意識を向けすぎたのだらう。きっと、そういうことなのだ。

それまで机のところで腰を預けるようにして機嫌よくしていた主だったが、その体は窓辺へと向けられ、そして冷ややかな様子で眉間に皺を刻んだ。

窓辺で何やら話している二人の姿がヴァルフアムにも確認ができたに違いない。

クレオールは咄嗟に声をあげた。

「エイリク様にデザートをお召し上がり頂きたいのでしょうか」

「義母うえも懲りない人だ。エイリクに近づいてよいことなどあり

はしないだろうに」

それでも冷静さを滲ませて淡々と言う。

最近はそれでも一緒にお茶を召し上がるようになりました。

さすがにここでいうのは懸命とはいえないだろう。クレオールは沈黙を守ることにしたが、その沈黙がやがて眩暈にまでかわるとは思ってもいなかった。

奥様……さすがにそれは、色々とまずいと思います。

ヴァルフアムが息を飲む音と、奥歯をかみ締める音がやけに鮮明にクレオールの耳に届いた。

\*\*\*

掴みあげた手、シーツに広がる絹糸の髪。

潤んだふた粒の翡翠に、戦慄く唇。

「義母うえ」

低く恫喝するかのように声をかければ、ファティナは小さく首を振った。

「ごめ……なさい」

こんもりともりあがる眦の涙が、つつと耳へと流れる。月明かりだけが照らしたすその光景に、口元が引き結ばれた。

「先日もナイシヨとおっしゃっておりましたね。まずは、どんなナイシヨだったかこの義息に教えて下さい」

両手で押さえていた手首を、片手に持ち替えた。頭の上で腕を交差させ捕らえれば下半身をもそもそと動かして逃れようとする。

それを許さぬように腰に手を当てて引き寄せ、ヴァルフアムは微笑を湛えた。

「言わぬつもりですか？ では、自ら言う気持ちを引き出してさしあげましょうね？」

さあ、どうしてくれよう。

そう思った途端に、しかしファティナはぼろぼろと涙をこぼしながら陥落した。

ひくひくとしゃくりあげ、まさにコドモのように。

「わ、悪いことはしておりません。ヴァルフアム様にナイショでエイリク様と仲良くなれば、きっとヴァルフアム様だって喜んでくださると思いますのですっ」

「……」

あっさりと白状した上に、その内容の酷さに落胆した。

「……私が、それを喜ぶと?」

「だって! 嬉しいでしょう?」

本気か?

思わずまじまじと見つめてしまった。

小娘様とエイリクが仲良くなれば、ヴァルフアムが喜ぶとな訳があるか。      そんな訳があるか。

ヴァルフアムは口の端がひくつくのを感じながらゆっくりとした口調で問いかけた。

「エイリクと仲良くなられたのですか?」

「も、もう少し……ねす。さいきは、一緒に、お茶をのんでくれるんです。きつともつとずうつと仲良く、なりま、す」

何故か語尾があやふやで、しゃっくりと同時にすんすんと音がする。      ヴァルフアムはその酷い有様に頭痛を覚えた。

酔っ払っている。

確実に酔っている。しかも泣き上戸だ。

まるで奇妙な生き物のようにすんすんひゃんひゃんと泣いている。

「なかよしは、いーことねす」

涙を流しながら言う義母に、ヴァルフアムは引きつりながらぐいと掴んだままの手首を引き上げ、自分の膝の上にファティナの上半身をうつぶせに引き倒した。

体内に蓄積されたものがぐだぐだと崩れ落ちていく。

端的に言うのであれば　性欲と呼ばれるものがあっさりと萎える。

ああ、まったくこの小娘ときたらどうしてこうなのだろうか。

「約束を破った罰は、やはりコレが一番ですね」

まったく度し難い。

嘆息が落ちた。

「へ、へうっ？　ひゃあっ」

やっと事態を理解したファティナが奇妙な声をあげて暴れたが、ヴァルフアムは暗澹たる気持ちでファティナの下着を引きおろした。

酒など飲まずのではなかった　本当に。

\*\*\*

扉の開く音と同時に、続き間のほんの少し冷えた冷気が部屋に一気に流れ込んだ。

剥き出しにされた尻に三発目の平手を打ちつけたところで、誰何すいかもなく寢室の扉が開かれたのだ。

「何事ですかっ！」

それはむしろこちらの台詞であったが、ファティナの悲鳴が廊下にまで響いたのだろう、息せき切って顔を出した執事はヴァルフアムの膝の上でうつぶせにされ剥き出しの尻を叩かれているファティナの姿に一瞬で青ざめ、ついで背中を向けた。

「何をしておいでですか」

「クレオっ」

悲痛に声をあげるファティナは必死に救いを求めているのだろう。それよりも、ヴァルフアムはいっそう冷ややかな口調で言った。

「見たものを脳内から消去できないのであればその目を刳り貫く手伝いをしてやるうか？」

「何も見ていません」

「」

ヴァルフアムはきつく執事を睨んでいたが、すぐにファティナの下着を調べ、うつぶせにしていた体を抱き上げると今度は一転幼子でもあやすかのようにその背を優しく撫でた。

「義母うえ、約束を破ると罰があるのです。もう十分ご理解頂けましたね？」

「ひろいれす……」

痛みを与えても酔いは未だ収まらぬのか、言葉は呂律をまわらない。そして相変わらず奇妙にすんすんと音を出している。

「私の手も痛い。私だとしてできるならばこんなことはしたくありません。けれど義母うえが約束を破ったのですから、それに対してきちんと罰を与えなければいけないのですよ。約束は、神聖なものですからね？」

ふにやりと顔をしかめている義母の眦に残る涙を舐めて、ヴァルフアムは背を向けたままこちらを気にしているクレオールへと告げた。

「もう休む。何も心配するようなことは無い　戸締りをして出る」

「……奥様は、本日はこちらでお休みになれるのですか？」

クレオールの言葉に、ファティナは咄嗟に「いやっ」と声を出そうとしたが、ヴァルフアムはやっぱりと「そうだ」と伝えてしまった。クレオールだともう休む時刻の筈だ。このフロアの声が一階のクレオールの部屋に届くとも思われぬ。おそらく窓辺で見たものことでファティナを心配して女主の姿を探していたのだろう。

女主には忠実だが、どうやら男主のことは信用していない。  
ファティナにとっては良いことなのだろう。丁寧な頭を下げる男  
を見送り、ヴァルフアムはファティナの汚れた顔をハンカチでぬぐ  
ってやった。

「もう……怒りまへんか？」

「怒ったのではありません。叱ったのです」

「同じことではありませんかあっ」

「同じではありませんよ。物分りの悪い子供の尻を叩くのは当然の  
ことです」

「わ、わたくしはもうコドモれはありまひえんっ」

涙でぐちゃぐちゃの顔をさらに真っ赤にして言う義母を抱きこみ、  
ヴァルフアムは鼻を鳴らした。

泣き上戸ははじめてみたが酷すぎる。

これではまるきり小さな幼子を虐めているようではないか。

「忘れておいでかもしれませんが、私はもう一つお尋ねしたいので  
すが」

「……何れす？」

「エイリクとどんな約束をなさいました？」

ファティナはますます眉を寄せて、不平をもらすように顔をしか  
めた。

「いやれす」

「ほう？」

「らって、どうせ正直に言っても、きっとヴァルフアム様は罰をお  
あたえになるもろ」

つんと横を向き、叩かれた尻を気にするよつに身じろびする。

すんすんと肩を揺らしている母を優しく抱きなおし、その前髪をかきあげた。

「義母うえ」

「……なんれす？」

眠気が戻った様子で重い瞼を動かす。言葉は相変わらず舌足らずなるもろ、に、なんれす。こちらこそなんです、だ。怒っている自分が馬鹿らしい。

「もう許します。ですから、どうぞ貴女からキスして下さい。今度の約束はそうですね」

私意外と約束の口付けをしないと、約束して下さい。

許す、という言葉にはつとフアティナが微笑んだ。けれどもその笑顔はすぐに不信を込めてかけた。

「家族れも？」

「あれは私と貴女の間で交わされた約束ではありませんか。思い出して頂きたいのですがね？ あなたはご自身の母君と抱きしめて約束をなさったでしょう？」

二人だけの約束です。

「……でしたか？」

「そうです。あの約束は私とあなただけの約束です。もう他の誰ともしないと 約束して下さい」

許したくは無かったが、さすがにもう泣き止んで欲しかった。何より、話など到底まっとうにできそうにない。

今の説明だとてかなり危ういが。

「ほんとーれすね？」

約束したら、もう許して下さいますね？

と、念入りに確認する。

酔っ払いの癖してしぶとい。

「本当です。でも、覚えておいて下さい。今度約束を破ったら。私の寝台にいる悪い虫に頭からばりばりと食べさせてしまいますからね」

笑みを浮かべて言う言葉を冗談と受け取り、ファティナはいつもの軽口に戻った義息の様子に安堵の吐息を落とし、ヴァルフラムの唇にそつと唇を押し当てた。

安心した為に一気に睡魔がファティナをからめとる。

ヴァルフラムがくったりとしたファティナを支えてくれる腕の力強さと体温と、そして瞼に、頬に触れる唇がくすぐったくてファティナはくすぐすと笑った。

怒りっぽくて、怖くて、けれどあつたかくて優しい。

その腕の中にいれば何も怖くない。そう思う反面、ふとファティナは気付いてしまった。

いつか、この義息は自分から離れていく。

妻を得て、子を成して　それはもしかしたら……とても寂しいことかもしれない。

せつなさ(後書き)

予想通り！ な人は拳手つ。

### 三人三様

メアリは女主の言葉に幾度も心の中で知っている歴代の聖人の名を並べ立てた。

「やっぱりヴァルフラム様の寝台には虫がいます!」

これは由々しき事態ですという女主だが、まったく別の次元で由々しき事態だとメアリは思っていた。

朝食を終えて女主のもとを訪れば、彼女は眉をひそめて不平顔で自らの胸元に手を当てた。

聞いて下さいませ! また虫にさされましたっ。

唐突な言葉に、本当の虫に噛まれたのかと思ったのだが、その二の腕の内側にある鬱血の跡も、はたまた鎖骨にある跡も、明らかに虫害ではなく人害だった。

同じ室内にいる侍女達が困った様子で視線を下げているのがまたなんとも切ない。

「ですから、ヴァルフラム様の寝台で休んではいけませんと」

あれほど申し上げましたのに……

「酷いのです。わたくしばかり。ヴァルフラム様は虫にちっともかじられないなんてどうしてでしょう」

「……どうしてでしょうねー」

貴女様をかじっている悪い虫が、そのヴァルフラム様だからです。

言ってしまうべきか。いや、言うてはいけない。

メアリは自らの手の甲をぎゅっとならせた。

「もっついっそ燻蒸してしまっただほうがいいかもしれませぬ」

棒読みでメアリは嘆息した。

煙でいぶされて果ててしまえ。

\*\*\*

「エイリク様！」

とうとうジゼリが声をあげた。

もともと短気な面も持ち合わせている乳母は、だらだらといつまでもヴァルフアムの屋敷に滞在することも、ファティナと茶を飲んでいることにも反対していた。

「ヒースのお屋敷にいつお戻りになられるつもりですか」

「進学先を決めてからだ」

うんざりとしながらそれでも応える。

ジゼリはエイリクにとって育ての親　今までは唯一の肉親のようなものだった。

「ジゼリは聖騎士は諦めて頂きたいと思います。将来エイリク様がお子を成せないなどとても耐えられません」

ハンカチをぎゅっと握り締めてせつせつと語られる。

聖騎士。

それを思うとふっとファティナが浮かんだ。

ジゼリはこういうが、あの女はどう言うだろうか。想像してみたが、おそらく反対はしないのではないかと思われた。

あのほやほやとした笑顔で「素敵ですわね」と言うだろう。

聖騎士。

兄であるヴァルフアムが憧れた　そんな事実はない　高潔な職種だ。

だが、素直に進むには心に迷いがある。果たして、それは正しいのか。自分は聖騎士たる資格を持っているのか。

「義母<sup>かあ</sup>さまは……」

ふつと唇から零れ落ちた言葉に、ジゼリが目に見えて反応した。

「エイリク様！ 何故あの女をそのように呼ばわるのですっ」

苛立ちを撒き散らす言葉に、エイリクはむっとした様子で相手を睨んだ。

「他に呼びようがないだけだ」

「あんな性悪女に騙されてはいけません！ ヴァルフラム様などは完全にたらしこまれているではありませんかっ。自分の義理の息子に手を出すような女ですよっ、汚らわしいっ」

すでにヒステリーをおこしているジゼリはまるきり憎むように暴言を吐き捨て、その内容の酷さにエイリクは呆気にとられた。

「旦那様がご一緒でないからといって淫らなっ」

「黙れっ」

咄嗟に吐き出した言葉に驚いたが、ソレ以上に驚いたのは次に出た言葉だった。

「義母さまがそんな計算高いものか！ 性悪女？ おまえはいったい何を見ているんだ？ 愚か過ぎて悪意にちっとも気付かないような人なんだぞ」

「エイリク様っ、ああっ、私のエイリク様があの女に毒されてしまわれたっ」

「うるさいっ、出て行けっ」

怒鳴りあげて退出を命じ ついで激しい虚脱感にエイリクはゆっくりと首を振った。

計算高い？

そっと自らの唇を無意識のうちに指先でなぞった。

あの口付けも、優しさも、微笑みも、すべて計算の上だと？

それが事実であれば、あれほど性質の悪い女はいない。

だがエイリクはもうその言葉を信じるできない自分に気付いていた。

義理とは言え息子である自分を今まで放置していた女だと憎み続けるのは、どうしても難しい。  
あの人と、そして母とは違う。

エイリクを金で売り払った冷たい母とは、違う。

「義母<sup>かあ</sup>さま……」

やはり兄は正しいのだ。

随分と年下の義母をきちんと慕っているし、敬っている。  
自分も、きちんとあの人を義母と認めよう。認めることはまだ難しいかもしれないが、それでも、極力そうするように勤めよう。

新たな決意をすれば、何故か腹部にあった苛立ちが落ち着く気がした。

これならば聖騎士の資格もそう遠くなく得られることだろう。  
エイリクは心底ほっとしていた

そう、兄のすることに間違いなどない。

兄の言葉をもとから信じていれば良かったのだ。

という完全に間違った思考を新たにするエイリクだった。

\*\*\*

目覚めは 小さな憤慨するような声。

「ヴァルフアム様っ、起きて下さいませ」

腕の中の義母が必死に声をあげている。軽く腰にまわした腕が揺れて、とんとんと二の腕を叩かれる心地よさ。

微笑を浮かべてファティナの頬に自分の頬をすりあわせようと身を寄せたのだが、それよりも小娘様は忙しいらしい。

「やっぱり虫がいますー！」

というファティナは自分の二の腕を「見てくださいませっ」というように示した。だが、どこに幾つ「虫刺され」があるのか当然ヴァルフアムは知っている。  
付けた当人であるのだから。

笑いを堪えながら「ここで眠ると虫に刺されてしまいますよと言っておいたでしょうに」と言うと、ファティナは上半身を起こして真面目に言った。

「どうしましょう。虫干しでは退治できませんでしたのね」

「なかなかしぶといですからね」

「ヴァルフアム様は刺されておりませんか？」

「この虫はどうやら私を刺す気はないようですね」

笑いを堪えながら身を起こし、刺された腕をまんじりと見ているファティナに、ヴァルフアムは更に意地悪く言った。

「首の下、鎖骨の辺りも刺されてますよ」

つつと指先でその部分をなぞると、ファティナは情けなさそうに眉をひそめた。

「寝台、交換してしまっただほうが良いではありませんか？」

「私は被害にあいませんから平気です」

さらりと言いながら、ふとヴァルフアムは思い至った。

「消毒してさしあげましょうか？」

「まさか毒虫なんですか？」

「そんなことは無いと思いますが、念のためです」

どうして彼女はこんなにも愚かで無防備で　どうしようもなく愛しいのだろう。もう少し他人を疑うということを知るべきだろう。そう、他人を。

ヴァルフアムは他人ではない。

だから自分のことは疑わなくとも良いのだが。それ以外の人間は全て疑うべきだ。

身を伏せて、昨夜彼女が眠っている間につけた幾つかの印にもう一度ゆつくりと全て口付けしていこうとしたところで、無粋なノックが扉を開いた。

「おはようございます」

義母の鎖骨の窪みに口付けしようとしたところで無遠慮に扉が開かれ、ヴァルフアムは不機嫌にそちらへと視線を転じた。

「クレオ、おはよう」

「おはようございます、奥様。よくお休みになりましたでしょうか？」

クレオールの後に二人の侍女がつき従い、その手には顔を洗う為に湯桶が持たれている。頭をたれて寝台の両わきにまわった侍女達は、静かに黙々と自らの主の朝の身支度を手伝った。

「よく眠れました」

ファティナは微笑を湛えて言うが、すぐに唇を尖らせた。

「でも、やっぱりヴァルフアム様の寝台には虫がいるようなのです。クレオ、ヴァルフアム様は寝台を交換なさる必要は無いとおっしゃるのですけれど、わたくしは交換したほうが良いと思うのよ。どう思います？」

ヴァルフアムは笑いを堪えつつ、ちらりとクレオールを伺った。

冷静な執事はほんの少しだけ言葉に窮したようではあるが、すぐに半眼を伏せて女主に答える。

「交換なさる必要は無いと思います」

「でも……」

困惑するファティナの頭を引き寄せ、そつとその額に口付けた。

「お好きになさい。何をしたところで変わらないと思います」

「わたくしは本気で心配していますのにつ」

「私の寝台で寝なければ良いのですよ」

そつ、もう入り込まなければいい。

あの誘惑を堪えることに、そろそろ限界を感じている。

一つだけ、彼女の体に残した印  
それがゆっくりと数を増していくように、自分の感情を押しとどめることは困難なことだ。

口付けの回数が増すように、自分の体を重ね合わせその身を苛み、すすり泣きの内に名を呼んで欲しい。

ふっと自嘲的な笑みがこぼれた。

いつからこんな感情を持つようになったのか、愚か者。

欲しかったのは女では無かった筈だ。

義母と共にいたい。ただそれだけであつたはず。

その想いの変化はおそらくあまり良いものではないと理解しているが、ヴァルフアムにはもはや止める術がない。

「さあ、部屋に戻って着替えなさい。

それとも、私の着替えを見ていたのですか？」

## 提案

廊下ですれ違う時、彼女は意を決するように深く息を吸い込んだ。ぎゅっと腹部の辺りで指を組み、まっすぐにヴァルフアムを見返して。

「ヴァルフアム様、お話がございます」

話すまでもない。

彼女がヴァルフアムに対して口を開く時、その理由は知れている。彼女の女主　そして、ヴァルフアムの義母。彼女が戦いの意思を示したとき、それは決まってファティナのことだった。

ヴァルフアムは煩わしさに相手を睨みつけたが、面前の女性は一歩も引くまいとするように強い意志をひらめかせている。

幾度か解雇クビにしてやろうとも思ったが、生憎と女性の教師は珍しい。何より彼女は更に珍しいことに中流階級の出ではない。

女家庭教師といえ、たいていが中流階級、商家の娘であることが多い。貴族の娘が仕事に狩り出されることなどはないものだ。

ファティナにつける者は相応しいものでなければならぬ。男教師などもう二度とつけようとは思わない。以前のような過ちを許す訳にはいかないのだから。

「聞いておられますか？」

「聞いている　だが、廊下で話すことでもない。図書室で構わない」

一番近い適当な場を提案しながら、ヴァルフアムは面前で静かに怒りを蓄えている女についての書類を思い浮かべた。

\*\*\*

ファティナが未だに不安定な心をもて余していることにクレオールは気付いていた。何か彼女の心を捉え、そしてそれを何とかやり過ぎそうとしている。

彼女の白く大きな愛犬のふっさりとした体毛に寄りかかり、ファティナは彼の耳の裏をしきりにかいてやっていた。

「ヴァルフラム様が再来週にはお休みをいただけるとおっしゃってくださいました」

今朝の会話の一旦を、まるで救いの綱のように囁く。

「旦那様はわたくしがお見舞いに行ったら喜んでくださるかしら」

「きつと喜んでくださいます」

「……だと、宜しいのだけれど」

ふつと物憂く吐息を落とし、ファティナはぎゅっと愛犬の首を抱きしめた。

「奥様」

「なあに？」

もう一度、問いただしてみようかという思いがクレオールの口を開かせたが、だがそれは大気に溶けて消えた。

あの男は何を言ったのですか。

あなたの心を苦しめるものの正体は何なのですか。

そう、問い詰めて更に心痛を与えてしまう訳にはいかない。一旦伏せた瞳を開き、クレオールは微笑んでみせた。

「寒くはありませんか？ 何かお飲み物を用意いたしましょうか？」

デザートでも？

矢継ぎ早に甘やかす言葉に、ファティナはくすりと笑い、ついで思い切るように口を開いた。

「ヴァルフアム様のご結婚のことなのだけれど」

突然の話題展開に、クレオールのほうが戸惑った。

「進んでいるの？」

「いえ、現在はヴァルフアム様もお忙しく」

「……そう」

ふっと視線を伏せたファティナは唇の隙間から呼気を落としこみ、困ったような微笑を浮かべた。

「判っているのです。わたくしも子離れしないといけませんわよね？」

そうですね、とはさすがに追従できずにクレオールは穏やかな眼差しだけを向けた。

「判っては、いるのです」

ゆっくりと落ちる声音に、クレオールは跪ひざまずいてファティナの翡翠の眼差しと自らの視線を合わせた。

「ご理解なさっているのであれば良いのです。急に全てを変えようとしても無理がでるものですよ。ご自身の心に留めて、ゆっくりとそのようになさればいいのです。私にできることであればどんなことでもお力添えいたします。どうぞ、お一人で思い悩むことなどして下さいませぬように」

低く力強く言われる言葉に、ファティナはまるで全ての音を吸収するかのようにじっと耳を傾け、そして微笑んだ。

「では、今度眠れぬ時はクレオに添い寝を頼もつかしら」

「……それは」

「ふふ、冗談です」

暗く沈んでいた瞳が、悪戯を喜ぶようにきらきらと輝きを取り戻し、クレオールは小さく笑んだ。

いつもの主とは言いがたいが、それでも必死にいつもの彼女で

あるうとする。

彼の女主は、弱々しく見えて実は強い部分を持っているのだ。

\*\*\*

「聞いておりますか？」

厳しい口調でヴァルフアムの寝台の悪い虫についての苦情を向けたメアリを前に、ヴァルフアムは腕を組んで思案していた。

メアリは言いたいことを一度も言葉をさえぎられず言えたことは概ね満足おほしていた。

つまり、女主と寝台を共にすることは倫理に反する行いであると。害虫の駆除を真面目にして欲しいと。

まあ、概ねそのようなことをいつもより更にきつい口調で訴えたのだ。

そして、珍しくこの屋敷の主はその言葉をただ静かに聞いていた。反論の一つや二つ、嘲笑の三つや四つあるものと思っていたメアリにとって、それは意外なものだった。

しっかりと苦情を言い切ったところで、ふいにヴァルフアムが組んでいた腕を振りほどき、自らの頬と顎先に触れるようにして手を添えた。

「ヴァルフアム様？」

やけにじろじろと見られていることに不安を覚え、メアリは眉をひそめた。

「女史、確か御生家は 男爵家だったとか」

「今は叔父が継いでおりますので関係がございません」

「そう、貴女の父親の爵位は貴女の叔父に受け継がれ、そして貴女は現在では女家庭教師という訳だ」

淡々といわれる言葉に、事実とは言え多少ムツとした。

「それが何か？」

「あなたは義母が好きか？」

「……ファティナ様は好きです」

この男はいつたいたいどうしたのだろうか。

いぶかしみながら応えれば、ヴァルフアムはその冷たい碧玉の眼差しを細めた。

「そう、あなたは義母がたいそう好きなようだ」

「何か問題ですか？」

「いや、たいへん結構」

ゆるく口元に笑みを刻みつけた男の様子に、メアリは我知らず一歩退いた。

心臓がとくとくとやけに激しく鼓動し、なんとも落ち着かない気持ちにさせられる。それでも虚勢でもって背筋ばかりはしっかりとぴんと伸ばし、負けまいと対峙したのだが、ヴァルフアムは口角を引き上げるようにして笑った。

実に悪魔的な微笑を。

「あなたは幾つです？」

「……女性に年齢を聞くのはたいへん失礼です」

「ああそうですね。確かに　なに、私は気にしませんよ。あなたが私より随分と年上だとしても」

「失礼ながら年下です！」

たかが二つ程度だが、年下だ。

「だから私は気にしません」

そうですね。あなたが気にする相手はいつだってファティナ様だけだ。

そう嫌味つたらしく言ってやるうかと口を開きかけたところで、ヴァルフアムは言葉を落とした。

「あなたならば義母を大事にしてくれそうだ」

「どういう意味です？」

「あなたが私と結婚するのに相応しいということですよ」

淡々と言われた言葉にメアリは意識を飛ばしてしまいそうになった。

## 決断

現実とはかくも厳しいものなのか。

メアリは自らの人生というものを振り返り、あまりかんばしくないものであることを改めて感じていた。

名家という訳ではないが、男爵家に生まれて育ち、これといった不自由はなかった。父親の方針で勉学に触れることができたことも幸いなことだ。だが、両親が先立つたところからメアリの身の不運ははじまっていたのだろう。

爵位は世襲されるべきものだが、生憎とメアリは女性である。

最近ようやく女性襲爵などという話もちらほらとでてきてはいるが、当時は爵位を襲爵することが許されるのは男子と定められていた。

勿論、まだ年若いなりにメアリが結婚することでその問題は解決するはずであったのだが、叔父はその機会を逃したりはしなかった。ただ、叔父が爵位を受けたところで問題はなかった筈だったのだ。自らの保護責任者が父から叔父へとかわるだけ。そう思っていたのだが、叔父はメア리를早々に屋敷から追い出しにかかった。

わずかばかりの現金とポストンバック一つだけで。

人生とはままならず厳しいものだと言恨する出来事であった。

そしてまた、人生とは厳しいものだと言った今、メアリは感じていた。

さすがに白馬に乗った王子様が跪ひざまずいて愛の許しを得るだとか、永遠の愛を誓うだとかいう夢は持ち合わせていない。

子供の頃はちらりと思ったかもしれないが、やがて王子は無いなと判断すれば、もう少し現実的に騎士にそうされることを夢見たりもした。

ただし、十四五の小娘の頃のことだ。今となつては鼻で笑つてそんな現実ないといえる。

だが現実では自分の前に騎士がいる。

騎士　確かに騎士かもしれない。

相手は騎士団に所属している。詳しいことは知らないが、騎士団の事務系統にいるのだというから、もしかして騎士なのかもしれない。

しかし面前の相手は跪きもしなければ、愛を囁いたりもしない。尊大な調子で図書室の机に腰を預けるように立ち、腕すら組んでこちらを睨めてみている青年に、メアリは咄嗟に手をあげなかった自分の理性を褒めてやりたくなつた。

「……失礼ですが、ヴァルフアム様」

「なんだ」

「今、何とおっしゃいましたか？」

声がわずかに震えていた。

「耳が遠いのか」

冷たい碧玉に、更に侮蔑まで含ませて言う相手に、メアリはどう立ち向かうべきなのか思案した。

「聞き間違いで無いとすれば、今、私は求婚されたような気がします」

「そのようだ」

即答で返された。

そう、自分は今夢にまで見た　いや、はるか昔の夢だが　求婚をされたのだ。ただし、完全に夢想だにしない現実として。

冷たい眼差しに、愛情の欠片も思わせない求婚を求婚というのであれば。

あなたを愛している。

求婚とはうわべだけでも愛を語り、微笑を湛え、その一時誰よりも女を輝かすものではなからうか。

だが現実はまだたく違う。

まるで剣を突きつけられて冷笑と共に、死刑宣告を受けるかのような求婚とは、いったいどれくらい悪辣に生きていれば身に降りかかってくることなのか。

少なくともメアリは自分の行いがそんなに悪かったなどと思ったことは無い。

神に見放されるような行いをしたことは無いのだ。

自らの良心のもと、精一杯主を守っているつもりである。その結果が　これなのか。

神は何をしているのだろうか。

「不都合はないな」

それでしまいだというように軽く手を払い、求婚相手を追い出そうとする男にメアリは咄嗟に声を荒げていた。

「不都合ばかりでございます!」

「なぜ?」

なぜ?

なぜって　そう切り返されると、自分でも何故かは咄嗟にはでてこない。

だが、答えなどとうに決まっている。

「お受けできません」

「あなたには誰か婚約者でも?」

「……いませんが」

「なら問題は無い。ああ、私は別に持参金は必要としていない。もしあなたがそれを心配しているのであれば不要だ。さらにいえば、もしそのようなものがあるとすれば、それは全て貴女の好きにしてくれて構わない。それとも、結婚後に発生する手当てについて何か言いたいことがあるのであれば」

まさに事務的に話をすすめていく相手に、メアリはぐっと奥歯をかみ締めて相手をにらみ付けた。

「お断り致します」

これは間違いだ。

ヴァルフアムの言葉を受け入れることが正しい。

自分は無力な女であるし、相手は侯爵家の嫡男。結婚はあくまでも家の結びつきであり、女性にとってこの婚姻は願ってもないものだろう。

だがメアリはこの婚姻を受け入れることはできかねた。

「愚かだな」

ヴァルフアムは嘲るように鼻を鳴らし「猶予をやるう　私は寛大だ」という言葉を残してメアリの脇を通り過ぎた。

猶予など要りません。

そう怒鳴ろうとした言葉が、震えて喉の奥で凍りつく。メアリはぎゅっと自らの指先を白くなるほどに握り締め、一人残された図書室で肩を震わせた。

悔しいのか悲しいのか判らなかった。

はじめて受けたプロポーズが、あまりにも酷く残酷に胸の奥でくすぶっている。

「さてい……」

ゆっくりと言葉が耳鳴りのように響き、それと同時に眦に浮かんだ涙が落ちぬようにぐっと顔をあげた。

あの厚顔無恥な馬鹿様の正体を微にいり細にいり懇切丁寧に女主に報告したい。

是非とも。

メアリはぎゅっと唇を引き結んだ。

この程度の嫌がらせをしたところでこの心の怒りは決して晴れはしないだろうが、多少の溜飲は下がるというものだろう。

ファティナ様、貴女の馬鹿息子は最悪です。

\*\*\*

都合がいい。

勿論それだけだ。

結婚はしなければいけない。

だが女を捜すのは面倒だった。

何より、結婚相手に煩わされるのは受け入れられない。

結婚相手に求めるものは何かと問われれば、ヴァルフアムは簡潔に言える。

女であるということ。

健康だろうと不健康であろうと気にしない。むしろ病弱なほうがいいのではないかとすら思うが、一応嫡男という立場上跡継ぎを残

さなければならぬ。ならばこのさい健康な女のほうがいいだろう。あとはどうでもいい。子供さえ産み落としてくれるのであれば、好きに振舞えばいい。愛人を囲うことも、自分の子がいいのものを産み落とそうと。問題はまったくない。

結婚さえしてしまえば、あの父親も居座るその椅子を立ち上がり、田舎に引きこもることだろう。もともと領地に引きこもっているが、もっと僻地にでも追い出して構わない。

爵位など欲しくはない。現在だとて騎士ナイトの称号なら名称だけを持っているし、子爵を名乗れる。だがそれである種の権限が手に入るのであれば否やはない。

義母に子など必要がない。

これ以上の跡取りのスペアなど必要がない。そう改めて言えば、自分が結婚するのが一番手っ取り早いのだと思えた。

だというのに、何故あの女は断るなどと言うのか。

それとも駆け引きの一つか　おそらくその程度のことだろう。間をもたせることによって結婚の条件を吊り上げるつもりかもしれない。

そう思えばヴァルフラムは眉間に皺を刻みこんだ。

悪い話ではないはずだ。没落した男爵家の娘　しかも嫁遅れといつていい年齢だ。これ以上の婚姻など望むことはできないだろう。

口うるさい点もあるが、所詮子供ができてしまえば他の屋敷に放置すれば良いこと。ファティナを思う忠誠心は認めてもいい。更に言えば、結婚市場に足を運ばなくても済むことは十分な利点だろう。

ふと、名前は何だったかと浮かんだが苦笑のうちに消えた。

名前などどうでもいい　女は女、ただそれだけなのだから。

このことを義母に報告すれば彼女はあの翡翠の瞳をきらきらと輝かせて喜ぶだろう。

喜べばいい。

念願の嫁も孫も与えてやる。ファティナが子を成す必要などありはしないのだから。

女が欲しいのではない。

共にいて欲しいのだ。

そこを誤まってしまつては、結局全てを失いかねない。

最近の自分の行いに自制をかける意味でも妻を娶ることは理に適う。もっと早くに女史を妻に娶ることを考え付けば良かった。そうすればファティナは子が欲しいなどとあの男に手紙を送つたりもしなかつただろう。

ヴァルフアムは過ぎた苦い思いを一旦捨てる、義母に結婚に付いての報告をすませようと意気揚々と考えを切り替えた。

ヴァルフアムの気など少しも知らぬ氣に晴れやかな表情を浮かべるであろうと義母を思えば、多少は鬱屈のようなものが溜まるが、ヴァルフアムが結婚することは決定事項だ。

真つ先に考えなければならぬような案件ではなかつただけで、自らの人生でいつもくすぶっていたものである。

面倒ごとが済むのであればどうでもいい。  
まずは一つ。

ヴァルフアムは暗い笑みを刻んだ。

\*\*\*

「義母<sup>かあ</sup>さま」

幾度も口の中でその音を転がす。

なんというか気恥ずかしい音だ。今までちかくにいた大人といえはジゼリだけ。母と触れ合うというものがどういったものであるのか、実際にエイリクは判らない。

自分に母など要らない。

そう頑なに定めてきたものだから、義母というものを前にどう接しているのか判らない。

触れたら柔らかく、香りはシナモンや甘いバターの香りがした。

義母を敬うと決めたもののどう接して良いのか判らない。

兄は帰宅すると義母の手をとり、優雅にその指先に唇を押し当てて脛と頬に口付ける。

当初は異様な光景としかとれなかったものだが、親子とはそういうものだろうか。

自分には多少身長が足りないが 敬意を払うというのはそういう

ことなのだろうか。

とりあえず兄の真似をしていれば間違いはないだろう。

エイリクはぐつと腹に力を込め、こくりと一つうなずいた。

兄を見習えば間違いはない筈だ。

エイリクは覚悟を決めて庭先で犬に寄りかかっている義母の姿を視界に入れた。

## 恪気

「子供は、結局どうすればできますの？」  
ファティナの唇から吐き出された言葉に、クレオールは天を仰いだ。

空は高く雲はゆっくりと流れている。小鳥が時折さえずっているし、中庭にある噴水から流れる水のせせらぎが耳に心地よい。  
最近は天候がよいが、朝は霧が濃く辺りを覆いつくしていた。ゆっくりとだが確実に季節の変化が……

「クレオ？」

現実に引き戻された。

「……もしわけありませんが、それにお答えすることはできません」

やんわりと断ると、ファティナは驚いた様子で瞳を瞬き、クレオールは先手を打った。

「どうぞその質問は旦那様をお願い致します。決して他の誰かにお尋ねしようなどとなさらないで下さい」

「ヴァルフラム様にお尋ねしてはいけませんか？」

「はい。奥様にそれをお教えることができるのは旦那様だけと定められておりますから」

絶対にヴァルフラム様に聞いてはいけません。

そこはしっかりと釘を刺したが、ファティナはもう一度口を開いた。

「夫婦でないと子は成せませんわよね？」

いつもであればしっかりとクレオールを見つめて話す女主が、視線を伏せてさまよわせて言う言葉に、クレオールは息を飲み込んだ。

「ヴァルフアム様と何かありましたか？」

「え？」

「失礼致しました。僭越ではございますが、何故そのように思われるのです？」

「ほんと一つ咳払いをし穏やかな調子を取り戻して問いかけると、ファティナは幾度か逡巡するようにしていたが、やがてゆっくりと首を振った。

「いいえ。ただ……疑問に思っただけなのです」

ヴァルフアムとの間に子を成したいなど思っただろうか。クレオールはちらりと考え、その思考の危うさに小さく首をふった。

「いいや、そんなことはありえない。何故なら、ファティナは夫を愛しているのだから。」

最近少し情緒不安定なのだろう。いたわしいと半眼を伏せ、そろそろ庭ではなく居間へと移動をうながそうとしたところでクレオールの視界にきびきびと歩くエイリクが入り込んだ。

「義母<sup>かあ</sup>さま」

まっすぐにファティナのもとへとやってくる少年の様子に軽く警戒をしていたクレオールだったが、その言葉に息をつめてぶしつけに相手を見てしまった。

「今、わたくしを呼んで下さいましたか？」

呼ばれた当人も随分と驚いた様子で瞳を瞬いているので、どうやら幻聴ではなかったようだ。

ファティナは実際にはこの名称で呼ばれたのは二度目のことだっ

だが、すでに一度目のことなど記憶にないのか、その翡翠にはありありとした驚きだけがあった。

「他の誰を呼んだと思うのですか」

しかし気恥ずかしい単語を更に聞き返されたエイリクはむっとした様子で眉をひそめた。

「そう……ですわよね？」

幾度も口の中で確認するようにしていたファティナだったが、次の瞬間にはふわりと微笑んだ。

「何でございましょう、エイリク様」

「今、戻りました」

どちらかに行かれてらしたの？

そう問いかけようとしたファティナであったが、子供の剣呑な瞳にいらまれて口をつぐんだ。

何故かエイリクは緊張した面持ちで自分をにらみつけてくるし、どうしてよいものか判らない。困り果てて、それでも何か用があるのかともう一度エイリクをよくみれば、どうやら熱でもあるかのようには頬に赤みが差していた。

「具合がよろしくないのでしょうか？」

子供はすぐに熱を出すというし、などと余計な一言を足すファティナに、エイリクはぐつと言葉を詰まらせた。

「子供扱いは止めて下さい」

「ごめんなさい」

慌てて謝る義母の姿に、エイリクは更に喉の奥でぐもった音を出し、吐き捨てるように言った。

「手をつ」

「……はい？」

完全に意味を図りかねた様子のファティナを更に睨み、エイリクは白い犬の体毛の上にある義母の手を顎で示した。

その傲慢な様子はまさに彼の兄によく似ている。

ファティナが戸惑いの中で自分の手へと視線を向け、おずおずとそれを差し出すと　エイリクはその手を乱暴に掴み上げ、その指先に唇で触れた。

犬の温かさか、それとも彼女自身の体温からか、その手はほかほかとあたたくエイリクは何故か自分には縁遠いなにかのように感じた。

つきりと胸が痛む。

そのぬくもりがあんまり優しすぎて。

エイリクの突然の行動に、ファティナの瞳が驚愕に見開き、クレオールも何事か言うべきかと口を開きかけた程だ。

「あ、あの……」

ファティナは突然の相手の行いがまったく理解できていなかった。勿論、末の義息と仲良くしたいと願っていたが、だからといって突然手のひらを返すように親しげに振舞われることが不安を与える。

囚われた手を無意識に取り返すように強く引くと、エイリクはむっとしたように眉をひそめて近い場所から睨んできた。

「あの、エイリク様　具合でも」

本当に具合が悪いのでは無いかと心配になったファティナはその手を伸ばし、エイリクの額に触れた。

途端、エイリクは自分の心の中で何かがびしりと碎けるのを感じた。

それは突然のことだった。

自分の中で固くしこりのように居座っていたものが、たかがふわりと柔らかな羽毛で撫でられた途端に砕けて、エイリクは感情が爆発するように瞼が熱を持つのを感じた。止めようにも止まらぬ熱が、こみ上げては頬を伝う。

ぎよつとた様子のファティナの翡翠を見返して、なんだかおかしくて肩が揺れた。

ああ、なんて愚かなんだろう。

「義母さま」

「エイリク様？ 大丈夫でいらつしゃいますか？」

「義母さま」

ぼくは、孤独な子供だったのだ。

母など要らぬと頑なに言いながら、母親の愛情に触れたくて仕方のない子供。

今、目の前に立つたかが五つ程度しか年齢の変わらぬ母のぬくもりに大きな声で泣いてしまいたい程に。

ファティナはスカートの下からハンカチを引き出すと、そつと優しくエイリクの瞼にそれを押し当てた。

「どこか痛いのですか？ あの、お座りになりますか？」

自分が座っていたキルトを示し、困惑している様子のクレオールにちらりと視線を向けた。

「義母さま……ごめんなさい」

言葉は素直にこぼれ落ちた。

手を伸ばしてすがるように抱きすくめる。相手のほづがかるうじて身長が高いけれど、その肩口に顎を預けられる程度には身長は引き合った。

義母の温かな体温とシナモンの香りとに安堵するように吐息をつく  
と、視界に屋敷のテラスから直に中庭におりた兄の姿を認め、照れ  
くささにエイリクは義母から体を引き離れた。

兄に愚かしい醜態をさらしてしまった。

ばつが悪くて何と言おうと言葉を搜していると、ヴァルフアムは  
あつという間に間合いを詰めて冷ややかな眼差しでエイリクを一瞥  
し、エイリクには到底無理だと思われる容易さでファティナの体を  
ひょいっと抱き上げた。

突然のことでファティナの口から短い悲鳴があがり、クレオール  
が慌てたがヴァルフアムはまるで人形でも抱くように義母を横抱き  
にした。

「エイリク」

「え、はい？」

「義母うえに近づくなと言った筈だな」

冷たい口調に、エイリクは頬が赤くなるのを感じながら口を開い  
た。

「あの、ぼくの態度は……良くなかったです。反省しています。も  
う二度と義母さまに酷いことはしません」

兄は未だにエイリクが義母を傷つけると危惧しているのだ。  
確かに前科があるのだからそれも当然だろう。けれどももうそんな気  
持ちは無い。

この人を嫌い続けることは簡単なことではない。  
優しく、温かくて、まるで砂糖菓子のようにだ。

「義母さま……？」

兄の口からその単語が落ちて、ますますエイリクは気恥ずかしさを覚えた。

「もう義母かあさ」

まを煩わせるようなことは決してしません。

その言葉を続けようとするのに、それは兄の低い唸るような言葉で遮られた。

「義母かあさま？」

できればその単語を幾度も言うのは止めて頂きたい。

エイリクがますます身の置き所に困っていると、やがてヴァルファムは冷たい碧玉を静かにエイリクへと向けた。

「クレオール、エイリクを叩きだせ」

「ちよっ、ヴァルファム様？」

「今日中にこの屋敷から。私の手を煩わせることなくすみやかに」  
ファティナがぎょっとしたように声をあげたが、エイリクはそれ以上に驚愕した。

兄さま？

何故突然そのような言葉を向けられるのか、エイリクはまったく理解できなかった。

もう傷つけたりしないと云っているのに、どうやったら兄は信じ  
てくれるのだろうか。

ヴァルファムに抱きあげられているファティナが抗議の声をあげながら暴れているが、ヴァルファムは少しも頓着していない。

ただ冷ややかな眼差しで　まるで憎しみさえ込めた眼差しで、エイリクを見返してくる相手の心がエイリクにはまったく判らなかつた。



## 憤慨

ヴァルフアムはその音を確かに聞いた。  
ぶちりと何かが切れる音を。

結婚相手を決めたと義母に報告するために居間へと向かったというのに、そこに義母の姿を見つけることはできなかった。

拳句、丁度居間にいた侍女の一人がまるで叱られるのを畏れるようにがばりと頭を下げたことも気に障る。不調法な使用人など必要が無いと自らのリストに留め、義母の居場所を問えば、更にはね仕掛けの下らぬ玩具のようにびくりと跳ね上がり、女は慌てた様子で「中庭においでです！」と悲鳴のように高い声をあげた。

家族の為の居間があるのは二階。そこから中庭を確かめれば噴水の近くに白い物体と共に座る義母の姿が見えた。

ふわふわの体毛に抱きつくようにしているのはまさに子供がいなのなものでもない。

いったいいつまであの人は子供でいるつもりだろうか。  
ヴァルフアムは苦笑をこぼし、瞳を細めた。

いいや、子供でいればいい。

いつもそうやって日の下で無邪気にくつろいでいればいい。自分の心が激しく揺れるのは、あの人が時々大人のような顔をするのがいけないのだ。

十三で嫁いだまま、そのままの小娘様であれば自分はきつと揺るぎなどしなかったものを。

かつりと長靴ちやうかの音をさせて身を翻し、ゆっくりと自分の心を定めるように落ち着くように一つ一つ考えながら歩く。

あの人と自分との間にある距離を。

女史と結婚し、子を成せばあの人はきつと嬉々として孫の世話を  
するに違いない。まるで自分の子のように愛し、慈しむに違いない。  
それはどれだけ素晴らしい光景だろう。当然子は男子がいい。男  
であれば跡継ぎとなれるし、おそらく父親である自分に似ることだ  
ろう。決して母親メアリ似の女子など要らぬ。父親わたし似の男子だ。色素の薄  
い金髪に碧玉の瞳。やがて歩き出し、ファティナのドレスにまとわ  
りついて抱っこをせがむ。

ババ様。

……

夢想にぴくりと眉が寄った。

「お祖母さま」

来年子供が産まれるとして、喋り始めるのは三年後か いや、  
二年後。その時はファティナは二十歳前後。それを思えばお祖母さ  
まなど不似合いだ。いくら舌足らずの子供でも、さすがにそれはお  
かしい。

ファア様、ファティ様。

孫はファティナを名で呼ぶだろうか。それは由々しい。不敬だ。  
許されない。

などとヴァルファムは激しく下らない思考に埋没していた。やがて  
孫の姿がしっかりと立ちあがり、ファティナの腰の辺りに張り付く  
のを夢想する。

「  
」

何故かだんだんと腹がたつような気がしてくるのが不思議だ。

おそらく孫 自分の息子はファティナに良く懐くだろう。彼女は

子供が好きだから、愛情をたっぷり向けられた子供はファティナに甘やかされて育つに違いない。

子供が十歳になればファティナは三十前後か。それでもまだ若く穏やかに微笑む彼女が想像できる。そして

一階の部屋のテラスに出た途端に視界に飛び込んだその光景は、まさに想像のままだった。

十歳前後の少年が、義母と共にいる。

白い犬にもたれたままのファティナと、そしてエイリク。エイリクはまた懲りずに何をしているのかと眉を潜めたヴァルフアムの前で、エイリクの手がファティナの手に触れ、その指先に唇で、触れた。

すつと自分の中で何かが冷えた。

血の温度が急速に冷えて、脳裏に薄いもやがかがるような不快さが満ちていく。ファティナが慌てて立ち上がり、エイリクの額に手を当てて何事か言えば、エイリクはファティナを引き寄せ、抱きしめた。

駄目だ。

下がっていた体温が一気に沸騰するようにあがった。目の前が真っ赤になるような衝撃。あえぐように息をつき、軽く首を振っていた。義母に触れるものが誰であろうと、許せる気がしない。

セラフィレスの声がからかうように「子供相手に大人気ない」と耳をよぎった。

知るか。

エイリクがこちらに気付き、けれどまるで照れるような笑みを向けながらファティナから離れた。足早にファティナの前に立ち、その体を抱き上げるとファティナは悲鳴を上げたが、ヴァルフアムの

指先はわずかに震えていた。

自分の腕の中に収めてやっと、少しだけ安堵した。抱き上げた柔らかなさも、重みもぬくもりも誰のものでもない。自分のものだ。

自分だけの。

その安堵の息が唇から漏れるのに、腹の中でくすぶるものが消え去らない。

大人気ない。

確かに。これではセラフィレスに笑われても致し方ないのではないだろうか。

自分で自分の分別ない行いに多少辟易としながら、それでも虚勢をはるように「義母うえに近づくなと言った筈だな」と低く告げた。まったくどうかしている。

これでは年端もいかぬ子供が弟に母をとられたと暴れるようではないか。本当にどうかしているとしか言いようが無い。いったい自分は幾つだと自らに説教をしたいほどだ。

それでも現実として自分は咄嗟にファティナの体を抱き上げてしまっている。ここは強く叱責して済ませてしまえばいい。

そう、思っていた。

エイリクの口がその言葉を落とすまで。

「あの、ぼくの態度は……良くなかったです。反省しています。もう二度と義母<sup>かあ</sup>さまに酷いことはしません」

照れたように困ったようにはにかみながら、エイリクは切々と口にした。

義母<sup>かあ</sup>さま。と。

聞き間違いかと一瞬眉を潜めた。

エイリクの口から落とされた音の意味がいまいちつかめずに、口の中で幾度か転がしてしまったヴァルフアムは、やがてその音が小娘様を示し、親しげに告げられた声音が脳内でゆるりと広がり、そしてぶちりと何かが切れるような音を聞いた。

いや、感じたというのが正しい。

ぶちり、と。

怒り。憤り。

競りあがった気持ちを必死に押さえ込んだのは、ともすればその怒りのままにたかが十歳前後の子供を本気で殴り倒し、その腹に長靴ちょうかを叩き付けたい衝動に駆られた為だ。

大人気ない？ ああ大人気ないだろう。

それがどうした。

「クレオール、エイリクを叩きだせ」

目障りだ。

狭量だろうが何だろうが知るか。

ヴァルフアムは射殺す眼差しでエイリクを睨みつけ、くるりと身を翻した。

腕の中のファティナが激しく暴れ、怒ったように「ヴァルフアム様！」と怒鳴る。それを睨みつけてやると、ファティナは一瞬息をつめたような顔をして、ついで義息の機嫌をとるように眉を潜めて唇を尖らせた。

「エイリク様は何も酷いことはしておりませんのに。何を怒っていらっしやるの」

「怒っているように見えますか？」

「それがいにどう見えるのですか」

ファティナの手がぎゅっとヴァルフアムの襟飾りを掴む。

「では怒っているのでしょうか」

「ヴァルフアム様！」

理解してもらえないとは思えない。到底無理だろう。

この激しい憤りを、苛立ちを、嘆き、悲しみを。

自分が一番理解したくないのだ。

幾度見てもたかが愚かな小娘のこと。

だがその小娘の為にこれほどにも感情は激しく揺さぶられ、熱を持つ。

今、許されるなら……

ヴァルフアムは口の端に笑みを浮かべ、困惑したように自分を見る相手を瞳を細めて見つめた。

許されるなら　握りつぶしてしまいたい。

「エイリク様は優しい子ですわ。ヴァルフアム様が心配するようなことはもうありません。

ですからどうぞ怒ったりなさらないで。帰れだなんてかわいそうです」

「私が何を心配しているのか、あなたには判りませんよ」

鼻で笑うように言えば、ファティナはますます唇を尖らせた。

「まあ、判っておりますわよ。わたくしが傷つけられたりしないかと心配なさっているのでしょうか？　ヴァルフアム様はちょっと過保護すぎです。わたくしは小さな子供ではありませんのに」

「違いますよ」

傷つけられるくらいどうということもない。  
多少傷つけられても、それを補うことはできる。傷ついたあなたを慰めることなどいくらでもしてやる。

「違います」

力強くもう一度言葉を落とし「とにかく、もうあの子供にかかわ  
」

あの子供に関わらないように。と更に強く言おうとしたというのに、  
ファティナの手がぎゅっとヴァルフラムの頬をつねった。

そんなことをされたのはじめてでヴァルフラムは驚愕に瞳を見  
開き、ついで足を止めた。

「兄君は弟君に優しくしてさしあげるものです！ どんな理由があ  
ろうとも、あんな風に冷たくして良いわけがありません」

いつになく強い口調でファティナは言い切ると、啞然としている  
義息の腕からのがれて床に着地し、厳しい表情で言い切った。

「家から追いだすなんて、酷いことを言ってごめんなさいとエイリ  
ク様に謝るまで、ヴァルフラム様のデザートは抜きです」

「……はい？」

「本気ですからね！」

……デザートはまったく気にしないが、いったいこの人は突然何を  
言い出すのだろうか。

まさか自分が食べ物如きでエイリクに頭を下げるとでも？

馬鹿にされているような生暖かい気持ちがいじわりと胸に広がって  
いく。それと同時にファティナが母親の顔をしてエイリクを擁護す

るのが激しく 気に入らない。

## 勝利

メアリは苦悩していた。

ファティナにヴァルフラムの悪行を洗いざらいぶちまけてやりたいと怒りのままに思ったものだが、それは同時にファティナの心をも損なうものである。

もし、信じていた相手が自分を騙していたと知ればあの方の心はどうなってしまうだろう。自分の行いがファティナにとって悪い結果ばかりをもたらすものであつては決してならない。

そもそも自分はいつたいどのようなようにあの腐れ悪魔の害虫馬鹿義息のことを語るうというのか？

「親子は口付けしあつたりしません」

……否、しないとは言いつれぬ。言いつれぬが、なんというか、程度とか何かが違うのだ。親子間の口付けはさりと爽やかなものだろう。だが いや、あの二人にしても爽やかといえは爽やかといえるかもしれない。

いわゆるフレンチキスをしている様子は見られないし。

そこまで考えて更にメアリは頭を抱えて絶叫してしまいたくなくなった。自分はいつたい何を考えているのだろうか。自分の主に対してなんという妄想を！

メアリはあまりの気恥ずかしさに近くの壁になつきそうになつてしまった。

なにより嫁入り前の女がキスの妄想でどうなのだろう。なんて破廉恥な。

ああ、駄目だ。こんなことではいけない。

よし、次。気をとりなおして次だ。

次　　そう、親子は同衾しない。

訳ではない……だが、二十歳を過ぎた男は実の母親といえども寝台を共にしたりしない。いや、これにしてもヴァルフアムが好んでしている訳ではないことは承知している。いつだってファティナ様が「眠れない」とか「寂しい」を理由に義息の寝台に入り込むのだ。

くうつと苦痛のような呻きが唇の隙間から漏れた。

これでは悪いのはファティナ様であってヴァルフアム様ではなくなってしまう。何か、何かと探すうちに、メアリは八つと息をつめてやっと回答を得られたようにぴんつと背筋を伸ばした。

息子は母にキスマークなどつけない！

そうだ。これは絶対にありえない。たとえ実の親子であつてもありえない。

そのことをとつくりと説明すれば、いかなファティナ様といえどヴァルフアム様の行いの悪さを理解して下さるに違いない。

しかし、今まで虫刺されだと言っていたのだからこれをどうキスマークなのだと理解させればいいだろうか。キスマークの説明……なんと難解な。

「メアリさんっ」

突然呼ばれ、夢の中にもいたメアリは危うく悲鳴をあげてしまっそうになった。

あまりのばつの悪さにきよろきよろと辺りを見回し、自分が現在使用人達が使用する狭い石廊下を歩いていることを思い出す。

そして相手は石廊下をばたばたと走っていた侍女の一人。

「エイリク様とヴァルフアム様が喧嘩になりそうなんですっ、どうにかして下さい」

「なつ、そんな無理をつ」  
クレオールさんに頼んで下さい！  
「とにかく中庭につ」

メアリはこめかみの辺りにつきつきという小さな痛みを感じた。

確か自分はしがない女講師であった筈……

\*\*\*

その時、メアリの胸に飛来したものは感動だった。  
あのファティナ様が、きつぱりと義息を拒絶するように言葉を叩き  
付けたのだ。普通の義息を諫める正しい母のように。決然とした態  
度で。

なんて素晴らしい。立派です奥様！

「ごめんなさいとエイリク様に謝るまで、ヴァルフラム様のデ  
ザートは抜きです」

しかし、最後の一文はちょっと駄目だ。

メアリは感動が一転、なんとというか切ないものにかわってしまっ  
とに胸を痛めた。

今までこんな風に母親らしく義息に強く出たことなど滅多になかっ  
た人が、なんと成長したものと称賛したいのだが、二十歳過ぎの  
男を捕まえて「デザートを抜く」といったところで痛くもかゆくも  
ないだろう。

そんな言葉が有効なのは他ならぬファティナ様くらいしかない。  
いくら自分がいやなことだろうと、彼女の義息には何の心痛にもな  
りはしないだろうに。

案の定、彼女の義息ときたら物凄く見下したような視線を義母に向けている。

あんな視線をとっくりと向けられ続ければ、ファティナ様の心が容易く折れて、意味不明に「ごめんなさい」と謝り出してしまいたいそう  
だ。

まさに蛇に睨まれたカエル。

狼の前のか弱き子猫だ。耳が伏せて体が小刻みに震えてしまいそう。メアリの視界の中、ファティナの凜とした姿勢が気弱に前かがみになっていくのを感じる。それに合わせてヴァルフアムが更に大きく感じるのは気のせいではないのではないだろうか。

メアリは咄嗟にファティナに駆け寄り、そして考えるより先に声をあげていた。

「デザートでは効きませんでしょう。いつそのこと」

言葉にしながらすでに後悔していた。

ヴァルフアムとファティナの視線が驚いたように自分に集中する。それを畏れるようにメアリはあえて遠く、ヴァルフアムの背の向こうでエイリクがこちらに来ようとするのを執事が止めているのを見ていた。

自分が聞いたのは確かヴァルフアムとエイリクが揉めそうで止めて欲しいという話だった。だが現状揉めているのは女主と馬鹿義息だ。

ああ、よく判らないがややこしい。

そして更に言えば突然口を挟んだメア리를憎しみまみれの視線で自らに求婚した筈の男が見ている。

自分より二つ年齢が上で、そして身分は侯爵家嫡男　現状は騎士団所属の将来有望株。腹立たしいことに貴公子などと影で言われる女性達の垂涎的の男は、この自分に求婚したのだ。

本来であれば頬を染めて喜び、恥じらいさえみせて「お望みのままに、我が君」とさえ応えるだろう。

相手が病気持ちでさえなければ。

ヴァルフアムは害虫でも見る眼差しで自分を見ている。  
見下ろしている。見下している。

その冷やかな視線にふつと何かが、切れた。

結婚？ 冗談ではない。

たとえ結婚など便宜上のことといえど、自分がこの面前の男と結婚することはありえない。

「奥様、ヴァルフアム様にデザートを抜いたところでまったく痛くも痒くもありません。むしろ、奥様を抜いたら良く効くと思います」

ええ、確実に。

メアリは宣戦布告を込めてヴァルフアムへと微笑みかけた。

ヴァルフアムは自らの前に立ちはだかった壁に一瞬怯みかけた。ほんの少し前に、自らの妻にと定めた女は、まるで現状でその地位を手にしたかのような傲慢さでもってその場に立ち、そしてファティナを盾にでもするように下らぬことを言い放ったのだ。

「女史？」

戸惑うようにファティナが自分の一歩後ろに立つ女史を見上げると、メアリは教師の顔で囁いた。

「エイリク様に謝らない限り、ヴァルフアム様と口を利かないで下さいませ。挨拶のキスも、触れるのも禁止です。宜しいですね？」  
「何を言っているんだ」

ヴァルフアムがいらだって声をあげれば、ファティナが慌ててヴァルフアムに話しかけようと口を開く。だが、メアリは優しい母や姉のように、ファティナの唇に指先を当てた。

「喋ってはいけません」

その言葉に、はじめこそ戸惑いをみせていたが、やがてファティナは楽しい遊戯のはじまりと言うようにぱっと表情を明るくした。

良い考えかもしれません！ その顔が爛々と輝いてそう告げている。

かつと熱が生まれ、ヴァルフアムはファティナへと手を伸ばしたがメアリがそれを阻んでファティナの体を引いた。

「触れるのも禁止です」

「女史！」

「さあ、ファティナ様。エイリク様とお茶にでも致しましょうか？」  
どんな理由で揉めているのかは判らないが、どうせまた下らぬことなのだろう。メアリはふんつと鼻を鳴らしてしまいそうになったが、生来の淑女教育がそれを押し留めた。没落しても淑女レディであることに代わりは無い。

腐っても侯爵家嫡男に求婚される程度には。  
それを思い出すだけで腹部にもやまやとしたものが溜まり、激しい動力にかわった。

視界の端にいたエイリクが乱暴にクレオールを押しつけて駆けてくる。

頑かたくな少年の顔立ちは強張って見え、メアリは複雑な気持ちを味わ

った。

「エイリクはたたき出すと言ったでしょう」

辛らつに言う義息の言葉に、ほんの数メートル背後の少年がびくりと身をすくめる。ようやくファティナが何について怒っているのか理解したメアリは更に意地悪い口調で言葉を続けた。

「まあ、エイリク様はお帰りですか？ でしたらいつそエイリク様  
にお願いして旦那様の御領地までお送りして頂いたらいかがでしょ  
う？」

「まあっ」

嬉しそうにファティナが声をあげたのを皮切りに、ヴァルフアム  
は苦痛の呻きをもらし、

「判りました！ エイリクを追い出したりしませんっ。それでいい  
ですね？」

あまりにも早すぎる。

高い矜持が邪魔をして一日程度は絶えるかと思えば、即効手のひら  
を返した。

ファティナという餌は疑似餌ではなくまさに生餌ということか。

メアリは内心で乾いた笑みを浮かべた。

なんという入れ食い。

忌々しいという憤りを惜しまないヴァルフアムの視線を真っ向か  
ら受けて立ちながら、メアリはほんの少しだけ溜飲を下げつつ、  
「駄目です。確か、条件はエイリク様に謝ったら、でしたよね？

奥様」

とどめを刺した。

さあどうだ！

メアリはすがすがしい気持ちで胸を張った。

脳裏に解雇という単語がちらついたが、自分のしたことに悔いは無い。

気の弱い自分が成長したものと、なんとなくメアリは自分が誇らしかった。

勝利（後書き）

女のイベントを汚されたメアリの恨みは深いのです。

## 親離れ

エイリクは喉の奥がやたら乾く感覚と、身が強張る思いに戸惑っていた。

突然兄の屋敷から出て行くようにと言われる意味もまったく判らず、不安のようなものが辺りを支配する。何よりもまず兄と話し合わなければいけないのだと判断しても、この屋敷の執事がそれを阻む。

焦りがどんどんと広がり、なんとか兄の元へと駆けつければ事態はすでに好転の兆しを見せていた。

「エイリク様に謝って下さい」

何故、義母の家庭教師が偉そうに胸を張っているのか理解はできないが、さすがに兄に頭を下げさせるつもりはない。

「ぼくは居て構わないですよ。兄さまが許してくださいならそれでいいのです」

兄の謝罪は必要ではない。兄に対する支援として声を掛けると、義母がふわりと柔らかい微笑みを浮かべ、その手を伸ばし、

「エイリク様は良い子ですわね」

頭を撫でた 腹立たしいことに。

この人はぼくのことをいつたいいくつだと思っているのだろうか。十一だ。来年には士官学校なり神学校なり教会に入ることのできる年齢だ。決して子供ではない。身長だって義母とたいして変わらないというのに、この、明らかに小さな子供を相手にするような扱いは許しがたい。

咄嗟に文句がこぼれそうになったが、それではまた兄に叱られて

しまつ。ぐつと耐えたが掴んだ拳はふるふると震えた。

やっと乗り越えられたかと思つたというのに、果たしてなんと高い壁だろうか。

おそるべし、義母さま。

「それでは、仲直りのしるしに」

しかも義母は明るい口調で言つた。

「お二人とも握手なさいましょうね」

にこやかに言つたファティナとは違い、ヴァルフアムもエイリクも その場にいたほかの使用人達もさすがに絶句し視線をそらした。

敬おうと誓つた筈だ。

エイリクは必死に何かを耐えた。

具体的に言えば、思わず口からこぼれそうになる「馬鹿ですか」という言葉を。

まったく本当に、この人を相手に怒りを覚えていた自分こそが馬鹿らしい。

\*\*\*

「義母うえに話があつたのですが……」

夕食の後、どこか疲れた様子のヴァルフアムが前髪をかきあげてゆっくりと口火を切つた。

一日があわただしく流れ、やっと穏やかな空間を取り戻したヴァルフアムだったが、なんだか本日は敗北感が身に染みている。

いったいぜんたい何故こんなことになつたのか本当に理解しがた

い。

エイリクはすでに離れへと戻っていたし、残っていたファティナもそもそも自室へと引き上げる頃合だ。

そこではじめて、ヴァルフアムはファティナに話があったのだと思いついた。

「わたくしにですか？」

ファティナは小首をかしげ、笑みを浮かべた。

「なんででしょうか」

結婚相手を決めました。

そう、言葉はするりと落ちずにヴァルフアムはふっと苦笑した。今更何を迷うことがある。これは定められたことで、立ち止まるべき事柄ではない。

だというのに、どうにも往生際の悪い義息は遠まわしな言葉を選んでいた。

「私が結婚するといったら、どう致しますか？」

まあ、おめでたいことですわ！

おそらくファティナは嬉しそうに微笑んでそう言うだろう。それこそ、おめでたい調子で。

ヴァルフアムがそう予想したのと違い、しかし面前の義母の表情は一瞬かげるように強張りを見せた。ふっとほんの一瞬、微笑みが固まるように。

「……義母つえ？」

問いかければぴくりと反応し、慌てて唇を笑みの形へと持ち上げる。

「素晴らしいことですわ」

意外な反応を引き出したことに、ヴァルフアム自身が戸惑い義母の瞳を覗き込んだ。だが、義母の視線がついっと逃れるように泳ぎ、ついでそのまま身を翻そうとするものだから、ヴァルフアムは咄嗟にその腕を捕まえていた。

「義母っえ？」

「なんでしようか」

「こちらを向いて下さい」

「もう、休みますから」

心臓が無意味にその鼓動を早める。

ファティナが見せた表情に、ヴァルフアムは身勝手な妄想を重ねあわそうとしている。そう、違う。これは間違いだ。こんな勝手な思い込み

私が結婚するのを嫌がっているのではないのか？

それまで決してそんな反応を示したことは無かった。

義息の婚姻を誰より望んでいた筈のファティナが見せた動揺に、ヴァルフアムは自分の思いが反応するのを止められずに力任せに引き寄せた。

「義母っえ、私の婚姻を　喜んではいただけないのですか？」

口元が笑みを刻み付ける。

腕の中で身じろぐ義母を無理やりに自らに向けて、泣きそうな戸惑う顔を

心臓が早鐘を打ち鳴らし、とろりとした誘惑が腹部を満たしていく。

イヤだと言って欲しい。

結婚などして欲しくないのだと。そう告げてくれれば、この義息を他の誰にも奪われたくないと望んで欲しい。

そうすれば

「ごめんなさい……」

「いやなのですか？」

何故？

自分の中で期待が膨れ上がる。かぐわしく、柔らかく甘美なものが胸の内で

「子離れできない義母で情けないです！」

「」

ファティナは泣きそうな顔で言うと、ヴァルフラムの肩口に顔を沈めた。

「ごめんなさい、ヴァルフラム様。わたくしお嫁様を虐めたりするつもりはありませんけれど、やっぱり世の中のお姑様の気持ちは判ってしまつのです」

「」

「ああ、どうして嫁姑戦争を楽しみなんて思っていたのかしら。きつとヴァルフラム様はお嫁様と義母の間で板ばさみになってたいへんな想いをなさることになりますわ」

ぎゅうつと義息の肩口を抱きながら切々と語る義母の様子に、ヴァルフラムは歯を食いしばった。

「がんばって子離れ致しますから」

「子離れ……」

低く唸るような言葉が落ちた。

子離れ

腹をたてるな。もともと期待するだけ無駄なのだから。こちらの勘違いであってファティナが悪い訳ではない。

勝手に勘違いをし、期待し、また落胆しただけのことだ。

そう、ファティナが悪い訳では　いや、これはある意味一歩前進ではないだろうか。

嫉妬の一種と捉えることもできない訳ではないではないか。

ヴァルフアムは自分の幸せが随分と低い位置に移動していることに気付いていたが、あえてそこには触れなくなかった。

「義母うえは私から離れておしまいになるつもりですか？」

「そのほうが宜しいでしょう？」

眉根を寄せる義母の頬に自らの頬を摺り寄せて、ヴァルフアムは苦笑した。

「義母うえがどんなに子離れしたいと望まれても、私は親離れする気はありませんよ」

それに、

「私が婚姻したところで、何かが変わる訳がない。きっと貴女は喜んでくださるでしょうね。」

私はあなたの家庭教師と婚姻するつもりです」

ファティナの身が強張ったのは、そう……　だから、ただの勘違いでしかない。

## 触れぬ心

ひんやりとした空気が世界の全てののように感じられた。

闇の内、窓から差し込む青銀の月明かりの下で眠れずに数字を数えるのはもう卒業した筈の遠い癖の一つ。

あの頃は、父や母が安全に航海することを願い無事に帰宅する日々を願い月夜を眺めた。

けれど今は、今は……何を思えばいいのか、ファティナは自分でも理解ができないことに戸惑っていた。

眠れぬ夜ならば、温かで安らかな眠りを与えてくれる義息の寝台に行けばすむはずだった。

溜息を一つ、呆れた言葉を一つ。

それでも義息はそのキルトを持ち上げて安眠を与えてくれる。おそらく今日もそうしてくれるだろうというのに、ファティナは自らの寝台の上で体を丸めてただじっと冷たい夜をやり過ごす。

「旦那様……」

そっと囁いて、枕を抱きしめて瞳を伏せる。

共に居て欲しいと願いながら、瞼が震えるのを必死で堪えた。

「旦那様」

自分にとって唯一の人を求めているのに。その手に触れることは適わない。

触れて、抱きしめていて欲しい。

覚えているのは大きな手と、そして鋭い眼差し。正面から受け止めるには強すぎて、ファティナは相手の顔をまともに見ることも適わなかった。

どきどきとはぜる心音のつるささと、緊張と、意味不明なほどの動揺。

婚姻するのだといわれたときは、その意味すら自らに溶け込もうとはしなかった。

忙しい父や母はいつもファティナを赤ん坊のように扱った。そして時々立ち止まり、じつくりと見ては「大きくなったわね？」と戸惑うように引き寄せた。

父の領地は辺境で作物もあまり育たない。山に入れば獣が跋扈し、狼の遠吠えが怖くて眠れぬ夜を数えた。年に数名の子供が病や飢えで亡くなった。本当に悲しくなるくらい大地は恵みをもたらさず、それでも必死に羊を飼ってその肉と柔らかな毛を産業とした。だからこそ、父と母とは躍起になって商業に手を出したのだ。

貴族といったところで下級貴族。商売に手を出せば更に貴族社会からははじき出されて立場を失う。だが、それでも領民を守る為に動くしかなかった父と母は　ある日、仕事の商談で海を渡りもう二度と戻らなかった。

ファティナがその知らせを受けたのは、遠い地で葬儀も全て終わった後。たった一人残された娘に真実がもたらされたのは最後だった。

その知らせと同時に、ファティナは自らの夫と出会ったのだ。

三十六歳も年上の夫。

自分の父親よりも年上の夫に、ファティナが望んだのは一つだけだった。

\*\*\*

表面上は何事もなく数日が過ぎていた。

エイリクは首にクラバットを巻きながら鏡の中の自分を眺める。

兄は忙しさが増してこの二日程は帰宅していないが、長期休暇をと

るということでそれは仕方のないことなのだろう。

話したいことは山とあったが、この先にいくらでも時間はとれる。

「今日はどうなさるのです?」

身支度の準備を手伝っていたジゼリが嘆息交じりの声で言う。

ジゼリは早々に自宅へ戻ろうと相変わらざるさいが、自分の慣れぬ場なのだから女にはきついのだろう。なんといっても、ヒースの屋敷では采配をふるべき女だが、この屋敷ではすることもない。全ての手配をこの屋敷の執事がまかっているし、下働きのようなものは多く居る。退屈が不平不満となって蓄積されるのかもしれない。

エイリクは溜息をつき、確かにそろそろヒースに戻る頃合なのだろうと考えた。

この屋敷に留まることは 実際、楽しくなっていたが。

兄とも多少は会話ができるようになっていたし、義母は……なんである人はああ愚かしいのだろうか。兄という保護者がいないと生きていけないのではないかという情弱ぶり。自分はおそらく見えもせぬ母という生き物に多く求めすぎていたのかもしれないと最近では自分を反省するほどだ。

「エイリク様?」

「今日は教会に行く」

「……本気でいらっしゃるのですか?」

「ああ。来年から教会に入り、聖騎士を目指す」

自分の性格上我慢の利かないこともあるだろう。だがそれはゆっくりと自分を律して成長していけばいいことだ。

「どうしてでございますか。私がこれほどお頼みしておりますのに」

「ジゼリ、もう決めたことだ」

「私はイヤでございます! 騎士にならなりたいのであれば士官学校

で宜しいではありませんか。なぜ教会なのですか。妻帯もできないのですよ?」

そう口にし、八つとジゼリは気付いたように瞳を開いた。

「そうです。妻帯できないなど駄目ですよ。もし兄君様になにかあった時はエイリク様がこの家の跡取りなのです。その跡取りが妻帯できないなどと許されることはありませんよ。こんな話はあつてはいけません」

せわしなくわめきたてるジゼリの言葉は確かに一理ある。だが、半ばうんざりとしていたエイリクは自分に縋つてこようとすると相手を軽く手を払った。

「ならば義母さまがお子を成されればいい。義母さまは未だお若いのだから、この先にくらでも弟など生まれる」

ファティナの旦那様談義に幾度か捕まっているエイリクは、思わず小さく笑ってしまった。義母は子供を欲しがっている。自分の下に弟や妹が生まれることも 悪い話ではないだろう。自分とは違い、きつとあの人はあの人自身の手で子供を抱き上げ、頬を寄せて愛情を込めて子供達を育て上げる。

それを思えば多少うらやましいという思いがわきあがり、ついで子育てに協力しなければ、いったい自分の弟や妹はどんな風に育て上げられてしまうのか危険ではなからうかという危惧も生まれる。

滑稽なことだ。

「あの女の産む子など、誰の子かも判りませんよっ」

しかしそんな夢想を打ち破る悲鳴のように言われた言葉の酷さに、エイリクは咄嗟に自らに更に縋ろうとする乳母を押しつけて怒鳴りつけた。

「いい加減にしろっ。退屈だからといっておまえは何を考えている

んだ。もういい。そんなにヒースに戻りたければさっさと一人で戻れ。ぼくは手続きをすませたら戻る」

当然のようにジゼリを連れて来たが、もとよりヒースにおいてくれば良かったとエイリクは後悔していた。

まったく、ジゼリの過保護はいつたいつになれば治る病なのだろうか。

まるで子離れの出来ぬ酷い母のようだ。

そうまで考えてエイリクは顔をしかめた。

「私の可愛いエイリク様が……」

ジゼリがわなわなと身を震わせてぎゅっと自分の手を握りこむ。

それを見ているのことに煩わしさを覚え、エイリクは冷たくもう一度告げた。

「おまえは疲れてるんだ。ヒースでゆっくり休めばいい」

最後の言葉は多少優しさを滲ませたが、ジゼリはうつむいたままいつものように「私のエイリク様が……」と熱に浮かされるように呟いていた。

\*\*\*

籐の椅子の中で身を丸めるようにして眠るファティナの横で、クレオールは膝をついてファティナに手を握られている状態だった。

この数日、ファティナが夜眠れていないことには気付いていた。

添い寝が必要であればメアリ女史に声をかけましょうかと進言してみたが、ファティナは儂い微笑みを浮かべて「いつまでも子供でいる訳には参りませんもの」と気丈に言っただけだが、昨夜などは明け方に力尽きて眠るといふ様子で決して健全な眠りでは無い。

クレオールは瞳を細め、吐息を落とした。

「まだナイシヨですわよ？」

そう唇に人差し指を押し付けてファティナが囁いたのは、すでに

ヴァルフアムから告げられていたことだ。

男主と家庭教師の婚姻。

それはまさにクレオールとしても青天の霹靂だった。

ヴァルフアム本人から告げられた時も、クレオールは「は？」としか浮かばなかったものだ。

「女史はまだ何も言ってお下さいませんの。こういう場合はわたくしからおめでとうと言うものなのかしら？ それとも言われるまで待つものでしょうか？」

「どうでしょうね」

果たしてそれがめでたいことであるのか理解しかねる。

「女史が報告してくれるまでに、女史の部屋やお祝いの品を用意しようと思つのですけれど、クレオはどう思います？」

ファティナは楽しそうに告げるのだが、時折見せる吐息にクレオールは憐憫さえ覚え、そんな自分を恥じた。

何に対して憐憫などと。

自分の浮かんだ考えに首を振り、クレオールはふつと小さく微笑んだ。

「クレオールさんでもそんな風に笑うんですね」

突然の声に視線を向ければ、歴史学の資料を手に開いたままの扉から件の女家庭教師、メアリが顔を出した。

「入室の際はノックをするものです」

「両手が塞がっておりますから」

メアリは肩をすくめ、ついでふつと眉を潜めた。

「奥様、お休みですか？」

「今日はこのまま休ませて差し上げたいので、あなたももう引き上げて頂いて結構です」

そう言葉にし、ふとクレオールは眉を潜めた。

「若奥様、そう言ったほうが宜しいですか」

「止めて下さい。何ですか、それっ」

メアリは突然寒気に襲われたように身震いし、あやうく手の中の資料を落としてしまいそうになった。

「貴女と若様が婚姻すると報告を受けていますが」

「お断りしております」

心底嫌そうに言うメアリの様子に、クレオールはくっど喉の奥を鳴らした。

「そうでしょうね」

その相手を軽く睨みつけ、メアリは憤慨するように言葉を落としました。

「笑い方にも差別を感じます」

「ファティナ様相手とは随分違いますね」

嫌味っぽく口にしながらメアリ自身随分と淑女らしからぬ態度だと内心で慌てていた。

淑女であればそつなく対応できる筈で、こんな嫌味など恥ずべき行為だ。

クレオールは声のトーンをあげたメア리를咎めるようにきつく一度睨み、女主の為に声を潜めるようにに告げ、ついで思い出すように口調をかえた。

「私はまだ仕事があるのですが」

「え………?」

「もし貴女に何もなければ」

穏やかな調子で言われる言葉にメアリは自然と頬に熱を覚えながら「何ですか」と相手を促した。

「ファティナ様に付き添ってさしあげて下さい。人に触れていれば安心なさいますから」

「………」

「無理でしょうか」

「いいえ」

メアリは乱暴に返答し、持っていた本をテーブルに置いてクレオールと場を入れ替わった。

クレオールがファティナに掴まれたままの手をゆっくりと丁寧に引き剥がし、メアリの手を掴んでファティナの手に重ねる。

まさかクレオールに手を掴まれると思っていなかったメアリは、目に見えて動揺した。普段であれば白手に包まれている手が、今は直手で温かく触れる。

男性の手に触れるなどはじめてのことではないだろうかと思えばメアリの腹部はあわだつように奇妙な感覚に狼狽した。

「しばらくお願いします」

しかし相手ときたらメアリの動揺などどこ吹く風で知らぬ調子でさっさとその手を離れた。

ずっと立ち上がる執事の背を睨むように見送り、メアリは何故か不貞腐れるように顔をしかめた。

あなたはいつもファティナ様ばかり。

なんて台詞、口から飛び出す前にメアリは重い塊のように慌てて飲み込んだ。

\*\*\*

それからどれくらいの間が経過したのか、繋がる手のぬくもりにメアリ自身うとうとと船をこぎ始めてしまった頃合に、ふと人の気配を覚えて視線をあげた。

部屋の入り口に立つ女は見慣れぬものであったが、メアリは記憶のどこかに引っかかる相手に小首をかしげ、ああと小さく呟いた。

「確か、エイリク様の」

きちんと紹介を受けている訳ではない為に名前までは浮かびはしな

かったが、それはエイリクの使用人の一人であったはずだ。  
「その、奥様にお話があるのですが」

強張ったような口調で言う女はただじっと眠るファティナを見つめていた。

「奥様はお疲れですので、話があるのですしたらまた日や時間を改めていただいたほうが」

「その女に話があるのです！」

激しく訴える女の眼差しに、メアリは我知らずぎゅっとファティナの手を握りこんだ。

ははおや

突然耳に入り込んだ怒声と、自分の手を強く握りこまれた感触に目覚めた時、ファティナは自分の手を握りこんでいるのがメアリである事実に息が止まるのではないかという程の衝撃を受けた。

気に入りの籐の揺り椅子で転寝うたたねをはじめた時、共にいたのは執事のクレオールであった筈だ。

体に蓄積された気だるさに瞼を閉じたり開いたりしながら、クレオールの優しい声音を子守唄代わりに耳にいれていたのをきちんと覚えていいる。

だが、突然の金切り声のようなものと、自らの手を掴む強い力とがファティナの優しい眠りを退け、そして彼女の視界に入ったのは、自分の手を掴んだまま面前に中腰で立つメアリの背中。

「無礼が過ぎましよう。出て行って下さいませ」

緊張を孕んだ言葉が、つながる手からもその振動を伝えるように。「ただの女教師であるあなたこそ出て行けばいいっ」

悲鳴のように上ずり、高い声が誰のものであるのかは判らない。だが、ファティナは覚醒した頭にけぶるものを払拭するように二度ほどゆっくりと首を振り、あえぐように酸素を取り入れた。

一瞬浮かんだものは、それまで自らが感じたことなど無い恐怖だった。

何故、彼女が自分の前にいるのか理解できない。

それまで良く知っていた筈の人だというのに、身のうちが震える程にざわりと何か体が貫き、まるきり理解の出来ない他人のように感じた。

そう思う自分がやけに許せずに、ファティナは一旦ぎゅっと強く  
瞼を閉ざして、慣れた習慣で浮かんだ感情全てを飲み込んだ。

彼女はわたくしの大事な教師。大事な友人。そして、義息が愛  
し、妻にと望んだ人。

「何事ですか？」

ファティナは静かに問いかけた。

現状は把握できないが、何かの揉め事は理解していた。メアリが誰  
かと口論している。なれば、女主として振舞うことが正しい。

「どうなさったの？」

ファティナの問いかけに、メアリは緊張した面持ちで振り返り、  
自らの体で隠していた相手を示すように少しばかり横にずれた。

開けた視界には、強張るような顔をした女が一人。ファティナそ  
れが誰だか判らず、困ったように小首をかしげた。

「どなたでいらっしやいますか？ わたくしに、何か御用が？」

記憶のどこかで見かけたような気がするが、使用人の誰かであつた  
ろうか。

「用などありません」

しかし、女は強張った表情のまま冷たく言い切った。

「私のエイリク様を返してください」

低く訴える言葉は怨嗟にまみれる程冷やかで、けれど言われた  
ファティナは瞳をまたたかせて意味をつかみかねていた。

「エイリク様の……お母様？」

「そうですよ。そうっ、私がエイリク様の母親なのです」

女はそう口にし、途端に自分の言葉に勇気付けられるように勢い

を増した。

「そう、私が母親なのよ！」

エイリク様は私がこの手で育て上げたのですっ。私のエイリク様を返してくださいっ。私のお優しいエイリク様をっ」

女は自分の言葉に更に興奮を募らせるように声をあげた。

ずかずかと無遠慮に近づくことを遮る為にメアリは慌てて二人の間に割って入る。

「あの子は私の子なんだっ」

相手の様子は錯乱しているようで到底まっとうではなく、大きく見開いた瞳は血走っていた。

酒でも過ごしているのかという程の様子だが、実際どうかは見て取れなかった。

メアリの腹が急速に冷えるように恐怖を示すが、だからといってこの状態の女をファティナに近づけさせられる訳が無い。

「なんなんですっ、誰かっ！ 誰かいないのっ」

咄嗟にテーブルの上にあるベルを引っつかんでかき鳴らす。その間も相手から視線をはずすことは逆に恐ろしくてできなかった。

「どきなさいっ」

よくないことが起こる。

いや、起こっているという思いに頭の中がキンっとした痛みを覚える。

メアリは力づくでファティナに詰め寄ろうとする女の様子に、相手の肩を押さえ込み、開いたままの扉に意識をむけ、早く誰かが来ないものかと気をもむがあまり意識を散らしてもいられない。

興奮に口元に粟粒を飛ばした女は、憎むように怒鳴った。

「どきなさいよっ」

声と同時に、メアリは二の腕に風圧と熱を感じて一瞬息を止めた。

「女史っ」

ファティナの驚愕の悲鳴に自分の身におきたことを感じ取ったメアリは慌てて二の腕から視線をそらした。

見なければ現実として受け止めなくて良いというように。突然走った熱は、やがてひりひりとした毛羽立つような痛みに変わる。

「なにしてるんですかっ」

自分の腕は極力見ないようにして、メアリは普段の「淑女らしく」という言葉遣いをかなぐり捨てて叫んだ。

「包丁とか、馬鹿ですかっ」

度が過ぎている。

諫めるつもりで言った言葉だったが、いつの間に小ぶりの包丁を手にした女は「あんたが邪魔をするからだっ」と怒鳴り散らした。

「その女さえいなければっ、その女は悪魔なんだよっ。私のエイリク様が、お優しいエイリク様がっ私に冷たくするなんてありはしないんだっ。ぜんぶ悪いのはその悪魔に違いないっ。誰も彼もそれに気付かないなんてどうかしてる！」

更に包丁を振りかざしてファティナへと向かいそうになる女をなんとか引きとめようとしたメアリだったが、その自分にファティナがぎゅっとすがってきたことに啞然とした。

恐怖で身がすくんだのかと思ったが、こんな場でそんな真似をされれば自分だっただけ動けない。

「おく　っ」

小刻みに震えながらぎゅっと抱きしめてくるファティナは、メリの動揺を上回る凜とした声を発した。

「ヴァルファム様の大切な方を傷つけてはいけませんっ」

この緊迫した状況だというのに、メアリは嫌悪感から意識を飛ばしてしまいそうになった

\*\*\*

その後すぐに駆けつけたクレオールと下男によって女は背後から羽交い絞めにされ引きたてられて行き、へたりとその場で座り込んでしまったメアリと、しっかりとメアリに張り付いたまま恐怖のあまり腰を抜かし、青ざめているファティナとが残された。

「奥様、お怪我はありませんか？」

「クレオ、クレオ、女史がっ」

「はい、傷の手当をしなければなりませんからはがれて下さい」

クレオールは優しく言いながらファティナの二の腕を掴み上げ、元々座っていた籐椅子へと座らせた。

その視線はすぐにメアリの切られた二の腕へと向けられ、胸のポケットからハンカチを引き抜いて、テーブルの上の水差しで湿らせる。

「今救急箱を取りにいつてもらっています。傷は浅いようですから……平気ですか？」

クレオールの手が二の腕を掴み、濡れたハンカチを押し当てると、それまで熱であったものが、途端に小さな痛みが変わっていった。それでも僅かな痛みに過ぎない。ほっと息をついてメアリが視線をあげると、未だ青ざめて心配そうにこちらを見つめているファティナの様子に、ちらりとクレオールを見た。

「私は大丈夫ですから、奥様を」

「侍女がきたらそうします。今はじっとしてして下さい」

慇懃な口調で言う男は、物慣れた様子でメアリの衣装の切り口を押し広げて、血の拭われた傷口を見て小さく息をついた。

「血が酷く出てますけれど、傷はたいしことは無い。多少……傷跡

は残るかもしれませんが」

傷が残る。

その言葉に小さくうめきそうになったメアリだが、なんとかそれは押しとどめた。

「平気です」

「ごめんなさい……ああ、クレオ。女史はわたくしを庇って怪我をしてしまったのですっ。わたくしどうしたらっ。ああ、そんなことより、ヴァルフアム様を呼び戻してっ。女史もヴァルフアム様がいたほうが安心ですわよねっ」

半泣き状態のファティナの言葉は、生憎とメアリにとって安心できるものでもなければ心安らかになるものでもない。

メアリは疲れた気持ちで、黙々と自分の傷の手当をしてきている男の横顔をちらりと眺め、ついで脱力しきった口調で言った。

「奥様、何か勘違いがあるようですけど……」

「ああ、女史。どうしましょう。何か必要でしょうか？」

何でも言ったださいね。わたくしにできることなら

「とりあえず、その勘違いから修正させてください。このままその虫唾が走るような恐ろしいことを耳に入れ続けると、私、失神しそうです」

「失神？ それは大変ですわっ」

更に慌て始めた女主を前に、メアリは自分の言い方が悪いと反省し、言葉を続けた。

「私はヴァルフアム様と婚姻するつもりはありません。あの方と結婚など、世界が滅亡してもありえませんが」

きっぱりと言い切ると、ファティナは青ざめた顔のままメアリを見つめ、かすれるような口調で言葉を落とした。

「まあっ、それは……ヴァルフアム様の片思いなのですか？」

どうしましろう、という様子のファティナを見ながら、メアリは  
どう説明すれば理解してくれるだろうかという難問に眩暈がした。  
この生徒ときたら、素直さばかりはおつりが来るほどあるのだが、  
文章問題への理解度は果てしなく低い。

## 裁可

仕事中に飛び込んだ知らせに取るものもとりにあえず邸宅に戻り、侍女の言葉もあり耳に入れずに義母がいるという居間へと飛び込むとヴァルフアムは椅子に座っているその姿にやっと安堵の息をついた。

こちらの心配などどこふく風で寝椅子に座るその様子に、途端に安堵感と軽い怒りとがあふれ出るのを感じる。

「義母うえっ、お怪我は？ 何事があつたのですっ」

上着を脱ぐこともせず義母の椅子の前で膝をついたのは、下半身の力が抜けてしまったというのも理由の一つで、その身を抱きしめると驚いたままの彼女は身じろぎしながら困ったように言葉をつむいだ。

「あの、ヴァルフアム様……わたくしは平気です。それより、女史が」

「あなたの平気は信用ができない！ 怪我は？ 本当に怪我はないのですか？ 医師はどうしたのですっ」

言葉を乱暴に向けながら、そのぬくもりと心音にヴァルフアムは神に感謝していた。

普段から神とは仲の良いほうではないが、今度ばかりは感謝の言葉を並べ立てて賛辞してもいい。

ファティナ様が気の触れた暴漢に襲われました。

それ以降の言葉など耳に入る余地も無い。ただ世界は真っ白に塗り替えられ、耳鳴りと奇妙な空虚感で必死に馬を飛ばして戻ったのだ。誰がそんなことをしたとか、どうしてそんなことになったのかなど

考えても意味が無い。

ファティナが生きている。それだけが今の現実だ。

「怪我をしたのは女史なのです。ごめんなさい、あなたの大事な方を守れない不甲斐無い義母で本当にごめんなさい」

「そんなのはどうでもいい」

ヴァルフアムはぶるりと身震いした。

ファティナが誰かを守る？ それはどういう意味だろう。

誰も守らなくていい。むしろ、そんな真似をしてファティナが怪我でもしては目も当てられぬ。

「そんなの……」

ヴァルフアムの後ろで小さな声が落ちたが、ヴァルフアムはまさにそんなことを気にかけていたりしていなかった。

しかし、自分の前で膝をつき、ぎゅっと自分を抱きしめている義息の腕の中でファティナはそれどころではない。

義息ときたら完全に動揺しているのか他を視界にいれていないが、ファティナの視界にはしっかりとメアリ女史がうつっていた。

反対側のソファで医師の治療を受けているメアリがどうにも微妙な顔をしているのだ。

ファティナは血の気を引かせた。

自分などを心配するよりも先に、本来であれば自らの求婚相手を危惧するべきだ。それこそが正しい。

女史の心がヴァルフアムに無いというのであれば尚更、こんなことをしてはますます嫌われてしまう。

焦るファティナは軽く混乱しそうになっていた。

「ヴァルフアム様っ、女史がわたくしを庇って怪我をしたのですよ」  
ほら、慌てて！

そう思う思いを込めて言うが、ヴァルフアムはやっと安堵した様子で息をついて身を起こすと、何故か胡散臭いものでも見るように後

るを振り返り、医師によって包帯を巻かれている女史と、その横で医師の手伝いをしているクレオール、ついで治療を受けている求婚相手を見た。

「義母を庇って怪我を？」

やっとメアリへと向けられた言葉に、ファティナはほっとうんうんとうなずいた。

「そんなことより、ドクター。義母に本当に怪我などはないのか？  
どうして義母より先に女史の治療をしている」

苛立たし気な言葉に、メアリは思わずちらりとその視線をファティナへと向けた。まるで「それみたことか」と言われたような気がして、その視線を受けたファティナはわたたとヴァルフアムの袖を引っつかんだ。

「私のことはどうでも良いでしょう！　ご自身の愛しい方が怪我をなさったのですよ！　あなたときたらどうしてそう冷静なのですっ  
先ほどまではあからさまに動揺していたというのに。」

怒るファティナを制するように、包帯を巻かれた現状のメアリがやけに冷静な口調で言った。

「ヴァルフアム様」

「なんだ？」

「私の名前、ご存知ですか？」

メアリはにっこりと微笑んで問いかけた。

包帯を巻かれた腕をそっと撫でて、しばらくじっとりとヴァルフアムを見つめる。

何故かその場に重い緊張が満ちた。

ファティナはメアリの言葉の意味が判らなかった。

彼女は突然何を言い出したのだらう。当然、メアリの名前など誰もが知っている。ヴァルフアムだとてそれは理解しているだらう。何といっても相手はもうずっと同じ屋敷で暮らしていた相手だし、何より、自分が愛して求婚した相手なのだ。その相手の名前を知らぬ筈が……

「ヴァルフアム様？」

まさかとファティナが声を掛けると、ヴァルフアムは眉を潜めつつ「それに何の意味があります？」と低く言葉にした。

「そんなことより、クレオール。今回の件はいつたいどういうことだ？ 義母うえを襲ったというのは誰だ？ まさか愚かにもまた義母うえを外に連れ出した訳ではないだらうな？」

「ヴァルフアム様っ」

ファティナは声を荒げた。

「そんなことではお嫁様は来てくださいませんからね！」

突然怒り出したファティナに、ヴァルフアムはまったく理解できなかつた。

\*\*\*

「もう本当に情けないです」

ヴァルフアムと医師とクレオールとが部屋を出て行くと　ファティナが追い出したのだが　ファティナはぎゅっとハンカチをにぎりしめてメアりに謝り倒した。

「ごめんなさい。女史には何と云えばいいか……」

「奥様が謝ることではありませんし、あの　愛情とかもう本当に欠片もありませんので、結婚など無いと理解してくださいればそれで結構ですから」

「でも、ヴァルフアム様は女史に求婚なさったのでしょ？　なん

と不誠実なのでしょうつ。もう本当に酷いことです。結婚はとても神聖で素晴らしいことだというのが。ああ、でも、女史。ヴァルフラム様は時々ちょっとおこりんぼうですけれど、本当は優しい素晴らしい方なんです。今回は少しばかり誠実さが足りなかったかもしれませんけれど、どうか許してさしあげて下さいな。わたくしの旦那様のようにきつと素晴らしい旦那様になりますから」

ファティナが泣きそうな顔で義息のことを擁護するが、メアリは内心でいちいち突っ込みを入れてしまった。

ファティナ様にだけ優しいのです。

旦那様に似たら相当駄目だと思います。

決して言葉には出せない本心だった。

一人必死になっている女主を前に、メアリは包帯の巻かれた腕を軽く撫でながら苦笑した。

「今はそれどころではないと思いますけれど」

「……そうでしたわね？ いえ、あの……どちらも大事なことだと思いますわ。女性にとって結婚は一大事ですし。ああ、でも怪我もつ。痛くはありませんか？ ヴアルフラム様の花嫁様の為に今部屋を用意しておりましたの。そちらにうつられて、しばらくは安静にしていますね」

痛みより熱さを感じていた腕は、今は塗られた薬と、医師に処方してもらった飲み薬のおかげでひりひりとしたわずかな痺れのようなものがあるだけだ。

「怪我は浅いようですから、残らないと医師もおっしゃっておられましたし、むしろ奥様に何かあるよりずっといいです」

心が。

自分と一緒にいる時に女主に何かあれば、それこそ自分が許せなかっただろう。そんな後悔を背負うのであれば、自分が怪我をしたほうが絶対にマシだ。

むしろ晴れやかにそう思うが、怪我をしていないファティナは同

じよつにきつと心を痛めているのだろう。  
守られることも辛い。

「部屋をかえたりあまり気をつかったりしないで下さい」  
「でも……」

「でしたら、一つだけお願いをきいて頂いてよろしいですか？」  
泣きそうな顔の女主に、メアリはにっこりと微笑みかけた。

「まあっ、はい。どんなことでもおっしゃって下さい」

「計算式のプリント、十枚。真面目にやって下さい」

ファティナは好奇心も強いし、勉強は決して嫌いでは無い。だが、計算は激しく苦手だった。言われた言葉にびしりと固まり、つつつと視線をそらそうとする。

「少なくとも三日程度はわたくしも勉強のお手伝いできません。  
ですので、宿題はたっぷり出しますからきちんとやって下さいね？」  
「……はい」

悲しそうな顔をしているが、先ほどまでの罪悪感に塗られた顔よりずっといい。

メアリは晴れ晴れとした気持ちで、だがふっと　あの女のことを考えた。

エイリクの母親だと言い張った女を。

\*\*\*

「アヘンチンキの多量摂取ですね」

医師の診断にヴァルフアムは苦いものを飲むような顔をした。

「一般的には鎮静剤などに使用されますが、ご存知の通りアヘンチ

ンキは阿片、モルヒネなどを主材料にして造られる水溶性薬剤です。多量に摂取することによっておこる副作用は眩暈錯乱、混乱、妄想。これらの症状により誤った行動を起こしたのではないかと。今回ははかるうじて留まりましたが、もう少し多く摂取していれば最悪は死をも……」

「もういい」

相手の言葉をさえぎり、ヴァルフアムは片手を払うと執務室の机の前で青ざめて立つ少年を見返した。

「エイリク」

低い呼びかけに、少年の細い肩がびくりと反応する。

「おまえが主だ。どうする？」

自分の使用人の裁可をゆだねられ、エイリクは喉を上下させた。突然呼び出されて叩きつけられた現実、十一の少年には重過ぎるものだった。

自らを育て上げた乳母が、誰かに刃を向けるなど考えたこともなかった。

そして、その引き金が自分であることは間違いようもない。錯乱した乳母は、今は一室に閉じ込められ下男達が見ているが、落ち着いたり喚いたりをまだ繰り返している。

「おまえが決断できぬのであれば私が裁可を下す。ここは私の家で言った筈だな？ 私の家人に危害があるのであれば……」

「ジゼリは、連れて帰ります」

エイリクはぐつと手を握り締めた。

「警邏隊に委ねることだけは御寛恕下さい。ぼくが、ヒースに連れて帰ります。もう二度と義母さまの前にジゼリが立つことはありません」

きっぱりと言い切るエイリクに、ヴァルフアムは薄い笑みを浮かべた。

「早々に出て行け」

「はい　あの、義母さまは……大丈夫でしょうか？」  
「怪我をしたのは家庭教師だけだそうだ。もし義母うえが怪我をしていたら、その女は即刻監獄行きにしてやるし、おまえは騎士はおるか神職に叩き込んで。感謝するのだな」

冷淡に言う兄の言葉に、エイリクはうなだれるようにしてこくりとうなずいた。

## 思い違い

医師の処方した薬でようやく眠りに落ちた乳母を前に、エイリクは失意の中にあつた。

何故彼女があのような行動に出たのか、理解しがたい。ただのアヘンチンキの過剰摂取だけが原因であるのか、それとも日々の憤懣が爆発したのか、あるいは　エイリクの態度がそうさせたのか。

兄は、ジゼリをそうそうに連れ出せといていたが、医師がとりなしてくれた為に数日の猶予があつた。ほんの数日。ジゼリが自ら歩けるようになるまで。

エイリクは寝台で眠るジゼリを下女に任せ、疲れた自らを鼓舞して母屋へと足を向けた。

幾度も幾度も足が止まり、躊躇する。

怪我をさせてしまったという家庭教師の姿を認めると、強張つた表情でエイリクは声を掛けた。

「ぼくの家人が、ご迷惑をおかけ致しました」

丁寧に謝罪するエイリクの様子に、メアリは何故か狐につままれたような微妙な表情を浮かべ、更に苦笑するように口を開いた。

「乳母の方はお疲れでしたのでしょうか。あまり心を痛めませんように」

思いのほか労わりのある言葉にぐつと喉の奥が詰まった。そんな自分を誤魔化す為に、エイリクは言葉を重ねた。

「義母さまは　お怪我は無いと聞きました。大丈夫ですか？」

「今は二階の居間においでだと思えますよ？　ご自身でお確かめになつたらいかがですか？　奥様もエイリク様を心配なさつておいででした」

穏やかに言われる言葉に胸が痛む。

「兄が……嫌がつておりますから」

自然と視線が足元に落ちた。

兄は義母に心を砕いていて、義母にとって自分が害有る存在であると定めてしまっているようだった。

もう義母に悪意など向けないと、怪我などさせないと誓ったところでおそらく認めてなどくれないだろう。

最後にきちんと謝りたいと願ってはいるが、兄は決してそれを良しとしてはくれない。

「お気になさる必要はありませんよ」

しかし、メアリはふっとどこか呆れたような笑いを浮かべ、何故か声を潜めた。

「ファティナ様をどう思われますか？」

普段であれば無遠慮だと憤慨しただろう。

だが、負い目が先にたちエイリクは眉を潜めたもののゆっくりとその問いに答えた。

「それは、好きとか嫌いとかいう話ですか？」

「どのようでも。率直な気持ちをお尋ねしているのですから」

「ぼくは母という存在を知りませんから、彼女を示されて義母といわれてもピンとはきません。けれど、今は、嫌いではありませんん」

「それは、女性としてですか？」

静かに問われた言葉に、エイリクは意味が理解できずに瞳をまたたき、次に「こいつは馬鹿か？」という思いに顔をしかめた。

「義母として認めようとしているところですよ。何故女性としてみなければいけないのですか」

「立派ですよ！」

は？

「エイリク様は素晴らしいですね。できればそのままねじくれずに成長して下さい。決してあの兄君を見本にはいけませんよ」

まあつと本心かららしい言葉をつらつらと言う女の無礼さに、エイリクはカツとなった。

「無礼なっ」

素晴らしい男の見本の筈の兄を示して、あれを見本してはいけないとはどういうことだ。腹立たしさに怒鳴ろうとするが、この面前の女教師ときたら全然ちつとも気にかけて、にっこりと微笑んだ。

「一緒に奥様のところに参りましょうか？　今頃はきつと宿題を前に眉間に皺を寄せていらっしやいますよ」

ぐいつと手首を掴んで歩き出した女教師の手を振り払おうとしたが、その手が怪我をしている手だと気付けばエイリクは苦々しい思いで相手の引くにまかせた。

女性だというのに、怪我をさせてしまった。

長袖の下にはきつとまだ包帯が巻かれているのだろう。少しだけ不恰好な腕を痛ましい思いで見つめ、何故か嬉しそうに少し前を行く女教師の横顔を仰ぎ、エイリクはどうにも複雑な気持ちになった。「……ごめんなさい。この償いはかならず」

ふつと自然と言葉が口をつく。

それに驚いたようにメアリは一旦足を止め、ついで微笑んだ。

「そうですね。エイリク様が大人になった折りに私が嫁いでおりませんでしたら、嫁にでも貰っていたかどうかしら」

そのあまりな内容に驚くエイリクに、メアリは柔らかな微笑を落とすとした。

「冗談ですよ」

「……判りました」

エイリクはぽつりと応え、メアリは弾かれたように笑った。

「ですから、本気にとらなくて宜しいですよ。私と貴方様、いたい幾つ違いだと思えますか。そんなことはいいのです。どうぞ健康やかに成長なさって下さいね」

ええ決してひねくれ曲がった大人になどならないように。

暗に彼の兄を脳内でけちょんけちょんにしていたメアリだったが、

エイリクには伝わらない。

エイリクは楽しい物言いを受けながら、メアリの手を見ていた。

\*\*\*

多量に詰まれた本とメアリ直筆の問題集を前に、ファティナは暗澹たる吐息を落としてそれでも真面目に取り組んでいた。

「少しお休みなさつたらいかがですか？」

クレオールが相手を勤めながら穏やかに問いかける。あれ以来、クレオールは女主を他の誰かに預けることを嫌がり、それでも職務上離れなければいけない場合はわざわざ侍女に下男を呼びに行かせ、ついで侍女も二人つけるといふ念の入れようだった。

メアリは事実上現在休暇中になっていた。

「あの方……ジゼリさんの具合はどうなのかしら」

クレオールから休むようにという言葉を受け、ファティナは持っていた羽ペンを嬉々としてペン立ての中に入れた。

「落ち着いてきておいでのようです」

「そう 判ってるわ。お見舞いなんていいませんから、そんな風に見ては駄目」

ファティナはじつと自分を見てくるクレオールの先手を打って肩をすくめた。

「こつそり行こうなんて駄目ですからね」

「その為に最近クレオはわたくしに張り付いているのですね」

もおつと不満をみせる女主に微笑みかけ、紅茶の準備の為に室内のベルを鳴らそうとすれば、開きっぱなしになっている扉を控えめにノックしてメアリが現れた。

「よろしいですか？」

「ええ、勿論！」

ぱつと微笑むファティナは、ふいに勢いをつけて立ち上がるとばたばたと扉へと近づき、そしてクレオールは顔を顰めそうになるのをかるうじて押しとどめた。

ただし、一瞬じろりとメアリを睨みつけるのは忘れなかった。

何故、エイリクを連れてくるのか。

最近メアリのすることは度が過ぎていのではないかとよぎる。使用人としての分を逸脱している。

確かに、女主を守り抜いたことは立派だがそれとこれとは違う。

「エイリク様っ」

「……義母さま」

「二日ぶりですね。お会いしたかったですけれど……」

いっそ無邪気な義母の様子にエイリクは戸惑いながら、だが本来ここに来た理由を忘れてなどいなかった。

「義母さま、お怪我は無かったと伺いましたけれど、今回のことは」

真面目に詫びをいれようとするエイリクを、ファティナは両手で引き寄せてその耳元に囁いた。

「あの方はきつとエイリク様が大好きなのです。誰かにとっても好かれることはとても素晴らしいことですね」

優しい口調で囁かれる言葉はエイリクの意表をついて。

そつと背中に回った手が優しく自分を撫でることにエイリクは突然、涙が溢れた。

「義母さま、義母さまっ」

この人が怪我をしなくて良かった。

その思いがぶわりと広がり、ぎゅつと相手にすがって恥じも臆面もなく、子供のままだに泣き叫ぶ。

そんなエイリクを優しく撫でながら、ファティナは相手の激しい感情に驚きはしたものの、ふわりと微笑んでエイリクの感情が収ま

るにまかせた。

まだ 幼い子供なのだ。  
いや、今やつと幼い子供であることが許されたのだ。

そんな二人を見ながらメアリは慈愛のこもる眼差しをむけ、ついでちらりとこの部屋のもう一人であるクレオールを眺めた。

微笑ましいですね。

そう思いを共通できるかと思ったのだが、クレオールはただメア  
リを冷たく睨んでいる。

……最近ちよつと優しさを向けてくれるようになった気がしたのだ  
が、鉄壁の執事は更に女主への庇護欲を高めてしまったようだ。  
物凄く、怖い。

涙が枯れ果てるまで泣きつくした少年は、照れくさい様子で義母  
を見て言った。

「明日、ヒースに帰ります」

「そうですね……寂しくなりますわ」

「来年……寄宿学校に入ることになりました。兄さまには聖騎士を勧  
められましたけれど、ぼくには到底無理だと判りました」

聖騎士は婚姻が許されない。

メアリの傷を思いながら、エイリクは苦い気持ちを胸の奥に押し込  
めた。

「学校は全寮制ですけど、休暇には顔を見に来ていいですか？」

「勿論ですわ」

嬉しそうにファティナはうなずき、ついで思い出すように言った。

「次の誕生日には何か欲しいものはありますか？ 去年はクレオー  
ルの勧めで本を贈らせてもらいましたけれど、でも本当はエイリク  
様が欲しいものを差し上げたいとずっと思っていましたのよ」

無邪気に言う母の言葉に、エイリクは息をつめて瞳を瞬き、ゆっくりとした口調で問いかけた。

「黒い装丁の、学術書でしたら……今回も持参しています」  
兄が送ってくれているのだと思っていた。

どくどくと耳元で脈が聞こえるように動揺が走っていたが、エイリクは平坦な言葉を落とした。

「喜んでいただけているようで良かったですね。当初はエイリク様がもつとお小さい方だと思っていたものだから、人形など贈ってしまつて……」

思い出したのかくすくすと笑うファティナを見ながら、エイリクは枯れた涙がまた落ちるような気がした。

人形なら知っている。

くず入れの中に入っていた。

ジゼリが捨てたのだ。

「まったく、業者が間違えて荷物に入れたのでしようね」  
そう言いながら、ジゼリはくず入れを片付けていた。

乾いた笑みが口元に広がり、エイリクは深く息をついた。

義母さまは、ぼくを無視していた訳じゃなかった。

義母さまは……

「そうだわ」

ファティナはよいことを思いついたというようにポンツと手を叩いた。

「エイリク様、今夜は一緒に寝ましようか？」

その発言に、エイリクはそれまでのしんみりとした思いを吹き飛ばし、思わず、

「ぼくは子供じゃありません！」

真っ赤な顔で怒鳴る声に重なり、メアリとクレオールとが、

「奥様！ 駄目ですっ」

と、声を張り上げた。

「良いではありませんか。ヴァルフアム様とは添い寝致しますのに、エイリク様とは駄目なんておかしいですよ」

むうっと唇を尖らせるファティナの言葉に、エイリクは思考を停止させた。

「ヴァルフアム様と一緒に寝るのも駄目だと言っているではありませんか」

メアリが言葉を募らせる。

「それはそうですね……ヴァルフアム様だって具合の悪い時は一緒にいて欲しいっておっしゃるのよ？ 子供と眠るのは普通のことです」

兄さま……？

エイリクは思わず視線を執事へと向けたが、執事はずっとその視線を刺らした。

決して合わせてはいけないとでもいうように。

兄さま？

## 仲直り

夕食後に話があるからとエイリクが面会を求めて来たという。

すでにクレオールからエイリクが明日帰宅するという報告を受けていた為にヴァルフアムは不要とは思ったものの、明日になれば居なくなるのだからと許諾した。

本日のヴァルフアムは機嫌の良さと悪さが平行線を辿ったままだった。

エイリクは帰宅する。だが、現状ファティナは「絶交です」と子供のように顔をそむけてしまふという有様だったのだ。

「寄宿学校に入学することに致しました」

直立不動でいうエイリクの姿にヴァルフアムは多少いら立ちを覚えたものの、もとよりエイリクの先行きに何の興味もない。むしろ帰るといふことばかりが脳裏にあり、その問題を失念していたと言ってもいい。

「判った」

「……」

あっさりと言われたことにエイリクは戸惑うような表情を浮かべた。

無理もない。なんといつても聖騎士を勧めていたのは他ならぬヴァルフアムである。ヴァルフアムが年若い頃に憧れた　という事実は無い　聖騎士という職種を、弟であるエイリクに担って貰えまいかという話であった筈だ。

もっと強く勧められるか、若しくは考え直すようにと言われると思っていたエイリクはあまりのあっけなさに拍子抜けしてしまった。

まさか高潔と信じて慕う兄から向けられた「トンスラになって一

生童貞を貰け」などという下らぬ嫌がらせだったとはさすがのエイリクにも判らなかった。もしそんなことを知ってしまったえば、この数日の間悩み続けた自分の頭を殴りつけたくなかったことだろう。

「クレオールから聞いている。明日帰るそうだな」

「はい。明日の午前中にヒースに向けて発とうと思っています」

「判った。無事を祈る」

話は終いだというようにヴァルフアムが軽く手を払えば、エイリクは身じろぎして「あのっ」と言葉をつなげた。

「なんだ、まだ何かあるのか？」

「ジゼリと少し話しをしました」

意識を取り戻したジゼリをエイリクは激しく問い詰めるようなこととはしなかった。

ジゼリがこのところ塞いでいたことも、ヒースに戻りたいと幾度も訴えていたことも知っている。

蓄積されたものが、エイリクに冷たくされたことでその引き絞った弓弦を解き放ってしまったのだらうというのはエイリクにだとして判る。

だが判らないものがあつた。

……ほんの下らぬ気まぐれで贈られる贈り物などでエイリク様の心を乱して欲しくなかった。もし毎月続くそれらがある日突然失われた時、エイリク様が傷つくと思えば腹立たしい思いが募つただと。

ジゼリが言った言葉全てが真実であるのかは判らない。

もっと別の感情があつたのかもしれない。だが、エイリクはジゼリにそれ以上問い詰めることはしなかった。

「一緒に帰ろう」

そう肩を叩いて「来年は寄宿学校に入る。そうしたら、ジゼリはぼくの居ないヒースの家を一人で守ることになるけれど 大人に

なって、その腕にぼくの子供を抱かせると約束するから」と労う口調で言えば、ジゼリは泣き崩れて自分のしてしまったことを詫びた。

「本人も今は深く反省し、義母さまや兄さまに謝罪したいと申し出ています」

「それは不要だ。決して二度と義母の前にその女を会わせるな」

思ったより厳しい反応にエイリクは慌ててうなずき、それを打ち消すように言葉を急いだ。

「それと、怪我をさせてしまった家庭教師のメアリですが」

ぴくりとヴァルフアムは目元を痙攣させた。

メアリのことではもうファティナからしつこい程の叱責を受けている。

「女心が判らない！」とまで言われた。更に、どこでひろってきたのか「そういうのはぼくねんというのです」と判らないことを言い出し、クレオールが咳払いをして「朴念仁です」と訂正したのがまた腹立たしい。

それを言うのであれば、義母ほど義息心が判らない女はいないだろうと糾弾したい程だ。

「メアリ女史がなんだ」

幾度もファティナに叩き込まれた為にはその名前もきちんと言える。

威張る話ではないが。

「怪我は残らないとシアース医師が請け負ってくれましたが、彼女には慰謝料として何かの保障をしたいと思います。お力添え願えますでしょうか」

「彼女には郊外に屋敷を一つ用意する。それでいいな」

それは慰謝料としても法外なものだった。

兄がそこまで考えていることに驚いたエイリクだったが、実情は違う。別の意味での慰謝料、むしろ迷惑料だった。

ヴァルフアムとメアリの婚約話は現在宙に浮いている。

浮いている　　というか、事実上は破談と言っていていいだろう。メアリが完全に拒絶していることもあるし、ファティナに言わせると「ヴァルフアム様の誠意の無さが酷すぎる」ということになる。

「名前さえ覚えずに婚姻など間違っております。失礼です。酷いです。わたくしの義息はこんなにも情けない方だとは思っております。酷かったです」

いかに婚姻とは素晴らしいものかということも溜々ときかされた。さすがに我慢が利かずに「あなたの婚姻はさぞ素晴らしいものなのでしょうね」と返せば、あの小娘様ときたら「自分の旦那様は素晴らしいですが、ヴァルフアム様は最悪です」と切りかえてきた。

腹立たしい。

思い返すだけであの小生意気な口を塞いでやりたくなる。

「メアリ女史を本気でお望みでしたら、心を尽くして愛を勝ち取るのです」

と熱心に言うファティナに、ヴァルフアムは冷笑を浮かべて言った。

「いやです」

「……」

「何度も言うように、私が望む妻は便宜上の妻でしかない。肅々と書類にサインをしてくれる女という性別であればいいのです。愛？

馬鹿げた妄想もいい加減になさい」

「そんな方にメアリ女史はあげませんからねっ」

「いいません」

そして小娘様は激怒し「ヴァルフアム様なんて大嫌いなんですっ」と出て行った。思い返せばまるきり子供同士の喧嘩のようだが、おそらく自分も苛立ちが頂点に達していたのだ。

何故に義母ときたらああも熱心に義息の結婚話をすすめようとするのか。そう思えば意固地にもなるというものだろう。

「やはりぼくの兄さまは立派です」

「なんだ突然」

「いえ、なんでもありません」

エイリクは機嫌を良くした様子できらきらと瞳を煌かせ、ついで見えない尻尾をぶんぶんと振った。

「ぼくは明日帰りますが、メアリと義母さまのことをどうぞよろしくお願いします」

丁寧に頭をさげる腹違いの弟の言動に、ヴァルフアムはぴくりと片眉を跳ね上げた。

「おまえに言われるべくもない」

「そうですね。兄さまは何でもそつなくこなせる素晴らしい兄さまですから！」

……なんだろうか、この居心地の悪さは。

全開で褒められるこの気持ちの悪さ。本心からなのだろうと思うが、ヴァルフアムとしては相手の裏を考えてしまう。

まさか褒めているようにみえて真実は貶しているのではあるまいな。

そんなことまで思うヴァルフアムだったが、それはただヴァルフアムの心が穢れているからに過ぎない。

エイリクは本気だった。

一瞬でも兄さまを疑った自分を恥じているぐらいだ。

そう、兄さまはもしかしたら自分の考えているような人ではないのではないかと、昼間ちらりとよぎったあれは間違いだとエイリクは尊敬と思慕の思いを更に募らせた。

「遅い時間にお時間を頂きましてありがとうございます」  
エイリクは丁寧な頭をさげた。

「逗留の間に多大な迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。明日は兄さまが仕事に行かれていた間に帰宅となりますので、これでお立の挨拶とさせて頂きます」

「気をつけて帰れ」

「はい」

一見すれば美しい兄弟愛にすら見えただろう。

それが間違いだと完全に気付くのは、もう少し先である。

\*\*\*

「絶対にヴァルフラム様と女史の婚姻は認めません」

ファティナは力強く言った。

「でも、ヴァルフラム様がちゃんとメアリ女史を愛して優しくしてくださいなら許してさしあげてもいいですけど」

濡れたファティナの髪の水気を丁寧にタオルで落とす執事は穏やかに口元に笑みを浮かべた。

「そうなると宜しいですね」

「クレオ、言い方に心が入ってませんわよ」

「そのように聞こえましたら失礼致しました。それから、頭を動かさないでいただけると、お髪を引くような無作法なことにはならないのですが」

ファティナがぐりんつと後ろを向こうとして髪が引っ張られたことを丁寧に詫びると、ファティナは肩をすくめた。

「クレオはこの婚姻は反対？」

「反対も何もありません。良いことだと思っておりますよ。僭越な

がら言わせていただければ、貴族の婚姻とはえてしてそのようなものだ」と

政略結婚とはそういうものだという執事に、ファティナは吐息を落として耳にかかるおくれ毛を指先からめた。

「わたくしは旦那様を愛しておりますわ」

「はい」

「旦那様は……わたくしを愛してくださっているかしら」

消え入りそうな切ない言葉に、クレオールはファティナの旋毛を見つめながら優しく髪をタオルでなぞる。

「どのようにお考えなのですか」

言葉にしてから失言だとクレオールはふつと眉を潜めた。

だが、相手はそうは取らなかつたようだ。

ファティナは鏡越しにクレオールを見つめ、微笑んだ。

「わたくし、婚姻のりに旦那様に一つお願いを致しましたの」

視線でうながせば、ファティナは幸せそうに微笑んだ。

「旦那様はその約束をきちんと守ってくださいました。だから……何があるうと、旦那様の妻でありつづけられるのです」

その言葉は、まるで自分に言い聞かせるようにゆっくりと一つづつ丁寧なファティナの唇から零れ落ちた。

そんな時の彼女はいつも彼女と違い、やけに大人びて見える。

クレオールは半眼を伏せ、だいぶ乾いた髪にそつと指先を入れ鏡台のブラシに手を伸ばしたが、丁度その時扉がノックされ、控えていた侍女が扉を開いた。

「よろしいですか、義母うえ」

「よろしくありません」

つんと途端にファティナは子供の顔に戻って顔を背けた。

その背は「絶交中です！」と頑なに示している。  
ヴァルフアムは苦笑を浮かべてファティナの私室に足を踏み入れると、鏡台に近づきクレオールの手からブラシを引き取った。

「大嫌いと言われたままでは安眠できそうにありません。非道な言葉の撤回を求めます」

「ヴァルフアム様の酷い結婚観を改めていただければ撤回は致しません」

つんと横をむいたまま言うファティナの髪にブラシを当てながら、ヴァルフアムは湿った髪に丁寧にブラシを通していった。酷く優しく、ゆっくりと。

「私の結婚観がどうなればいいのですか」

「きちんと愛する方と結婚なさいませ。好きな方はいらっしやいませんかの？ その方とずっと一緒にいたい。愛し、愛されて子供を育み、家庭を築きたい。そういう方と結婚なさるといふならば、大嫌いは撤回してもよろしいですわ」

横を向けていた顔を正面に 鏡へと戻し、自分の背にいる義息を鏡越しに見上げる。

ヴァルフアムは鏡の中のファティナではなく、自分の前にいるファティナの肩を見つめていた。

「 そんなことを言えば私は一生独身かもしれませんよ」

「 今はいないかもしれませんが、いつかきつとそういう方にめぐり合えますわよ。早く結婚なさいませとお願いしましたけれど、でも無理やり結婚なさるなんて馬鹿げてます」

「 私が愛する方を妻にするといえ、あなたはあの言葉を撤回するのですか？」

淡々と問いかけてくるヴァルフアムに、ファティナはほっとした様子でうなずいた。

「勿論です」

「判りました」

ヴァルフアムは吐息を落とし、ファティナの髪を一筋すくいとり湿った髪に唇を寄せた。

ハーブオイルの香りのする髪に口付け、ヴァルフアムの口元に疲れたような微笑が浮いた。

「本当に判ったのですか？」

「ええ。結婚するならば心から求める方に致します　だから、どうぞ大嫌いだなどと冷たいことをおっしゃるのは止めて下さい」

あんまり非道い言葉で辛くて眠れないと低く言う義息に、ファティナはヴァルフアムが辛いなどというのはまるきり信じることができずに肩を震わせた。

「では撤回致します。大嫌いなんて嘘です。わたくしはヴァルフアム様が大好きですわよ？」

「愛していますよ、義母っえ」

囁いた言葉の真実など、少しも気に掛けてなどいないだろうけれど。

今はまだ、それでいい。

## 帰郷

エイリクがファティナの元に帰宅の挨拶にみえたのは朝食が済んだあとのことだった。

「兄とは既で最後に挨拶ができました」

せめてもと兄の出仕を見送りがかったのだ。

少なくともこれからしばらくはまた兄に会うことは無い。兄だけが自分を気にかけてくれているという思いこそ間違ったものであったが、だからといって自分に聖騎士を勧めてくれたりと気配りのある優しい兄との別れは寂しいものだ。

本人さえ真実に気付かなければ。

エイリクの嬉しそうな報告に、「今度いらつしやる時はヴァルフラム様も一緒に親子三人、馬に乗って遠駆けなど宜しいですわね」とファティナが穏やかに言えば、エイリクは多少驚いた声をあげた。

「義母さまは馬にお乗りになられるのですか？」

「乗れますわよ？」

「……驢馬ではなく？」

「馬です！」

身長に合わせて驢馬のほうがずっと似合いそうだ。それになにより馬では誤って速度があがってしまった場合の対処がこの面前の義母にできるとは到底思われない。

いやだがまで、絶対に義母より馬のほうが賢そうだ。馬が義母を制御しているのか？

いぶかしげに顔を顰めるなか「乗馬はとても好きなのです」とファティナはのほんと続けた。

「驢馬と馬の区別はつきますか？」

しつこく喉から言葉が出掛かってしまったエイリクだが、飲み込んでおいた。

「当初はヴァルフラム様に反対されましたけれど、十五になった頃からきちんと教えてくださるようになりましたのよ。ですから、もしかしたらわたくしはエイリク様よりも立派に馬を御せるかもしれませんわよ？」

ふふつと意地悪く言う義母をまじまじと見つめ、信じられないとエイリクは軽く首を振った。

そんな雑談をしているなか、軽いノックの音がクレオールは観音開きの扉を片側だけ静かに開いた。

「よろしいでしょうか？」

顔を出したのはメアリで、応えを待たずに居間にエイリクの姿を認めてほつと息をつく。そんな家庭教師の行いをクレオールは咎めようと口を開きかけたが、おそらくフアティナもエイリクもそれを良しとしないだろうと唇を引き結んだ。

「ああ、エイリク様。もう出てしまわれたかと思いました」

メアリの言葉にエイリクは体を引くようにして相手を認めた。

その視線が鋭くメアリの傷を負った腕へとむくが、腕の包帯は薄いものにかわっているのか、長袖の下の様子は伺えるものではなかった。

「どうぞ事故になどあわれませんように、お気をつけてお帰り下さい」

メアリがにっこりと微笑みを浮かべて一礼すると、エイリクはつと視線を逸らし喉の奥をからませるように咳払いを一つし、ついで自らの姿勢を正した。

「メアリ」

吐き出された単語には勢いを乗せ、けれどその勢いは次の音で失

速した。

「あー、義母さまのことを……頼みます」  
恥じるように消える音。

ファティナは瞳をまたたいてそんな義息と、そして自らの女家庭教師とを交互に見た。

「エイリク様？」

ファティナとメアリの言葉が重なる。

その全てを打ち消すように、エイリクは身を正してファティナを見た。

「義母さま。これで失礼致します　今度はぜひ義母さまのすばらしい馬術を見せてください」

多少の嫌味をのせ、ついでエイリクは照れくさい様子で言葉を続けた。

「それと、メアリのことも頼みます」

\*\*\*

エイリクがヒースにある邸宅に戻ってしまったことは、ファティナにとって寂しい出来事の一つだった。

せつかく仲良くなれそうだっただけに、残念でしかないが、エイリクの家人の療養の為にも帰るのが良いのだといわれれば引きとめることもできかねた。

エイリクは帰り、そしてなおかつお嫁さんは来ない。

それはファティナの中に不思議な響きをもって落ちた。

「世の中ままなりませんわね」

吐息交じりの言葉をそつと囁くのと同時、コンコンと軽快なノックの音が響いた。その音は使用人が出す音とはまったく違うもの。

「失礼します」

軽い警戒を持ってクレオールがファティナに一礼して居間の扉を開くと、そこに立っていたのはまるで自らの屋敷を訪れたかのようなセラフィレスだった。

「やあ、元気かな」

沈んでいたファティナの表情が明るくなり、座っていた椅子から勢いをつけて立ち上がる。

しおれていた花がぱつと色合いを取り戻すようなあからさまな変化が部屋を満たした。

「セラ兄さまっ。帰っていらしたの？」

「昨日ね。リルティアは君の贈り物のヴェールをとて喜んでいたらよ」

言いながらセラフィレスは持ってきた花束をファティナに差出した。

「花嫁のブーケ？」

瞳をきらきらと輝かせるファティナだったが、セラフィレスは肩をすくめて笑ってみせる。

「生憎と、そうだったらもう枯れてしまっているだろうね。これは同じ種類の花で作らせたうちの庭師のブーケ　雰囲気だけだけれど、おすそ分け」

ファティナの親友であるリルティアの婚姻は相手側の領地で行われた為にファティナには出席が適わなかった。しばらくの間このリルティアの兄もその婚姻に出席する為に地方領に出向いていて顔を出すことはなかったのだ。

軽くファティナを抱き寄せた青年に、クレオールは懇懇に礼をし「セラフィレス様、いらっしやるのでしたらどうぞ事前にお知らせ下さい」と一応いつもと同じ台詞を口にした。

幾度言ったところで相手が受け入れないことはもう経験上知っていた。屋敷の使用人達もセラフィレス相手だとわざわざ伝えにも来ない有様だ。警備上由々しい自体だが、ヴァルフアムでさえ最近は

諦めているのでクレオールの言葉などまったく意味は無い。

セラフィレスはファティナの額に口付けを落とし、ファティナを籐椅子へと座らせると自らは反対側にある椅子に腰を落とした。

「ぼくが居ない間にちっこいヴァルが来たんだって？」

紅茶をクレオールに頼みながらさらりと言うから、ファティナは瞳を瞬き、次の瞬間にはじけるように笑った。

「まあ、セラ兄さまっ。どこからそんな情報を耳にお入れなさるのかしら」

「その執事が怖いからね。情報源は秘密　ヴァルとそっくりだつて言うんだから、ぜひとも一目見たかったね。丁度ぼくと入れ替わってしまったみたいで凄く残念。昨日、おととい？　帰ったって？」

肩をすくめて片目をつむるセラフィレスは、長い足を組んでちらりとクレオールを見た。

「クレオール、実際どうなんだい？　ヴァルと似てる？」

「私の口からは何とも」

「そっか。そんなに似てたか。あーもつたいないなあ。きっと面白かったんだろうな」

クツクツと笑うセラフィレスの様子に、ファティナは眉を潜めた。

「面白がることではありませんわよ」

「で、チビヴァルはファティのこと義母うえって呼ぶの？」

セラフィレスは興味津々で体を起こしてファティナを覗き込む。

少しばかり唇を尖らせ、ファティナは「はじめのうちは呼んで下さらなかったけれど、仲良くなってからは義母さまって呼んでくださるようになりました」と正直に口にした。

途端、セラフィレスは口元を押さえ込み、自分の膝をばんばんと叩き始めてしまった。

まるきり子供のように無邪気に。

「うわっ、見たかった！　なんでぼく居なかったかな。もう絶対に

見たかった！ その時のヴァルフラムの顔をつ」

「兄さまっ？」

「うわーっ、もお苦しい。ひいつ。駄目、死ぬっ」

眦に涙まで溜めて悶えるセラフィレスの様子にファティナは呆気にとられた。

「クレオール、君はいいね。うらやましいよ。二・三日君が変わってこの屋敷の執事をしたいよ。結構本気で」

新たな紅茶の準備をしながらクレオールはどう受け答えるべきか逡巡した様子で、しばらく無言だったが静かな口調で「おそれいます」と返した。

何が「おそれいる」のか誰にも理解できなかったが、言った当人も他にいい様が無かった。

貴方のように笑い転げる方には向きません。

などと言う訳にもいかない。

「ファティ、チビヴァルがいる間ヴァルはさぞ機嫌が悪かったらうね？」

「兄さまがどうしてそんなにお笑いになるのか判りません」

ファティナが顔を顰めて言う言葉に、セラフィレスは必死に笑いを堪え肩を揺らしてこくこくと二つうなずいた。

「ファティ、君ってなんて残念な子だらうね。この状態をまるつきり無視できるその神経は本当は凶太いんじゃないかい？ お兄さんは困惑だ」

やれやれと肩をすくめて言う言葉に、つんとファティナは横をむいた。

「意地悪しにいらしたのならお帰り下さいませ」

「おやおや、ファティこそせっかく顔を見に来た兄さんに意地悪だね。そんな意地悪な子にはコレはあげられないかなー」

言いながらセラフィレスが胸のポケットから出したのは、一通の封書だった。

「リールから？」

「そう。読みたいなら、兄さま大好きごめんなさいって言うてごらん」

ひらひらと封書をふるセラフィレスに、ファティナは飛びつくように言われた言葉を口にした。

\*\*\*

「やあ、甥っ子！ 会いたかったよ」

帰宅した途端、両腕を広げたセラフィレスに大仰に抱擁された。がしりと抱きつき、「ちゅーっ」と頬に唇を押し付けられそうになり、ヴァルフアムは咄嗟に相手の腹を殴ったが正当防衛は適応されることだろう。

何故男からそんな仕打ちを受けなければならないのかまったく理解不能だ。

「ヴァル、酷い」

意外にいいところに入ったようで、セラフィレスは一旦体を折って呻いた。

「何度も言っているが、貴様は人の家でいったい何をしている」

しばらく気配が無かった為に安堵していたというのに。

まさか自宅の玄関を開いた途端にがばりとだきついてくる馬鹿がいるとは思ってもいなかった。

「愛する甥っ子と親睦を深めようと待っていたに決まってるじゃないか。土産に美味しいブランドーを持ってきたから、夕食の後に飲もう」

痛めた腹を撫でながら言う男を相手に、ヴァルフアムは溜息を落とすとした。

夕食も食べる気なのかこの男は。

だが、エイリクが帰宅したことでファティナが少しばかり気を落としていた。この男の来訪はおそらく彼女にとって良い気晴らしになったことだろう。

自分の居ない間に勝手に訪れていることは気に入らないが、多少は大目に見てもいい。  
あくまでも多少は、だ。

「二・三日中にたまにはサロンでビリヤードでもしないかい？」  
セラフィレスの陽気な誘いに、ヴァルフアムは冷たい眼差しを返しながら「生憎と、明後日には父の領地に行くことになっている」と静かに告げた。

セラフィレスの瞳が楽しそうに揺らめき、口元がゆるむ。

「へえ、楽しそうだね？」

楽しそう？

ファティナはきつと喜ぶだろう。

ずっと待っていた知らせに微笑み、素直な喜びを示すに違いない。  
そんなものは想像するでもなく容易く思い浮かぶ。

ヴァルフアムは生憎とちつとも楽しくはなかった。

## 脱力

毎度のことながら、今度は何だ。

ヴァルフアムは、はつきりと挙動不審な義母に嘆息した。

セラフィレスと飲み明かした翌日。朝一番で言いたくも無い父親の所領へ行く旨告げようとしたものの、義母ときたら目の下にクマなどつくり、どこかぼんやりとしている。

普段からうつかりものの義母だが、食器の音をさせたり、食べ物をぼろりと落とすような瑣末な真似はそうそうあるものではない。

この屋敷に来てしばらくの間はそのようなこともあったが、さすがに十六となった現在は淑女として見える程度にはなっている。

だというのに今日の彼女ときたら、心ここにあらずときたものだ。はじめのうちこそ見てみぬふりをしていたが、やがてヴァルフアムは吐息を落として口を開いた。

「セラが何か？」

セラフィレスは土産と称し持参した酒を容易く飲みきり、ヴァルフアム秘蔵のウイスキーやスコッチをさんざ漁った拳句、明け方近くに「むらむらするから帰る」とふざけたことを言っただけで帰っていった。

どこかその辺りで酔いつぶれていたとしても絶対に同情しない。むしろ路上で野垂れて野良牛にでもひかれてしまえ。

野良牛がいればだが。

「え、あ……セラ兄様がどうかしまして？」

ファティナは慌ててそう言うから、原因はどうやらセラフィレス

ではないらしい。

「何か気に掛かることがおありのようですが」

「何にもありませんわっ！」

ファティナは突然顔を悪くし慌てるようにそう叫ぶと、朝食もそこそこに膝の上のナプキンをテーブルへと置いた。

「ごめんなさい、ヴァルフアム様。先に失礼致します」

クレオールが侍女にファティナについていくのを命じつけるのを眺め、ヴァルフアムは眉を潜めた。

「何かあったのか？」

クレオールに問いかけると、クレオールは静かに「昨日リルティア様からのお手紙をお読みした後から少し思想に更けることが多いおなりです」と進言したが、ヴァルフアムは冷たく睨み返した。

「なぜ早く言わない」

「申し訳ありません」

クレオールは丁寧に詫びをいれたが、ヴァルフアムは嘆息して食事を中断すると、口元をナプキンで拭い席を立った。

なんと役立たずだろうか。

昨日からあの状態だと？ セラフィレスが阿呆のように騒いでいるから気付かなかった。

もしや、昨夜あの人は何かを思い悩みヴァルフアムに相談したいと思ったかもしれないというのに、あの下らぬ酔っ払いの為にそれが適わなかったかもしれないのだ。

ヴァルフアムは内心でセラフィレスとクレオールをののしり、自分のことは棚に放り投げた。

自分に非はまったくない。勿論。

ファティナの部屋の前に立ち、大きく息を吸い込む。

艶のある二枚扉に軽く結んだ拳を押し当て、極力優しい声音でもっ

て囁きかけた。

「義母うえ、よろしいですか？」

「よろしくありません」

またか。

中から聞こえる声に嘆息し、無理に扉を開くと中にいたファティナが顔をゆがめ、ついで彼女についている侍女が体を硬直させ自分の女主を見て、勇気を振り絞るように一歩進み出た。

「申し訳ありませんが……」

「義母はへそを曲げているだけだ。話し合えば分かり合える　席  
をはずしている」

ぴしゃりと言い切り、軽く手を払う。

女主人を守る為にいる侍女と言えど、相手はこの屋敷の正真正銘の主である為、困惑しつつも丁寧に頭を下げ、そのまま引き下がった。未婚の女性であれば男と二人になどできようはずはないが、あくまでもファティナは既婚者であり、またこの男は彼女の義息だった。

義母は寝椅子に座り、大きなクッションを抱きしめて眉を潜めた。

「ヴァルフアム様、お仕事はどうなさいました」

「長期休暇にはいりました　その話をしようかと思っていたのですがね」

「……旦那さまのところに、行きますの？」

戸惑うような言葉に、ヴァルフアムは息をつめた。

面前的義母は、明らかに動揺している。

だが理由がまったくつかめない。

今の話の流れで、彼女は理解したはずだ。愛する夫の許へと、今日明日にでも旅立つのだということ。

いかな愚かな彼女だとて、長期休暇に入ったという意味くらい理解

していることだろう。

ヴァルフアムは眉間に皺を刻みつけてファティナの前に膝をつき、その顔を覗き込んだ。

「父の許に行く気は失せましたか？」

「いえ、そんなことは」

「突然どうなさいました？」

普段であれば他人の心など完全無視して、阿呆のように「旦那さまにお会いしたいのです！」と騒ぐ小娘様らしくもない。

視線を合わせようとすると、視線がそれる。

もともと短気なヴァルフアムはその手を伸ばしてファティナの顎先を捉えると、ぐっと無理やり視線を合わせ、まるで人攫いが甘い菓子で子供を釣るかのごとく優しく囁いた。

「何か困ったことがおありですか？ 一人で気をもむなど貴女にはむきませんよ」

「」

「それとも、この義息は貴女にとって信用ならぬ者でしょうか？」

「そんなことはありません」

そう言う言葉が弱々しい。

自らもどうして良いのか判らぬという様子に、ヴァルフアムは苛立ちを覚えながらも、やんわりとした口調を変えずに相手の心を解きほぐすように囁いた。

「では、どうぞ何でも相談なさってください」

「でも、ヴァルフアム様は……」

ファティナは眉をきゅつと寄せ、膝の上に乗せた手を握りこむ。

「男の方ですもの」

不満そうな言葉に、ヴァルフアムは苦笑した。

「男だと駄目ですか？」

「判りません」

脈絡の無い様子にヴァルフアムは深く息をつき「義息にはいえないですね。判りました。義母うえがそんなに私を信用して下さいとないとは思いませんでした。とても悲しいですね」と淡々と言葉を落とし、ぱつと固定していた顎先から手を離し、身を翻した。

途端、ファティナは声を張り上げていた。

「痛いのですか？」

「は………？」

何が？

ぴたりと足を止めて振り返ると、ファティナは半泣きの顔で悲痛にヴァルフアムを見上げていた。

「子作りは痛いのですか？」

「

その時ヴァルフアムを襲ったのは激しい脱力だった。

聞かなければ良かったと思ったのだが、正解はもう少し違う。聞かなければ良かったのではなく、それ以上言わせなければ良かったが正解だ。

「リールがとても痛かったと言うのです。酷いって」

「はあ、なんというか　そういうこともあるようです」

これは確かに男であるヴァルフアムには応えがたい。自らの身で確認できることでもないのだから。

「では本当なのですね？」

蒼白になったファティナはぶるりと身震いし、更に悲壮な表情で言葉を続けた。

「リールがイヤだといったら、リールの旦那さまは無理やり縛って

……そんなこともするのですか？」

さすがにヴァルフアムは思考能力を失いそうになった。

「へ、部屋に三日の間閉じ込められて椅子に縛られたって。子作りってそんなにたいへんなのですか？」

見知らぬ恐怖に慄いているファティナはとうとう涙まで流し、ヴァルフアムは「馬鹿をおっしゃい！」と声を荒げてしまった。

「どんな鬼畜ですか。そんな人間は早々いませんよ」

「では、嘘なのですか？」

「嘘です」

いや、嘘ではないかもしれないが。特殊であることに変わりはない。

少なくともヴァルフアムはしない。いや、しない？　しないと思う。少しだけしたいかもしれないがそれはまた別の話だ。

ファティナを閉じ込めて、縛る？

……くそつ、何故に突然こんな話題に。あの馬鹿娘つ。だから友達は選べと言っているではないか。

「じゃ、じゃあ。旦那さまはそんなことはなさらない？」

ヴァルフアムが内心で罵り言葉を撒き散らしていると、ファティナは嬉しそうに声をあげた。

「しません。まったくあなたときたら、どうしてそう突飛なことを……リルティア嬢にからかわれただけではありませんか？」

いや、本当かもしれないが。

リルティアの夫の性癖など知るものか。

忌々しそうに吐き捨て、ヴァルフアムは八つと息を飲み込んだ。

ファティナが目に見えてほっとした様子で眦に浮かんだ涙を拭う。

「ああ、良かったです。ヴァルフアム様にお尋ねして本当によかったです。だってわたくしときたら、旦那さまに会うのが少し怖くなってしまうのですもの。そうですね。旦那さまがそんな酷いことをするなんて、なんてわたくしは愚かなのでしょ」

「……」

「こんな話を旦那さまが耳に入れたら、きっと笑われてしまいますわね。ヴァルフアム様にお尋ねしてよかったです」

ヴァルフアムはにっこりと微笑む義母を見下ろしながら、

「ヴァルフアム様は長期休暇に入られたのですよね？ 早く旦那さまにお会いしたいですわっ」

自分の失態を呪った。

くそっ、いつそ誤解させておけば良かった！

## 旅の前日

ああ、夢だ　夢を、見ている。

けぶる睫毛に眼差しを伏せて、蜂蜜のような金髪が緩いカーヴを描いて揺れる。口元にいつの間にも紅を差すようになったのか、微笑をこぼす口唇が紅い。

頬につつと流れ落ちた涙の意味が、頭からずっと離れない。

そんなことは無いといいながら、いいや　と幾度も頭を振った。

口付けたのも……その身を抱いたことも、全て夢だ。

脳内で幾度も幾度も繰り広げられた饗宴は、いつしか現実であるのか虚構であるのかもしれないものと成り果てた。

夢、だ。

夢だと理解しているというのに、それでも心のどこかが渴望していた。

愛では無い。

そんなものは戯言だ。

それでも、二人の間に【何か】は確かに存在していた。

存在していたのだ……

\*\*\*

それだけでも煌びやかさを持つ細やかな細工の宝石箱は、もともとは母の持っていたものだ。

中には琥珀と翡翠で作られたブローチとネックレスが入っていたが、それらは失われた母と父のよすがに領地の屋敷の片隅にそっと埋められた。

遠く海上で果て、遺骸の無い墓が哀れで、せめてもと埋めてその印と成すために。

十六となった現在、母の残した宝石箱には、溜息がこぼれる程の輝きを放つ輝石をはめ込んだ指輪に耳飾、同じ意匠の髪飾りと、まるで子供の菓子箱のように数多の宝石が納められている。

それらは全て夫からの贈り物だった。

その宝石の輝石は琥珀と澄み渡るような湖畔の色彩を放ち、見つめていると夫の眼差しに触れているようななんだか落ち着かない気持ちを抱かせた。

それは、触れるとどこまでも冷たく、まるで社交界のデビュタントが緊張にかく汗の手を沈める為に握りこんだ水晶を思わせる。

そして、その宝石に混じってファイティナは一通の封書を大事にそこに収めていた。

夫がはじめて自分に送ってくれた封書　夫がはじめて妻へと向けてくれた言葉。それがたとえどんなものであると、ファイティナにとっては宝物だった。

その封書をそつと撫でて、ファイティナは宝石箱を閉ざした。

「そちらはどうなさいますか？」

荷造りをしてきている侍女を監督するクレオールが穏やかに問いかける。

それを受けてファイティナはふるりと首を振った。

「置いて参ります」

「ではこちらにいらしていただいて宜しいですか？　残りの荷物の点検をしていただきたいのですが」

「クレオが見てくれたのでしょうか？　ならば間違いなどありませんわ」

ファイティナは微笑み、けれどすぐに顔を曇らせた。

「どうかなさいましたか？」

「クレオは一緒に行ってくれませんかよね？」

この屋敷に暮らすようになって一番共に時間を過ごしたのは、義息でも家庭教師でもなく、間違いなくこのクレオールという執事だった。

出会った当初のクレオールは未だ執事見習いであったが、その翌年にはこの屋敷の正式な執事としてファティナの良き理解者として、話し相手としてその手を差し伸べてくれていた。

だが、そんな相手とも幾度か離れたことがある。

それはヴァルフアムと共に山荘などで過ごした時のこと。

「私はこの屋敷の執事ですから」

「……寂しいですわね」

ふつと瞼を伏せる女主の切ない吐息に、クレオールは身を伏せその視線を合わせて微笑みを返した。

「私も寂しゅうございます。どうぞご無事でお帰り下さい」

「メアリ女史も居残りですものね。とつても……」

言葉を繰り返しながら、ふつとファティナは大事なことに気付いてしまったという様子で眉を潜め、その手を伸ばしてクレオールの手を掴んだ。

「どうしましょう、クレオ」

「何か？」

不安そうに揺れる眼差しに問いかけると、ファティナはぶるりと身震いした。

「ヴァルフアム様と二人ということですかね？」

「護衛や従者、御者に侍女も二人いますが……まあ概ねおおむね」

ヴァルフアムと二人ということに身の危険でも感じたのかと思えば、ファティナは真剣な口調で言葉を続けた。

「ヴァルフアム様のお説教がはじまってしまったら誰が助けてくれ

るのです?」

「……あまり怒らせないようにがんばって下さい」

\*\*\*

野良牛に轢かれたりしなかったらしいセラフィレスは、妹がファティナへと宛てた手紙の内容を一読し、耐え難いというように腹部を折って笑い出した。

「まったくあの子はどうしてこういう阿呆らしい話を引っ張り出せるな。その才能に嫉妬しちゃいそうだよ!」

「笑い事じゃないだろう。おまえの妹が心配じゃないのか」

というか、何故私が心配しなければいけないのだ。

ヴァルフアムはぎろりとセラフィレスを睨みつけたが、セラフィレスはどこ吹く風でひくひくと肩を震わせている。

「この手紙によるとだね、軟禁だか監禁だかされて椅子に縛り上げられて三日過ごしたあげく、子作りを拒絶してさらに三日の間折檻を受けたことになっている」

淡々と言う言葉に、ヴァルフアムは嫌悪するように眉根をひそめた。

「……胸糞悪い話した」

いくらリルティア相手といえども、それを想像すると胃をすっぱいものが通るようないやな気持ちになる。おそらく、ヴァルフアムの中でその少女がリルティアではなくファティナに変換されるからこそその嫌悪感であろうが。

「でも、この手紙をぼくが預かったのは、結婚式の翌日なんだよ」

ひらひらとセラフィレスは手紙を振った。

「花嫁と花婿が床を共にしたのはその一日だけ。一週間の拷問まがいの扱いをいつたいつ受けられるんだい? それに、三日も食事抜きなんてしたらあの子は自由になった途端に逃げ出してるね。極

上のスコッチを賭けてもいい」

大仰に肩をすくめ、セラフィレスは口の端を歪めた。

「十五歳年の離れた花婿は、可愛い花嫁にデロデロで、爪先からねつちりと舐めあげるとはあっても泣かせることは怖くてできないと思うよ？ ああ、鳴かすことはあるかもね？」

「……」

「あ、うわっ、いやな想像しちゃったじゃないか。気持ち悪い」

セラフィレスは顔をしかめ、その手紙をくしゃりとまるめて放り投げた。

他人の私室を道端と勘違いしているのではあるまいな。

「ま、実際この手紙の中身は嘘だろうけど」

さらりと言われた言葉に、ヴァルフアムは顔をあげた。

「嘘？ そんな嘘を書いて何が楽しい」

「ファティが騙されて右往左往するのが！ きっと今頃それを想像してあの子はニヤニヤしていると思うね」

なんとという厄介な。

ヴァルフアムが顔を顰めると、セラフィレスは笑いながら片眉をあげた。

「本当にぼくのリールにそんなことをする男なら、決闘なんて言わない。寝てる場所でその心臓をぶち抜いてやるよ」

「決闘はしないのか」

ヴァルフアムは忌々しいというようにぼそりと呟きつつ、放り出されたゴミ屑を暖炉の中に入れなおす。

なぜこの男の尻拭いをしなければならぬのかまったくもって謎だ。

何より、あんな下らぬ手紙を書く淑女など滅びてしまえ。

「ああ、それよりもこんなモノもあるか」

ふと、セラフィレスは思い出したように胸元に手を差し入れ、小さな瓶を一つ取り出し、にやりと口元をゆがめた。

親指と中指で瓶を挟み込み、入り込む太陽光に反射させるようにとろりと中の液体を揺らして見せた。

「ヴァルにあげるよ」

「なんだそれは？」

「俗称、淑女の吐息」

ことりとテーブルの上にそれを置き、セラフィレスは謳うように続けた。

「甘く柔らかな眠りを約束してくれるらしいよ 永遠に」

昨日泊めてくれた可愛い子ちゃんが持っていたんだけど、危ないからもらってきちゃった。

とへらへらと笑うセラフィレスに、ヴァルフアムは眉間に皺を刻みこんだ。

「生憎とそんな眠りなど欲しくない」

「嘘つきだなあ、ヴァル。判っててそう返すなんて。まあま、決闘やら血生臭いものより随分といいもんだと思うよ。幸い、相手はもういつぽっくり逝くか知れぬ年齢だし？」

茶化す物言いにむっとしながら、ヴァルフアムは軽く手を払った。

「何を言っているのか判らん」

「ぼくも何言ってるのか判らないや」

くくつと喉の奥を鳴らし、セラフィレスは足を組み替えてつんと指先で小さな瓶を弾いた。

「こつこつというのはアレだ、知り合いのカディルのが似合うんだよね」

やれやれと何気なく落ちた言葉に、ヴァルフアムはそれまでしていた作業 旅行の間の荷物と大まかな予定を組む作業を中断し、

片眉を跳ね上げた。

「カディル？ カディル・ソルド？」

「ああ、ヴァルも知って……でもおかしくないか。そりゃそうだ」

一人で勝手に納得しているセラフィレスに胡乱な視線を向けると、セラフィレスは首をかしげた。

「あれ、違う人？」

「誰の話なんだ？」

「誰って……ファティナの郷里であるグレイフィードの領主館を取り仕切っている家令の話しじゃないのかい？」

セラフィレスは不思議そうに首をかしげた。

「元々はグレイフィードの隣の領主の長男外で、今はグレイフィードの屋敷と領地を管理している。たまに顔を合わせるんだけど、なんていうか爬虫類？ トカゲとか蛇っぽいよね。何考えてるのか良く判らないから、ぼくはああいうのはちょっと苦手だな」

ファティナの屋敷の家令。

その事実がすとんと腑に落ちた。屋敷のことをファティナに語っていたのもうなずける。うなずけると同時に、自分の父親がファティナに対して砕く心の意味に不愉快な気持ち湧いた。

父と義母達の間のことなど今まで気にも掛けていなかったが、父は妻にそのような気の掛け方をしたことがあつたであろうか？

「ああ！」

突然目の色を深くしたヴァルフラムの様子に、ヴァルフラムの夢想を言葉を跳ね退ける勢いで突然セラフィレスはにんまりと笑った。

「ぼくはヴァルみたいに感情が駄々漏れなタイプのほうが好きだよ。必死に平静を装っていても、苛立ちとか憤懣がもお完璧にいたらだら

漏れちゃって素直で大好きだよ！」

「貴様に好かれても嬉しくない」

「もお素直じゃないんだからっ」

……なぜこの男はこの屋敷に入り浸るのだろう。

ヴァルフアムはぐっと拳を握り締めたが、この男を叩きださない理由を考えないところですでに敗北していることに気付いていなかった。

## 胸の内

要らないと言ったにもかかわらず、テーブルの上に残された小瓶。まるで気付く薬でもいれるかのように、表面に蔦をからませたデザインに薄い桃色の、いっそ愛らしい小瓶は淑女が好みそうなものだった。

それを眺めていると、ヴァルフアムの眉間の皺はずいずいと深まった。

セラフィレスのほのめかしが判らないとは言わない。

父の死を望んだことなら幾度も有る。

だが、自らの手で殺したいのかといわれれば、あまりその気はなかった。いや、だがしかし。そうすることが必然であればその場合はむしろ毒などではなく、拳銃で風穴を開けてやりたい。

安らかな眠り？ 何故そんな生ぬるいことをしなければならぬのか。いっそ死ぬならばせいぜい苦しんで果てる。

そこまで考え、ヴァルフアムは息をついた。

我ながら、性格が悪すぎやしまいか？ そもそも、父に対しての気持ちなど、ただ「居なくてもいい」程度のものでしかないのだ。

落ち着け。あまりにも支離滅裂だ。

まず、父が死んで何か利点があるのか？

あるだろう。父さえ居なければ義母を誰にも奪われることは無い。父が居なくなれば、義母は変わらずそこにいる。

たとえ自分が他に妻を得なければならぬとしても、義母は……また、その場合、妻を娶らなくてもいいのではなからうか？ 義母を

自分の妻に 教会法によって無理だ。血のつながりはなくとも、義母と自分は教会によって親子と定められているのだから、夫婦に

なることはできない。  
跡取りである自分は必ず子を設けなければいけないのだから、妻は必然。

ぐるぐると巡る思考に、やがてヴァルフアムは匙を投げた。

「酔っているな……」

思考がまとまらない。

阿呆なことが脳内を駆け巡るのは、セラフィレスがおかしなものを持ち込んだせいだ。

きしりと椅子の音をさせて足を組み替え、ヴァルフアムはテーブルの上の小瓶をつまみあげて燭台の灯りに照らした。

傾けると中の液体がとろりと揺れる。粘度のあるらしいそれを瞳を細めて眺めながら、自嘲するように口元に笑みを落とす。

いつそ、ファティナに口移しで飲ませれば、こんな下らぬ悩みなど解決するだろうに。

\*\*\*

「わたくし決めました！」

朝一番でクレオールを相手にぐっと拳を握り締めて強く宣言したのはファティナだった。

夫の領地へと旅立つ朝、ファティナにも思うところがあったのだから。

「わたくし、大人になります」

「」

クレオールはとりあえず笑みを張り付かせた。

「旦那さまに会うのに恥ずかしくない立派な大人になります！」

大人になるという宣言一つで大人になれるなら世話はなく、またファティナにそれが適うとは到底クレオールには思えなかった。

きしりと胃が痛む気がするの、この女主が自分のいないところできちんと生きていけるのかどうか果てしなく心配である為だろう。勿論、彼女は決して一人ではないのだが、旅の同行者がヴァルフラムである。

いつそ執事という職を辞して、従僕にでも転職してしまいたい。少なくとも、屋敷に縛られる執事よりは主の世話係の従僕であれば旅に同行が適うというものだ。

引継ぎのことなどを考えれば当然無理な話ではあるが。

「立派な心がけです」

他にいいようがない。

しかし、クレオールの言葉に我が意を得たりと言つ様子で、ファティナは勢いよくうなずいた。

「私が大人のきちんとした女性であれば、きっと旦那さまは……」

「

勢いに乗っていたファティナだったが、ふつと顔を強張らせたかと思うと視線をそらした。

「奥様？」

「きつと旦那さまは旦那さまのお子を授けてくださると思うのです」「そうですね」

クレオールはふつと口元をほころばせそうになるのを堪えつつ、女主の言葉に賛同した。果たしてヴァルツがこの幼い妻にどう接するつもりなのかは使用人である自分には理解しがたい。だが、ファティナが望むのであればそうなって欲しいとクレオールも願っていた。

夫を愛し、子を求める　女主は極普通の女性なのだ。

ただほんの少し、突飛過ぎるところがあるだけの。

ただ少し……いや、深く考えてはいけない。

「馬車でいつたい何日かかります?」

「若様がご予定しているのは六日程です。行程的にはゆっくりとしたものになりますから、これより遅くなることはまず無いと思います」

昨夜のうちに聞いた行程は、あくまでも野宿などしないようにと心の配られたものだった。各所の宿屋もきちんと視野に入れられているし、随所の休憩地点も考えられている。ファティナに無理をさせない為であろうと思えば微笑ましい程だ。

クレオールは女主を階下へと促し、朝食の為に食堂室へと歩き出した。

「旦那さまのお屋敷では朝食は食堂ではなく、寝室でとられることとなると思いますが、侍女がお手伝いしますので戸惑うことはありません」

「寝室で食事、ですか?」

「はい。この屋敷ではヴァルフラム様が朝はお早いですし、ファティナ様も一緒に朝食を召し上がる習慣でしたから食堂室でしたが、一般的には朝食は寝室でとることが多いのです。寝台の上でクツシヨンに背を預けて膝の上に食台をセットしてお召し上がりになることとなります」

説明を加えながら、やはり心配になってくる。

この屋敷での常識が外では通用しないこともある。心配したらまったくもってキリのないことだ。

ファティナはしばらく考える風だったが、やがて真面目な口調で言った。

「寝台に虫がきてしまいそうですわね? もしかして、ヴァルフラム様は時々わたくしが寝坊した時に寝台で朝食を召し上がっているのかしら? だからあの寝台には悪い虫がいるのではない?」

……何もしなくてもあの寝台には悪い虫がいるのです。

「いない間にも虫干しと燻蒸をお願いしますね」

「そのように致します」

思わず言葉が不必要に慇懃になってしまった。

「あ、それともやっぱり寝台を取り替えてさしあげたほうが良いかしら？ 結局まだ取り替えてませんわよね？」

真剣に悩みだした女主を前に、クレオールは更に心配が増してしまい、我知らずそつと自らの胃の腑の辺りをなであげてしまった。

「クレオ？ なんだか顔色が悪いみたい。大丈夫？ 具合が悪い？」

あれこれと思い悩んでいる主がふと足を止めてクレオールを見返してくる。眉を潜めたその姿に、クレオールは苦笑をこぼしそうになる自分をとどめ、そつと首を振った。

「クレオは具合が悪いのではありません。ファティナ様が一日も早くご無事でお帰りになられるようにと願っているだけなのです」

真摯にゆつくりと言葉にすれば、ファティナは時折見せるやけに大人びた微笑を浮かべた。

「心配は要りません。わたくしは旦那さまの許に行くだけなのですもの。」

そう 心配なんて、少しもありません」

瞼を伏せて、まるで自らに言い聞かせるように呟いたファティナは、途端に子供の顔に戻ってみせた。

「久しぶりに名を呼んでくれましたわね。いつもそうしてくれていいと言っていますのに。誰も名を呼んでくれないと、わたくしはわたくしが誰か忘れてしまいそう！」

たいへんありがたい申し入れだが、自分で自分の首を絞める趣味はクレオールには無い。

クレオールは食堂室の扉を開き、すでにテーブルについて新聞に視線を落としていた男主に一礼した。

「おはようございます。若様」

丁寧に告げたが、いつもどおりヴァルフアムは軽く視線でうなずくだけだった。

「おはようございます、義母うえ。良い朝ですね」

ばさりと音をさせて新聞をおろし、ヴァルフアムが席を立ててファティナへと手を差しだした。

「おはようございます。ヴァルフアム様　とつても素晴らしい朝ですわね」

「食事が済んだらお腹が落ち着くまで体を休ませ、その後出立いたしましょう。荷物は朝のうちに馬車に積み込むように伝えてありますから、何の心配もありません」

ヴァルフアムは言いながらそつとファティナの脛に、頬に口付けた。

「楽しみですね」

\*\*\*

目覚めてしばらく、その忌々しい薬瓶を前にヴァルフアムはまたしても下らぬ思考に落ちてしまった。

こんなものが存在しているのが悪い。

こんなものはさっさと処分してしまうに限る。そう決意し手をかけたところで、ノックの音と共に侍女が扉を開いた。

「おはようございます」

咄嗟に、ヴァルフアムは小瓶を手の中で強く握りこみ、何食わぬ顔で上着のポケットの中に落とし込んだ。

激しく心臓が鼓動するのは　まるで自らの心の内を見透かされる  
ようなどうしようもない罪悪感だったろう。

侍女は当然ヴァルフアムが何を思い、何を手にしていたかなど知る  
良しも無いというのに。

殺意など、無い筈だというのに。

## 馬車の旅

白い大きな犬の首にぐつと手を回し、ファティナは「悪戯しては駄目ですよ」と囁いた。

「パールは大丈夫ですよ。お散歩は私が致しますし」と、メアリは穏やかな微笑みでそんな女主に請け負った。

屋敷の主が馬車で旅立つという朝は、澄み渡る青空が広がる晴天だった。正面の車寄せに使用人達がざわざわとざわめきながら荷物を二台の馬車に詰め込み、護衛が三名、御者が二名、侍女二人に従僕が一人　いかにも大仰な道行だが、淑女がいるのだから当然ともいえる。馬車で五日あまりも走るというのだから、結構な遠出だ。昨夜のうちに組まれたという旅程は無理の無いものになっているし、決して野宿などにならないようにと町の宿屋のことも定められている。ヴァルフアムがどれだけ心を砕いたものか知れるものだが、ファティナには届いていない。

「義母うえ、あまり時間をかけても予定が崩れます」

ヴァルフアムが馬車につながれた替えの馬の鼻面を撫でながら苦笑をこぼせば、ファティナは名残惜しいという様子を見せながらも愛犬から手を離れた。

「パール、皆を困らせてはいけませんよ？」

垂れた耳の裏をかいてやり、更にぎゅっと犬を抱きしめるファティナに、ヴァルフアムはしびれを切らしたのか呆れた口調で言った。「よろしいですよ？　行きたくないのであれば」

「まあっ、またそういう意地悪をおっしゃる。わたくしがどれだけこの日を楽しみにしていたのか、ヴァルフアム様はご存知でいらっしやるでしょうに」

ファティナは唇を尖らせ、ついでメアリへと視線を向けた。

「わたくしがいない間はゆっくりとなさっていただきますね」

「最近は何もつばなしです。どうぞご無事でお戻り下さいませ。それと、私がないからと言って、勉強をおろそかにしてはいけませんよ?」

教師らしく威厳を込めて言われ、ファティナは眉を潜めつつもうなずき、手を伸ばしてメア리를軽く抱きしめた。

「戻ったら近代の歴史ですわよね?」

「きちんと覚えていらっしやいますね。忘れずに予習なさって下さい」

いかめしく言えばファティナが笑う。

ファティナはすつと身を引き、ついで控えているクレオールへと体を向けると、クレオールの手をぎゅっと握った。

「クレオもたまにはゆっくりして下さいね」

「ご心配には及びません。奥様はどうぞご病気や怪我などなさらないように 困ったことがありましたら、何でも侍女に申し付けてください」

しみりとした別れの空気をかもし二人だが、それをじりじりと冷たい眼差しで見ているヴァルフアムの存在にメアリはあきれ返っていた。

もしこれでファティナがクレオールに抱きついたりしたら面倒臭い事態になりかねないとメアリなどはひやりとしたが、クレオールはやんわりとファティナの手を引き離して一歩退いた。

「どうぞ、お気をつけて 〴〵無事をお祈り申し上げます」

\*\*\*

予定より幾分遅い出発となったが、馬車は昼前に出立することができた。

予定より遅くなった最終的な理由は単純にして明快、突然ファティナが「ヴァルフアム様！やっぱりパールも連れて行ってあげたらどうでしょう？」などと言い始めた為だ。

いつまでもぐずぐずと犬に張り付き、往生際も悪く。

「パールはわたくしがいないと寂しいですわよね？」

確かに、パールは寂しげな眼差しで主をみあげ、でかい図体にかかわらずくんくんと鼻を鳴らしてはいたが、だからと言って「はいそうですか」などと犬を連れていける訳がない。百歩譲って連れていくことが可能だとしても、こんなでかい犬　へたをすればファティナと体重が近いほどの犬など邪魔でしかない。何よりこの犬はヴァルフアムがファティナに誕生日の祝いに与えた犬だということに、ちつともヴァルフアムにはなついていない。

ともすれば温和な顔をしているというのに鼻に皺を寄せて威嚇する始末だ。

ヴァルフアムはにっこりと微笑んで、

「駄目です」

きっぱりと言い切り、さっさとファティナに馬車に乗るようにと言ったのだが、小娘様は途端にむっとした様子で「世話はわたくしがきちんとします」とまで言い出す。そもそもその犬の世話をするという意味をこの義母が理解しているとは到底思えなかった。

どう言い聞かせようかとヴァルフアムが逡巡していると、それまで控えていた執事が穏やかな口調でファティナに言った。

「大人におなりになられるのですよね？」

「……」

「パールの世話はきちんと致します。どうぞ心置きなくお立ち下さ

い

ファティナはそれでも名残惜しい様子をみせたが、仕方ないというようにもう一度愛犬の首をぎゅっと抱きしめて「寂しくても鳴いてはいけませんよ?」確実に寂しがっているのはファティナ自身だろうと思わせることを眩き、観念した様子で馬車に乗り込んだ。

「大人になるとは何ですか?」

馬車が走り出してしばらくは窓辺にべったりと張り付いて屋敷が見えなくなるまで手を振り続けていたファティナだが、やがて前方にいるヴァルフアムを視界に入れた頃合を見計らい、ヴァルフアムはゆっくりと切り出した。

「わたくしはもう立派な大人です」

「そうですね?」

何故か得意げに背筋を伸ばして言う義母が滑稽で、ヴァルフアムは思わず疑問系で応えてしまった。

「なんだか言い方がいやな感じですよ」

「そうですね? 勘違いではないでしょうか」

「わたくしは今朝自らに誓ったのです。旦那さまに恥じない立派な大人になって旦那様にお会いしに行こうと」

ファティナはぎゅっと自分の胸の前で両手を重ね合わせ、微笑んだ。

そういうところが子供だというのだ。

ヴァルフアムは内心で呆れつつ、ついで「旦那さまの為」に努力しようとする義母に腹立たしさを覚えて面前の義母をすさんだような気持ちで眺めた。

今日の義母の服装は、この日の為にあつらえさせた淡い桃色の旅行用のモスリンドレスだ。身動きがしやすいようにとコルセットを

使わないタイプで、外套をつけている。季節的にさほど寒くは無いが、もしかや足元は冷えるかもしれないと足元には暖めたレンガを置いてある。

普段であれば耳の脇の髪を一掬いづつ後ろで束ねて髪留めで止め、残りの髪は腰の辺りまで自由に流してあるものが、本日はきちんと全て結び上げて頭の上には申し訳程度に可愛らしい帽子がちょこんと乗せてある。

ふと、以前このように馬車で義母と迎え合わせに座っていたのはいつのことだろうと記憶を手繰り寄せ、思い出した途端に後悔した。義母がヴァルファムに無断で屋敷を抜け出し、セラフィレスが演奏する音楽会に出席した時ではなかったらうか。

今日のような旅装ではなかったが、あの時のファティナも髪を結び上げて幾つかの髪飾りと真珠、そしてきらきらと髪を彩っていたのは輝石をすりつぶして散らしたものだっただろう。

結び上げられた髪に、白い首筋。

そして、怒りと、強い渴望。

きつちりと結び上げられた髪が乱れて、その唇に乱暴に触れた。

舌先を無遠慮に吸い上げ、掃かれた口紅がかすれて吐息がしつとりと濡れる感覚。

その時の感情も、感触までも生々しく思い出し、ヴァルファムは思わず呻いた。

「ヴァルファム様？」

ふいに膝頭に重みを感じ、ハッと息を吐き出すとヴァルファムの膝頭に軽く手を添えて不思議そうに覗き込んでくるファティナの翡翠が飛び込んだ。

「うわあっ」

珍しく無様な声をあげてヴァルファムはのけぞり、その勢いのまま箱馬車の背にがんと頭を打ち付ける羽目に陥った。

「な、何してるんですかっ」

「何って……何度も呼びましたよ？ 具合でも悪いのでありません？ 大丈夫ですか？」

「いいですから座ってなさい！」

側頭部に鈍い痛みを覚えながら、ヴァルフアムは思わず怒鳴ってしまった。

自らの思考を見られたかのような焦りが先に立ち、その気まずさを誤魔化すように怒鳴り上げたのだが、面前にいるファティナは何故怒鳴られたのか判らずに唇を尖らせた。

「わたくしはただ心配しただけなのに」

「……すみません」

ばつの悪さにヴァルフアムが謝罪すると、ファティナは 図に乗った。

「そもそも、ヴァルフアム様は怒りっぱいですよ。勿論わたくしはヴァルフアム様がお優しい方だと知っていますけれど、きつとヴァルフアム様が偏屈で怒りっぱくて面白みの無い方だと勘違いしている方もいると思います」

偏屈……

「聴いておりますか？ たまにはきちんとこの義母の話をお聴き下さいませ」

なんだか判らないが、ファティナは調子にのった様子で自らもきちんと反対側にすわり、こほんつとわざとらしく咳をつくど、たんたんつと座席の天板を叩いた。

「お座りなさい！」

「座っています……」

ファティナは満足そうにうなずき、

「この旅の間に立派な大人の男性になつて素敵な花嫁様をお迎えできるようにヴァルフアム様も人間を磨くのです」

時折……そう、時折。

ヴァルフアムは生あつたかいような生ぬるいような気持ちでファティナを眺め、自分は激しく趣味が悪いのだろうと天を仰ぎたいような気持ちになる。

「女性には優しく、誠意を込めて対応なさらないと！」

「はいはい」

「まあっ、誠意が少しも感じられません」

趣味が悪すぎる。

自分はまったくもって本当にどうにかしているのではあるまいか

ヴァルフアムはぷりぷりと意味不明なことで楽しそうに怒っている義母を前に乾いた笑いを浮かべ、足を組みなおした。

淑女とはほど遠く、賢さとも縁が薄く、けれどどうしようもなく愛しいイキモノ。もう理屈とかそういうものを全て無視した存在としかいいようがない。

「では義母うえがおっしゃる大人の男はどんな男なのです？」

「それは勿論女性に優しくして、誠実で、素敵な男性です」

随分と象徴的で判らない言葉が並んでいる。

所詮、ファティナ自身理解していないのだ。

ヴァルフアムは深く息をつき、顔をあげて微笑んだ。

「生憎とこの不肖の義息のことですから、貴方の望み通りの大人の男になれるか判りませんが」

「あら、ヴァルフアム様はわたくしの自慢の義息ですわ」

不肖だなどともなくてもないと言う義母に唇を引き上げるようにし

て笑って見せた。

「では、とりあえず大人の男になれるように努力してみせましょう」

大人の男など、ちっともあなたは理解していないだろうに。

## 渴望

詭弁だ

勿論、ヴァルフアムはそこを理解している。

「義母うえ、足元が悪いですよ」

馬車のステップに片足を掛け、義母の手を取りそのままひょいと抱き上げる。

あれだけ甘いものに執着している割に軽いのは、元々の身長のせいなのか　容易く抱き上げると、ファティナは吐息を落とした。

「ヴァルフアム様、歩けます」

「勿論歩けるでしょうが、なんと言いましても私は大人の男になろうと努力しているところですから、あなたは寛容な心でもって受け入れてくださいますよね？」

そう、詭弁だ。

だが便利なこの言葉に、ファティナは言葉を詰まらせる。

なんといつてもそれを求めたのは義母当人であるのだから、今更「止めなさい」などと言えないのだろう。

ヴァルフアムはにっこりと微笑み、ファティナを抱き上げたまま小川の畔に用意された厚地のキルトへと誘った。

侍女と従僕とがお茶の準備と軽食とを整え、キルトの上には女主の為にクッションと掛け布が置かれている。ヴァルフアムはファティナをクッションへとそつとおろすと、その膝に掛け布をかけ、自らもキルトの端に座った。

馬車の旅も二日目。

一日目はセラフィレス個人の私邸が郊外にある為、そこに泊まった。元々言つてあつた為にセラフィレスは部屋も十分な食事も用意していたし、翌日の朝食食用にとバスケット一杯の食料も用意してくれ

た。問題があるとするれば、深夜遅くまでまたしても酒に付き合わされることとなったが、旅の当初としては悪くない滑り出しであったろう。

二日目になれば、それまでまばらにもあつた家屋敷の姿はすたれて農地が続き、やがて牧草地帯へと変化していく。牛や羊を見ては喜んでいたファティナだったが、昼頃には疲れも出たのか少しばかり無口となっていた。

「お茶、入れてさしあげますね」

従僕が少し離れた場所で火を炊き、沸かした湯をポットにいれて運んでくるとファティナがそれまでの変化の無い退屈を蹴飛ばした様子で嬉々として茶器に手を伸ばした。

「少しは上手になりましたのよ」

「それは楽しみですね」

言いながらもヴァルフラムはそこはあまり信用していない。

先日作られた焼き菓子の時にもそれが「食べられるもの」であるという認識はあつたが、果たして「嗜好品」であるかどうかには疑問を抱きつつ口にしたものだ。

幸い、それは問題なく喉を通つたが。

難点があるとすれば少しばかりヴァルフラムには甘みがきつすぎたが、なんといつてもあれは義母がヴァルフラムの為に作ったものである。甘かろうが辛かろうが、どうということもない。

さすがにファティナの用意するものであれば毒でも口にするとどという覚悟は無いが。

……いや、食べるか？

従僕と侍女とがきちんとバスケットの中身を皿に盛り分け用意を整えると、ヴァルフラムは下がって護衛や御者にも食事を用意し、彼ら自身も食事をするようにと命じつけた。

「クレオが良く言っていますけれど、蒸らし時間とお湯の温度とに気をつければいいのですわよ」

と、ファティナは少しばかりあやうい手でもってお茶の準備をする。ポットの中に茶葉を三掬い、湯をそつと落とし込んで可愛らしいティーコジーを乗せる。

「それでも時々苦味がすぎてしまうのですけれど」

くすくすと笑う義母は楽しそうで、ヴァルフアムは自然と口元に微笑が浮かぶのを感じた。

仕事に追われ、家の瑣末なことに追われてこうして穏やかな時間を得るのは実に久しぶりな気がする。

ああ本当に。

結婚だとかエイリクだとかまったくもって邪魔臭い問題でこのころずっと頭が痛かった。

さすがにしばらくの間はファティナも結婚のことなど持ち出したりにないだろう。なんといっても彼女の義息は完膚なきまでに振られたのだから。どんなに無神経な女といえどその傷を掘り返そうとはしないだろう。

いや、ファティナであればするかもしれないが。

「でも一杯練習しましたのよ」

ファティナは熱心に言いながら、温めた紅茶のカップに茶を落とし、キルトの上に置かれた盆に載せ、示した。

「どうぞ」

まるきり子供のままごとのようだ。

そのおかしさを堪えてヴァルフアムはカップを手にとり、その香りと色を楽しみ一口喉へと流し込んだ。

口の中に広がる爽やかさと、喉にほんの少しからむ渋みに苦笑す

る。

「いかがです？ 以前よりずつとうまくなったと思うのです。ミルク・ティは難しいのでまだちょっと無理ですけど、普通にいれるぶんには大丈夫ですわよね？」

熱心に尋ねてくるのが愛らしく、ヴァルフアムは「おいしいですよ」とやんわりと応えた。

途端、ファティナは両手を合わせて口元にあて、微笑んだ。

「きつと旦那さまも喜んでくださいますわよね？」

「そうですね」

一気に不愉快な気持ちになったが、ヴァルフアムは落ちてしまった声のトーンを必死に盛り返そうと努力した。

自分は今大人の男になる為に努力しているのだ。

こんなことで大人気なく不愉快になっている場合ではない。

「そういえば、ヴァルフアム様」

「はい、なんですか？」

「メアリ女史にはきちんと挨拶はされました？」

義母の無神経さは予想通り、いや遙かに上回っていた。

「……私と彼女はもう無関係です」

なんといつてもすでに慰謝料の為の屋敷を郊外に用意している。

あれで文句があるのであれば正攻法で訴えてみる。

弁護士など用意せずとも勝てる自信がある。

「本気でおっしゃっていらっしゃるのですか？」

「この話題はここで最後にして欲しいのですが、要約いたしますと私はメアリ女史に振られたのです。いいですか？ 傷心の私にこれ以上塩を塗り込めるような真似はお止め下さい」

さすがにここまで言えばいいかと思えば、ファティナは吐息を落としました。

「可哀想なヴァルフラム様……」

ええ本当に。時折本当に自分は随分と可哀想なのではないかと思えますよ、義母うえ。

「でもここでめげてはいけません！ ヴァルフラム様はとっても素敵ですもの、ちゃんとヴァルフラム様を好きになってくれる方が見つかります。ですから悲しまないで下さいね」

悲しんではないが、そこまで同情されるとなんとなく腹立たしいのはいったい何故であろうか。

まるで物凄く女性に嫌われているかのように言うのは止めて欲しい。ヴァルフラムは苦笑し、紅茶のカップの淵を指先でなぞった。

「素敵ですか？」

「わたくしの自慢の義息ですもの」

ファティナは盆の上にあったサンドイッチを一口齧り、飲み込みながらうなずいた。

「ありがとうございます。私にとってもあなたは自慢の義母ですよ」  
たとえ愚かで考えなしで無神経で人を怒らせる天才であろうとも。

劣わる言葉一つ、優しい眼差し一つ、無邪気な微笑み一つ。それを惜しみなく与えてくれるそれだけで誰よりもかけがえのない愛しい女。

ふつと鼻で笑えば、ファティナは小首をかしげた。

自然と上着のポケットをさすり、そこに硬い瓶の感触があることを確かめる。

愚かで考えなしで無神経なあなたのことを考えると、愚かなことばかりを考えている自分が更に愚かに思えてくる。

「でも、いつか義母うえは私を嫌いになってしまつかもしれませんね」

「どうしてそんなことをおっしゃるの？ わたくしがヴァルフラム様を嫌いになるなんて、そんなことは絶対にありませんわよ」

ファティナは食べかけのサンドイッチを手にしたまま、少し怒るようにして唇を尖らせた。

翡翠の眼差しをひたりと向けて、見くびらないで欲しいと訴える様子に、ヴァルフラムは微笑を浮かべ、身を寄せて囁いた。

「でも、この秘密を知ったらきつと嫌いになりますよ」

「まあ、何か秘密がありますの？」

「ええ、ずっと　ずっとあなたに秘密にしていたことが。けれどきつとそれを知ったらあなたは私を嫌ってしまふと思うのです」

声を潜めてナイショ話しのように言う義息の前に、ファティナはむっとした様子でもう一度口にした。

「嫌いになったり致しません」

「約束できますか？」

「勿論」

ファティナは言うど、手にしていたサンドイッチを一旦盆に戻し、につこりと微笑んだ。

口の端にサンドイッチに挟み込まれたソースがついているのが、またなんと滑稽だ。

「ヴァルフラム様にどんな秘密があっても、たとえば、ヴァルフラム様がどんなひどいことをしたとしても、わたくしは決してヴァルフラム様を嫌ったり致しませんわ」

高らかに宣言し、そっとファティナはヴァルフラムの唇に自分の

唇を押し当て、すぐに離しはしたものの満足気に一つうなずいた。

「さあ、その秘密を教えてくださいませ」

嬉しそうに言う義母の前に、ヴァルフアムは身を起こして自らの唇についたソースをぺろりと舐めて微笑んだ。

酸味のあるソースが、口の中にじんわりと広がっていく。

それと同時に、自分の中に激しい飢えを感じた。

腹の奥でぐるぐると巡る、激しい飢え。口腔の奥に自然と溜まる唾液が息苦しさを与え、意識してゆっくりと嚥下した。

「では、今宵は久しぶりに一緒に寝台で休みましょうか。その時に私の秘密を教えてくださいませよ」

義母の秘密をどう捉えたのか、楽しそうにしている義母にヴァルフアムはもう一度確認するかのよう言葉が続けた。

「言うておきますけど、知りたいと言ったのは義母うえですからね。聞いてから聞かなければ良かったというのはナシですよ。それに、嫌いという言葉もナシです」

ヴァルフアムは意地悪い口調でいいながら、ファティナの食べかけのサンドイッチに手を伸ばし、それを自分の口の中へと納めた。

嫌われない保障など勿論存在しない。

ポケットの中にある小さな冷たい瓶を意識しながら、ヴァルフアムは何が自分にとって最悪なのかを考えた時、一つの答えを導き出していた。

どのような結果になろうとも彼女はきつと泣くこととなる。

ならば、誰かに泣かされるくらいであれば自分が泣かして何が悪い。

## 亀裂

二日目に宿泊したのは小さな町の宿屋だった。

夕刻には従僕を走らせ宿の予約と整いをさせたものの、よくある駅馬車が通過する町ではあるが、いかにも宿屋は小さく貧相だ。

食事を済ませている間に侍女と従僕が部屋の掃除をすませ、シーツなども持参したものに交換はしたものの部屋の調度品や趣が変わる訳でもない。

そここうするうちに天候が崩れ、階下の食堂では人の声が大きくなっていた。

騒がしい……

ヴァルフアムは室内に小さな浴槽を入れて入浴をすませたが、部屋の椅子に座り琥珀色の酒の入ったグラスを傾け、鼻を鳴らした。

食事時もファティナは疲れを見せてはいたものの、出されたものに文句も言わずにきちんと食べていたし、来る途中に見かけた牛の柄が可愛かったと良く判らないことに喜んでいた。

今頃は彼女も入浴後の身支度を侍女に任せていることだろう。

馬車の旅も二日目だったが、実は王都からそう離れているという訳ではない。

時間はかかるが、義母の体に負担が掛からぬことを第一に道も広くて通りやすい場所を選んでいる。少しばかり辺鄙といってもいい道で物騒な噂もあるが、その為に屈強な護衛を三人つけているし、二台の馬車にはそれぞれ銃も乗せてある。ヴァルフアム自身、短銃を一丁手元においているのだから、安全には気を配っていた。

だがそれはつまり、人があまり通らないのだから町にある宿もあまり期待のできるものではないということでもあった。

寝台も今は一見すれば真新しいシートがきちんと掛けられて何の不  
足も無く見えてはいるが、決して清潔なものでは無いだろう。へた  
をすれば本当に悪い虫がいそうなくらいだ。

こんな場で……

ちらりと部屋の扉を、そして壁へと視線を転じる。

気になって一番近い壁を軽く叩けば、笑いたい程軽い音が耳につい  
た。

壁も、薄い

あの人は泣くだろうか。

泣き叫んだとしても今日の決意は固い。だが、邪魔が入るのは頂け  
ない。

今宵、今まで隠し通していた胸の内を伝え　そして、この腕の中  
でその身に想いの全てを刻みつける。そう覚悟を決めてしまえば、  
何故か余計なことばかりが気に掛かる。

酒を飲ましてしまえば……いや、駄目だ。酒は駄目だ。

あの時と同じように泣き上戸になられてはたまらない。ほんの意地  
悪で酒を飲ませたあの時、へぐへぐと泣きまくり、こちらの気力も  
怒気も、あまり大言できない何もかもをそぎ落としてくれた記憶は  
未だ鮮明に残っている。

だからといって声をあげられては、近くにいる護衛はおるか侍女  
に踏み込まれてしまうかもしれない。

さすがにそんな訳にはいかない。

泣いて抵抗されでしまう前に、いっそのこと縛り上げてしまおう

か。

いや、どうせならあの人が義息と関係を築いたと使用人達にばれ  
てしまえば　　というか、ちょっと待て。私は正気か？

これではまるきり十代の若造　　いや、犯罪者だろう。  
完全に駄目な感じの。

泣いて抵抗するあの人を抱きたいなどと思っている訳ではない。  
優しく口付け、それに応えて欲しい。

自らその唇を解き、甘い吐息と舌先で触れる愛撫に身を震わせて欲  
しい。

時折見せる大人の顔で見上げ、首に手を回して愛していると……

脳裏に甘く柔らかな吐息を描いたとき控えめなノックが響きわた  
り、ヴァルフアムは危うく持っていたグラスを取り落としそうにな  
り、その気恥ずかしさを誤魔化すように空咳を二度繰り返した。

だから、私は十代の青二才か！

「どうぞぞつ」

言葉にし、いやこれでは駄目だと手元のグラスをテーブルに戻し、  
席を立った。

ファティナを優しく招きいれる程度の礼儀と誠意はきちんと示さな  
ければ。そう、最初から最後まで大人としての誠意を示すのだ。

たとえ抵抗されたとしても、優しさのうちに最後には求めてもら  
えるように。

自分の感情を一旦沈めて引きつる顔面筋を叱責して笑みを湛えると、  
ヴァルフアムは数歩で届く扉に手をかけて開こうとしたが、その扉  
はヴァルフアムの応えに対して反対側から開かれた。

「失礼致します」

丁寧な口調で応え一礼した相手を前に、ヴァルフアムは顔面筋を宥めて作成された笑顔のまま言った。

「どうして執事おまえがここにいる？」

自宅屋敷に残して来た筈の執事は、にこやかな表情と微妙な声で応対した主の前に一瞬怯んだが、まるで屋敷でそうするかのように会釈して口を開いた。

\*\*\*

「クレオっ」

寝巻きにガウンという姿のファティナは、嬉しさを隠さぬ跳ね上がる声音でクレオールを呼ぶと、執事の手をぎゅっと握り込んだ。

「会いたかったです……けれど、あの、どうなさったのです？」

当初の喜びをすぐに収め、ファティナは小首をかしげた。

「私もお会いしたかったです、奥様。ご健勝そうでなによりですが説明は……」

ちらりと、クレオールはその視線を自分の背後で引きつった表情で足を組んでいる主へと向けた。

「私が致します」

ヴァルフアムは不機嫌そうに低い声で言い、とんとんとテーブルの表面を弾いた。

「義母っえ、明日の朝になりましたらそのまま自宅に戻ることにしました」

端的な言葉にファティナは瞳を瞬き、その意味が判らないというようにゆっくりと眉を潜めた。

「ヴァルフアム様、お仕事でいらっしやいますの？」

「いいえ、父の領地に行っても無駄になりました」

淡々と言葉を告げる義息に、ファティナはその言葉を吟味するようにはばらくじっとしていたが、やがてゆるゆると首を振った。

「まさか 旦那さまの身に何かっ」

「そうならまだマシでしたが」

ヴァルフアムは小声でぼそりと言ったが、勿論その言葉はファティナの耳には届いてはいなかっただろう。

ファティナは右手を戸惑うようにぎゅっと握り込み、不安そうに真摯な眼差しでヴァルフアムを見つめてくる。

ヴァルフアムは思わず視線を逸らし、前髪を軽くかきあげながら言葉を続けた。

「王都の別邸にいるそうです」

「……あの？」

「今朝方手紙が届いたそうです。五日後に訪問すると」

ファティナは狐に抓まれたな顔をした。

それに追い討ちを掛けるように言葉を続ける。

「王都の別邸に来て居るそうですよ。議員会がありまして、そちらに出席していたそうです」

足の怪我もなんのその、自らの仕事に向かうその熱意はむしろ天晴れと褒めてやりたいが、その知らせが届くのが遅すぎる いや早すぎたのか？

どちらにしるタイミングの悪さは類を見ない。

あの男は判っていて嫌がらせをしているのでは無いかとすら被害妄想が爆発してしまう。

まったくなんたるザマだ！

せつかく決意を固めたというのに、一瞬のうちに全てが台無しとなつてしまった。少なくとも、侍女や侍従を誤魔化せたとしてもクレオールを誤魔化すことは不可能だろう。

何より、この知らせでファティナを懐柔することは容易いことではなくなつてしまった。

今の彼女は今まで以上に夫のことを考えているだろうから。ぎしりと奥歯を噛み締め、ヴァルフアムははたりと気付いた。まさか呪われているのは自分ではあるまいか？

生憎と他人に呪われそうな覚えなら山ほどある。

ヴァルフアムは客観的に見ても他人に対して友好的な男ではない。少なくとも五人や十人くらいは軽く蹴倒して生きてきたと自負している。そのうちの二人や三人くらいに呪われていても不思議ではないだろう。

たかが呪い如きでどうにかなるほど軟では無いが、ここまで邪魔が入ると本気で何かあるのではないかと疑いたくなる。

「旦那さまは……どうして王都にいらしたことを知らせて下さらなかつたのでしょうか」

ヴァルフアムの内心など知らぬファティナはふっと瞳を伏せて肩を落とした。

「気になさる必要はありません。あの男は自らのしたいことをしたいようにするだけですからね」

冷やかに言う義息に、ファティナは唇を一旦引き結んだ。

「ヴァルフアム様、旦那さまに失礼なことをおっしゃってはいけません」

「失礼？ どこが失礼だというのです。私は事実を言っただけですよ。」

そもそも、貴女を本邸によこすようにと言ったのはあの男だという

のに、そのことすら忘れていたのでしょね。

あの父にとつては私や貴女など気に掛ける価値もない。庭先の石のほづがまだあの人の気持ちをかせるでしょうよ」

真実だ。

そう、それは確かに真実ではあつたろうが、思いのままにファティナに言うのは過ちだ。

ファティナは言葉を詰まらせた様子で義息を見返し、何かを堪えるようにして息をついた。

「明日の朝は早いのですよね。私はこのまま休ませて頂きます」

応えを待たずに身を翻したその小さな背に、ヴァルフアムは自分の失態を呪い、手のひらの中で爪が食い込むほど拳を握り締めた。

「クレオール」

「はい」

「あの人にお茶を入れてやってくれ」

失言を詫びて、その心を慰めたいという思いと同時に、今自分が行けばただあの人の心を壊すだけだと理解していた。

執事という立場でありながら単騎で駆けつけた男は、軽く頭を垂れてそのまま部屋を後にした。

おそらく、命じつけずともあの男はファティナの元に足を向け、その心を慰めたであろう。

あの人の心を慰めるということは、あの人の願う言葉を囁くことと同義で、たとえクレオールに任せなければならないのだとしても、そればかりは今のヴァルフアムにはできかねた。

ヴァルフアムはぎしりと音をさせる座り心地の悪い椅子に背を預け、テーブルの上に置かれたままのグラスに手を伸ばして残りの液体を一息に煽った。

父を擁護するよつなことなど、今の自分には到底無理だ。

## 真実

よく磨かれた板張りの廊下は艶やかな光沢を放っている。

丁寧に最高の敬意をもって作られたその建物は、細かい装飾をちりばめられた芸術のようだ。

王宮監理区域に作られている議員会館は、手入れこそ行き届いているものの、しかし煙草の香りがこびりつくようでもヴァルツにとつて心地よい空間とはいえなかった。

元々煙草が嫌いという訳ではないが、四年ほど前に煙草を手放していたらしい、煙草の紫煙も香りも眉間に皺を刻みつけるものと成り果てた。

議員会館の廊下は広く取られ、そこかしこで議論の続きを繰り広げている紳士がヴァルツに軽く会釈を返す。

「まったく精力的な男だな。怪我の時くらいは領地に籠ったらどうだ」

「私は何事も中途半端で済ますことはできない性質だからな。自ら進めた法案の決議を見逃せるはずがあるまい」

冷やかすような言葉を軽く受け流しながら車寄せへと向かうヴァルツだったが、ふと足を止めた。

立派な建物ではあるが、その年代を抑えることはできないのか床板に軽く反り返るような箇所が幾つか存在し、その違和感に右手で握る杖の先端が触れたのだ。

杖に頼るヴァルツにはその違和感が更に不快を覚えさせた。

「手をお貸し致しましょうか」

少し後ろを歩くカディル・ソルドが声を掛けると、ヴァルツは冷

ややかな眼差しを返した。

「一人で歩けぬとも思うか？」

「いいえ。げんに卿はご自身で立たれ、歩いておいでです」

「ならば余計な口は利くな」

冷ややかな応えを、カディルは瞳を細めて笑んだ。

「では話題をかえましょう。」

長く議題に上っておりました案件がようやく終結なさいましたと伺いました。おめでとうございますとお伝えしたほうが宜しいでしょうか」

淡々と言われる言葉に、ヴァルツはふつと鼻で笑った。

「めでたい？ 貴様はそうは思っていないのだろうか」

「どうしてそう思われるのでしょうか。私は心からそのように思っておりますが」

冷やかにヴァルツはカディルを見つめていたが、ふいに目元に皺を刻んだ。

「とにかく、私はすべきことをすべて成した。望みがあるとするばあとは……」

ふつと伏せた眼差しの下 蜂蜜色の緩やかな髪が浮かんだ。

豊かな金髪に意思の強い眼差し。薄い唇に紅をはいた姿は到底忘れることはできない程鮮やかにヴァルツの中にある。

約束して下さい……

何事も中途半端で終わらせるつもりはない。

約束など不要。

そう怒鳴りつけてやりたいが、ヴァルツには判っている。

その約束は、彼女が向けたものではない。

それは　ヴァルツが自らに課し、決して……果たされることの無かった約束だ。

\*\*\*

床板がキシリと小さな音をさせる。

クレオールはその宿屋のたてつけの悪さに軽く眉を潜めながら、女主へと宛てられた部屋へと足を向けた。

ヴァルフアムこそ心を安定させる為にお茶が必要に思えた。

顔色を悪くし、歯を食いしばり顔を背けたその姿は、まるで苦しさに耐えきれなくなった子供のようだ。おそろくきつと、ヴァルフアムこそファティナにすがりたい程の渴望を覚えているだろうに、その全てに背を向けてクレオールに「行け」と命じるのは苦しい決断であつたらう。

そう思いながら、クレオールはその考えを払拭させるように一度強く首を振った。主の感情など考えるべきものではない。今クレオールが考えるべき事柄があるとすれば、女主のことだけでいいのだから。

意識を切り替えれば、薄暗い廊下が見えた。壁に付けられた照明は獣油を燃やすもので、クレオールにとつても馴染みのあるものだが、ヴァルフアムの屋敷でそれが使われるのは使用人達の私室と、階下のみ。

主が通る場の照明は全てもう少し香りの良い植物油や蜜蝋だ。いくら程度の良い宿屋がないのだとしても、女主にとつてい相応しいものではない。一泊だけだからこそ、男主もここで妥協しているのだらう。

一階の受付ですでにヴァルフアムの部屋とファティナの部屋の場所は聞いてあるが、部屋番号を確認するまでもなく、ファティナの

部屋を発見することはできた。

ファティナ付きの侍女が二人、困惑したような表情である部屋の前でぼそぼそと話し合っていたのだ。

キシリと音をさせて近づくとクレオールを視界に入れ、彼女達はあからさまにほっとした様子で息を付き、軽く会釈した。

「クレオールさん。あの、奥様が……」

「お茶の用意を頼みます」

簡潔にいい、クレオールは扉の前に立ち一旦息を吸い込んだ。

意識を切り替えてそつとノックをし、まるでおびえるうさぎを招くように穏やかな口調で声を掛けた。

「奥様　クレオです」

しかし一回では返事が無く、二回同じことを繰り返しても対応は変わらなかった。

その間に、階下の厨房からお茶の為の湯を運んできた侍女が戻る。

その眼差しは困惑に揺れていた。

クレオールは吐息を隠し、もう一度ノックを試みた。

「ファティナ様、ご就寝前にお茶をお持ち致しました。この数日の間にお茶の淹れ方をきちんと復習なさっておいのですか？　どうかクレオに披露して頂けませんか？」

もう一度、そつと名を口にすると、かちやりと扉の掛け金が外れる音が耳に届き、クレオールは安堵に息をついた。

「ヴァルフアム様は、いらっしやいませんか？」

「おられません。ですが、心配されておいです」

「……」

ファティナはまるでネズミか何かのようにそつと扉を開き、外にヴァルフアムがないことを確認してやっとクレオールを部屋へと招きいれた。

狭い部屋は、それでも二間続きになっている。奥には小さな寝台が置かれているのが見えて、そしてこちらの部屋には寝椅子とテーブルがセットされ、侍女が休めるようにと配慮されているが、到底高級な宿舎とは言えるような場ではない。

クレオールは侍女から受け取った銀の盆をテーブルに置き、あくまでも穏やかな口調で語りかけた。

「私がお茶を淹れましょうか？ 奥様が淹れてくださいますか？」

「……クレオの淹れてくれる美味しいお茶を、頂きたいわ」

ファティナは淡い笑みを浮かべ、儂く寝椅子に腰を預けた。

泣いたあとは見られない。けれどその表情は白く、気を落としているのがいやでも判る。

あの父にとっては私や貴女など気に掛ける価値もない。庭先の石のほうはまだあの人の気持ちを動かせるでしょうよ。

ヴァルフアムが辟易と吐き出した言葉は、ファティナの胸に鋭いナイフのように突き立てられたのだろう。はたしてどのようにその心を慰めるべきか、とクレオールがティーコジーを手に思案していると、ふっとファティナは息をついた。

「ヴァルフアム様は間違っておいでです」

「……」

「旦那さまが私のことをどう思っているかなんて……」

ファティナは途切れがちの言葉でそっと、そっと消え入りそうに囁いた。

「私が一番判っておりますのに」

クレオールはファティナの作ったレースが縫いつけられているテ

イーコジーを見つめ、ただ静かに空気のように女主の言葉を耳にいられた。

相手の言う意味がどのようなものであるのか汲み取るのは難しい。

「……ファティナ様？」

「私の、父と母は、とても優しくかったです」

ファティナは記憶を辿るように、か細い言葉で続けていた。

それはクレオールに聞かせるというよりも、むしろただの独り言のように。

「時折しか顔を合わせませんでしたけれど、お二人は私を愛してくださっております」

彼女の言いたいことがどこに落ち着くのか、クレオールは詮索せず蒸らしあがったティポットのお茶を、温めたカップに落とすた。

「愛して……下さっていましたのよ」

ゆっくりと確認するその言葉に、クレオールはどこか安堵するよう息をつき、淹れたての紅茶を主の前に示した。

離れていても愛情は判るといふファティナは微笑ましく、そしてどこか切ない。

それでも彼女が笑っていてくれればクレオールに不満はなかった。だというのに、ファティナはどこか諦めた様な微笑を浮かべ、温かなカップをその手におさめて言葉を続けた。

「ですから、愛されていないことくらい……判っております」

## 謝罪

眠れない一夜が明けた。

古臭い家屋はぎしぎしと家鳴りがし、雨音が天井や戸板をたたく。

そして風が渡る音　静寂とは程遠い一夜。

彼女は、きちんと眠れたろうか。

見知らぬ場で、義息と口論のあとに、あの人はきちんと眠ることなどできたのだろうか？

ヴァルフアムは酒の残る体を無造作に引き起こし、酒臭い息をついた。

酒に頼って睡眠をうながしてはみたものの、さまざまな考えが脳裏を巡り、やっと眠りに付いたかと思えばそれは悪夢によって幾度もたたき起こされる。

気だるいのは睡眠不足か、はたまた二日酔いであるのか自分でも判らない。

従僕が朝の挨拶をしながら手桶に湯を注ぐのを眺め、ヴァルフアムは前髪をかきあげた。

ファティナに会いたい。

それと同時に、会いたくないとも思うのだ。

なんと大人気ないことだろう。

大人の男になる？

阿呆らしい。まるで子供のように八つ当たりで愛しい女を傷つけるものが男であろう筈が無い。

たとえ自分の矜持をねじ伏せても、ファティナの気持ちを浮上させよう。

新たな決意で顔を洗い、身支度を整えて覚悟を決めると　ヴァル

ファムは食堂でファティナと対峙することにした。

許しを請い願ひ、その体温を感じて安らぎを得たい。

そこに確かにいるのだと感じたい。その為であれば百回殺しても殺し足りないあの因業親父を贖辞してやってもいい　血反吐を吐きそうなくらいイヤだが。

が……相手は予想の斜め上を突き進む小娘様であった。

ヴァルフアムが宿屋の一階の食堂で神妙な気持ちで義母を待つていると、彼女はクレオールと侍女を従えて階段をおりたち、食堂室に入った途端に口を開いた。

「ヴァルフアム様！　ものすっごい天気ですつ。昨日の荒れた天気が嘘のようですわね」

「……そうですか」

ファティナは挨拶もそこそこにつこりと微笑み、クレオールからナプキンを受け取る。その様ときたら昨夜の頑なさなど微塵も見せず、いつもと変わらぬほえほえだった。

いったいこの頭には何が詰まっているのだろうか。

実は一晩眠ると前日のことは綺麗さっぱりと忘れ去ることのできる特殊なナニカが入っているのではあるまいか？

脳みそではなく、まったく別の振るとちやらんぼらんと奇怪な音をさせる何か！

悩んだのは自分だけか。

ファティナを随分と傷つけたと苦悩のうちにあった自分が途方も無い程に間抜けに見える。

まったく、いつそファティナを憎めたらどんなに生きやすいことだろうか。

ヴァルフアムは苦虫を？むような表情でちらりとクレオールを見たが、クレオールは何故かいつもよりも無表情に拍車をかけるかのように唇を引き結び、ただ静かに控えていた。

「ヴァルフアム様、お願いがございますの。聞いていただけますか？」

嘆息を隠しつつ宿屋の美味くも無い食事に没頭していると、ふいにファティナが明るい口調で話しかけてきた。

イヤです。

ひねくれた義息は思わず即効で拒絶の言葉を返してしまいたい気持ちになったが、引きつった微笑で促した。

「内容次第です。どんなお願いでしょう？」

「今日は馬車ではなくて馬に乗って行きたいのです。馬車は退屈なものです」

「生憎と横鞍は持ってきていませんよ。馬車で我慢なさい」

ぴしゃりと言いつくと、ファティナは途端に不満そうに唇を尖らせた。

「まあ、ヴァルフアム様つてば準備がお悪い」

旅行にわざわざ横鞍など持参する馬鹿はどこのだ。いつだ。

ヴァルフアムは冷ややかに顔をあげ、馬鹿にする眼差しで義母をねめつけた。

「男用の鞍でよろしければご存分にどうぞ」

勿論、相手がそれを承諾するなど考えずの言葉であつたが、ヴァルフアムは相手を見誤つた。

なんといつてもヴァルフアムの面前にいるのは、考えなしの愚か者  
冗談を冗談とすることもできない小娘ファティナである。

ファティナはにっこりと微笑み、胸元で手を組んで喜びを示した。

「ありがとうございます！」

「義母っえ？」

「クレオ、乗馬服はトランクに詰めてありますわよね？ さすがクレオですわ。どんな時にも抜かりがありませんわね」

それは横鞍の用意をしていなかった義息へのあてつけか？  
一瞬ムツとしたが、それどころの話ではない。

すでに喜色満面のファティナは、クレオールに乗馬服の用意を頼みながら機嫌よくヴァルフアムを見た。

「横鞍よりきつと上手に乗れると思いますわ」

「駄目です！」

すぐさま叩き付けられた叱責のような言葉に、ファティナは瞳を瞬いた。

「先ほど存分にどうぞと言つたではありませんか」

心底不思議そうに言われると居心地が悪い。

確かにそう言つたが、まさかファティナが真に受けるとは思わなかつたのだ。

ヴァルフアムは奥歯を噛み締め、ゆっくりとした口調で詫びた。

「失礼しました。ただの冗談です」

「まあっ。冗談でおっしゃつたの？」

確認をするな。

ヴァルフアムは苦々しい思いに駆られながら、それでも自分の失態を認めてやんわりと口を開いた。

「立派な淑女がまさか横鞍以外の乗馬を承知なさるなどと思いませんでしたからね」

「……わたくしは立派な淑女ですけど、普通の鞍も承知するのです」

ヴァルフアムの嫌味を察知したファティナは、更に嫌味つたらしく「立派な淑女」だと念を押した。

「紳士であるヴァルフアム様は、まさか一度御自分がおっしゃられた事柄を撤回なさったりなさいませんわよね？」

あげく更に畳み掛ける。

ファティナの瞳が悪戯の成功を期待する子供のよういきらきらと輝き、ヴァルフアムはそれを睨みつけた。

「判りました。その代わりに、あなたは私の前に座っていただきますからね。それ以外は絶対に、何があっても、たとえあなたが昼食を食べないだとか、おやつを食べないだとかおっしゃっても認めませんからね」

念を押すように一つ一つ突きつけたが、ファティナはまるきり聞いていなかった。

嬉々としてクレオールに向き直り、

「クレオは馬車に乗ると宜しいわ。体を存分に休めてね？ クッシヨンが一杯あるから、少し横になりなさいな」

などと言っている。

「義母つえ、聞いておりますか？」

苛立ちのままに言えば、ファティナはあからさまな溜息を吐き出してヴァルフアムを見返した。

「聞いております。一人では駄目ということですよね?」  
「そうです」

「ヴァルフラム様が一人で寂しいとおっしゃっていらっしゃるから、心優しいわたくしはその提案を快く受け入れますわ」

誰が寂しいなどと言っている。

思わず口の端が引きつったが、やがてヴァルフラムは諦めた。

「義母っえ」

「なんです?」

「昨夜は申し訳ありませんでした。少し苛々しておりました、八つ当たりをしてしまったようです。情けないこの義息をお許しいただけますか?」

ファティナは困ったように眉を潜め、つつと視線を剃らした。頬を染めて。

「早く朝食をすませてしましましょう? わたくし、早く馬に乗りたいですわ」

言葉を詰まらせながら言うファティナの様子に、どうやら彼女も彼女なりに色々と気まずい思いを隠そうとしていたのだとヴァルフラムもやっとなり理解した。

……やっぱり子供だ。

「何を笑っているのですか!」

「いえ。笑ってなんていませんよ」

子供であると再確認してほっとしている自分のほうが、子供なのかもしれない。

ふと浮かんだ考えにヴァルフアムは苦笑したが、ファティナが視線を窓の方へと向けたとき、ヴァルフアムはその表情に息を止めた。

ほんの一瞬、ふつと浮かべた顔がやけに大人の表情をしていて

自分の知らぬ女がそこにいるような苛立ちに息苦しさを覚えた。

## 愛憎

「先に帰ってしまいますの？」

心底残念そうに言うファティナに、クレオールは軽く眦を下げた。一緒に帰るものと決めかかっていたファティナだったが、しかしクレオールは単騎で先に戻ると告げたのだ。

「私には私の務めがございますから」

執事はそう言うと、ヴァルフアムにふかぶかと頭を下げた。

「途中、セラフィレス様の邸宅で本日のご訪問をお知らせしておきますので、どうぞ無理はなさらないで下さい」

単騎で駆ければ一日で王都の邸宅に戻ることも可能だが、それだとて馬の交換が必要であるし馬車など余計なものが無いに限る。人数も荷物もある彼らは、やはりどうしたって二日という日数を必要とするのだ。

「そもそもセラばかりに迷惑をかけられない。あの屋敷の辺りであれば程よい宿があるはずだ。途中で誰かを走らせるから、今夜のこととは気にしなくていい」

遊び人だと自称するセラフィレスのことだ、もともと別邸でもあるあの邸宅に毎日のようにいる男ではない。夜になれば夜会だサロンだと出歩き、果てには娼館など如何わしい場所にも入り浸る。突然訪れてその予定が合うとも思えない。

淡々と言う主の言葉に、クレオールは軽く目礼し「でしたら、アイコン大佐の邸宅に差し掛かる大通りに評判のよいホテルがございます。王都を訪れるご婦人方たちが多くご利用になられるという話ですから、そちらを使われては如何でしょうか」と言葉を続けた。

今回利用したような場とは違い、そちらであれば女主に不便も無いだろう。クレオールは屋敷に戻る時にそちらには声を掛けておくと言け負い、夕べたつぷりと休憩と飼葉とを満喫した貸し馬の背に跨った。

「では、失礼致します」

「気をつけて下さいませね？」

ファティナはひらひらと手を振ってクレオールを見送ると、今度は自分だとばかりにくるりとヴァルファムを振り返った。

すでにファティナ達の旅支度も整っている。

荷物と侍女二人を乗せた馬車はその重量を考えて先に出立している。一台残された馬車には従僕と本日の昼食用のバスケットがのせられ、護衛とが控えている。

そして、ヴァルファムは馬車の替え馬としてつれてきていた馬に蔵を乗せ、その轡を押さえていた。

今日のファティナは乗馬服だった。

乗馬服と言ったところで女性はズボンを履くような風習は無い。ファティナの着用しているのは普段着用しているようなふわりと膨らませたドレスではなく、体に負担が掛からないツーピースだ。

普段着用している薄く着心地のよい絹地と違い、少しばかり厚地の綿生地を使用したものはいつももの彼女と違い、快活な農村部の娘のように何か不思議に見せる。

頭の上にはちょこんと帽子が乗せられているが、まさに髪飾りのように乗っかっているだけであり意味を成さない。

そもそも帽子などファティナは嫌うが、淑女というものは外出時には帽子や parasol を使うものだと決まっている。侍女もその慣わしを忘れてはしないのだろう。女主人は不満そうだが。

ヴァルファムは吐息を落とし、馬の轡を近くにいた護衛に預ける

とファティナの腰に手をかけて彼女を馬の上へと押し上げた。

力任せにもちあげた為にバランスを崩したファティナが小さな声で抗議したが、ヴァルフアムは嫌なことはさっさと終わらせてしまおうとでも言うように、そのまま勢いをつけて鎧に足をかけ、ぐんつと体重移動させて馬の背にまたがった。

馬が嘶き、軽くたたたらを踏む。

ファティナは軽いといったところで、大の男と女が一人づつ乗るのだから馬もご苦労なことだろう。

苦笑しながら馬を宥め、ヴァルフアムは手綱を引いた。

「行きますよ」

横座りのファティナが居心地のよい体勢を求めてもそもそと動く。元々馬の鞍などは二人で乗るように作られていないのだから、有る程度の居心地の悪さはあきらめるしかない。

だが、そのファティナが何の疑問もなく極当然のようにヴァルフアムの胸に頭を預けて小さく息をつく、途端に義息は喉の奥から呻きたいような気持ちになった。

「ではヴァルフアム様っ、速歩で」

「……」

きゃいきゃいと子供のようにはしゃぐ義母の様子に、殴ってやりたい気持ちが湧き上がったが彼女の義息はぐつと奥歯を噛み締めて耐えた。

「きちんとつかまっついて下さい。落ちたら拾いませんよ」

「あら、ヴァルフアム様はわたくしを落としたりなさいませんわよ？」

そう、落としたりなど決してしない。

ヴァルフアムは苦笑し、更にファティナの体を引き寄せる為に華

奢な腰に手を回して、ぐつと自らの腰に寄せた。

ファティナの体温が高いのは子供だからだろうか。それとも、男の腕の中にいることにきちんと気付いているのだろうか。

義息の体温が高いことに気付いているのか？

そして たかが小娘の体温、香りだけで早鐘を打つこの心音を、彼女は聞いているのだろうか。

ヴァルフアムはあれこれと余計なことを考え始めてしまう自分を戒めるように軽く首を振った。

「そういえば、ヴァルフアム様」

はじめのうちこそ喋ることもままならない様子でぎゅつと義息の上着と鞍の端を掴んでいたファティナだったが、なんとか口を開くことができるようになったのか、ふいに声をあげた。

「なんです？ 花摘みですか？」

「違います」

からかうように言えばファティナは機嫌を損ねたような声をあげる。ヴァルフアムは少しだけ馬の速度を落とし、ファティナの耳の脇に顔を伏せてそつと唇を落とした。

「昨夜は聞きそびれてしまいました。ヴァルフアム様の秘密って、何なのです？」

すつと頭をそらして視線を合わせてくるファティナに、ヴァルフアムは思い切り視線をそらして前方へと向いた。

視界に入るのは先行する護衛が二人。

後ろを見れば馬車一台と護衛とが走行していることだろう。

ヴァルフアムは一旦下げた馬の速度をまたあげた。

ふいの動きにファティナは慌てて更に力を込めて義息にしがみついた。

「さあ」

「教えて下さいませんか？」

「物事には時期というものがあるんですよ。今は言う時期じゃないと思います」

そう、このような場で言う話題ではない。

決して逃げられないように退路を断ち、この腕の中に閉じ込めて。

あなたの義息は、あなたを愛している。

といったところで通じなさそうなのが小娘様だ。

むしろにこにここと「知ってますわ」とか「わたくしも愛しておりますわよ？」とかいわれてしまいそうなのがする。もっと直接的なことを言うべきかもしれない。

あなたの義息は、頭の中であなたを幾度も犯している。

「……」

なんと頭が悪そうな。

いや、だがこれくらい言わないとファティナは理解しないのではないだろうか。

なんといつても彼女の頭の中身は「ちゃんぽらん」だ。いや、そもそも「犯す」という単語を知っているのか？

脱がす？ 組み敷く？ 抱く？

立て続けに脳内に浮かんだ単語の羅列に、ヴァルフアムは自分の体温が余計な場所に集中していくのを感じてしまい、ぎりつと奥歯を噛み締めた。

「ヴァルフアム様？」

「うわぁっ」

よからぬ思想にふけつていたところで、ふいにファティナが身じろいで声をかけるものだから、ヴァルフアムは咄嗟に奇妙な声をあげ、ぐっと手綱を引いてしまった。

突然ぐんつと手綱を引かれた馬が慌てて前足で宙をかく、ファティナが驚いて悲鳴をあげ、義息にしがみついた。

護衛達が慌てて馬を止め「どうしました」と声をかけるのを制し、ヴァルフアムは全てを誤魔化すように馬を宥めながら声をあげた。  
「なんでもない　うさぎに驚いただけだ」

おそらく背後を走っていた馬車の御者は首をかしげたであろうが知るものか。

ヴァルフアムは顔をしかめ、ファティナの背を宥めるようにとんとんとたたいた。

「失礼しました、義母うえ。大丈夫ですか？」  
のぞきこんだ先、ファティナは恨みがましい眼差しでヴァルフアムをねめつけていた。  
上目使いで、軽く瞳を潤ませ。

「ひた、はみまひた……」

ちろりと赤い舌先を出し、その先端を血に滲ませたファティナの様子にヴァルフアムは空を仰ぎ見た。

拷問か。

これは拷問なのか？

何だこれは。

いつか馬車の中でおきた出来事が脳内を駆けめぐり、ヴァルフアムはぎゅっと手綱を握り込んだ。

手が白くなるほど。

以前、同じようにファティナが自ら舌を噛んでしまいその舌先に傷を負ったとき、ヴァルフアムは消毒だと偽ってその舌先を、口腔を思い切り蹂躪した。

その時の唾液の味も、血の味すらも覚えている。甘く、苦く……そして愛しい。

咄嗟にその舌を口に含み、じつくりと舐めあげてしまいたい衝動が暴れまわっていた。

だが、護衛もいるこんな炎天下でさすがのヴァルフアムにもそんな真似はできようはずがない。

だがうねる欲望に、唾内に無意味に唾液がたまった。耳の先端が熱を持ち、喉の奥で小さな唸りが漏れ落ちた。

うすら暗い欲望を力任せにねじ伏せ、ヴァルフアムは半泣きのファティナの肩をぐつと一旦抱いた。

「この先に小川があります。そこで休憩しましょう」  
ポケットからハンカチを取り出し、ファティナの口元に当ててやる。

「少し我慢できますね？」

ついで護衛達に目顔でもう出立すると告げると、ヴァルフアムも手綱を握りなおしたが、ファティナは相変わらず恨みがましい顔をしながら口を開いた。

「しょーろくはなさひまへんの？」

舌先を浮かせて言う謎の文言の意味はあえて無視した。即行その首を捻ってやりたくなりそうな衝動と共に。

ああ本当に、時々本気でどこかに閉じ込めて思い切り怒鳴り散らしてやりたくなるくらい、義母程憎らしいイキモノはいない。



## 欲望

嵐の過ぎ去った澄み渡る空気と明るい日差し。

木々の葉の間から落ちる陽光。

舗装されている訳ではないが、それでも馬車が往来する道をさかのぼればやがて小川へと行き着き、馬の上、自らの腕の中で眉を潜めているファティナを小川の片隅にしつらえたキルトの上におろした頃には、すでに口の傷は血を流してはいなかった。

「正直におっしゃっていただきたいのですが」

さすがに馬で駆けるのと馬車で走るとでは速度が違う。

初日に身を寄せたセラフィレスの屋敷を夕刻前には通過することができた。そして宿屋を発見するのが簡単であったのは、先に行かせていた馬車がすでに到着していた為だ。

早い段階でクレオールに告げていた宿に部屋をとったのは、中途半端な時間に移動するのを避ける為だった。

王都を訪れた婦人方に人気が高いというだけあり、その作りは一般的な貴族の諸室と劣ることも無い。使われている家具も統一をもたせた一流の物を使用しており、カーテン一つにしても厚地に丁寧に刺繍を施してある一品だ。

侍女達はぬかりなく主の為に居心地のよいようにと部屋を整えてまっていたし、夕餉をとるには多少早かったが、早々にチェクインをすませることにした。

ゆったりとした気持ちで居室に続く個人用の居間で食後のお茶とケーキを楽しんでいると、やがてあらたまったように咳払いを一つし、ファティナは意味ありげな眼差しで義息を見つめた。

この小娘様はいったい何を言う気かと身構えたのには理由がある

当然、色々と後ろ暗いのだ、彼女の義息は。

正直におっしゃって下さいといわれたが、正直にいけないことならば山とある。いったいどれに対しての言葉であるか、果たして義息には即答などできよう筈がない。

幸い、部屋に居るのはファティナと義息だけ。正確に言えば侍女と従僕も控えてはいるが、彼らがいたところでヴァルフアムは頓着する男ではない。

ファティナはオレンジのコンポートを平らげた口元をナプキンでぬぐい、もう一度いやらしい嫌味な言い方で問いかけた。

「人間誰しも過ちはありますわ。でも、それはきちんと謝罪なさるべきだと思います」

「……まったく話しが見えませんが」  
「消毒の件です」

きっぱりと言われ、ヴァルフアムは引きつった。

正直に言えば、まだ言うか？ という思いだ。

小川についた時にもこの小娘様は「消毒はしませんの？」と不思議そうに小首をかしげた。場合によっては誘っているのかも思えるしぐさだ。

別にしてもいい。いくらでもしよう。欲望のままに。

だが、護衛の前でそれをする気概までは生憎無かった。誰はばかることなくヴァルフアムはファティナを大切に扱っている。しかし、それはあくまでも義母と義息という関係上のことだ。屋敷の人間がどう思っているようにそれは気にしないが、ヴァルフアムだとて理性もあれば常識もある。

まったく無実無根のことで義母の対面を汚すことなどしたくない。

彼女は　義母であろうとも汚されていない乙女なのだから。自らが誹られるのは構わない。しかしファティナにそれを向けさせる訳にはいかない。無実の罪などと与えてはいけない。

だが、今は違う。

屋根のある一室。この場にいるのは家人だけでそれすら問題ではない。

軽く咳払いをし、ヴァルフアムは片手をあげて従僕と侍女に下がるようにと示した。

彼らが一歩足を下げて退出するのを視界の端で感じながら、ふとヴァルフアムはファティナと二人であるという事実に関口に笑みを刻んだ。

「何を笑っているのです？」

「いえ　それほど消毒をお望みでしたら、いくらでもしてさしあげますよ？」

優しく微笑みかけると、しかし相手はむっとした様子で顔をしかめ、呆れたように首を振った。

「まあ、まだシラを切るおつもりですね？」

「　義母うえのおっしゃる意味が生憎とこの義息には理解しかねるのですが？」

ファティナはたいてい唐突で、その口から吐き出される言葉の六割は意味不明。そして二割は人を怒らせ、二割が幸せを与えてくれる。

ヘタをすれば八割が人を怒らせる種だが……

面前の義母は何故か得意げに顎をそらした。

「舌を消毒するのに舐めるのは嘘なのでしょう？」

「……」

とくりと心音がはぜた。

ファティナの翡翠が勝ち誇るようにきらきらと輝き、鬼の首をとったかの如くに義息を見ている。

ヴァルフアムは自らのうちに軽い興奮が広がるのを感じていた。

座る椅子にしつらえられた肘置きに肘を預け、その先にある手の甲、指の第二関節に節右頬を預ける。

足を組み替えてゆったりと座り、微苦笑をこぼした。

「嘘だとしたら、どうなさいます？」

何故、あなたの義息はそんな嘘をついたのか、判りますか？

心内でやんわりと囁きかける。

あれが消毒でないのであれば、では、あれは……何なのでしょう？  
あなたは答えが判りますか？

期待を込めて瞳を細めて見つめると、ファティナは胸元で指を組んで嬉しそうに言った。

「やっぱり！ 私もおかしいと思ったのです。以前言いましたわよね？ 舌は口の中にあるのですもの。唾液で消毒なんてきつと根拠の無いお話でしたのでしょうか？ 宜しいのですよ？ 誤った知識を披露してしまったことで矜持の高いヴァルフアム様はきつと羞じていらっしやるのでしょうか？ そういう時は素直にごめんなさいと謝ればよいのです」

それはそれは嬉しそうに言葉をすらすらと並べ立てるファティナは極上の微笑みを浮かべてみせた。

「ヴァルフアム様でも間違つことはありますのね」

自分が間違つたのは、コレを愛していることに違いない。

本当に愛しているのか？

間違っているのか？ むしろ間違いだといって欲しい。

ふ、ふふふつと鼻について笑いが漏れた。

それに合わせて肩が僅かに揺れる。

苛立ち、腹立たしさ、そして　うずきを与えるものに、ヴァルフ  
アムは底意地の悪い感情を抱いた。

「間違いではありませんよ。間違っていない　消毒してさしあげま  
しょうか？」

空いている左手を伸ばして手のひらで示せば、けれどファティナ  
は戸惑いに眉を潜ませ、不思議そうに見つめ返した。

「間違っているのではないのですか？」

「ええ。傷口が傷みますか？　いらつしやい」

軽く指を曲げて招いても、ファティナは身を縮めて　そして、彼  
女にしては珍しく顔を赤く染めて視線をそらした。

「結構です」

「なぜ？」

意地悪く問えば、ファティナは自分の指先を不安そうにいじりな  
がら小さな声で囁いた。

「……なんだか恥ずかしいのですもの」

羞恥などという感情をいつ覚えた？

ヴァルフアムは冷め切った気持ちでファティナを眺め回した。

今は昼間の乗馬服ですら無い。ゆったりとした旅行用のワンピース  
ス　背にあるちいさな包み釦で止められたそれは首までしっかり

と覆い隠している。

けれど首から頬にかけ、そして耳までをも赤く染めて、ファティナはもぞもぞと居心地が悪いというように身じろぎした。

「何が恥ずかしいのです？ ただの消毒　口付けと変わらない」

「口付けとは、違うではありませんか」

「どう違うのでしょうか？　生憎私には判らないな」

くっ　と喉の奥が音をさせた。

ファティナは怒ったようにこちらを睨みつけ、そして困ったように言う。

「口付けは、舌を舐めたりしませんわ」

ファティナの動揺すら乗せたその言葉を耳にいれ、ヴァルフアムは微笑んだ。

「しますよ？」

飄々と応える義息の言葉に、ファティナは軽く瞳を見開いた。

そんな彼女を楽しげにゆっくりと眺めまわしながら、彼女の義息はくっくつと笑って見せた。

「義母うえはご存知ないのですか？　触れ合うだけが口付けだと？　子供ですね」

子供扱いされるのを嫌う義母をからかう口調でいいながら、ヴァルフアムは先ほどファティナを招いた指を自分の唇へといざなうと、相手の想像をかきたてるように人差し指でそつと自分の唇の膨らみをなぞり、ファティナが見ているのを確認しながら舌先でゆっくりと舐め、軽く歯をたてた。

ことさらある種の意味をもたせて。

ファティナの身が震える。

どうしようもない程の愛しさが湧き上がる。

まるで、か弱い羊をその思惟だけで追い詰めていくかのような高揚感に、ヴァルフアムはうっとり微笑んだ。

牧羊犬の気持ちか、それとも狼か。

彼等はきつと深い愛情をもって愛しい羊に接しているに違いない。その愛は恐ろしく利己的であろうとも。

「舌と舌とをからませて。その先端を舐めあげて」

甘く、甘くとろけるような囁きで。

「相手の歯列をなぞり、ぴちゃりと跳ねる唾液すらすすりあげて

ほら、舌先の消毒に似ているでしょう?」

「……」

「恥ずかしい?」

組んでいた足を下ろすと、ファティナはびくんとその身を跳ね上げた。

驚いたうさぎが横に飛ぶかのように。

羞恥で真っ赤になったファティナの首筋がこくりと上下に動いて唾液を飲み込む、湧き上がる楽しさに、ヴァルフアムは体制を整えなおし、勢いをつけて椅子から立ち上がった。

息を飲むようにして狼狽するファティナへと手を差し向けて、ヴァルフアムはできるだけ優しさを込めて微笑んだ。

「部屋にお連れしましょう。どうぞ本日はゆっくりお休み下さい」

脅えの混じるその指先が、義息の手を取るべきか取らざるべきかと僅かに振るえているのを無視して、ヴァルフアムはファティナを慈愛のこもった眼差しで見つめ続けた。

眠れるものなら、寝てみせる。

彼女の内に確かに芽吹いたであろう淡い欲望というざわめきに、  
ヴァルフアムは満足していた。

## おもかげ

眠れなかった。

ヴァルフアムはつきつきと痛む額に軽く触れながら、口元にいやな笑いが浮かぶのをとめられなかった。

本日の天候は薄曇り。単騎の馬上は少しばかり空々しい。前方を行く馬車ではファティナが侍女と三人で乗っている。

昨夜ファティナに対して眠れない夜を過ごせと思ったものだが、すぐに自分がどれほど阿呆らしいことをしでかしたのかは自らの身にかかる事柄で承知した。

何もファティナを開放してやらずとも良かった筈だ。

あのまま自らの腕に閉じ込めて愛を囁き、口付けはおるか、それ以上のこともどんなものであるのか一つ一つゆっくりと教えてしまえばよかった。

ということに気付いたのは、ファティナの赤らんだ顔やらきつく苦しげに結んだ唇を想像して悦に入り酒を楽しんでいた頃合だ。

そのまま引き寄せ、告げたとおりの口付けをしてしまえば良かった。指先に、首筋に、鎖骨の窪みに。

そして、滑らかなクリーム色の肌を辿り、彼女が決して受けたことの無い場所にまで。

……想像したら眠れなくなったのはヴァルフアムのほうだった。思春期の子供でももつと手っ取り早く眠る方法など熟知しているだろうに。

扉を開いて彼女の客室まで行くには、ヴァルフアムは矜持が高すぎた。無駄すぎる矜持だとは理解しているが。

それでも寝不足であったのはヴァルフアムだけではなかったことは、ヴァルフアムの心を軽くした。

翌朝、ファティナは目の下に隈をつくっていたし、半眼に伏せた瞳は義息を捉えようとはしなかったのだ。

拳句、しどろもどろに「今日は馬車で参ります」と口にし、ヴァルフアムが相変わらず微笑を湛えて「そうですね。今日は馬車で寓話など話して差し上げましょうか？」と提案すると、弾かれたように顔をあげ、泣きそうな顔でふるふると首を振った。

「ヴァルフアム様は馬で先に行かれてはいかが？」

当然、先に行くことなどできない。

自分は護衛もかねているのだし、今までもファティナを一人で外出させないようにと勤めていた義息だ。

共に居ることを拒絶されたのだと思うと、ヴァルフアムは笑いたなくなった。

つまり、意識されているのだ。この、義息が。

今まで一人の男として意識もされなかった自分が。

「そうですね、私は騎馬でお供致しましょう。馬車には侍女を乗せればよい。話し相手になるでしょう」

穏やかな囁きに、義母の表情があらさまにほっと安堵の色を浮かべるのを見逃さず、ヴァルフアムはすばやくファティナの手首を捉えて引き寄せ、自らの腕に抱きこみ、耳の付け根に口付けた。

「ヴァル……っ」

「何か？ 今日はやけに緊張しておいでなのではありませんか？」

旅は随分と義母うえに負担を掛けたようですが、戻ったら医師の診察を受けたほうがいい。義母うえに何かあったらと思うと、私は心

配で夜も眠れなくなってしまいそうだ」

ヴァルフアムは体を固くしておびえたように自分を見上げているファティナに満足し、抱き寄せる力を緩めた。

「どうしたんです？ 今日の高女はいつもの高女らしくない」

「そんなこと……」

「まるで私に触れられたくないようにお見受けいたしますが？」

意地悪く言葉を続け、切なそうに囁く。

「まるで汚らわしいもののように扱われているのは、どうしたことでしょうね？」

「汚らわしいなんて、そんなつもりはっ」

「そうですか？ ではどうしてそんなに体に力を入れているのです？ 今まさに逃げ出したいというように」

小さく笑い、ヴァルフアムはいつもと同じようにその額に、瞼にゆっくりと唇を落とした。

ただし、唇の離れるその時に舌先でその肌を愛撫してみたのはほんの意趣返し。

腕の中で小さくファティナが震え、口付け以外の何かを感じ取ったことにヴァルフアムは満足そうに喉を鳴らした。

わざとそらすように伏せられた眼差しに、更に意地悪く身を伏せてのぞきこむようにした途端 ファティナはあるうことかそのままふつとのけぞるようにして崩おれた。

まるで操り人形がその主を失ったかのような突然の動きに、ヴァルフアムは驚愕し、慌ててその体を支えた。

「義母うえっ？ 義母うえっ」

確かに圧力を掛け続けたのは認めよう。

言葉で、態度で、眼差しで 自らのもてる矜持を総動員して義母を誘惑するように示してきたのは認める。だからといってそれで気を失うというのはどういふことか。

かくして、彼女は馬車の中。

そして侍女達は震えながらも必死にファティナを守るように、その眼差しだけでヴァルフアムを非難し、遠まわしな言い方でヴァルフアムは馬で行ったほうがいいだろうとせつせつと訴えた。

普段であればそんなものは無視してしまうヴァルフアムだが つまり、一応反省はしていた。

「まったく子供だ」

ヴァルフアムは額に手をあて、溜息を落とした。

あんまり楽しくて、やりすぎた。

\*\*\*

旦那さま。

組んだ指を胸に当て、ファティナはもう幾百、幾万もその言葉を呟ってきた。

それは絶対のお守りだった。

絶対のお守りの、筈、だった。

瞳を閉じれば瞳に浮かぶ。色素の薄い金髪。碧玉の瞳……

必死に夫の姿を求めて、やがてそれが像を結んだ時 はつきりとそれがヴァルフアムである事実に気付いたファティナは、悲鳴をあげ、何かにすがるように手を伸ばし、宙をかいた。

「奥様っ」

振り上げた手が誰かの手に触れる。途端にそれを掴み上げ、ファティナはがばりと身を起こして何かから逃れるように身を丸めた。

「旦那さま、旦那さまはっ」

喘ぐようにもれた言葉で、やっと視界に色彩が戻った。

ゆったりとした箱馬車の中。ビロードと詰め物とを丁寧に打ちつけた座席、更に多くのクッションを置いたそこに横になっていたファティナを、心配気に二人の侍女が覗き込んでいる。

人間三人分の体温の為か、馬車はほどよい熱気をもっていたがなんとなく違和感のようなものがファティナの肌に触れていた。

帰りは侍女と馬車で……

ファティナはぎこちなく、微笑んだ。

「ごめんなさい」

そつと自らの手を引き上げて、ふるりと小さく首をふる。

もし、ここに居たのがメアリ女史であったら自分はどうするだろう。ファティナは半眼を伏せて考え、同じように相手から手を引き抜き何事も無かったかのように微笑むだろうと結論を出した。

たとえばここにいたのがクレオールであれば……いや、誰であろうと答えは同じだ。

ファティナはすがろうとした手を戻し、微笑むことしかできない。

「果実水をお飲みになられますか？ 御酒もございますが」

変わらす心を砕いてくれる侍女に、ファティナは果実水を頼み、箱馬車の背もたれに身を預けて皮袋のまま口をつけた。

伏せた瞳で夫を思い出そうと思うのに、浮かぶのは八つ年上の義息になった。

それがとても恐ろしいことのように思えて身がぶるりと振るえ、フアティナ未だ気だるさの残る体をより強く馬車の背もたれに預けた。

愛しい。愛している……旦那様を、愛している。

フアティナは自らの心と体にゆっくりとその呪文を巡らせた。

あの日からずっと、ずっと、もう幾百も幾千も唱えてきた言葉。

旦那様、旦那様……だん、な、さま？

自らの心を落ち着ける為のいつもの所作。

握った拳を胸に当てて、そうしてフアティナはふと息を止めた。明滅するようにある事柄が思想をよぎり、その事柄によってフアティナはいつそのまま果ててしまいたいと切に願った。

気付きたくなかった……

頭を箱馬車の背もたれに当てると、がたがたとした激しい振動が直接脳を揺らす。

それを感じながら、フアティナは湧き上がる感情に笑いたいのか泣きたいのか判らなくなってしまった。

気付きたくなかった。

旦那様の顔も、名も……思い浮かばない現実など。

愛する方の名前を告げることができないなど誠意が無いと、義息を叱りつけたのはそんなに遠い昔のことではない。

それでもわたくしはあの方の、妻でありたい。

それは傲慢な、夢。

ファティナは自分がどれだけ傲慢で浅はかで愚かであるか知っている。

世の中には知らぬことが多くあるけれど、自分自身がどれだけ酷い人間かは熟知しているつもりだった。

わたくしはあの方を愛している。

家族が欲しいのだと、一人では居たくないのだと告げた願いを叶えてくれた、あの方を……愛している。

ファティナにとって、それが絶対の真理。

たとえ、伏せた瞼に浮かぶのが義息だとしても。

一刻も早く旦那様に会いたい。かすむ記憶を新たに塗り替え、落ちて着かない今の自分を滅びさっしてしまいたい。

旦那様にお会いして……お会いして、ああ、わたくしは何をしたいのだろう。

馬のいななきと地面を蹴る音とが、旅の終焉を告げた。

## 雷鳴

怯えさせたい訳ではない。

ただ、氣付いて欲しかった。目の前に立つ義息が男というイキモノだということ。

自らの屋敷の正面玄関を入り、車寄せの石畳で馬車が止まる。

馬の嘶きと蹄鉄が石畳を打つ音とが響きあう。

それより先にあわただしく屋敷の人間達が現れ、ヴァルフアムの横には馬丁が駆けつけて馬の轡に手をかけた。

まったくもって無駄な旅だった。

旅、というよりも随分と面倒臭く長い散歩のようだ。四日掛けて、往復しただけという意味不明さ。

だが、何かが確実に変化するものであった。

ヴァルフアムは馬の胴を締め上げ、その足踏みに体のバランスをとりながら無駄な旅と位置づけながらも、満足気に息をついた。

「お帰りなさいませ」

馬丁の言葉に軽くうなずき、ヴァルフアムが勢いをつけて馬から降り立つと、丁度正面玄関前に控えたクレオールが珍しく少しばかり強張るような表情で一礼した。

「ヴァルフアム様、お」

そしてそのまま近づいて来ようとしたが、近づく必要は無いという意味合いを込めてヴァルフアムは軽く手を上げた。

「しかしっ」

「後でいい。片付けを」

挨拶など後でいい。

たたらを踏んで立ち止まる執事のその後ろを、真っ白い大きな犬

がごろがるように駆けてきて、自らの主に会わせると出張するように珍しく吠え立てる。長くもっさりとした尾がちぎれるのではないかというくらいぶんぶんと振り回され、それを更に追うようにして正面玄関より現れた女家庭教師は、ちらりとヴァルフアムを一瞥したが、すぐにファティナの犬の首輪に手を添え「パール、お座り」と命じた。

名前。

ふと浮かんだ単語に、ヴァルフアムは不機嫌な気持ちになった。咄嗟に女家庭教師の名前が出ないからといって何だというのだ。もう終わったことなのだから関係などあるまい。

それを振り払らい、ファティナへと意識を戻した。

従僕が馬車のステップを引き出すのを眺めながらヴァルフアムは義母の乗る馬車へと近づくと、呼気を落として馬車の扉に手をかけた。

「義母うえ、お疲れでしたら抱いて運んでさしあげますが」

からかうように声をかけたが、馬車の左側に座っていたファティナは馬車の屋根から垂れ下がる皮のベルトに一旦手をかけ、軽く首を振った。

「一人で」

すつと向けられた翡翠のまなざしが、まるで針を向けられたかのように瞬時にその瞳孔を細めた。

ヴァルフアムの肩越し、その向こうを食い入るように見つめたファティナの手が、ヴァルフアムの手に分れようとしたところで止まる。

「お待ちしておりました 姫様」

ヴァルフアムは背後から掛けられたカディル・ソルドの声を聴きながら、ファティナの表情を見つめていた。

彼女はヴァルフアムを見ていない。

ただ、ただ　おそらくヴァルフアムの背の向こうにいるであろうカディル・ソルドを見つめ、そして今にも倒れそうにその顔を白くかえ、必死にすぎるものを求めるようにしてヴァルフアムの手を勢い良く掴んだのだ。

「ヴァルフアム様っ」

「はい？」

「ヴァルフアム様っ」

ファティナは切羽詰るかのようにヴァルフアムを呼ばわり、まるでヴァルフアムの体に自分をすっぽりと治めてしまいたいというようにその身を押し付けた。

「ごめんなさい……つれて行って下さいませ」

午前中には触れられるのも恐ろしいと身を震わせていた小娘様だというのに、今の彼女は確かに身を震わせているが、まったくその様子は違うものだった。

ヴァルフアムの腕の中に安全地帯を求めるかのように。

「義母うえ？」

意味がつかめずに問いかけるが、ファティナぎゅっとヴァルフアムの胸に額を押し付ける。

突然気分が悪くなってしまったのかと慌てたヴァルフアムは、一旦身を引いて体勢を整えると、すっと彼女をその腕の中に抱きこんだ。

横抱きにした体が、いつそう身を丸めてすがつてくる。身を翻して正面玄関へと向くと、ヴァルフアムの視界に眼鏡をつけた狡猾そうな男が、薄い笑みを浮かべて軽く会釈した。

「どうしてお前がいる？」

ヴァルフアムは不快を隠さずに口にした。

毒の似合う男。

確か、セラフィレスはそんなニユアンスでこの男を示していた。ヴァルフアムとしてもその意見に異存は無い。この男は狡猾な狐や蝙蝠、そして蛇を連想させる。

薄い唇を引き結び、面前の男は敬意など欠片も抱いていないであろうに、うそ臭い微笑とともに一礼した。

「ヴァルツ様のお供をして王都に参じておりますので、我が姫君にご機嫌伺いに参りました」

その会話は足を止めずに行われていたものだが、不意に腕の中のファティナが、ぎゅっとヴァルフアムのクラヴァットを掴んだ。

「止まって下さいませ」

消えてしまいそうな、懇願のような囁き。

義母はまさか未だに朝の気を失ったことが堪えている訳ではあるまい。何といつても、それが原因であるなら、決してヴァルフアムに自らを託そうとは思うまい。ならば、また別の理由で気分が優れないのだ。

医者領域かとヴァルフアムの心が急かそうとするが、ファティナはもう一度「止まって、ヴァルフアム様」と、今度は少し強い口調で言葉にした。

かつんと音をさせて足をとめると、腕の中でひゅっと大きく息を取り込む音がする。

ファティナはヴァルフアムの心音を聞くかのようにぺたりと張り付いていた体を起こし、けれどすっかりとヴァルフアムの上着を掴んだままカディル・ソルドへと視線を向けた。

「ソルドさん」

「はい」

「先日は失礼致しましたわ。わたくし、疲れていたみたい　気を悪くしていなければ宜しいのですが」

先日、という単語に「どの先日だ？」とヴァルフアムは自らの知らぬ会話を交わす二人に腹立たしさを感じたが、ファティナは喘ぐようにもう一度酸素を取り入れ、やけにきつぱりと言った。

「もう、下がります。わたくし、少し疲れてしまいました」

「どうぞお体をおいと下さい」

ヴァルフアムに向ける礼とは違い、多少は敬意を払うようなくさで礼を取るとカディル・ソルドはファティナへと手を差し出した。本来であれば、差し出されたその手に貴婦人は自らの手を預け、そして紳士はその指先に敬愛を込めた口付けを贈る。

それは良くある光景だ。

カディル・ソルドが貴族の三男であることも耳に入れ、拳句ファティナの生家の家人だというのであれば、無いとは言えない光景。

だが、ファティナはヴァルフアムの胸に置いた手を相手に向けようとはしなかった。

「ヴァルフアム様、もう宜しいわ」

囁く言葉に、ヴァルフアムは眉間に皺を寄せないように努力しながら身を翻した。

背筋を伸ばして威厳を見せていたファティナの体が、気力を失ったかのようにぱたりとまたヴァルフアムの胸に押し付けられる。

大きく開かれた玄関を入り、階段へと足を向けながらヴァルフアムは囁いた。

「あの男が何か？」

「以前いらして下さいました時に、わたくし忙しくして少し冷たくしてしまいましたの。気を悪くなさっていらっしやなければ宜しいのですけど」

その言葉は振るえ、どこかそらぞらしく響く。

ヴァルフアムは誰にも見られていないことをいいことに、思い切り顔を顰めた。

今、まさに貴女はあの男に冷たい態度を取ったのに？

ファティナが何かを隠していることに苛立ちが湧き上がる。

彼女は、男として意識し、触れ合うことすら躊躇した義息に安寧を求める程にあの男を恐れている。今現在ファティナの頭の中にはきつとヴァルフアムのことなど一欠けらもない。あの男に対して身を震わせているのだ。

カッと体温が上がり、乱暴にファティナを揺さぶってその理由を問いただしたいという気持ちが膨れ上がった。

ソルドの気配が遠のくのを確認すると、ファティナはやっと体の緊張をといて、階段の踊り場までたどり着くと、ヴァルフアムの胸を軽くとんとたたいた。

「ヴァルフアム様、ありがとうございます……もう下ろして下さいませ」

「義母つえ、もう体の調子はよろしいのですか？」

おさえた声が冷たく響くことを止められない。

身じろぎして無理やり床に足をおろしたファティナは、困ったように微笑んだ。

「はい、もう」

「では教えて下さい。あの男と、何がありました？」

決して逃すつもりは無いとその両肩に手をおいて、ただ真摯な眼差しを叩き込む。強張るファティナの顔がそらされ、片手でその顎を押さえつけて無理矢理視線を合わさせていた。

「庭師であろうと馬丁であろうと、貴女が嫌うことはない。けれどあなたは確かにあの男を嫌っておいでのようなのだ。何が貴女をそうさせた？」

「嫌ってなど」

とりつくろう言葉に、苛立ちが更に吹き上がる。

「嘘はたくさんだ」

相手の言葉を否定するようにかぶせると、ファティナは苦痛を感じるように眉を潜めた。

おさえた声は低く唸るように吐き出され、苛立ちが彼女を掴む手に力を込める。

廊下を来る誰かの気配。

クレオールだろうと思えば舌打ちが漏れたが、しかし声は反対側階段の上から、落とされた。

「何の騒ぎだ」

朗々とした太い声は、まるで落雷のようにその場を支配した。予想してしかるべきだった。

あの狡猾そうな男は 共をして来たと言っていたではないか。玄関口のクレオールが身を強張らせ、何事かを言おうとしていたのは知っている。何故、自分はさえぎったのか。

思わず庇うように自分が掴むファティナを引き寄せ、抱き込んだ。咄嗟の行動であったが、冷静さを取り戻せばヴァルフアムは笑い出しそうになってしまった。

自分の妻を息子が腕に抱くその様を、あなたは一体どのように思っただ、我が、父よ。

湧き上がりそうな笑いを堪え、ヴァルフアムは挑むように視線を上げた。

「ご健勝そうで何よりです、父っえ」

コツリと杖をつく男は、冷たい碧玉の瞳を更に細めて階段の踊り場の二人を見下ろしていた。

## 女王

宝石箱の中に収められた一通の封書。

何かのついでではなく、ただファティナへと　妻へと向けられた言葉。

宝石箱の中には夫から送られたアクセサリーや宝石が煌き、その下につつましく封書は収められている。

その表面に書かれている神経質そうな文字には「グレイフィードの姫君」と。

裏面を見れば署名が踊る。

ヴァルツ・ジグナイト　スターリング侯爵。

ゆっくりと指先でなぞり、確認する。その行為一つで安らぎが得られるかのように、ファティナはゆっくりと吐息を落とした。

「ヴァルツ……さま」

小さく囁いて、その滑稽さにファティナは小さく笑った。

ヴァルフアムとたいして違いのない名前。だというのに忘れていたなんて、なんと自分は愚かなのだろう。

旦那様と口にし続けて、その本質など見つめようともしなかった。だが本質など必要だろうか？

必要なことは、自分とヴァルツとの婚姻が、ヴァルツにとって意味があるという事実だけ。

自分という存在があの方にとって何かの利益に通じるならば、それは喜びだ。

あの方にとって自分が

「クレオ」

ファティナは宝石箱の中から琥珀をベースに作られた耳飾を引き出し、鏡の中で見つめる執事へと示した。

「付け方が判らないの。お願い」

「僭越とは存じますが、奥様には他の……」

その宝石箱とは別の宝石箱にある石を示そうとするクレオールに、ファティナは首を振った。

「琥珀は、わたくしの好きな色なのです」

穏やかな調子で微笑むファティナに、クレオールは「失礼致します」と口にして耳飾へと手を伸ばした。

カチリと小さな音をさせて留め金を緩め、左右の耳朵に耳飾が飾られる。

普段より大人びた薄蒼の衣装を合わせたファティナは、じつと自分の姿を鏡で見つめ、ゆっくりと薄い唇から呼気を落として立ち上がった。

「行きます」

たとえ、あの方にとって自分が……

\*\*\*

政略結婚であることは知っている。

口さがない使用人の囁きなど耳にせずとも、この婚姻の意味がただの紙切れ一枚であることは知っている。

婚姻のその場で、誰でない、ヴァルツ自身がそう言ったのだから。幼い頃であれば普通の結婚と政略的な結婚の違いなど理解できなかった。自分にとって結婚は家族が増えるという喜ばしいことでは無かったのだから。

「結婚？……わたしが？」

説明してくれたのは、もの珍しくも眼鏡をかけた青年だった。呆れたように口の端に笑みを浮かべて息をついて見せる。

「姫君、わたしが、ではなくわたたくしがとおっしゃって下さい。言葉が不調法ですね。それは早めに直さなければ　あなたは侯爵夫人になられるのだから」

侯爵夫人。

舌の上で転がしても、それがどんなものかはあまり理解できなかった。

爵位の上下なども知らぬ小娘に、青年は苦笑して眼鏡の蔓を押し上げた。

思い返せば、確かにその青年はカディル・ソルドだった。

両親の死の後に、あわただしく訪れた夫となるヴァルツが連れて来た、司祭と見届け人の一人。

グレイフィードという名称を知るものは少ない。

グレイフィード領

何故ならそれは王都であるクリアンゲイズからずっと東に存在する僻地とも言つべき場であり、これといって鉱山が出る訳でも無く、実りがある場でもない。

山には崖があり、土地はなだらかでもなく領民が多くいる訳でもないただ広大な土地ばかりの寂しい場だ。

雨が酷く降れば土地が流れ、病が流行れば医者も無い。

町の間が生活の糧としているのは主に羊毛。それすら、時に山からおりる狼によって苦しめられる。

それでもその彼らの生活がゆつくりと軌道に乗り始めたのは彼ら

の領主が羊毛を織り上げ、付加価値を与え、他人を介するのではなく自らが海すら渡り交易した為だ。

現金収入を増やし、医者を求め　ほんの些細な病で子供を失う生活から脱却され、少しずつ資産というものを増やして町の人間に微笑みが広がる頃合いに、彼等に乗せた商船は海底に沈んだ。

「ここにサインを」

示された書類に、ぎこちなく名前を記載した。

あまり上手に書けないのは文字を習い始めてそれほど間が無かった為だ。それでも精一杯がんばって書けば、殊更ファティナの言葉遣いを諷める眼鏡の青年は微笑んだ。

「これであなた様はスターリング侯爵の花嫁　侯爵夫人となられます」

花婿が連れて来た司祭、見届け人、花婿、そして花嫁。

ただ四人だけの式だった。

生憎とファティナは結婚式というものがどういったものか知らないから、これが正しいのか正しくないのかまでは判らなかつた。

教会でもなく、ファティナの暮らす屋敷の居間で、ただテーブルの上にある幾つかの書類に文字を連ねるだけの行為。

司祭がこほんと咳を落とし、ちらりとその視線を咎めるようにヴァルツへと向ける。

「せめて誓いの言葉だけでも」

「必要はあるまい」

ぞんざいに返され、司祭が更に「私が認めないといえはこの婚姻は認められないのですがね」と冷たく言えば、ヴァルツは不機嫌そうに眉を潜めたが、司祭の言葉に従い、彼の促すとおり言葉で唱和しファティナにも求めた。

「誓いの口付けを」

その言葉には苦笑が落ちる。

ヴァルツは身を屈めてはじめてファティナを見た。

「グレイフィードの姫」

幾度も呼ばれたことのある名称が、これほど恐ろしく耳に届いたことはなかった。まるで自分のことを呼ばれている気がせずに、視線もろくにあげられずにファティナは身を震わせた。

「はい……？」

戸惑いながらも小さく言葉が落ちる。

面前の夫はファティナの手袋もしない手をすくいあげた。

大きく、ごつごつとした手に怯み、思わず引き戻しそうになる。

けれどファティナは司祭の温かな眼差しに、夫の行為に耐えた。

「この婚姻はそなたの為ではない」

突然の花婿の言葉に、司祭が更に顔を顰め、眼鏡の青年が小さく笑い、そつと首を振った。

「政略結婚という意味も判るまい　だが、一つだけどんなことをしてもそなたの願いをかなえよう。何か望みはあるか？」

突然夫というものを持つ意味も、実はあまり理解してはいなかった。

父と母の死も突然知らされたが、この婚姻についてもまた突然知らされた。

大人達は父と母の死よりあわただしく、遺体の無い葬儀も何もかもが飛ぶように過ぎて、そしてその人は訪れたのだ。

自分の夫になるのだと。

「遠慮は要らぬ。欲しいものがあれば言えばいい」

結婚というものに憧れるよりも、ファティナが欲しいものはもっと別の

がらんと誰もいない居間、誰もいない屋敷。父も母も、おそらくきつとファティナを愛していてくれたけれど、それ以上に領地を、領民を守る為に精一杯だった。

ファティナは面前の夫を恐れながら、それでもそつと囁くように言葉にした。

「わたくしとあなた様は結婚したのですから、夫婦となるのですわよね？」

このところ無理やりに修正させられた言葉は、きちんと相手の耳に不快を与えずに届いているだろうか。

ファティナはちらりとカディルへと視線を向けたが、相手は微妙な笑みを湛えていて自分の言葉が「不調法」であるかどうかは判らなかつた。

「そなたが望む夫婦にはまずなれないが。それがそなたの望みか？」

自分の望む夫婦とは何だろうか？

父と母は自分にとって望む夫婦の姿だっただろうか？

ファティナはどう伝えれば良いのか判らず、ただ自分が思うままに伝えることしかできなかつた。

「もう、一人ぼっちはイヤ。ちゃんとした家族が欲しいの。一緒にいてくれる、家族が」

おそらく不調法な言葉であつたであろうが、深く考えることはできなかつた。

自分の望み。自分が、欲するもの。

ヴァルツは一旦は眉間に皺を刻み、口元に皮肉な笑みを浮かべ、掬い上げたままのファティナの手のひらに口付けを落とした。

「誓おう　そなたが一人にならぬようにと」

その誓いに、あなたは……

\*\*\*

浮かんだ負の感情に蓋をして、ファティナは階段の上に立つ夫を見る為に身じろいだ。

やっと戻ってこれた家で、危うく義息に隠していた秘密を暴かれそうになっているその時に望んでいた声が降り注いだ。  
まるで低く雷鳴のようにはっきりと。

子供が欲しいのだと。

新たな家族が欲しいのだと望んだ言葉に、返事をくれた夫。  
心臓が張り裂けてしまいそうなほど高鳴るのは、安堵の為か、畏怖であるのかファティナにはいまいち理解しがたい。

心臓が痛いくらいに早く打ちつけて、眩暈すら誘発する。

夫と顔を合わせる時、決まって緊張で倒れてしまいそうになる。  
会いたいと願う癖に、共にいて欲しいと望む癖に、意気地の無い自分はいつだって夫の顔をまっとうに見上げることできないのだ。

けれど今日こそは、きちんとその瞳を見つめたい。

その姿を認め、もう決して忘れないようにその全てを刻み付けてしまいたい。

愛する夫の姿を、二度と忘れてしまふことのないように。

ファティナは決意を込めてヴァルフアムの腕から逃れ、そして階段

の上に立つ夫をただひたすらに求める強い眼差しで見上げた。

「旦那さまっ」

必死に紡いだ言葉の先、ファティナの声はゆっくりと闇へと溶けた。

見上げた先、愛すべき夫の碧玉の眼差しは自分の手首を背後から掴む義息に良く似ていて、そして……

旦那様、その先の言葉をファティナは紡ぐことができなかった。

何をつけてよいのか判らない。

どうして良いのか判らない。

碧玉の瞳には、はつきりと失望が浮かんでいた。

早鐘を打ち続けた心臓が、途端にぎゅっと掴まれたように萎縮する。

泣きたいような気持ちを投げ捨てて、ファティナはその失望を打ち

消すように、精一杯の気持ちを込めて微笑んだ。

「旦那様、お会いしとうございました」

自分には、微笑むことしかできないのだから。

愛されていないことなど、今更どうだというのだろう。

愛など、もとより知らないのだから。

愛など

ヴァルツは冷ややかな眼差しでファティナを見つめ、ちらりとその視線がファティナの背後で自分を睨みつけている息子に向かい、ふいに口の端を押し上げた。

「息災で何より。」

我が姫　グレイフィード領女伯爵、レディ・ファティナ」

……たとえ、あなたにとってわたくしがチェスの駒だとしても。

「義母うえが女伯爵？ いったいどういうコトです？」

もとより女性が伯爵位を襲爵することなどできないだろう。咄嗟に脳裏で駆けつけた単語は、次には自分の内で打ち消された。

おまえの親父結構色々な法律の立案だしているじゃないか。上官の暢気そうな言葉がごとと脳裏によみがえる。

「外洋における他国との保安条例だとか、女性襲爵だとか、水路政策……」

まだ立案だけであつたその政策の一つ、女性にも爵位を世襲するという法案が通つたのはつい数日前のことだ。

ヴァルフアムはすうっと腹の底が冷えるのを感じた。

怪我を押してわざわざ王都くだりまでやってきた理由はそれか！

内心で湧き上がるものは吐き気にすら近い。対するヴァルツは、詰め寄る息子をしげしげと見つめていた。

まるで無機質に観察するように。

\*\*\*

帰宅したばかりの妻へと、旅装を解いて着替えをすませたら図書室に来るようにと命じたヴァルツは、煩わしくも自らについて来た息子に眉を潜めた。

父親の後について歩くような息子ではなかった筈だがと思えば、実に面白い反応を示している。

書斎の窓辺によりかかるようにして立つヴァルツに、ヴァルフア

ムは食って掛かるように口を開いたのだ。

こんな風に感情を示す息子だったろうかと考えてみたが、もとより自分と息子との間の関係は紙切れ一枚よりも薄すぎて、その性質すら感知していなかった。

「あれを義母と呼んでいるのか？」

「そんなことはどうでもいい！ あなたは」

呆れるような父親の言葉に、ヴァルフアムは言葉をとぎらせ、奥歯を噛み締めた。

面前の父親ときたら吐き気がする程に自分に似ている。

違うのはその目がヴァルフアムよりも険しく、色素の薄くなった金髪は今や白いものが混じっている。目じりには小皺が目立つが、その眼力を防ぐものではない。

未だ快活な壮年の男を見せ付け、その放つ覇気が、意味不明に他者をひるませる。それは無意識に一步退かせる程の壁だ。

「あなたは……彼女を自分の野望の生贄にでもするつもりか」

「野望？ おかしなことを」

揶揄するように鼻で笑い、ヴァルツは自分の息子を静かに見つめた。

彼の息子は苛立ちを隠すことなく、奥歯を噛み締めていた。

「自分が提出した法案で義母うえを女伯爵にして、次はどう利用するつもりです」

ヴァルツはそんな言葉を吐き出す息子をただ観察し、血気盛んな年頃であつたらうかと思ひ返し、自分の息子の年齢などもとより気にかけてことはないことに気付く。だが、確か二十歳は超えていた筈だと思つのだが、その実年齢は生憎と思ひ浮かばなかった。

これでは、まるで十代の子供だ。

ぎゅっと強く拳を握り締め、歯を食いしばり今にも掴みかからんばかりに自分を見ている息子の様子は、あまりにも滑稽だった。

「父うえっ」

ヴァルツは口の端を持ち上げ、辛辣な口調で「出て行くがいい。子供に構っていられる程の暇は持ち合わせてはおらぬ」と杖先で扉を示した。

「あの人をどうするつもりです」

「するのではない。女伯爵になるのだ」

応えてやる必要もないが、ヴァルツは淡々と告げていた。

その為に打つべき布石は全て打ちつくした。何年もかけて根回しし、苦勞の末に法案を通した。グレイフィードの管理をカディルソルドに任せ、そしてファティナの教育はヴァルフアムに担わせた。女性の識字率すら低い世の中で、女性に領地を任せるなど愚の骨頂だと嘲笑を浴び続け、愚か者の戯言と蔑まれもした。

女に仕事をさせることにより男の立場を悪くするなどという下らぬことを言う愚か者どもの多いことには辟易とさせられたものだ。

しかしそんなことは元より承知。  
何故なら、それは自らの姿でもあったのだから。

女に爵位？ 領地を任せる？ なんと愚かしい。

「グレイフィードの姫は誰よりも先んじて女伯爵として立つ」

見るといい。

自ら地を治め、子を育み、自ら立つその姿を。

「ヴァルフアム、出て行くがいい」

もう一度威圧的に命じると、ヴァルフアムは射殺すかのように睨み返してくる。その気概だけは買ってやってもいいが、生憎とヴァルツは下らぬことに時間を割き、無駄にするつもりは無かった。

ヴァルツの命令と同時に、親子が睨み合う様子をどこか面白がるように控えて見ていたカディル・ソルドが音もさせずに扉に近づき、その扉を開けば、丁度反対側からノックする為に構えていたクレオールとカディルの視線がかち合うこととなった。

「失礼致しました 奥様をお連れしました」

クレオールは一瞬目を痙攣させたが、すつと意図的に自分の背後にいる女主がカディルの視界に入らないように一歩ずれ、軽く一礼した。

旅装を解いて着替えを済ませたファティナはカディルの姿に一瞬身を強張らせはしたが、その場に夫と義息がいるのを認めてゆつくりと肺に空気を取り込み、微笑んでみせた。

これ以上の失望を与えたくない。

幼い娘でなく、大人の女性としての矜持を。

ファティナは無様な自らを叱咤し、メアリに教えられた通りの作法で背筋を伸ばし、まるで宮廷淑女のようにすつと足を引く所作で一礼してみせた。

「お呼びにより参りました」

「入れ」

対する夫は、ゆつくりとうなずき尊大な調子で言い、その視線を息子へと移す。

「ヴァルフアム、お前に用は無い。出て行くがいい」

「いいえ。出て行きません」

低く恫喝するような口調で応えるヴァルフアムに、ファティナは眉を潜めて、ついでゆっくりと近づくとその二の腕を優しく親しげに叩いた。

「ヴァルフアム様、旅でお疲れでしょう？ どうぞ居間でくつろいでいらしたら？」

「義母っえ」

ヴァルフアムは穏やかに見上げてくるファティナに違和感を覚え、眉を潜めた。

まるでオトナの女性のように儂げな微笑を浮かべるのも違和感であれば、その身に宝飾品が飾られているのもまた違和感を与えた。

琥珀の耳飾り 胸には碧玉のペンダント。

そして、彼女の指につけられた指輪にヴァルフアムは奥歯を更に噛み締め、まるで懇願するようにファティナの肩に手を置いた。

子供のようにイヤだと言ってしまうような自分をヴァルフアムは嘲笑で押しやった。

本能がイヤだと訴えている。

久しぶりに見た父親が、まるで壁のようにそこに存在している。その壁を乗り越えることなどできないのではないかと感じる自分が反吐が出るほどに嫌いだ。

「義母っえ、私がここにはいけない理由は無いでしょう？」

どう言葉を選んで良いのか判らない。

無様な幼子が母のスカートに張り付いているようではないか！

それでも、あなたが傷つけられると判っていて手を拱いていることができない。

ヴァルフアムの焦りを、けれどファティナは微笑で受け流した。どこまでも儚げで、透明な 母親の顔で。

「夫婦の会話に子供が入るものではありませんわ」

「貴女は判っていない！ この男はっ」

まるでハイエナのように貴女を傷つけ、喰らい尽くす為<sup>ため</sup>にこの場にいるというのに。感情のままに引っさらって行きそうな息子の様子に、ヴァルツはカツンッと杖で床板をつき、不快そうに声をあげた。

「クレオール、カデイル その愚か者を連れていけ」

ガンツという図書室のマホガニーの重厚な扉を蹴り上げる音を最後に、シンと図書室の空間に静けさが一度落ちた。

ゆつくりと夫の視線がファティナを捕らえ、視線が合つ。

そこで浮かぶ碧玉の色合いに、ファティナは精一杯背筋を伸ばし、ゆつくりと心内で数字を数えた。

そうしなければ耐えられない。

会いたいと切望した相手から向けられる冷たさに、身を震わせてどこかに安全な場を求めてしまいたくなってしまうそうぞ。

「こうして見えるのは婚姻の折<sup>ま</sup>以来か グレイフィードの姫」

幾度か顔を合わせたことはあるが、このように二人で対峙することとは無かった。そして、二人の視線がこうしてかみ合うことも。

深く、重い言葉を耳に入れ、ファティナはこくりと喉を鳴らして軽くうなずいた。

「お会いしとうございました」

「」

ヴァルツはふつと鼻で息をつき、瞳を細めた。

まるで遠くを見るように細められた眼差しに身じろぎし、ファティナは見られていることに耐えた。

恐ろしい獣に見下ろされていくように身を苛む恐怖。

泣き出して、できることなら誰かにすがって安堵を得たいとまで願う自らの心に笑い出してしまいたい。

これが、自らの夫。

そしてこれが、自らの心。

夫を愛しているといい続けた、自分の、ココロ。

「子が欲しいと願っていたな」

「はい」

「そなたは未だ年若い。まずは陛下の御前にて正式に襲爵した後、領地を掌握したのちのこと。その全てはカディル・ソルドがおまえを導くこととなるだろう」

ヴァルツはここで一旦言葉をとめると、

「子に関してもあれが協力できよう」

平坦な口調のままに続けた。

ヴァルツは前置きを必要とはしていなかった。

カツリカツリと杖の音をさせ、図書室に置かれている一枚板の机へとたどり着き、その上に無造作に置かれた書類の脇に手をつき、ただ静かに、何の感慨も浮かばせることもなく。

対するファティナはぐつと自分の指に力が加わり、もう片方の手の甲を強く握り込む。

酸素を奪われた魚のように空気を求め、淡々と事務的に落とされていく言葉の羅列を拾い上げていく。

気を　そらしてはいけない。

向けられる言葉の一つ一つが、全て、全て、夫がファティナへと向けてくれるもの。その気持ちは何一つ落として良いものではない。

夫が与えてくれる、その全て。

そう思うのに、向けられる言葉はまるでただの音や記号のように耳をかすめて流れていく。ファティナは自分と、そして夫とをどこか違う場から傍観するかのような気持ちで眺めていた。

頭の中で霧が発生するように、思考能力が追いつかない。

その時間はほんの十数分であつたらうに、その時間はそれまでの人生の中で一番長い時間を感じられた程だ。

嗚咽が漏れてしまいそうな体と心の振るえ、歪んでしまいそうな口元。

「何も心配は要らぬ。そなたはソルドに従いその処理を済ませればいい」

「……はい」

「何か、判らぬことはあるか？」

判らない。

あなたが 何を、おっしゃっているのか、判らない。

そういえば、その眼差しに宿る失望の色はもつと深くなることだろう。

ファティナは精一杯の気持ちを込めて微笑んだ。

「旦那様の、望みのままに」

その言葉は、けれど相手の眼差しを更にひそませる結果を産み落とすだけだった。

しかしヴァルツはすぐにその色を打ち消し、自らが書き記していた書類をファティナへと示した。

……愛して、います。

最強の呪文も、ファティナの手のひらの上をさらさらと流れて、散った。

僧正（前書き）

\*ネタバレを含みますので、ラストまで知りたくない人は今回回避推奨。

（ラスト後二話予定）

## 僧正

パシリと乾いた音が理性を促した

自分は今、いったい何をしてしまったのか。

面前にはクレオール。

その頬に赤みがあるのは、たった今、自分が咄嗟に手をあげてしまった現実だ。

ヴァルフアムは息を飲み込み、面前の沈着冷静な男を見返した。どうしてこんなことになってしまったのか。それを自分の中で考えるより先に、相手の口は淡々としたいつもの調子で開かれた。

「落ち着いて下さい」

一旦底冷えするように取り戻したものが、その一言でまたぐるぐると自分の中で回りだす。

使用人に手を挙げたことなど無かった。

そうするまでもなく使用人は自分の思うとおりに動いたものだし、そんなことをする意味も理由さえもなかった。

紳士たるもの使用人を相手に暴力などふるうべきではない。それは長年培われていてしかるべき事柄であるのだから。

咄嗟にどうすればいいのか判らずに狼狽した心など知らぬ気に、クレオールは叩かれた頬すら頓着せず言葉を操る。

まるで、愚か者を相手にするように。

「奥様は大丈夫ですから」

その冷静さが憎らしくすら感じられた。

何故そんなに冷静でいられるのか判らなかった。

力々と体内の血が沸騰するように熱を持ち、ぎしりと奥歯が音をさせる。

「奥様はしっかりとおいでです」

クレオールが冷静にファティナのことを言えば言うだけ、自分が何も判っていない子供のような錯覚を覚え、苛立ちばかりが蓄積されていく。

ぎしりと更に強く奥歯を？めば、口の中にいやな味が広がった。錆びたものを口にしたような、あの感覚だ。

「……おまえは、父の思惑を知っていたのか？」

低く抑えた声は、自分のものとは思えぬ程に暗い闇を孕んでいた。憎めるものは何ものをも憎んでしまいそうな闇。

父も、面前の執事、そして 自らを子供扱いする義母すらも。護りたいという思いを踏みにじり、護らせてももらえない。

差し伸べた手を拒絶されることにこれほどの怒りと憎しみ、悲しみが湧きあがるうとは思いもしなかった。

「思惑というものが何を指し示しているのか判りかねますが、旦那様は決して奥様を傷つけたりはなさいません」

「どうしてそう言い切れる！」

肉体的に傷つけるなどとヴァルフアム自身思っている訳では無い。あの父は視線だけで相手を威圧し屈服させるだけの力を持っている。自らの手でもって肉体的な意味での痛みを他者に与えることなどもとより必要ではないのだ。

「ヴァルフアム様が思う程、奥様は弱くはございません」

「知った口を利くなつ。貴様などっ」

おまえに何が判る。

義母を見続けた自分の自負が、たかが執事の言葉に揺らがされる。まさか他の誰かにおまえは何も理解していないと突きつけられることがあるうなどは、思ってもいなかった。

「貴様など、クビだっ」

その言葉が本心から出たものであるうが、咄嗟に出してしまった言葉であるうが意味は無い。

クレオールはふっとその眼差しの色を変えた。

自分がやりすぎ、言い過ぎていることはひしひしと理解していたが、しかし高ぶるものが振り上げた矛を下ろすことができない。ぎりぎりとかみ締める歯の音を耳障りに聞きながら、ヴァルフアムはクレオールが小さく息をついて頭を下げるのを見ていた。

「失礼させていただきました」

むしろ丁度よかったなどといえば、ヴァルフアムは激高しただろうか。

クレオールは苛立ちと動揺とに不安定さをみせるヴァルフアムを一人残し、さっさと自らのすべき道を定めた。

やることは理解している。そしてまた、やれることもまた理解していた。

\*\*\*

「ああ、痛そうだ」

椰揄するような言葉に視線を巡らせ、クレオールは足を止めた。

「主人が使用人を殴るとは」

「生憎ですが、実質上の私の主はヴァルツ様です　ご存知ではな

いようですが」

クレオールの言葉に、しかし相手は少しも動じた様子はみせず、眼鏡の奥の瞳を細めた。

「では、ご同輩という訳だ」

「いいえ。私と貴方は 違います」

はつきりと言い切ると、カディル・ソルドは一旦片眉をわざとらしく跳ね上げたが、口元に余裕の笑みを浮かべてみせる。

「確かに、私とおまえは違う」

その言い方にはつきりとした侮蔑を感じ、クレオールは微笑んだ。おそらく相手は自分の出自について「違う」と発言したのだろう。だが、クレオールが告げた「違う」の意味は、それこそまったく違う。

クレオールは慇懃に軽く頭を下げ「失礼します」と言葉にするとカディル・ソルドの脇を通り過ぎようとした。

「ああ、そうだ」

一旦体をずらしてクレオールを通そうとしつつも、カディルはわざとらしくそう口にしてクレオールの歩みをとめさせた。

「主を変える気はないかな」

「……どのような意味でしょう」

「暴力を振るう癩癪持ちの子供のような男の下で執事として過ごすより、私の元でその手腕をふるってみてはいかがかな。なんといいても、あなたは私の姫君の扱いを良く知っているようですからね」

どういう意味かとは問い返さなかった。

クレオールは一旦とめた体の向きを微妙にずらし、相手を静かに見つめ返して微笑んだ。

「主を変えることは考慮いたします」

微笑をすぐに慇懃なものにかえ、クレオールはその足を主へと向けた。

\*\*\*

「では、そのように」

夕刻、カデイル・ソルドが意気揚々と告げる言葉に、ヴァルツは瞳を眇めて鷹揚にうなずいた。

自らがしたことに対してヴァルツは後悔するような材料は持ち合わせてはいない。だが、ただあの眼差しだけがヴァルツの中で奇妙な、小さな棘を残したのは事実だった。

二粒の翡翠。

そう、翡翠。

女性に爵位を？

はじめその言葉を耳に入れた時、なんと愚かなことをと鼻を鳴らしたものだっただ。

年若い友人は気分を害した様子もなく、ただ口元に皮肉な笑みを浮かべてみせる。

「そう言いますけどね、ヴァルツ。あの人ときたらぼくなどよりずっと領主にふさわしい。あなただってあの人とぼくとを並べ合わせれば、ぼくから爵位を取り上げてあの人に譲りたくなくなってしまうでしょうよ」

友人。

否、友人ではないだろう。もとより友人などという親しげな存在をヴァルツは持っていない。そんなものは面倒を招くためにあるようなもので、事実　その男は面倒ごとしか招きはしなかった。

その男はヴァルツにとって信じがたい思想を披露した。

ありとあらゆる面でヴァルツとは違う生き物であったと言っているだろう。

「貿易？」

れきとした爵位と領地を持つ貴族だというのに、商いをして金を稼ぐなどと愚の骨頂だ。貴族は金を稼いだりなどしない。そんなものは下賤の考えだと言えば、また肩をすくめてみせる。

「貴方も仕事はしているでしょうに」

「私がしているのは貴族として正しい活動に相違ない。貴族としての義務。だがおまえがしようとしているのは、下らぬ市井の考えだ」

だがあの男はヴァルツの忠告を無視して貿易の仕事に手を出した。もちろん、途端に社交の場では悪意ある言葉が飛び交い、拒絶され冷笑を招いたものだ。だが、あの男は気に掛けることはなかった。

「うちは貧乏だから、領地の人間が苦勞する。それを無視して賭け事に現を抜かすことのほうがばかげている」

あっさりと全てを切り捨て、そして小さく笑った。

「って、いうのがうちの奥さんの考えです」

妻の考えに振り回される愚か者め！

知る限りで一番の阿呆であったあの男の妻は 琥珀の眼差しと蜂

蜜色の髪を持つ女だった。

どこにでも居る女だ。

盤面に配置するまでもなく、ただひたすら男の人生に添うだけの女である筈の。

しかし、あの男の妻だというその女はヴァルツの冷ややかな眼差しを、更に強い琥珀で見返し口元には強気的笑みさえ浮かべてみせた。

強烈な印象と、女王のような覇気。

「無礼は承知しております。ですがどうぞ、貴方の所領の港を使う

ことをお許し下さい」

ヴァルツの知るどの女とも違う。

たかが一介の小娘でしかない女は、忌々しいことにヴァルツの盤面を真つ向から叩き割る気概を示し、その人間味の溢れる柔らかな琥珀の眼差しをヴァルツの中へとねじこんだ。

女に爵位を与えるなど愚かな妄言だ。

今となつては苦い記憶でしかないが。

「ではすぐに馬車の手配を　ファティナ様にはまだ学ばれることが多くおあります。ヴァルツ様にはご不満のことと思いますが、もうしばらく襲爵の儀は後になることでしょう」

面前にいる男は狡猾ではあるが、愚か過ぎるものでは無い。今までもグレイフィードの領地を家令として纏め上げて来た。この先もファティナの良き補佐役として付き従うことだろう。

そう思い、口元にわずかな笑みが浮かんだ。

この男にしても、おそらく番狂わせであつたに違いない。ファティナを手にし、そして自らが伯爵位を抱くものと考えていたのだろうから。

だがそんなことを許すつもりは無い。

あくまでもヴァルツはその全てをファティナに残すことのみを考え続けて来たのだから。

あの男が、そして　あの女が護り、愛したものを全て、余すことなく彼らが残したファティナへと与える。

彼らが望むそれ以上を。

ファティナを誰かに利用などさせはしない。

あの娘は父のように、そして母のように自らの意志で全てを担うの

だ。  
それが……自らが与えた船で二人を死なせたことの、償いなのだか  
ら。

自らの野望にあの人を利用するおつもりか！

ふとヴァルフアムの怒りの声を思い出し、ヴァルツはそのおかし  
さに口元に笑みを浮かべた。

なんと的外れなことよ。

利用も何もない。この自らがファティナの為の歩兵ポーンでしかないのだ  
から。

「失礼致します」

ふと、ノックの音が響き、書類の不備が無いかと点検していたカ  
ディルの手が止まる。声の主はこの屋敷の執事であるクレオールで  
あることはヴァルツにもすぐに判った。

「どつした」

「お暇をいただきに参りました」

この先、自らの息子の為にと配置した僧正ヒツショウが行動を示した  
それは、しかし幾つか先読みした恣意の一つでしか無い。そ

ヴァルツの盤面を覆すものなど、もう二度と現れたりしないのだけ  
ら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3679k/>

---

陽だまりのキミ

2011年9月27日13時12分発行